

関西外国語大学大学院外国語学研究科
博士学位申請論文 平成 30 年度

コーパスに基づく日・中味覚形容詞の対照研究
——認知言語学からのアプローチ

関西外国語大学大学院

外国語学研究科 言語文化専攻

913301

石 俊

目次

第1章 序論	1
1.1 はじめに——問題提起	1
1.2 研究範囲	2
1.3 本研究の目的と意義	2
1.4 研究方法	3
1.4.1 コーパス言語学的視点	3
1.4.2 認知言語学からのアプローチ	5
1.4.3 対照言語学の立場から	6
1.4.4 共時的な考察であること	6
第2章 先行研究	7
2.1 日本語の味覚形容詞についての先行研究	7
2.2 中国語の味覚形容詞についての先行研究	8
2.3 味覚形容詞の日中対照研究についての先行研究	9
2.4 味覚形容詞の日英対照研究についての先行研究	10
2.5 先行研究の問題点と残された課題	11
第3章 コーパスに基づく日中味覚形容詞の考察——「甘い」と“甜”	13
3.1 辞書における「甘い」と“甜”の意味記述	13
3.1.1 国語辞書における「甘い」の意味記述	13
3.1.2 中国語辞書における“甜”の意味記述	17
3.1.3 「甘い」と“甜”の意味記述の対照	18
3.2 日中対訳コーパスに基づく「甘い」と“甜”の意味・用法の考察	20
3.2.1 対訳関係が成立可能な意味・用法についての考察	20

3.2.2 対訳関係が成立しかねる意味・用法についての考察	23
3.2.3 本節のまとめ	28
3.3 認知言語学的アプローチによる「甘い」の意味拡張プロセスの分析	29
3.3.1 プロトタイプの意味	30
3.3.2 味覚ドメイン内の転義	33
3.3.3 共感覚ドメインへの転義	38
3.3.4 人間活動ドメインへの転義	45
3.3.5 物事の状態ドメインへの転義	54
3.3.6 認知言語学的アプローチによる語義の再分類	56
3.3.7 多義的意味ネットワーク	58
3.4 認知言語学的アプローチによる“甜”の意味拡張プロセスの分析	62
3.4.1 プロトタイプの意味	62
3.4.2 味覚ドメイン内の転義	63
3.4.3 共感覚ドメインへの転義	65
3.4.4 人間活動ドメインへの転義	69
3.4.5 認知言語学的アプローチによる語義の再分類	75
3.4.6 多義的意味ネットワーク	76
3.5 コーパスに基づく語義の頻度分布に対する定量調査	79
3.5.1 「甘い」の頻度分布に対する定量調査	79
3.5.1.1 調査方法とデータ	79
3.5.1.2 調査結果	79
3.5.2 “甜”の頻度分布に対する定量調査	82
3.5.2.1 調査方法とデータ	82
3.5.2.2 調査結果	83
3.6 「甘い」と“甜”の対照分析	85
3.6.1 意味・用法における異同	85

3.6.2 語義分布における異同	88
3.6.3 意味拡張の認知的プロセスにおける異同	92
第4章 コーパスに基づく日中味覚形容詞の考察——「辛い」と“辣”	96
4.1 辞書における「辛い」と“辣”の意味記述	96
4.1.1 国語辞書における「辛い」の意味記述	96
4.1.2 中国語辞書における“辣”の意味記述	99
4.1.3 「辛い」と“辣”の意味記述の対照	101
4.2 日中対訳コーパスに基づく「辛い」と“辣”の意味・用法の考察	103
4.2.1 対訳関係が成立可能な意味・用法についての考察	103
4.2.2 対訳関係が成立しかねる意味・用法についての考察	104
4.2.3 本節のまとめ	109
4.3 認知言語学的アプローチによる「辛い」の意味拡張プロセスの分析	110
4.3.1 プロトタイプの意味	111
4.3.2 味覚ドメイン内の転義	112
4.3.3 共感覚ドメインへの転義——嗅覚への転用	114
4.3.4 人間活動ドメインへの転義	114
4.3.5 認知言語学的アプローチによる語義の再分類	116
4.3.6 多義的意味ネットワーク	117
4.4 認知言語学的アプローチによる“辣”の意味拡張プロセスの分析	118
4.4.1 プロトタイプの意味	119
4.4.2 味覚ドメイン内の転義	120
4.4.3 共感覚ドメインへの転義	122
4.4.4 人間活動ドメインへの転義	124
4.4.5 物事の状態ドメインへの転義	127
4.4.6 認知言語学的アプローチによる語義の再分類	128

4.4.7 多義的意味ネットワーク	129
4.5 コーパスに基づく語義の頻度分布に対する定量調査	133
4.5.1 「辛い」の頻度分布に対する定量調査	133
4.5.1.1 調査方法とデータ	133
4.5.1.2 調査結果	133
4.5.2 “辣”の頻度分布に対する定量調査	135
4.5.2.1 調査方法とデータ	135
4.5.2.2 調査結果	136
4.6 「辛い」と“辣”の対照分析	138
4.6.1 意味・用法における異同	138
4.6.2 語義分布における異同	141
4.6.3 意味拡張の認知的プロセスにおける異同	144
第5章 コーパスに基づく日中味覚形容詞の考察——「苦い」と“苦”	147
5.1 辞書における「苦い」と“苦”の意味記述	147
5.1.1 国語辞書における「苦い」の意味記述	147
5.1.2 中国語辞書における“苦”の意味記述	149
5.1.3 「苦い」と“苦”の意味記述の対照	151
5.2 日中対訳コーパスに基づく「苦い」と“苦”の意味・用法の考察	153
5.2.1 対訳関係が成立可能な意味・用法についての考察	153
5.2.2 対訳関係が成立しかねる意味・用法についての考察	157
5.2.3 本節のまとめ	159
5.3 認知言語学的アプローチによる「苦い」の意味拡張プロセスの分析	161
5.3.1 プロトタイプの意味	161
5.3.2 共感覚ドメインへの転義	162

5.3.3	人間活動ドメインへの転義	165
5.3.4	認知言語学的アプローチによる語義の再分類	168
5.3.5	多義的意味ネットワーク	169
5.4	認知言語学的アプローチによる“苦”の意味拡張プロセスの分析	170
5.4.1	プロトタイプの意味	171
5.4.2	共感覚ドメインへの転義	171
5.4.3	人間活動ドメインへの転義	174
5.4.4	物事の状態ドメインへの転義	179
5.4.5	認知言語学的アプローチによる語義の再分類	180
5.4.6	多義的意味ネットワーク	181
5.5	コーパスに基づく語義の頻度分布に対する定量調査	184
5.5.1	「苦い」の頻度分布に対する定量調査	184
5.5.1.1	調査方法とデータ	184
5.5.1.2	調査結果	184
5.5.2	“苦”の頻度分布に対する定量調査	186
5.5.2.1	調査方法とデータ	186
5.5.2.2	調査結果	187
5.6	「苦い」と“苦”対照分析	189
5.6.1	意味・用法における異同	189
5.6.2	語義分布における異同	192
5.6.3	意味拡張の認知的プロセスにおける異同	195
第6章 コーパスに基づく日中味覚形容詞の考察——「酸っぱい」と“酸”		199
6.1	辞書における「酸っぱい」と“酸”の意味記述	199
6.1.1	国語辞書における「酸っぱい」の意味記述	199
6.1.2	中国語辞書における“酸”の意味記述	200

6.1.3 「酸っぱい」と“酸”の意味記述の対照	202
6.2 日中対訳コーパスに基づく「酸っぱい」と“酸”の意味・用法の考察	205
6.2.1 対訳関係が成立可能な意味・用法についての考察	205
6.2.2 対訳関係が成立しかねない意味・用法についての考察	206
6.2.3 本節のまとめ	208
6.3 認知言語学的アプローチによる「酸っぱい」の意味拡張プロセスの分析	209
6.3.1 プロトタイプの意味	210
6.3.2 味覚ドメイン内の転義	211
6.3.3 共感覚ドメインへの転義	211
6.3.4 人間活動ドメインへの転義	213
6.3.5 物事の状態ドメインへの転義	215
6.3.6 認知言語学的アプローチによる語義の再分類	216
6.3.7 多義的意味ネットワーク	217
6.4 認知言語学的アプローチによる“酸”の意味拡張プロセスの分析	219
6.4.1 プロトタイプの意味	219
6.4.2 味覚ドメイン内の転義	220
6.4.3 共感覚ドメインへの転義	220
6.4.4 人間活動ドメインへの転義	222
6.4.5 物事の状態ドメインへの転義	224
6.4.6 認知言語学的アプローチによる語義の再分類	224
6.4.7 多義的意味ネットワーク	225
6.5 コーパスに基づく語義の頻度分布に対する定量調査	228
6.5.1 「酸っぱい」の頻度分布に対する定量調査	228
6.5.1.1 調査方法とデータ	228
6.5.1.2 調査結果	228
6.5.2 “酸”の頻度分布に対する定量調査	230

6.5.2.1 調査方法とデータ	230
6.5.2.2 調査結果	231
6.6 「酸っぱい」と“酸”対照分析	233
6.6.1 意味・用法における異同	233
6.6.2 語義分布における異同	235
6.6.3 意味拡張の認知的プロセスにおける異同	239
第7章 終章	242
7.1 まとめ	242
7.1.1 「甘い、辛い、苦い、酸っぱい」と“甜、辣、苦、酸”の意味用法における異同	242
7.1.2 「甘い、辛い、苦い、酸っぱい」と“甜、辣、苦、酸”の語義分布における異同	251
7.1.3 「甘い、辛い、苦い、酸っぱい」と“甜、辣、苦、酸”の意味拡張における異同	252
7.2 反省点及び今後の研究課題	253
参考文献	260

第1章 序論

1.1 はじめに——問題提起

どの国でも、味覚表現は多い。人間にとって味覚は基本的な感覚であるにとどまらず、人間が味覚経験を通して味覚以外の概念を認知することは普遍的に存在する現象といわれる。人々はよく味覚表現の派生義で物事の賛否の評価などを表す。「酸っぱい、甘い、苦い、辛い、塩辛い(鹹い)」と“酸、甜、苦、辣、咸”は、日・中両言語における基本的な味覚形容詞である。日・中両言語の味覚形容詞は、類似点が多いと同時に、「味覚」以外に様々な意味があり、それぞれの特徴を持っている。中国人日本語学習者と日本人中国語学習者にとって、五味のことは極めて簡単なことばであると思われがちであるが、実際に運用してみると、案外難しいものである。「酸っぱい」は“酸”と、「甘い」は“甘・甜”と、「苦い」は“苦”と、「辛い」は“辛・辣”と、「しおからい(鹹い)」は“咸”と対応していることが分かっていても、基本義からかけ離れた意味に遭遇すると、正確に理解できないことが多い。

例えば、日本語の「甘いリンゴ」と中国語の“甜苹果”は意味が同じである。それに対し、日本語の「子供に甘い」は「子供に対する態度が厳しくない」という意味を持っているが、中国語の中にこのような用法はない。また、中国語の“睡得很甜”は「気持ちよくぐっすり寝ている」様子を表しているが、日本語の「甘い」にはこの意味はない。更に、日・中対訳の場合、もし文字通りに、“肩膀酸”を「肩が酸っぱい」に、「点が辛い」を“分数辣”と訳したら、極めて不自然になり、ひいては意味不明になる場合さえある。靳(2004: 180-190)では、比較文化論の視点から、日・中味覚形容詞の類似性と違いについて、両言語の文化的特徴を探っていた。言語学の立場に立つならば、松本(2003)¹⁾によって、ある語において基本義と異なる新たな意味が派生することを意味拡張と呼ぶ。上記の「甘いリンゴ」の「甘い」は基本義で、“睡得很甜”、「子供に甘い」、「肩膀酸」、「点が辛い」の“甜”、「甘い」、「酸」、「辛い」などは新たに生じた派生義である。味覚形容詞である「酸っぱい、甘い、苦い、辛い、塩辛い(鹹い)」と“酸、甜、苦、辣、咸”は味覚における基本義のほか、実に豊富な派生義を持っている。日・中味覚形容詞の意味・用法の異同を明示すること、及び、どのように訳したら自然で、意味が通じるかを考察することが切実な問題となり、極めて喫緊な課題であると思われる。

1.2 研究範囲

日・中両言語には、「五味」という言葉がある。「甘い」、「酸っぱい」など五味のひとつを表す表現は、本来飲食物の味という属性を表している基本味と言われている。両国の基本味説は多少異なるが、基本的なものは同じである。つまり、「酸味、甘味、苦味、塩味」は基本味に入るといふ共通認識はある。しかし、「辛味」に対する意見がそれぞれに分かれる。中国では“酸、甜、苦、辣、咸”を五味と呼ぶが、日本において、“辣味（辛味）”のかわりに「うま味」が五味に加わる。辛味は受容体が三叉神経末梢に存在し、味細胞に存在しないという研究成果から、専門家の間では味ではなく、一種の刺激とされている。しかし、日本でも一般的に、「辛い」は「甘い」と対照する重要な味とされているので、今回の研究対象に入れるとする。一方、「うま味」は中国ではまだ認識が薄く、固定的な訳語がないため、研究対象から外すことにした。

さらに、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を使って、「酸っぱい、甘い、苦い、辛い、鹹い（塩辛い）」など、5つの日本語の味覚形容詞をキーワードとし、それぞれの使用頻度について調査したところ、「酸っぱい」206件、「甘い」2568件、「苦い」568件、「辛い」2465件、「鹹い（塩辛い）」39件であり、「甘い>辛い>苦い>酸っぱい>鹹い（塩辛い）」という順で頻出している。『北京大学中国語言語学研究所・CCLコーパス』で、5つの中国語の味覚形容詞“酸、甜、苦、辣、咸”を検索すると、“酸”11186件、“甜”13127件、“苦”115119件、“辣”6312件、“咸”4265件であり、“苦>甜>酸>辣>咸”という順である。日本語の「鹹い（塩辛い）」と中国語の“咸”の使用頻度が一番低いことがわかる。そして、張（1999）と黄（2006）は日・中味覚形容詞の意味を比較し、「塩辛い」と“咸”は大體基本義として使われ、派生義がめったに見えないということを指摘している。塩味に関する表現の意味拡張はほとんど見られないので、今回は割愛することにした。

要するに、本研究においては、味覚形容詞「甘い、辛い、苦い、酸っぱい」と“甜、辣、苦、酸”だけに焦点を絞ることにする。

1.3 本研究の目的と意義

本研究は、コーパスを利用する実例分析を伴い、対照言語学の研究方法を取り、認知言語学の視点から、日・中両言語における味覚形容詞の異同を究明したい。

本研究の記述・分析・解明することによって、両国の学習者の多義語習得の手助けにもなり、日・中異文化の理解や日本語教育、中国語教育への応用にも役立つものではないか

と考えられる。

1.4 研究方法

日・中味覚形容詞「甘い、辛い、苦い、酸っぱい」と“甜、辣、苦、酸”の意味・用法を体系的に解明するために、次の3つの研究課題を設定する。

(1) 「甘い、辛い、苦い、酸っぱい」と“甜、辣、苦、酸”の各意味・用法の抽出と各語義の認定

(2) 「甘い、辛い、苦い、酸っぱい」と“甜、辣、苦、酸”の各語義の関係

(3) 「甘い、辛い、苦い、酸っぱい」と“甜、辣、苦、酸”の異同

上記の3つの課題を解決するための方法として、3つの具体的な方法論を提案している。

(1) コーパス分析に基づき意味・用法を抽出し、各語義を認定すること。

(2) 品詞自体の持っている性質を重視した認知言語学的アプローチで各語義の関連を解明すること。

(3) 日・中味覚形容詞の比較・対照すること。

1.4.1 コーパス言語学的視点

まず、(1)の各意味・用法の抽出と各語義の認定には、膨大な用例が必要不可欠となる。

コーパス言語学は、「言語データの利用に不可欠な情報処理技術を基盤とし、緻密な事実観察による言語の実証的研究を行い、妥当な言語理論の構築および研究手法の確立を目指すものである。」(砂岡 2003)。本研究の意味分析は、豊富な資料が収集された大規模なコーパスを活用することにより、味覚形容詞の各意味・用法を抽出し、各語義を認定するとしている。従来の手作業による用例収集および内省に頼った作例と比べて、コーパスを使う利点として、①コーパスデータは客観的であり、主観性にゆれないため、作例より信頼性が高い。②豊富な資料が収集されているため、単なる文脈的ゆれのような個別的なものが避けられ、意味・用法の抽出の正確さが保証できる。③コーパスデータの処理の柔軟性は、計量的手法による語義分布調査などの定量分析を可能にしているという点が挙げられる。特に非母語話者の場合、母語話者のように直観や内省をそのまま生かすことができないため、コーパスに蓄積される客観的なデ

ータを活用する方が確実である。ここでは、本研究で使われるコーパスを簡単に紹介する。

I. 『中日対訳コーパス』³

北京日本学研究中心では、設立（1985年）当初から日・中両国の研究者による複眼的日本学教育と研究を継続的に実施し、最近では、多言語対訳コーパスの開発と研究利用を始めとする多文化比較研究に積極的に取り組んでいるそうである。対訳コーパス(parallel corpus)は、オリジナルのテキストと翻訳を並列して処理するもので、言語の対照研究や翻訳研究などに活用されているとのことである。『中日対訳コーパス』は、2000年前後にスタートした日・中の共同研究プロジェクトで、日本の国際交流基金と中国の社会科学基金の援助により実施されている。このプロジェクトは、「中日両言語並列型の対訳コーパス（単言語利用や多言語拡張も可能）」、「中日英 windows で利用可能」、「世界初の2千万字規模（多ジャンルで原文と対訳で157件）」、「多分野研究と教育の利用が可能」（言語・翻訳・文学・文化など）「多様な機能を持つ検索ツール付き」（ダブルキーワード、定形表現、正規表現などの検索）「基本的な情報付与」（対応／品詞／係受け、並列抽出表示可能）「ユニコードと純正コード処理」（検索結果のコピーや再利用が簡単）「データ種類の指定と選択可能」（ジャンル・種・原文・訳文）などの特徴をもち、実用性と可能性の両面で大きな注目を集めているそうである（曹大峰 2007）。

II. 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)⁴

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)は、現代日本語の書き言葉の全体像を把握するために構築したコーパスであり、現在、日本語について入手可能な唯一の均衡コーパスである。書籍全般、雑誌全般、新聞、白書、ブログ、ネット掲示板、教科書、法律などのジャンルにまたがって1億430万語のデータを格納しており、各ジャンルについて無作為にサンプルを抽出している（国立国語研究所 2011）。

III. 《北京大学汉语语言学研究中心语料库》(CCL)⁵

《北京大学汉语语言学研究中心语料库》(北京大学中国言語学研究センターCCL コーパス)は、北京大学中国言語学研究センターで作成され、現代中国語コーパスと古代中国語コーパスに分けられている。その規模は、約7億8000万語であり、そのうち現代中国語の文学作品、論文、新聞、雑誌など36種の文献、約5億8000万語のデータが収められている。オンライン上で公開されており、誰でも利用可能である（北京大学中国言語学研究センター 2003）。

1.4.2 認知言語学からのアプローチ

次に、(2)の各語義の関係について、靱山・深田(2003)が指摘するように、語の各語義の間関係を解明することは、語の意味分析から必然的に導かれる問題である(靱山・深田 2003:141)。認知意味論では、語が多義であることを言語の基本的事実として認識し、語の多義性と意味拡張の問題について積極的に扱っている。「自然言語においては、多義性は極めてふつうの現象であり、ほとんど普遍的な特徴の一つではないかとすら思える位である」(池上 1975:222)。語の多義性がありふれた現象であり、「使用頻度が高い語であればあるほど、その語の多義の度合いは高くなるといえる」(瀬戸 2007:31)。しかし、語の意味分析においては、意味・用法を抽出し頻度順に配列するだけでは、各意味の関係を犠牲にしかねない。体系的な意味記述を実現するためには、各語義がどのように結びついているのかという問題を明らかにしなければならない。また、語の意味拡張に対する従来の研究では、比喻による意味拡張の一般化が強調されつつ、品詞自体の持っている性質は無視されていた。したがって、本研究では、認知言語学的立場で味覚形容詞の意味を考える。具体的には、以下のような点がある。

1) 身体的な経験を重視する

味覚形容詞の意味拡張のプロセスを分析し、身体感覚にかかわる経験が日常言語の主観的な世界をつくり上げていく背景的な基盤としての役割を明らかにする。

2) プロトタイプ理論⁶に基づく

本研究ではプロトタイプ理論のカテゴリー観にもとづき、味覚形容詞が持つ多義の意味も、プロトタイプ的な中心的成員から副次的で周辺的な成員へと放射状に拡張していく多義的カテゴリーをなしていると考えられる。

3) 拡張関係を比喻によって説明する

本研究は語の意味拡張プロセスの内容をメタファー・メトニミー・シネクドキーの3つとする。語はプロトタイプ的な意味を出発点として、メタファー・メトニミー・シネクドキーによって意義が展開し、体系的な意味ネットワーク⁷をなしていると考えられる。

4) 味覚形容詞自体の持っている性質⁸

本研究は、各語義の関係を解明するために、メタファー・メトニミー・シネクドキーによって関係づけることに留まらず、味覚形容詞自体の持っている性質——価値評

価性・程度性を重視した方法を提案する。研究対象となる味覚形容詞の性質を視野に入れることにより、意味拡張に見られる傾向性を見いだす。

1.4.3 対照言語学の立場から

更に、(3) は対照言語学の立場に立って、日・中味覚形容詞「甘い、辛い、苦い、酸っぱい」と“甜、辣、苦、酸”の比較・対照研究についてである。

「甘い、辛い、苦い、酸っぱい」と“甜、辣、苦、酸”の比較・対照は日・中味覚形容詞の使用・対訳に関する重要な問題である。「甘い、辛い、苦い、酸っぱい」と“甜、辣、苦、酸”の使用や対訳について、個々の語義は何の制限もなく、自由に使用可能なものではない。本研究は、外国語学習者が日・中味覚形容詞を正確に使用するために、意味・用法の分析において、種々の語義の日・中対訳関係を明らかにする必要があると主張する。「甘い、辛い、苦い、酸っぱい」と“甜、辣、苦、酸”の比較・対照を通して、両者の対訳関係を明らかにし、意味・用法、語義分布、意味拡張などにおける相違点・類似点について詳しく考察する。

1.4.4 共時的な考察であること

靱山・深田(2003)では、意味拡張に対する研究には、共時的な考察と通時的な考察の両方ができるとしている。本研究では、日・中両言語における味覚形容詞の意味拡張に対して、基本的には共時的な考察を行う。

本研究は、コーパスに基づいて用例を収集・分析し、「甘い、辛い、苦い、酸っぱい」と“甜、辣、苦、酸”の意味・用法を再整理・分類する。そして、認知言語学的視点から、味覚形容詞の意味拡張のプロセスを解明し、プロトタイプ的な意味から拡張していく各派生義を見出し、多義的意味ネットワークを提示する。さらに、計量言語学的手法によって、コーパスデータに対して定量的な調査を行い、対照言語学の角度から、“酸、甜、苦、辣”と「酸っぱい、甘い、苦い、辛い」の異同を明らかにする。

第2章 先行研究

本章では、日・中両言語における味覚形容詞「甘い、辛い、苦い、酸っぱい」と“甜、辣、苦、酸”に関する先行研究と問題点について述べる。

2.1 日本語の味覚形容詞についての先行研究

武藤 (2001) 「味覚形容詞『甘い』と『辛い』の多義構造」は認知的な比喩 (メタファー・メトニミー・シネクドキー) を切り口に、先駆的な研究方法を取った。従来説明できないとされてきた感覚間の意味転用の動機付けについて、感覚間だけを対象としては説明できないもので、多義全体を記述することにより、はじめて説明が可能となるという点を確認した。認知的な比喩による意味の拡張という観点から、「甘い」と「辛い」の複数の意味を共時的に分析している。また、多義派生を支える心理的動機付けを探ることにより、両語の意味構造を述べている。その結果、インターネット上に公開されているホームページと『新潮文庫の100冊』(1995) CD-ROM版から収集した例文に基づき、「甘い」には一つの基本義と七つの派生義があることを認定した。「辛い」には、一つの基本義と三つの派生義があることを認定した。また、意味の間にはメトニミーやメタファーによる意味拡張がなされていることを説明している。

青谷 (2001) 「多義語の語彙ネットワークに関する研究 (1) ——形容詞『甘い』について——」では、「甘い」が刺激語として与えられた場合、どのような語が連想されやすいのかについての調査を行った。刺激語「甘い」に対し、連想された語彙は、「糖分 (基本義)」、「からさの不足」、「共感覚」、「心理的快感」、「厳格さの不足」、「状態の不十分さ」に分類された。しかも、「甘い」の意味の拡張関係をネットワーク状に表した。だが、基本義と派生義がどのようにつながっているのかについては説明していない。

小出 (2003) は、「甘い」、「辛い」、「苦い」、「酸っぱい」という四つの味覚形容詞をめぐって、意味拡張を体系的に記述し、拡張の度合いと方向性を分析している。小出 (2003) では、「甘い」、「からい」、「苦い」、「酸っぱい」の意味区分を行い、その意味間の関係を記述した。味覚形容詞が、ほかの感覚の対象を表すこともできるため、ほかの感覚を表す可能性も比較された。また、この四つの味覚形容詞の用法の広がりをも、大きく「人の内部の事象」、「外界の事象」という二つの対象に注目して記述している。「人の内部の事象」は「味覚表現」、「他感覚表現」、「心的な事象の表現」に、「外界の事象」は「他者に対する姿勢、

評価など]、「外界の事象の状態」に細分類している。その四つの味覚形容詞の意味領域の比較により、味覚のプロトタイプは「甘い」であると述べている。

楠見（2004）は、共感覚的比喩表現の心理的なアプローチについて、味覚のメタファー表現を分析している。味を含めた共感覚的比喩の意味は、味覚形容詞の意味構造が感覚メタリティを越えた構造的同型性を持つことで説明している。

謝豊地（2005）は、多義性に対する分析と考察によって、「甘い」と「辛い」がどのようにそれぞれの意味へと拡張・転用することが明らかになった。

上述した先行研究は、認知言語学の観点から、日本語の味覚形容詞の意味拡張を研究しているものである。

2.2 中国語の味覚形容詞についての先行研究

日本語に比べ、中国語における味覚形容詞についての研究は多くないのが現状である。

緜（2003）は、分類の角度から“味覚詞（味覚を表す語）”に触れ、語の表している良さと悪さから味覚形容詞が“美味詞”、“恶味詞”、“中性詞”に分けられると指摘した。また、比喩の角度から“香甜是美好,苦臭是不好”という観点を提出し、“味覚詞”の比喩的意味は人間の心理的認知と関係があり、“美味詞”、“恶味詞”、“中性詞”が異なった物事と人間の心理や精神的な感覚を表すという意見を出した。

李（2005）は、《味覚隠喩化的認知結構及語義特征》で、“味覚詞”と他の語との組み合わせの方式という新たな研究角度から“味覚詞”の隠喩について論述した。李は、“味覚詞与其他词组合构成味覚感官范畴的词语,往往表达了主观感受的意义”と述べ、つまり、“味覚詞”と他の語との組み合わせは味覚感覚のドメインに属した語であり、よく主観的感覚の意味を表しているという意味である。“味覚詞”を他の語との組み合わせられた理由は、人間が類似性によって二つの異なった物事を結びつけ、その内的な繋がりに関与したからである。“味覚詞”が他の語と組み合わせられた後で、もう味覚の本来の意味ではなく、新しい意味で用いられ、徹底的に隠喩として使われるのであると明らかにした。

候氏も李氏も、中国語において、隠喩の角度から“味覚詞”を研究し、新たな一步を踏み出したと言えよう。しかし、中国語の“味覚詞”をめぐる展開された研究がまだ少なく、具体的な“味覚詞”や基本“味覚詞”についての体系的研究があまり見ならない。

丁（2010）は、認知言語学の観点から中国語と英語における“酸”の意味転用の異同を論じている。“酸”は味覚、身体感覚、心理感覚、抽象的意味という四つの分野の意味を表

すことができる」と述べており、「酸」の基本義と派生義の関係はメタファーとメトニミーという認知方法で説明できると述べている。

王 (2010) は、認知言語学の視点から「苦」の意味転用を分析している。「苦」は味覚における使用のほか、視覚・触覚、感情、物的世界、程度などの領域に意味の拡張をなしていると述べている。しかも、その意味拡張はメタファーという修辞法に基づいて行われていると指摘している。

王・李 (2010) は、中国語と英語における「辣」の意味に関する比較研究を行った。認知言語学と文化の視点からその異同を分析した。「辣」はメタファー的な意味を表す時に、単独で使う場合が少ない。しかも、その時に共起することばは大体そのメタファー的な意味を表すと指摘している。

葛・黄 (2012) は、メタファーという修辞法を切り口に、中国語の「甜」の基本義と派生義を考察している。コーパスから実例を引用し、本来味覚用語である「甜」の嗅覚、聴覚、視覚及び心理感覚への転用を分析している。この研究において、「甜」という単純語を扱うばかりではなく、「甜」の入っている複合語も扱う対象にし、さらに、「甜」がいつどのようなことばと共起するかを検討している。

2.3 味覚形容詞の日・中対照研究についての先行研究

尤 (1994) は、「あじ」に関する形容詞にめぐって、その比喩的表現について日本語と中国語との類似点と相違点について分析している。形容詞の表現イメージと形容詞の比喩の意味範囲との二つの方面から、日・中両言語の「あじ」語彙の形容詞の相違点を分析し、その文化や習慣の異同点も比較することにしてしている。

張 (1999) は、「甘い、辛い、酸っぱい、苦い、塩辛い」5つの形容詞を中心に日・中味覚表現の派生義について、さまざまな意味を羅列し、簡単に比較している。黄 (2006) は中国語にある味覚形容詞が入っている複合語を羅列し、それに対応する日本語の表現を述べた。その比較により、日・中味覚形容詞の意味と用法を比較している。また、文化や習慣の角度から、日・中味覚形容詞の意味の異同の原因を探った。五味のことばの意味拡張を比較することにより、中国語における「酸」と「苦」の意味拡張が圧倒的に豊富であることを指摘している。その原因はこの二つの味が中国の飲食文化における歴史が日本のそれより長いからだ」と指摘している。また、「咸」つまり「塩辛い」という味は一番欠かせない、一番基本的な味であるにもかかわらず、この二つの形容詞における意味拡張が見られ

ないことを指摘し、それが興味深いことであると述べている。張（1999）、黄（2006）は、味覚を表わす「甘い、辛い、酸っぱい、苦い、塩辛い」といった五つの形容詞を中心にその派生義について比較しているが、意味拡張の特徴や、構造を体系的には捉えていない。

頼（2004）は、「日本語味覚形容詞の意味構造」で「酸っぱい」、「甘い」、「苦い」、「辛い」、「渋い」といった基本形容詞を対象として、その漢字表記に因んで、中国語との対照比較を行っている。また、CD-ROM版『新潮文庫の100冊』と『日本国語大辞典 第二版』（2001）とインターネット上で公開されているホームページから収集した自然な用例を通し、日本語味覚形容詞の意味構造を明らかにしている。さらに、共感覚の観点を入れ、日・中の違った派生義を挙げている。その結果、いくつかの味を同一形容詞で表すことから、日本語味覚形容詞「酸っぱい」、「甘い」、「苦い」、「辛い」、「渋い」は、典型的なファジー語としている。中国語の味覚形容詞も同じであるが、日・中両言語における味覚形容詞はすべてが対応しているわけではないと述べている。中国語で、「辣」はからし・生姜などの味、「咸」は塩味を表すのに対し、日本語では、からしも塩も「辛い」と言うなどの理由から、日本語は中国語よりファジー性が強いと指摘している。

曹（2009）は、日本語味覚形容詞「甘い」、「辛い」と中国語味覚形容詞“甜”、“辣”を中心にし、意味分析を行い、基本義から別義間の関連を認知意味論の理論によって分析している。両言語のこの味覚形容詞の意味構造と各意味間の拡張メカニズムを対照比較し、その異同を明らかに示している。

張（2011）は、「語の由来・変遷」及び「生理・心理学に基づく感覚表現を支える認知のしくみ」を考えつつ、単純語と複合語における「甘い」・“甜”と「辛い」・“辣”の多義構造を分析している。例文を収集し、意味区分を行い、その様々な意味の間を関係づけ、さらにその関係を認知的な比喩より分類し、意味間の関係を拡張図に示している。

崔・馬場（2010）は、日本語の味覚形容詞「甘い」、「辛い」と中国語の味覚形容詞“甜”“辣”を対象とし、その意味派生に焦点を当て、用例に基づいて分析している。両言語における味覚形容詞の異同点を詳細に示している。

2.4 味覚形容詞の日英対照研究についての先行研究

近（1997）は、日本語の「甘い」と英語の“sweet”との比較し、意義特徴の対照を通じ、それぞれの語の意味構造が考察されている。

皆島（2005）は、日本語の「甘い」と英語の“sweet”について、共感覚比喩に基づき、

語彙分析の観点から、対照言語学的な考察がされている。「味覚」から他の諸感覚への転義を中心に、両言語における味覚形容詞の意味のネットワークの展開および意味成分における共通点・相違点を述べている。

長谷川 (2008) は、日本語の「甘い」と英語の“sweet”を中心に、共感覚の一部(味覚-嗅覚)におけるメトニミー、及びものの属性——受け手の感情を表わす用法におけるメトニミーについて分析している。

小田 (2003) は、日本語の味覚形容詞「甘い」と英語の味覚形容詞“sweet”の意味構造について、分析と対照研究を行っている。

英語と日本語の対照は個別の味覚形容詞、特に「甘い」と「辛い」を中心に記述したものが多く、体系全体の拡張を対象とする研究はほとんどない。

2.5 先行研究の問題点と残された課題

日・中両言語における味覚形容詞に関する先行研究を概観してみると、いくつかの問題点が浮かび上がる。

まず、両言語における味覚表現はそれぞれ単独の研究が多数であるが、特に「甘い」、「辛い」と“甜”、“辣”に集中している。ほかの味覚形容詞についての研究は極めて少ない。たしかに、日本語の「甘い」、「辛い」と中国語の“甜”、“辣”の意味転用は実に豊富であるが、中国語の「酸」と「苦」の意味・用法も多彩で興味深いものである。したがって、本研究では「甘い」、「辛い」と“甜”、“辣”だけではなく、「酸っぱい」、「苦い」と“酸”、“苦”にも注目する。

また、味覚形容詞の派生義はプラス的とマイナス的な使い方があるが、それについての比較と原因の究明はほとんど行われていない。例えば、快い味覚をもたらす「甘い」はなぜ日本語において様々なマイナス的な意味を持っているのか。また、なぜ中国語ではこのような使い方が存在しないのかはまだ究明されていない。日本語と中国語の味覚形容詞を取り上げ、体系的に行われる対照研究は少ないのが現状である。

なお、味覚表現の使い方に関する研究は主に認知言語学の視点からなされている。より詳しく言えば、メタファー、メトニミー、シネクドキといった認知言語学の角度から味覚形容詞の意味転用を説明しているが、具体的にどんな意味として使われるのか、または、どんな領域に転用されているのかの研究ははっきりしていないようである。

本稿は、先行研究を踏まえ、コーパスを利用する実例分析を行い、認知言語学の視点から、対照言語学の研究方法を取り、日・中両言語における味覚形容詞「甘い、辛い、苦い、酸っぱい」と“甜、辣、苦、酸”の異同を究明したい。

第3章 コーパスに基づく日・中味覚形容詞の考察 ——「甘い」と“甜”

本章では、認知言語学の視点から、『日・中対訳コーパス』、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』及び《北京大学汉语语言学研究センター語料庫》など大規模な言語データベースから味覚形容詞「甘い」と“甜”の使用例を収集・分析し、その意味・用法を対照しながら、考察を行う。

3.1 辞書における「甘い」と“甜”の意味記述

本節では、日・中両言語の辞書における味覚形容詞の意味記述に基づき、「甘い」と“甜”の意味項目を対照しながら、考察を行う。

3.1.1 国語辞典における「甘い」の意味記述

本節では、日本語の国語辞典に見られる「甘い」の意味記述をしてみることにする。自明のことではあるが、辞書によって語彙の意味項目の立て方や意味記述が異なる。本研究では、日本語の国語辞典の中から代表的であると思われる大型辞書2種、中型辞書2種及びインターネット辞書1種、計5種の辞書を取り上げ、それぞれの辞書における「甘い」の意味記述を考察する。調査の対象とした辞書は、『日本国語大辞典』（小学館 第二版）『学研国語大辞典』（学習研究社 第二版）『新明解国語辞典』（三省堂 第六版）『岩波国語辞典』（岩波書店 第七版）『デジタル大辞泉』⁹（小学館）（以下、それぞれ『日国』『学研』『新明解』『岩波』『大辞泉』と略称）という5つの辞書である。

まず、「甘い」の意味や用法が、上記5種の国語辞典でどのように記述されているか、見てみよう。（以下に引用する各辞書における「甘い」の意味の説明はすべて原典通りである。ただし、紙幅の関係上、各意味項目の後ろに掲載されている用例は省略する。また、考察する際の便宜上、意味項目の番号付けを統一させている。原典には振り仮名が付けられているが、ここでは省略する。）

(1) 『日国』

①味覚に関していう。

- i) 砂糖や蜜など糖分の味がある。
- ii) 塩気が薄い。辛くない。

②心理的に砂糖や蜜の味のように感じられるさま。

i) (ことばに関していう) 人が聞いて気持ちがよくて、ついうかうかと欺されそうである。

ii) 愛情がこまやかである。男女の間の愛情についていうことが多い。

iii) (音楽や香りやその他いろいろの物事に関していう) うつとりと快い。

③心理的に、塩気のきいていないような感じというところから、きびしさ、鋭さ、強さなどに乏しいさま。

i) なまぬるい。手ぬるい。また、愛情におぼれて厳格でない。

ii) しっかりしていない。きっちりしていない。しまりがない。

iii) 切れ味が悪い。

iv) 物価・株価がやや低い。また、低くなる気味である。

v) 芝居などで、興行物の不入りなのという。

(2) 『学研』

①糖分のもっている味である。

② [料理で] 塩気が少ない。

③ [においが] 糖分を思わせるようだ。

④心がとけるようだ。楽しい。

⑤人を喜ばせてきそいこむようだ。

⑥ [男女間の] 愛情が細やかである。

⑦ [しつけ・採点などが] きびしくない。親切で、なんでもうけいれる。

⑧深く考えない。考えが足りない。のんきである。

⑨大したものではない。

⑩ [刃物の] 切れ味が悪い。にぶい。

⑪ぴったり合わない。ゆるい。

(3) 『新明解』

①⇔からい

i) 砂糖や蜜のように、舌に快く感じられる(抵抗感を与えない)味だ。[広義では、嗅いだり聞いたりして、いい感じが得られることにも言う]

ii) 煮物や汁物の塩けが薄い(くて、物足りない)感じだ。

②<(だれ・なにに) ~>きびしさ・鋭さが足りない感じだ。

③相場が幾らか下がり気味だ。⇔しっかり

(4)『岩波』

①砂糖・みつなど糖分の味がする。

②糖分の味を思わせる。

i) やわらかく人をとろけさせるようだ。

ii) 人をたらし込むように仕組んで心をくすぐる調子（内容）だ。

③きつい感じがしない。鋭くない。

i) てぬるい。きびしくない。

ii) ゆるい。しっかりしていない。しまりがない。

iii) 切れ味が悪い。

(5)『デジタル大辞泉』

①砂糖や蜜のような味である。

②塩気が少ない。辛くない。

③口当たりが穏やかで、刺激が少ない。酒の味などにいう。

④（味覚以外の感覚に転じて）

i) 蜜のようにおいがある。

ii) 話しぶりが巧みで、人をたぶらかすさま。うまい。

iii) 耳に快い。

iv) 男女の仲がよく、幸せそうなさま。

⑤

i) やさしすぎるさま。厳しさに欠けているさま。

ii) 評価の基準が厳格でない。

iii) しっかりした心構えができていない。

⑥楽しく、快いさま。

⑦物事の機能が本来あるべき状態より衰えているさま。

⑧株価の動きが鈍く低落気味だ。

上記5つの国語辞典の意味記述をまとめると、日本語の「甘い」の各語義では

①砂糖や蜜など糖分の味がある。

②塩気が薄い。辛くない。

③口当たりが穏やかで、刺激が少ない。酒の味などにいう。

- ④（においが）糖分を思わせるようだ。
- ⑤（音声など）うっとりときい。
- ⑥（言葉などが）人を喜ばせてさそいこむようだ。人が聞いて気持ちがよくて、ついうかうかと欺されそうである。
- ⑦心がとけるようだ。楽しい。
- ⑧（男女間の）愛情がこまやかである。
- ⑨なまぬるい。手ぬるい。また、愛情におぼれて厳格でない。
- ⑩しっかりしていない。きっちりしていない。しまりがない。
- ⑪大したものではない。
- ⑫切れ味が悪い。
- ⑬ぴったり合わない。ゆるい。
- ⑭物価・株価がやや低い。また、低くなる気味である。
- ⑮芝居などで、興行物の不入りなのという。
- など15項目（表1-1）があげられる。

表1-1 「甘い」について5つの国語辞典の意味記述

「甘い」の意味項目	日国	学研	新明解	岩波	大辞泉
①砂糖や蜜など糖分の味がある。	① i	①	① i	①	①
②塩気が薄い。辛くない。	① ii	②	① ii	—	②
③口当たりが穏やかで、刺激が少ない。酒の味などという。	—	—	—	—	③
④糖分を思わせるような匂い。	② iii	③	① i 広義	—	④ i
⑤（音声など）うっとりときい。		—	—	—	④ iii
⑥（言葉などが）人を喜ばせてさそいこむようだ。人が聞いて気持ちがよくて、ついうかうかと騙されそうである。	② i	⑤	—	② ii	④ ii
⑦心がとけるようだ。楽しい。	—	④	—	② i	⑥
⑧男女間の愛情がこまやかである。	② ii	⑥	—	—	④ iv
⑨なまぬるい。手ぬるい。また、愛情におぼれて厳格でない。	③ i	⑦	②	③ i	⑤ i、ii
⑩しっかりしていない。きっちりしていない。しまりがない。	③ ii	⑧		③ ii	⑤ iii

①大したものではない。	—	⑨	—	—	—
②切れ味が悪い。	③ iii	⑩	—	③ iii	⑦
③ぴったり合わない。ゆるい。	—	⑪	—	—	—
④物価・株価がやや低い。また、低くなる気味である。	③ iv	—	③	—	⑧
⑤芝居などで、興行物の不入りなのをいう。	③ v	—	—	—	—

*考察する際の便宜上、意味項目の番号付けを統一させている。

3.1.2 中国語の辞典における“甜”の意味記述

本節では、《古代汉语词典》(商務印書館)、《辞海》(上海辞書出版社 1989 年版)、《现代汉语大辞典》(上海辞書出版社 2009)、《现代汉语词典》(商務印書館 2002 年増補本)、《新华词典》(商務印書館 2001 年修訂版)の5つの辞書(以下、それぞれ《古漢》、《辞海》、《現漢大》、《現漢》、《新华》と略称)を利用し、中国語の“甜”の意味記述を調べ、整理してみる。(以下に引用する各辞書における“甜”の意味の説明はすべて原典通りである。考察する際には、便宜上、意味項目の番号付けを統一させている。)

(1) 《古漢》

①味甘。即像糖和蜜的味道。汉・王充《论衡・超奇》：“俗好高古而称所闻，前人之业，菜果甘甜；后人新造，蜜酪辛苦。”

②形容觉睡得踏实。宋・杨万里《夜雨不寐》：“更长酒力短，睡甜诗思苦。”

③美好；娇美。金。董解元《西厢记诸宫调・卷一》：“曲儿甜，腔儿雅，裁翦就雪月风花。”元・刘秉忠《干荷叶》：“脸儿甜，话儿粘，更宜烦恼更宜饮。”

(2) 《辞海》

①糖或蜜的味道。《孔子家语，致思》：“楚王渡江，得萍实，大如斗，赤如日，剖而食之，甜如蜜。”

②比喻美好，舒适，幸福。杨万里《夜雨不寐》诗：“更长酒力短，睡甜诗思苦。”

(3) 《现汉大》

①像糖或蜜的味道。秦牧《“果王”的美号》：“这类果子…却可以长得肥硕香甜。”

②美好。老舍《上任》：“差事不算很甜；也说不上苦来。”

③形容睡得酣畅。陈毅《初游青岛》：“思之乐融融，归寝熟且甜。”

④言语使人舒心、愉快；投其所好而使之入迷。郭沫若《屈原》：“他把国王甜着了，国十便高兴得昏天黑地。”又如：这孩子嘴真甜。

(4)《现汉》

- ①像糖和蜜的味道：这西瓜真甜/话说得很甜。
- ②形容舒适、愉快：他睡得真甜。

(5)《新华》

- ①像糖或蜜的味道。与“苦”相对。
- ②幸福：舒适。忆苦思甜/他睡得真甜。

上記5つの中国語の辞典の意味記述をまとめると、中国語の“甜”の各語義では

- ①像糖或蜜的味道。
- ②比喻美好，舒适，幸福。
- ③形容觉睡得踏实。
- ④言语使人舒心、愉快；投其所好而使之入迷。

などの4項目（表1-2）が記述される。

表1-2 “甜”について5つの中国語の辞典の意味記述

“甜”の意味項目	古汉	辞海	现汉大	现汉	新华
①像糖或蜜的味道。	①	①	①	①	①
②比喻声音、样貌、气味等美好，或事物舒适，幸福。	③	②	②	—	②
③形容觉睡得踏实。	②	—	③	②	—
④言语使人舒心、愉快；投其所好而使之入迷。	—	—	④	—	—

*考察する際の便宜上、意味項目の番号付けを統一させている。

3.1.3 「甘い」と“甜”の意味記述の対照

日・中両言語の辞書における「甘い」と“甜”の意味記述には、主に次のような特徴が見られる。

1. 辞書によって、意味立項の配列は多少異なっているが、「砂糖や蜜など糖分の味」「像糖或蜜的味道」を第一義として挙げている点では各辞書が一致している。

2. 品詞性から見れば、“甜”は主に形容詞としての役割を果たしているが、《现汉大》の語義④に記載されている例が示すように、動詞的な用法もある。この場合、“甜”は“使…甜”（人を喜ばせる）という使役の意味を持つ。それに対し、「甘い」の意味記述は、形容詞に集中して、ほかの用法はあまり言及されていなかった。

3. 各辞書による「甘い」と“甜”の意味規定から、「甘い」と“甜”は味覚を表わす本来の語義①以外には、味覚以外の共感覚、人間の心理感覚、人間の動作の様子などのような意味拡張が生じている。

4. 中国語の“甜”は基本的にはマイナス的評価性を帯びていないようであるが、日本語の「甘い」はプラス的評価性とマイナス的評価性を両方とも帯びているようである。

辞書における「甘い」と“甜”の各意味記述を対照してまとめると、表 1-3 のようになる。

表 1-3 「甘い」と“甜”の意味記述の対照

意味記述	「甘い」	“甜”
①砂糖や蜜など糖分の味がある。	○	○
②塩気が薄い。辛くない。	○	—
③口当たりが穏やかで、刺激が少ない。酒の味などにいう。	○	—
④ [においが] 糖分を思わせるようだ。	○	—
⑤ [音声など] うっとりとい。	○	○
⑥ [言葉などが] 人を喜ばせてさそいこむようだ。人が聞いて気持ちがよくて、ついうかうかと欺されそうである。	○	○
⑦心がとけるようだ。楽しい。	○	○
⑧ [男女間の] 愛情が濃やかである。	○	○
⑨なまぬるい。手ぬるい。また、愛情におぼれて厳格でない。	○	—
⑩しっかりしていない。きっちりしていない。しまりがない。	○	—
⑪大したものではない。	○	—
⑫切れ味が悪い。	○	—
⑬ぴったり合わない。ゆるい。	○	—
⑭物価・株価がやや低い。また、低くなる気味である。	○	—
⑮芝居などで、興行物の不入りなのにいう。	○	—
⑯ [睡眠が] 心地よい、ぐっすり。	—	○

日・中両言語の辞書における味覚形容詞「甘い」と“甜”について、共通した語義には、

①砂糖や蜜など糖分の味がある。⑤ [音声など] うつとりと快い。⑥ [言葉などが] 人を喜ばせてさそいこむようだ。人が聞いて気持ちがよくて、ついうかうかと欺されそうである。⑦心がとけるようだ。楽しい。⑧ [男女間の] 愛情がこまやかである。などの5項目しかあげられない。

中国語の“甜”は、「甘い」の意味項目②塩気が薄い。辛くない。③口当たりが穏やかで、刺激が少ない。酒の味などにいう。④ [においが] 糖分を思わせるようだ。⑨なまぬるい。手ぬるい。また、愛情におぼれて厳格でない。⑩しっかりしていない。きっちりしていない。しまりがない。⑪大したものではない。⑫切れ味が悪い。⑬ぴったり合わない。ゆるい。⑭物価・株価がやや低い。また、低くなる気味である。⑮芝居などで、興行物の不入りなのという。などの10項目に相当する語義が記述されていない。一方、「甘い」の意味項目の中に、“甜”の意味項目⑯ [睡眠が] 心地よい、ぐっすり。と対応できるものが見当たらない。

つまり、辞書の意味記述により、①砂糖や蜜など糖分の味がある。⑤ [音声など] うつとりと快い。⑥ [言葉などが] 人を喜ばせてさそいこむようだ。人が聞いて気持ちがよくて、ついうかうかと欺されそうである。⑦心がとけるようだ。楽しい。⑧ [男女間の] 愛情がこまやかである。などの意味を表す時、日本語の「甘い」は中国語の“甜”と理解することができ、お互いの直接翻訳は可能であるが、それ以外の場合では、コミュニケーションに問題が発生する可能性が十分あると思われる。以下、コーパスの実例を見ながら、考察してみよう。

3.2 日・中対訳コーパスに基づく「甘い」と“甜”の意味・用法の考察

本節では、日・中両言語の辞書に述べている意味項目を参考にし、日・中対訳コーパスから収集した用例を分析しながら、「甘い」と“甜”の意味・用法や対訳関係のありさまを考察する。

3.2.1. 対訳関係が成立可能な意味・用法についての考察

①砂糖や蜜など糖分の味がある。

本来の味覚においては、日本語の「甘い」と中国語の“甜”は同じ意味を持っている。したがって、互いの言語へ訳す時に、そのまま、直訳すればよいのである。例を通して見てみよう。

(1)爱吃甜食是孩子的天性,有些家长喜欢拿糖果哄孩子,这样会使孩子摄入过量的糖份,岂不知吃糖过多会影响孩子成长。

訳:子供は生まれながらにして、甘い物が大好きです。(お子さんがぐずったら、)お菓子であやす親御さんは多いのでしょう。結局、糖分の過剰摂取が子供の成長を妨げる原因になります。

(2)小朋友喜欢吃甜食,吃完甜食之后就觉得开心,喜欢这个口味儿,因为甜食吃了以后它会让人高兴,就是说你脑子里面会有多巴胺一类化学物质的产生, …

訳:子供は甘い物が好きで、甘いものを食べると楽しくなります。甘いものは脳内の神経伝達物質であるドーパミンやセロトニンの分泌を促し、食べると「快樂」を感じるのです。これが、子供が甘いもの好きである理由です。

用例の「甘い物」と“甜食”は同じ糖分が入っている食べ物や果物などの味を表わしている。このような食べ物を口にした時、「砂糖やあめのような糖分があつて、刺激が少ない味」という意味で使われ、日・中両言語の「甘い」と“甜”は対訳にすることができる。

②口当たりが穏やかで、刺激が少ない。

「口当たりが穏やかで、刺激が少ない。」という使い方について日本語と中国語は共通している。したがって、この意味の使用例はすべてそのまま直訳すればよいと思われる。

(3)土地の人はこの水を「ご神水」と言う。その水は夏でも冷たく甘い。口にふくむと木の香りがする。

訳:当地人称这泉水为神水。这水即使夏天,也甘冽甜美,入口还带有一股树木的清香。

③ [においが] 糖分を思わせるようだ。

「甘い」と“甜”は人間が匂いを嗅ぎ、好ましく快い感覚を喚起させた状態を表わすために用いられる場合がある。

(4)(糖葫芦),那熬糖的学问,蘸糖的技巧是非得练上一番不可的。“趁热吃香哪!”偶尔的一声吆喝,伴着空气中弥漫的甜香,牵住了许多人的脚步。

訳:(砂糖漬けの果物菓子) …、砂糖の煮詰め方はもちろん、果物に煮詰めたタフィーを塗りつける技法もいくつかの練習が必要だ。空気の中の甘い匂いと共に、時折「熱いうちに!」との叫びがたくさんの人を呼び寄せる。

(5)山上玉蜂闻到玉蜂蜜浆的甜香,纷纷赶来。

訳：山の玉蜂が蜜の甘い匂いを嗅ぎ付けてやってきました。

用例の「甘い匂い」、「甜香」において、主体が発する「好ましい匂い・香り」を嗅いだ時、「甘い」食物を食べた時の好ましい感覚を思い出し、「甘い」という味覚形容詞を使って、その匂いを表わしているのである。

④ [音楽、声など] うっとりとかい。

次のように「甘い」には、「人の声が美しい」、「音や音楽が心地よく響く」という意味が含み、「甜」と対訳することができる。

(6) “当真当真当真！”孟蓓的声音又甜又脆。

訳：「ほんと、ほんと、ほんとよ！」孟蓓の声は甘くて澄んでいた。

ここでの「甘い」と「甜」は「聴覚的刺激」で、同じ聞き手を満足させるような「心地よい音声」を修飾し、対訳することができる。

ただし、嗅覚・聴覚を表す場合、中国語では「甜」という単音節形容詞の形で単独的に使う場合が少なく、「甜甜」という重ね型が使用されるケースが多数である。

(7) やさしい、かすかな、いかにも綺羅子らしい甘い声でした。

訳：温柔的、轻微的、绮罗子特有的那种甜甜的声音。

また、日本語には「甘い声」という表現もあるが、「甜美的歌声」を「甘い歌声」と訳しても理解できるが、例(8)では、訳者は「きれいな声」と訳している。

(8) 她的歌声多么甜美，从没有谁唱得象她这样动人。

訳：きれいな声、こんなにドキドキする声を聞いたのは初めてだな。

つまり、日・中両言語において共通している使い方も文脈によって対応しない形で訳される場合がある。

⑤ 心がとけるようだ。楽しい。

(9) 这个小屋，曾经度过多少甜甜的幸福时光，难道永远也不能再回来了吗？

訳：かつて、あの蜜のように甘い時期をすごしたこの部屋にも、もう、永久に戻っては来られないのだろうか？

用例(9)は「好ましく快い心理的感觉」を起こす事象を表わすものである。

⑥ [男女間の] 愛情がこまやかである。

「甘い」と“甜”は男女関係における感情を描写するにもよく用いられる。例えば、以下の用例で示されているようである。

(10) この平民的な苗字が自分の中心を聳動して、過ぎ去った初恋の甘い記憶を呼び起こすことは争われない。

訳：这个平民般的姓氏触动到了我的内心。不容否认它唤起了我对那段已经过去了的甜甜的初恋记忆。

この場合、「甘い」と“甜”は「初恋」を修飾対象としていることから、恋愛関係にある二人が醸し出す「うっとりとした、幸福で親密な様子」という意味で捉えられていると思われる。

⑦ [言葉など] 人が聞いて気持ちがよくて、ついうかうかと欺されそうである。

(11) わたしの弱点…それは“甘い言葉”に弱いということだった。

訳：我的弱点，就是经受不住“甜言蜜语”的诱惑吧。

(12) あの甘い言葉に乗せられ、故郷へのむかしの憎悪も、まるで忘れ、つい、うかうか、「出席」と書いた。

訳：我上了那句甜言蜜语的当，一时间忘记了对家乡曾经的憎恶，随随便便写下了“出席”二字。

例(11)、(12)のように、「甘い言葉」の訳語として使われている“甜言蜜语”は日本語と同じように、マイナスの意味を表している。「甘い言葉」や“甜言蜜语”に油断したら、騙される可能性がある。

⑧ 異性をうっとりさせ、誘い込むような (触覚)

(13) あのとろけるように甘いキスの感触が、夢だなんて思えない。

訳：甜甜的吻使人陶醉浮想联翩。

中国語の“甜”が「異性をうっとりさせ、誘い込むような (触覚)」という意味で使われている。この使い方は日本語の「甘い」と共通している。したがって、「甘い口付け」の「甘い」は“甜甜的”と訳せば通じる。

3.2.2 対訳関係が成立しかねる意味・用法についての考察

⑦' [言葉などが] 人を喜ばせてさそいこむようだ。

(14) 奶奶回到娘家，倏忽三天，眼见着又是回婆家的日子了。三天里她茶饭不思，精神恍惚，曾外祖母做了好饭好菜，说着甜言蜜语，我奶奶置之不理，宛若人一样。

訳：祖母が里帰りしてからまたたく間に三日が過ぎ、また婚家へもどる日がやってきた。三日の間、彼女はまるで食欲もなく、ぼんやりと過ごした。曾祖母はご馳走をつくって耳ざわりのいい言葉をかけたが、祖母はそっぽを向いたきり、まるで木偶のようだった。

例(14)における“甜言蜜语”は前後文によってプラスの意味を表していることが容易に分かる。もし、それをそのまま「甘い言葉」と訳したら、理解に不具合が生じてくる。したがって、訳者は「耳ざわりのいい言葉」と訳している。

⑨塩分・塩気が比較的多くない、足りない。

「塩分・塩気が比較的多くない、足りない」という使い方の場合である。

(15) 関西の味噌汁は、甘くて、どうも口に合わない。

訳：关西的味噌汤味道较淡，不合我的口味。

また、香辛料による刺激成分・刺激度が比較的高くないという意味で使われる場合である。例えば、「甘いカレー」は“香辛料不重的咖喱”と理解したほうが正しいのである。

⑩アルコール度数が低い。

「アルコール度数が低い」という意味で使用される場合である。

(16) 俺って基本的に、甘いお酒じゃないと駄目なのかな。

訳：我基本上只能喝点低度酒。

「甘いお酒」は中国語に訳される際は、“度数较低的酒，不太烈的酒”と訳したほうがふさわしいのである。

⑪旨い、美味しい。

「食物や料理などの味が好ましい状態にある」という意味で使用される場合である。

(17) 鶴川は東京の生家にたのんで、ときどき甘いものなどを送らせた。

訳：鹤川经常让父母从东京捎来点好吃的。

(18) 鳥の味は奇妙に甘い。

訳：鸡的味道出奇地鲜。

用例(17)、(18)の中の「甘い」は中国語に訳す時に、“甜”ではなく、“好吃的”、“美

味的”、“鮮”、“鮮美的”などと訳したほうが正しいのである。

⑫ [表情、顔立ちなど視覚の刺激が] 心地よい

中国語において、“甜”は子供や女性にだけ使われるのに対し、日本語において「甘い」は男性にも用いられている。

(19) 孩子的脸上挂着甜甜的微笑。

訳：子供の顔にはいかにも幸福そうなほほえみが浮かんでいる。

(20) 韓流スターにもひけをとらない甘いマスクと芯がしっかりした感じで将来の大スターになると思います。

訳：我觉得他不仅有着不输韩流男星俊美外形，而且又有主心骨，将来势必会大红。

⑬ 人や物に触れた時の快い感触

(21) その上を歩くと、なんとも形容しがたい快感が足裏に残る。まるで熱いシャーベットのように、甘い感触なのだ。波のほとんどない入江は、この白砂のために驚くほど透明度が高い。

例 (21) のように、「甘い感触」を“柔軟的触感”と、「甘い手触り」を“手感很滑，手感丝滑”と理解すべきであろう。

⑭ 肉体的な痛み・苦痛が比較的強くない、弱い

(22) 至上の甘い痛みを全身で味わう。

例 (22) の「甘い痛み」は“轻微的疼痛”と訳されるであろう。

⑮ 感触的に堅牢でない・確実でない

(23) 自転車のタイヤの空気が甘いと、キチンと入っているときに比べ、加速力や最高速度は劣りますか。

例えば、「タイヤの空気が甘い」は“轮胎的气不足”と訳すべきで、ほかに、「自転車のブレーキが甘い」は“自行车的刹车松了”と翻訳されるべきであろう。

⑯ マイナスの気持ちの程度が弱いさま。

(24) そんな甘い悲しみの中から、逢ったらなんといおうと、その時の光景を想像して

胸をときめかしたりする。

(25) そして、甘い悲しみが泉のように胸の中に湧いてくる。

例の「甘い悲しみ」は“淡淡的哀愁”と訳されるべき、「甘い罪悪感」は“轻微的犯罪感”と理解すべきであろう。

⑩人間や事物に対する姿勢が厳格ではない

まず、「甘い」は物事に対する態度・姿勢に厳格さや正確さが足りない状態を描写するのに用いられる。よく、“不严格、很松”などの中国語に訳される。

(26) 僕はどうも女の子には甘いようですね。

訳：我好像对女孩子比较松（要求不严格）。

(27) 子供に甘いから言うことを聞かない。

訳：你对孩子太姑息了，所以他才不听话。

⑪考え方や判断などが簡単で単純である。

次に、人の考え方・判断などについて不完全で不徹底的な状態を描写するのにも用いられる。この意味の「甘い」はよく、“天真、盲目乐观”と訳され、例(28)では、訳者は「甘い考え方をする」を全体に「抱有幻想」と訳している。

(28) 考えてみれば、元々世界に対して甘い考え方をしていた人間でなければ、厭世観を抱くわけもないし、自惚やか、自己を甘やかしている人間でなければ、そう何時も〈自己への省察〉〈自己呵責〉を繰り返す訳がない。

訳：看来，人对这个世界如果本来就不抱有幻想的话，那是不会有厌世观的。此外，人如果不是自负、或姑息自己的话，那就不会反复地去进行自省和自责了。

⑫守りや攻めが弱い、不十分である

また、人の行為、特に防御や攻撃について、守りや攻めが不十分で不徹底的な状態を描写することができる。

「脇が甘い」、「ディフェンスが甘い」は“防守能力不强，防守有缺陷”というふうに理解される。

⑬ぐっすりと眠る様子。

(29) 他回到家里，躺下就睡，立刻就睡着了，睡得非常安静，非常甜。

訳：家に戻って床につくなり、深く安らかな眠りにおちた。

(30) 来北大以后，道静也是第一次那么甜甜地睡着了。

訳：北大に派遣されて来てから、道静がはじめて、ぐっすりと安眠できた夜でもあった。

“甜”は眠る様子に用いられる時、“甜甜”という重ね形も使われ、日本語に訳す場合は「ぐっすり」、「深い」、「安らか」と訳されることが多い。

⑩利益、うまみ。

“甜”は“甜头”という慣用表現があり、「利益」や「うまみ」を表している。

(31) 我们俩都决心自己走自己的道，一天两早晨不见着事实，不尝着点甜头或是苦头，他不会跟着我走；就算勉强强地拉上他，他也会三心二意不坚定。

訳：おれたちは二人とも、もう、自分の道を行く気持を固めてしまっている。少しは事実を目のあたりに見、いい思いにしろ辛い思いにしろ味わってみねえことには、あれもおれについてきはしねえ。

(32) 大泉哥认为，你们现在还没有看到组织起来的优越性，没尝到甜头。

訳：大泉さんの考えじゃ、いまのお父さんたちはまだ組織することの優越性が目に入っていないし、そのよさも味わっていない。）

“甜头”は、(31)、(32) の中の「いい思い」、「よさ」と訳されるほか、また、前後の文脈によって、「利益」、「うまみ」、「おいしいところ」などの訳語が存在している。

⑪ (否定) 大したものではない。

また、「甘い」は物事の本質や問題について、成り立ちや構造を理解するのが比較的困難ではないということも表している。この意味として使われる「甘い」は主に“简单 (簡単)” “单纯 (単純)” と訳されている。

(33) 話し合いで解決するほどその問題は甘くない。

訳：这个问题并不是商量一下就能解决这么简单。

⑫物事に緩みや隙が見られる。

なお、「甘い」が事物の緩んだ状態にあることを表す場合を見てみよう。例えば、「ピン트가甘い」は“对焦没对准，焦距没调整好”と理解されるべき、「包丁の切れが甘い」は“刀

口钝了”に、「水の切れが甘い」は“水没有沥干”に翻訳されるべきであろう。

(34) 写真のブログなどを見ていると、度々目にする「あまい写真」とか「カリッとしたり」と言う表現。一般的にあまいと言うのは「ピントが甘い」事が一般的だと思いますが、「解像力が低い」時にも甘い写真になります。

③株価などがやや安い。

最後に、「甘い」は「株価などがやや安い」という意味で用いられる。「相場が甘い」は中国語の“股市行情低迷（不好）”と訳されることが多い。

3.2.3 本節のまとめ

本節では、日・中対訳コーパスを利用し、日本語の「甘い」と中国語の“甜”における意味・用法の共通点と相違点、両語の対訳関係などについて具体的に考察してみた。その結果を表1-4にまとめておく。

表1-4 「甘い」と“甜”の対訳関係

	意味記述	「甘い」	“甜”
対訳関係 が成立す る場合	①砂糖や蜜など糖分の味がある。	甘い菓子	甜点心
	②口当たりが穏やかで、刺激が少ない。	甘い水	甜水
	③ [においが] 糖分を思わせるようだ。	甘い匂い (香り)	甜香
	④ [音楽、歌声など] うっとりときい。	甘い声	甜美的声音
		甘いメロディー	甜美的旋律
	⑤主体に好まれる快い心理感覚。	甘い時期	甜蜜的时光
	⑥ [男女間の] 愛情がこまやかである。	甘い初恋	甜蜜的初恋
	⑦ [言葉などが] 人が聞いて気持ちがよくて、つい うかうかと欺されそうである。	甘い言葉	甜言蜜语 (一)
⑧異性をうっとりさせ、誘い込むような (触覚)	甘いキス	甜甜的吻	
対訳関係 が成立し かねる場	I. 「甘い」の“甜”以外の中国語訳		
	意味記述	「甘い」	中国語
	⑨塩気が薄い。辛くない。	甘い味噌汁	(盐) 淡

合	⑩アルコール度数が低い。	甘いお酒	(酒精度) 低
	⑪旨い、美味しい。	肉が甘い	(肉类) 鲜美
	⑫ [男性の表情、顔立ちなどが] 心地よい。	(男) 甘いマスク	(男) 俊美、帅气
	⑬' 人や物に触れた時の快い感触。	甘い手触り	手感丝滑
	⑭肉体的な痛み・苦痛が比較的強くない、弱い。	甘い痛み	轻微的疼痛
	⑮感触的に堅牢でない・確実でない。	タイヤの空気が甘い	轮胎的气不足
	⑯マイナスの気持ちの程度が弱いさま。	甘い哀しみ	淡淡的哀愁
	⑰人間や事物に対する姿勢が厳格ではない。	(子供に) 甘い	不严格、姑息
	⑱考え方や判断などが簡単で単純である。	甘い考え	天真、盲目乐观
	⑲守りや攻めが弱い、不十分である。	デフェンスが甘い	防守有缺陷
	⑳ (否定) 大したものではない。	甘くない	不简单
	㉑物事に緩みや隙が見られる。	～が甘い ピントが甘い	～没做好 焦距没调整好
	㉒株価などがやや安い。	相場が甘い	行情低迷 (不好)
II. “甜” の「甘い」以外の日本語訳			
	意味記述	日本語	“甜”
	㉓' [言葉などが] 人を喜ばせてさそいこむようだ。	耳触りのいい言葉	甜言蜜语 (+)
	㉔' [女性や子供の表情、顔立ちなどが] 心地よい。	(女) 可愛い	(女) 长得甜
	㉕ぐっすりと眠る様子。	ぐっすり、安らか	睡得甜
	㉖利益、うまみ。	いい思い、よさ	甜头

表1-4から簡単に分かるように、「甘い」と“甜”の対訳関係から見れば、「甘い」と“甜”の意味派生には顕著な相違が見られる。それはもともと快い味覚を表す「甘い」は多くのマイナスの意味へ派生していることに対し、中国語“甜”は「甘い言葉」を表す“甜言蜜语 (-)”以外、すべてプラスの意味へ拡張していることである。

次の節では、引き続き認知言語学の視点から、「甘い」と“甜”の差異をもたらす理由を探ってみる。

3.3 認知言語学的アプローチによる「甘い」の意味拡張プロセスの分析

本節では、認知意味論に依拠し、味覚形容詞「甘い」の各意味項目の意義関連を明らかにし、またそれぞれがいかなる原理によって派生したのかなどについて検討する。

ここでは、2011年8月に国立国語研究所によって公開された検索アプリケーション『中納言』を利用し、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(以下、BCCWJと略称する)から「甘い」の実例を収集・分析することによって、「甘い」の意味拡張を検討する。以下において、出典を明記していないものは、すべてBCCWJからのものである。

3.3.1 プロトタイプの意味

語義①：糖分があるような味

「甘い」の意味拡張プロセスを追うに当たり、まずはその基点となるプロトタイプの意味を確認することから始める。

日本語の国語辞典及び先行研究が指摘するように、「甘い」は味覚を表し、糖分があるような味を意味する。皆島(2005)は『「甘い」は、食物を口に入れた時に「砂糖や蜜や飴などのような味」が舌によって感知された状態を描写する』と指摘し、一般的に「快く好ましい味」(cf. 皆島 2005: 21-28)である。

「甘い」は砂糖(などの甘味料)をなめたときに生じる味覚である(西尾 1972: 98)。また、小田(2003)によると、「人は砂糖、蜂蜜、熟した果物や、ある種の化学薬品(サッカリン、ズルチン、チクロなど)の刺激を舌に受けると、「甘い」と感じる」(小田 2003: 188)という。要するに、人間の味覚の1種である甘味を表すのが「甘い」の本来の姿であり、この意味こそ「甘い」の原義だと思われる。しかし、荒川・森山(2009)が指摘するように、プロトタイプの意味が原義と等しい場合もあるし、異なる場合もある。靱山(2001: 33)では、「複数の意味の中で、最も重要であり、慣習化の程度・認知的際立ちが高いといった特徴を備えたものをプロトタイプの意味と認定する」と主張した。多くの先行研究(Jantimal 1999、武藤 2001、小田 2003、崔・馬場 2010 など)では、「甘い」のプロトタイプの意味が「糖分の持っている味」とであると見なしている。また、日本語の国語辞典(『日国』『学研』『新明解』『岩波』『大辞泉』)においても、「糖分の持っている味」を「甘い」の第一義として挙げている。要するに、日本語の国語辞典及び先行研究においては、冒頭で挙げた「砂糖をなめたときに生じる味覚」という原義が「甘い」のプロトタイプの意味とされていないのである。西尾(1972)では、「甘い」などのような味覚形容詞は、味の内容そのものをことばによって述べることは難しいため、「その味のする具体的な物

によって示すのが手っ取り早い方法である」(西尾 1972 : 98) と述べている。「甘い」の原義がプロトタイプの意味として認められないことは、西尾 (1972) のこの説によって解釈可能である。本研究では、先行研究及び辞書記述に従い、「甘い」のプロトタイプの意味を「糖分があるような味」とする。この意味での「甘い」は、舌で舐めるだけですぐ感じ取られる、具体的な、単純な属性であって、他の意味はここから派生したものとして位置づけることができる。

これまでの先行研究は、「甘い」の原義とプロトタイプの意味の関係には目が向けられていない。しかし、二者の間には必ずしも何の関係もないわけではない。「砂糖や蜜など糖分の持っている味」は「甘い」という味覚を引き起こす原因であり、甘味という味覚はその味によって引き起こされた結果だと考えられる。つまり、二者の間には<結果—原因>という1種のメトニミー関係が成り立つ。メトニミー関係に基づいた「甘い」のプロトタイプの意味の背後には、言葉で把握しにくい身体感覚を、その感覚をもたらす原因いわば具体的な物の性質によって表すという知的メカニズムが働いていると思われる。

「甘い」が砂糖のような糖分がある味というプロトタイプの意味を表す場合、対象物は果物をはじめ様々である。その対象物がもつ味覚情報を「甘い」という言葉によって表現する。しかし、同じ「甘い」の意味・用法でも対象物によっては些細な違いがある。

ア. 糖分などの甘味物質の入っている砂糖、蜜、果実、菓子類、飲み物などの味を修飾する時に使われる場合。

(35) 紅茶は、カレーを食べ終わり、フルーツやデザートで甘いお菓子を食べた後、一番最後に出てきたのである。

(36) 美味しいものに目がなかったカテリーナは、甘い菓子をこよなく愛したと言われる。

(37) 香りは特に優れ、果実が非常に甘い。

イ. 穀物など糖分を含む澱粉質の味が甘くて美味しい場合

(38) つやつやきらきら、炊きたての新米は、見て美しく、かいで香ばしく、食べて甘い。

(39) 秋になると実も大きく甘い栗が出来て、真田侯は代々これを将軍家へ献上し、おほめをいただく仕来りになっている。

ウ. タマネギ・ニラなどの野菜が甘くて刺激性が低い場合

(40) 最初にイタリアやスペインなどで栽培されていた品種は甘いタマネギです。これ

が中欧や東欧に広がりながら、辛タマネギに変種します。

生タマネギの中には、辛味（刺激性）のもとになる硫黄化合物と、甘味成分の糖類（ショ糖、果糖、ブドウ糖など）の両方が含まれている。ただ、含まれる辛味成分がとても強い為辛さしか感じなくなってしまうのである¹⁰。

エ. お茶やお酒などは糖度があるため、苦みや辛味が抑えられる場合

(41) 黄杞茶は、葉茶のイメージとは違って、ほのかに甘く、おいしい。

(42) このワインは安物だけど甘くておいしい。

果物には糖分が含まれることは恒常的状态であり、常識のようなものである。一方、穀物には甘みがあると言っても、果物が持つ甘みとはレベルの違うものである。野菜の場合、タマネギやニラなどは刺激が強くて、臭みがあるイメージが一般的であるが、その内糖分がある為、相対的に苦みや臭みの刺激性が低減されるものに対しては、「甘い」と言える。この場合の「甘い」は苦味や臭みより比較的甘くて美味しいという意味合いが含まれている。これもまた果物の甘みや穀物の甘みとは違うものである。ワインや焼酎の甘みは、その原材料である葡萄や穀物に由来すると考えられるが、お酒には辛口や甘口の区別があるように、「甘い」をお酒についていう場合は、原材料の「糖分があるような味」を表すより、むしろ「渋みが少ない味或いは辛さの度合いが低い」という意味の方が前面化している。

要するに、「糖分があるような味」という意味・用法だけでも、感覚される対象物によって、その「甘い」という味覚は階層性を成している。果物、お菓子やコーラなどはそもそも糖分が含まれていて、むしろその味に関する属性の中で糖質が際立ったものとしてプロファイルされている。例 (1) と (2) における「甘い」は糖分そのものの味を表す。また、果物や穀物もそれ自体には糖分が含まれているが、糖分の種類において単糖類と多糖類の区別があると言われる。単糖類と多糖類は知覚者にもたらす味覚が異なるため、その味覚を感じ取った人間主体はその対象物に対する味覚体験や評価も異なるはずである。甘みは穀物の属性の一つとは言えるが、穀物の甘みは果物ほど強くない。お米は甘いものが上質なものであるという概念化者が穀物に対する評価基準に影響されるため、果物が「甘い」とは異なり、お米についていう「甘い」には糖分の意味合いが薄れていく。野菜やお酒について「甘い」という場合、「糖分があるような味」という意味がさらに薄れて、苦味や臭みより相対的に受け入れやすく、口当たりがいいという意味合いが前面に出る。この場合、「甘い」は苦味や辛さの対極にある味わいを表す表現として使われる。

つまり、プロトタイプの意味としての「甘い」は、「甘味」という尺度の目盛りの上を自

由に上下するものである。このとき、「甘い」は小刻みな程度の段階が考えられるため、西尾 (1972) がいう「自由な尺度性をもっている」ものだと見てもよい。

次に、プロトタイプの意味としての「甘い」の評価性について考えよう。瀬戸 (2005) では「甘い」の評価性について次のような指摘がある。

「甘い」は、「苦い」の対極にあって、もともと体にプラスに働く合図となる。よって、評価はもともと高いはずだ。しかし、あまり甘くては困るものもある。甘過ぎれば醤油を足したり、塩を加えたりする。だから、「甘い」は、味ことばとしては、つねに評価がプラスであるわけではない。

瀬戸 (2005 : 16)

したがって、プロトタイプの意味としての「甘い」は評価する人や評価される対象によって、異なる価値評価が付与されることが考えられる。

3.3.2 味覚ドメイン内の転義

前節で述べたように、「甘い」は語義①<糖分があるような味>というプロトタイプの意味以外に、ほかの種の味覚を表すこともできる。ここでは、「甘い」が語義②<食物や料理などの味が好ましい状態>及び語義③<塩気・辛味が薄い味>への転義プロセスを分析してみる。

語義②：食物や料理などの味が好ましい状態

「甘い」は食物や料理などの味が好ましい状態にあることを描写する場合もある。

ア. 新鮮な味・天然の味を修飾する場合、「甘い」は「食物が新鮮で持ち味がよい」という意味である。

今回検出されたデータの中には、「甘い」が刺身や魚介類などについて用いられる用例が見られた。このような用法は全体の生起頻度から見れば多くないが、鮮魚の刺身や肉の脂などについて「甘い」が使われるのは独特な所がある。

(43) その加減で焼かれた蟹の身は、水分をたっぷり含んで甘い、なんとも品格の漂う味わいだった。

(44) 鶏肉でも魚でも新鮮なものはほんのり甘い。

例 (43) と (44) のように、「甘い」によって修飾・叙述される名詞は、カニ、エビ、牛サシ・鯛・ウニなどのような新鮮で良質なものに限られている。「甘い」のこの種の意味・

用法は、刺身や魚介類を好む日本人の食生活に大きく関わり、極上の食材に恵まれる日本人の独特な食感かも知れない。

イ、「美味な」、「おいしい」という意味

また、語義②に使う「甘い」は「甘み」を表すと同時に、「滋味」、「旨味」をも表し、「旨い」の意味に似ていると考えられる。

(45) 鶴川は東京の生家にたのんで、ときどき甘いものなどを送らせた。夜が更けてから、私の枕許へやってきて一緒に食べた。

例(45)から見られるように、「甘い物」は「美味しい物」の意味においても用いられることがある。

「甘い」は食物や料理などの味が好ましい状態にあることを描写する場合もある。つまり、「食物が新鮮で持ち味がよい」、「美味な」、「おいしい」といった概念が内包されている。

「甘い」のこの意味・用法については、国語辞典や先行研究にははっきりとした記述が見られない。日本人から見れば特に取り立てて言う必要がないのかもしれないが、中国人から見ればこれは日本人の独特な食文化に根ざした特殊な意味・用法だと思われる。辞書においてこの意味解釈を明記すれば、中国人学習者が「甘い」の意味の理解を一層深める効果が期待できる。

西尾(1972)は、『甘い』は語史的には、美味を意味する『うまい』と関係が深いといわれる(西尾1972:99)と述べている。また、『日国』では「甘い」と「うまい」との関係について次のような記述がある。

『観智院本名義抄』では「甘・甜・旨・美」などの漢字に「あまし」、「む(う)まし」のいずれもが当てられている。これは、当時は「あまい」ものは快い味がする貴重品であり、「うまい」ものとされていたことを思わせる。現代方言で砂糖の味をウマイとする地域が東北北部や鹿児島・奄美のいわゆる辺地であることもこの証左となろう。

(『日国』第二版2000:517)

このように、「甘い」はうまい味の1つとして扱われていたように思われる。慣用句「甘い汁を吸う」の「甘い」は「うまい」に置き換えられるのもこれを傍証できる。

現代語の「甘い」の語義としては、「美味だというような要素が含まれていないことはいうまでもない」(西尾1972:99)とされている。しかし、「新鮮で甘い刺身」や「甘い伊勢海老」などの用例が示すように、魚介類・肉の新鮮で良質な味を「甘い」で表すこともあ

る。なぜ元来「糖分があるような味」を意味する「甘い」は食物や料理などの味について言えるのか。これは大石（2007）が提案した「尺度融合」というメカニズムによって解釈できると思う。大石（2007：167）は、「明—暗」によって「善—悪」を表したり、「黒—灰色—白」というグレースケールを「有罪—無罪」と対応させたり、「松竹梅」、「金銀銅」を「上中下」と同じくランク付けに用いたり、「右—左」によって「保守—革新」を表したりするなど、さまざまな動機によって、ある尺度を別の尺度と結びつけることには、「尺度融合」という認知機構が存在していると主張した。

われわれは、現実を認識するだけではなく、認識した現実の中で適切に行動して生き抜いていかなければならない存在だからであり、すばやい行動を起こすためには、毎回認識結果を評価し、行動を計算しては間に合わない。したがって、特定の属性尺度に対して一定の評価尺度をあらかじめ割り当てておけば、すばやい判断と行動が可能になる。これは、単細胞生物の走性（刺激の種類によって走光性、走地性、走流性、走電性などがある）に起源を持つものであろうが、人間の場合にはもちろんそのような単純なものではなく、非常に多様な尺度の組み合わせが見られる。

大石（2007：167—168）

果物は新鮮で良質なもののほど甘くて美味しいと評価されると同様に、食物や料理なども新鮮で良質なもののほど美味なものだとされる。ここには、果物の美味しさを評価する尺度と食物や料理などの旨味を評価する尺度が融合していると考えられる。もちろん、尺度融合の前提としては食物の旨味と果物の甘味が人の好ましい味であり、ポジティブ性で共通しているからである。すなわち、旨味と甘味は「美味・人の好ましい味」であるという類似性に基づき、評価基準が融合し「甘い」という表現によって、新鮮でコクのある味を表すようになったと考えられよう。要するに、「甘い」の語義②<食物や料理などの味が好ましい状態>という意味は、「甘い」のプロトタイプの意味のポジティブ性が写像され、更に果物の味と食物や料理などの味を評価する尺度が融合されたことによって派生してきた意味だと思われる。これはメタファーと味覚領域内の「尺度融合」という2つのメカニズムの協業によるものだと考えてよかろう。

この場合、「甘い」は自由な尺度性を表すものではなく、「旨味」という尺度の、著しく上の方の部分だけに範囲を限定されている。語義②<食物や料理などの味が好ましい状態>としての「甘い」は美味しいという意味に使われているため、プラスの価値評価が付与

される。

語義③：(塩分、香辛料、アルコールなどの) 口中における刺激が基準に達しておらず、
相対的に弱いさま

ア. 塩気が薄い

日本語の国語辞典によれば、「甘い」が「辛い」の対義語として、「塩気が薄い」ことも表すという。例えば、次の例(12)は『日国』から引いた用例である。

(46) 流れあふ湊の水のうまければかたへもしほはあまきなりけり。(『日国』第二版)

例(46)では、海に注ぐ湊川の水が美味しいから潮の水も甘くなったということをいう。本来塩辛い潮水が、塩気が薄くなり、美味しくなったという意味である。「甘い」が塩気の薄い味という意味に使うほかの例として、以下のものが挙げられる。

(47) その香りとほろ苦さを、とろりと甘い自家製味噌に封じ込める。

(48) 関西のみそしるはあまくて、どうも口に合わない。

例(47)と(48)では、「甘い」によって叙述・修飾される名詞は、「味噌汁」、「味噌」のような本来塩分を含むものである。(48)に用いられる「甘い」は、塩気が薄くて物足りない感じがするという話し手の評価を表す。本来期待していた味に達していないという意味で、マイナスの評価になる点でほかの例と異なっている。

イ. 香辛料やお酒などの刺激性が低い

また、次の例(49)と(50)が示すように、「甘い」は刺激性が低いカレーの味やアルコール度数の低いお酒を表すこともできる。

(49) 昔の、おうちでよく作ったとろみある甘いカレーをそのまま煮詰めていったような、そんな味がするんです。

(50) 甘い酒でも一杯飲めば、小さい絃琴に合わせて踊れもしたし、ナイチンゲールのようにうたえもしました。

「カレー」はそもそも食感的に刺激性の強い料理であるが、甘いカレーは平均基準より相対的に刺激性の弱いものである。「甘い」のこの語義は、糖度とあまり関係がない点で語義①と大きく区別される。語義③の「甘い」は塩味・辛味の対極にある味わいとして使われ、つねに評価がマイナスであるわけではない。たとえば、辛口の好きな人には刺激性が足りなくて甘いカレーも、子供には食べやすく美味しい。要するに、語義③に使う「甘い」は人によって、プラス・マイナス両方の価値が考えられる。

語義③< (塩分、香辛料、アルコールなどの) 口中における刺激が基準に達しておらず、相対的に弱いさま>からも明らかなように、日本語の味覚形容詞「甘い」は刺激的な味が薄いことを表すこともある。西尾 (1972 : 328) では、「甘い」が塩味が薄い意味として使う用例として、「あまいみそ汁」、「塩のあまいさけ (甘塩のさけ)」、「塩の甘いせんべい」が挙げられている。つまり、「みそ汁」などのようなそもそも塩味が要求される物には、塩分が少なく、足りない場合に使う表現である。

この場合、「甘い」は塩辛い、しょっぱいという意味に使われる「からい」と対義関係を成していると言える。この点については、西尾 (1972) は次のように述べている。

「あまい」と「からい」とには、塩味の程度の大小を表す側面があり、その限りにおいて同一尺度上の程度による対立の要素を含んでいるといえよう。たとえば、塩の「あまい」さけの、塩の量を加えていくと「からい」さけになる、というような場合があるわけである。

(西尾 1972 : 328)

また、Jantima (1999) は、「この場合の『あまい』は刺激がより強い『からい』の『からさ』の軸に乗っていて、二元的な対義関係から一元的な対義関係をなしていると考えられる」(Jantima1999 : 147) と述べている。つまり、塩味という尺度の上で「甘い」と「からい」とは程度の違いによって相対的に対立していると考えることができる。塩分の量がなんらかの基準に及ばないと「甘い」の条件が成立する。

塩味の尺度においては「からい」の反対側には「甘い」が存在するのはなぜなのか。小田 (2003) は、「甘い」と「からい」の対応関係について、「ふわっとした弱い刺激を表す『甘い』に対して、『辛い』味は、体がびっと緊張するようなきつくて強い刺激を感じさせる」(小田 2003 : 189) と述べている。要するに、刺激性の強弱について「甘い」が「からい」と対立させられている。このため、本来塩味という強い刺激性が求められた食べ物を口にしたときに感じる薄い塩味は、「からい」の対極にある「甘い」によって表されるのも理解しにくいことである。この場合、「甘い」は甘味か美味を表すものではなく、基準より刺激性が弱く、塩気が足りない味という相対的な評価となる。武藤 (2001) は、この種の意味について「語義①< 刺激が少ない>という意義特徴との類似性に基づくメタファーによる意味の拡張であると考えられる」(武藤 2001 : 44) ということを主張している。「甘い」のプロトタイプの意味には< 刺激が少ない>という意義特徴が含まれているかどうかはまだ議論する余地があるが、本研究はこの武藤 (2001) の指摘を基本的に支持する

ものである。すなわち、「甘い」は刺激が弱いという点で、塩分が足りない味と共通しているため、プロトタイプ的な意味からメタファー的に語義③に発展してきたと考えられる。しかし、メタファー以外に「甘い」と「からい」との間に起こった「尺度の一元化」¹¹⁾も無視してはいけないのである。語義③の意味転用はメタファーや「尺度の一元化」の協業によるものだと考えている。

語義③の「甘い」の程度性に関しては、「甘い」と「からい」とは1つの尺度の軸の上に併存しており、「甘い」はスケールの下の方の部分だけに範囲を限定されている。価値評価性から見れば、「甘いみそ汁」や「塩の甘いせんべい」などは、それを食べる人の好みによって、プラスとマイナスの両方が考えられる。

以上、味覚を表す「甘い」の意味・用法について考察してきた。

3.3.3 共感覚ドメインへの転義

味覚を表す「甘い」は、共感覚に転用されることがある。

従来の「一方向性仮説」によれば、味覚を表すことばは味覚より高次的な嗅覚、聴覚、視覚への転用しか見られず、触覚への転用はできないということである。しかし、本研究のデータ収集によれば、「甘い」は味覚より原始的な触覚への転用も可能であることが証明された。以下は、順をおって共感覚ドメイン（嗅覚・視覚・聴覚・触覚）への「甘い」の意味拡張を見てみよう。例えば、「甘い香り」、「甘い匂い」（語義④・語義⑤・語義⑥）、「甘いマスク」（語義⑦）、「甘いピンク」（語義⑧）、「甘いメロディー」（語義⑨）、「甘い手触り」（語義⑩）、「タイヤの空気が甘い」（語義⑪）、「甘い痛み」（語義⑫）などの例がある。

(1) 嗅覚への転用

砂糖・蜜・飴などのような舌に快い感覚は、「味覚」以外の感覚にも転用される。その中の一つが「嗅覚」であり、香り・匂いなどが芳醇で快いことを意味する。

語義④： 糖分などを持つものが人の鼻腔における好ましく快い嗅覚刺激。

糖分などを持つものが発するある匂いが「甘い」の語義①「砂糖や蜂蜜など糖分があるような味」を連想させる場合、その匂いを「甘い」で修飾する。

「甘い」の味を持つものは通常、ある種の「香り」、「匂い」を有することが多い。「甘い」という味覚は多くの人間に快い感覚を与えていることに類似して、この種の芳醇で快いにおいも人の食欲を刺激するような好ましいものである。

(51) 目の前には、甘い匂いのもとが皿に盛られていた。刻んだレーズンの入った素朴な焼き菓子だ。

上記の例によって示されるように、「甘い」によって叙述・修飾されるのは、感覚対象物の味覚刺激ではなく、嗅覚を表す「香り」か「匂い」のようなものである。このとき、「甘い」は食べ物が発するよい匂いを表すことが多い。

典型的なのは例(17)の砂糖や蜜のような味をするお菓子の甘い匂い(香り)であるが、蜜腺を持つ花の香りも「甘い」と自然に結びついている。以下の二例を並べて具体的に示そう。

(52) 盛りをすぎてはいるがまだ花は咲きそろう、冷えた甘い香りが地にはっている。

(53) 稲の花の甘いにおいが風といっしょに流れてくる。

人間は焼き菓子と花の心地よい匂いを嗅いだ時、焼き菓子などの甘いものを食べた時の「甘い」味覚とよく似たので、「甘い」を用いられる。

つまり、甘味物質の発する匂いが「甘い」の語義①を連想させる場合、嗅覚が味覚とリンクして、その匂いを「甘い」という。

語義⑤：糖分を持たないもの(お茶、お酒、香水など)が鼻腔における好ましく快い嗅覚刺激。

(54) そして、そういった扉のなかから、甘い葡萄酒の香りが流れ出、汗に濡れた男たちのたくましい肉体がかいま見え、果ては酒盛りのざわめきや粗彫りの卓を叩く拳の音や、卑猥な春歌の一節が、まるで横っ面をはりたおすような勢いで外へ飛びだしていく。

(55) さらに少女は顔に濃く化粧を施し、全身にたくさんのアクセサリをまとい、香水の甘い香りを漂わせていた。

例(54)と(55)のように、穀物や果物などの本来の甘い味を連想させるお酒などの優しい香り、元々蜜腺を持つ花の芳香な匂いを模倣してできた香水やシャンプーの香りがいいことも「甘い」と言える。

「甘い」は「香り」、「匂い」のような嗅覚に関する名詞と共起し、語義①である「砂糖や蜂蜜など糖分があるような味」のような物を口にする時の心地よい感覚から嗅覚へ転用して、香りや匂いが快く感じられることを表す。

この種の物質については、語義①の味を持たないため、味覚と嗅覚との複雑な関連性を把握しにくい、物質の持つ特別な匂い(香り)が一種の嗅覚的(快い)感じを引き起こ

す。この嗅覚的快感と甘いものが味覚に与えた〈好ましく快い〉感覚と似ていたため、異なる感覚同士を混合させた共感覚的表現だと推測される。つまり花などの植物の芳香やお酒の芳醇な香り、香水やなどの化学製品の香りの場合、「甘い香り」、「甘いにおい」は「快い香り、心地よいにおい」という意味になる。

語義⑥：異性をうっとりさせ、誘い込むような嗅覚刺激。

また、例(56)と(57)から分かるように、「甘い」は「異性をうっとりさせ、誘い込むような」意味も含まれていると考えられる。

(56) そして彼女のなつかしい、いつも彼女が漂わせていたあの甘い香りとやさしい雰囲気胸いっぱい吸いこみました。

(57) 綾波は僕の背中におぶさる。綾波の胸のふくらみを背中に感じる。綾波の甘い匂いが鼻腔をくすぐる。

「甘い香り」や「甘い匂い」がする主体は女性で、それを「甘い」と感じるのは男性である。ここでは、「快い香り」、「心地よい匂い」のほかに、「異性をうっとりさせ、誘い込むような」意味も含まれている。

「甘い香り」、「甘い匂い」のような嗅覚への意味拡張(語義④・語義⑤・語義⑥)については、武藤(2001)は「甘い」という味を持つものは、「通常ある種の匂いを有することが多いということから、『味覚』と『嗅覚』という二つの属性の『同時性』に基づくメトニミーであると考えられる」(武藤2001:44)と述べている。

一方、小田(2003)は嗅覚で感じる感覚と味覚で感じる快く柔らかい感覚との間にある類似性に基づくメタファーであると指摘している。要するに、武藤(2001)と小田(2003)は「甘い」が嗅覚への意味拡張に対して意見が分かれている。このような違いは「香り」と「匂い」という属性の持ち主によるものだと考えられる。楠見(2005)では、同時性のメトニミーを「ある感覚経験が、同時に知覚された別の感覚経験によってすり替わる」(楠見2005:118)メトニミーだと定義している。

例えば、お菓子などの飲食物が発する香ばしい匂いは同時に「甘い」という味覚経験によってすり替わるが、シャンプーや芳香剤などの香りは味覚経験によってすり替わるのが困難であろう。要するに、同じ嗅覚領域を表す「甘い香り」でも、その属性の持ち主によって意味拡張の方式が異なることが分かる。

語義④〈糖分などを持つものが人の鼻腔における好ましく快い嗅覚刺激〉では、食べ物

の香ばしい匂いや香りの意味拡張は同時性のメトニミーに基づくものだと見てもよいかもしれないが、花・シャンプーなどの芳香を表す語義⑤<糖分を持たないものが鼻腔における好ましく快い嗅覚刺激>や、語義⑥<異性をうっとりさせ、誘い込むような嗅覚刺激>の場合では、「甘い」の意味拡張はやはりメタファーだと考えたほうが理屈に合う。

Taylor (1989) においては、“loud colour”（「うるさい色」）や“soft music”（「やわらかい音楽」）などのような共感覚について、「こうした異なる領域の属性がメトニミーを通して結び付けられているかどうかは疑わしい」（Taylor1989：220）としている。本研究は Taylor (1989) や小田 (2003) に従い、「甘い」が嗅覚領域への意味拡張を、快い感覚を呼び起こすという類似性に基づくメタファーによるものだとする。

(2) 視覚への転用

語義⑦：容貌・笑顔が美しく好感を持たせる

「甘い」が「マスク」や「顔」など容貌を表す名詞と一緒に使われた場合、主に雰囲気や表情から「甘い」と感じられる男性のことを指す。

(58) その髪と、やや甘い表情の眼もとを見ると、太郎の胸は揺すぶられるのであった。

(59) 甘いマスクの佐藤は、ボクシング界きっての二枚目として絶大な人気を誇る。

例 (58) において、「甘い表情」の主体は女性であり、例 (59) の中では、「甘いマスク」は男性の顔立ちを表現している。「顔」は本来人間の身体部分をあらわす表現であるが、ここでは身体部位レベルのものではなく、顔立ち・容貌という意味の顔である。「顔」や「マスク」などの名詞は「甘い」と結合し、ハンサムで優しそうな男性について言う表現として使用される。主に男性に使われ、女性から見て甘さを感じるような顔立ちを指すと言われる。「甘い顔」は、格好よくルックスがいいだけでなく、その人の雰囲気・性格が穏やかで優しいという意味も内包されている。

語義⑧：（色やファッションなどについて）可愛くて女らしい

今回の BCCWJ に対する調査では、「甘い」が女性のファッションに使用された用例が検索された。

(60) 甘いピンクも、スポーティなスキッパーカットソーなら、大人っぽく着られる。

(61) リボンがグリーンだから、甘くなりすぎない。

(62) 今シーズンは大人の女性だけが持っている強さや優しさをビニールの切替えや大

きなリボン使いで甘く表現した。

以上のような例 (60)、(61)、(62) における「甘い」は、色名を表わす名詞やファッションに関する名詞と共起しており、色彩やデザインなどの視覚感覚に関する属性を表している。日本語の国語辞典はこの種の意味・用法について全く触れていない。BCCWJ の検索結果から見れば、この種の使用例はほとんど雑誌というジャンルに集まっていることが分かる。ファッション業界の用語として、クールなイメージに対し、可愛くて女らしいという意味として使われている。使用範囲はファッションに関するものに限定されているようである。これは辞書に直接的な記載がないことにも関連し得ると思われる。言葉の意味は常に変化していて、辞書で定義されていない新しい意味・用法も生まれている。新しく生まれた意味・用法は、その語の新しい語義として定着していることも珍しくない。

(3) 聴覚への転用

語義⑨：人の声や歌声・音楽が心地よい

日本語の「甘い」は味覚としての快い感覚は聴覚に転用されるケースも見られ、人の声や物の音が快く感じられる、美しく響くといった状態を描写するのに用いられる。

以下の用例を通じて具体的に考察しよう。

(63) 彼女は、会うたびに何かインスピレーションのようなものをあたえてくれ、その甘い声は、生きる力の源泉をくすぐられるような想いに土岐を誘うのだ。

(64) うっとりとして眼をとじたままで、耳掃除をさせながら小兵衛が、間もなく六十になるという老人とはおもえぬ甘い声で「そうかえ」と、こたえる。

(65) 試験曲は自分が弾く曲と同じベートーヴェンの悲愴。でもその音にびっくりした。なんて、甘い音を出すんだろう！って。

(66) ただ、スペイン系の甘い音色のギターは、ビラ＝ロボスの曲には向かないかもしれない、と今日初めて思った。

このように、味覚によって感じられる「甘い」という快感は聴覚¹²へ転用され、人の歌声・声が優しくて美しいことや、音楽・旋律などが心地よく感じられることを表現する。

「甘いマスク」(語義⑦)、「甘いピンク」(語義⑧)、「甘いメロディー」(語義⑨) などのような視覚、聴覚への意味拡張も、前述の嗅覚への意味拡張と類似し、語義①において味覚領域に限定されていた快感が、視覚・聴覚の感覚領域へ転用される。つまり、語義①が

喚起した好ましく快い感覚との類似性に基づくメタファーで転用されたものである。

鍋島（2007）¹⁹では、価値評価性が異なる意味領域がつながれる要因のひとつと考えられる。鍋島が指摘しているように、味覚の「甘い」が嗅覚・視覚・聴覚への意味転用は価値評価性に対する主観的な印象の同一化によるものだと考えられる。「甘い」は嗅覚・視覚・聴覚へ転用する場合、プロトタイプの意味からポジティブ性が受け継がれ、プラスの価値評価が付与されている。程度性からいえば、「快い」という尺度の上の部分だけに範囲を限定されている。

（4）触覚への転用

共感覚表現における一方向性仮説によれば、味覚形容詞は触覚を修飾することができないことになっているが、日本語における反例が存在している。

語義⑩：人や物に触れた時の物理的な感触が快い、さわり心地がよい

人や物に触れた時の物理的な感触について、感触が快い、さわり心地がよいといった状態を表す時に用いられる。例えば、「甘い感触」、「甘い手触り」である。

（67）その上を歩くと、なんとも形容しがたい快感が足裏に残る。まるで熱いシャーベットのよう、甘い感触なのだ。波のほとんどない入江は、この白砂のために驚くほど透明度が高い。

（68）もう一枚の肌のように、互いの指先に甘い感触を残す布を、男のものも女のものも、とうとう見つけることはできなかった。

（69）少女はどこもかしこも柔らかで、あたたかく、そして甘い感触がする。まるで砂糖菓子のように甘い、唇。

例（67）、（68）の「甘い感触」は足元や指先から得た心地よい具体的な感じ——「柔らかい触り」である。この「甘い」は「なめらか」、「やわらか」、「さらさらしている」、「すべすべしている」といった概念が内包されている。更に、例（69）の「甘い」は触覚の誘い込むような＜好ましく快い刺激＞によって恍惚感を喚起させる感覚を表現している。この種の触覚への転用は、前述の嗅覚・視覚・聴覚を表現する各語義と同じ、「甘い」の恍惚感を喚起させ、誘い込むような＜好ましく快い刺激＞の性質を表す。

語義⑪：感知的に堅牢でない・確実でない

「甘い」は「本来ならばきちんと固く締められているべき物」の物理的な触覚について、感知的に堅牢でない・確実でないという状況を描写する時に用いられる。すなわち、「ゆるい」、「ゆるんでいる」、「ぶかぶかだ」、「しっかりしていない」といった概念が内包されている。例で示すと、「タイヤの空気が甘い(タイヤに触れた感触が甘い(ぶかぶかだ))」、「自転車のブレーキレバーの感触が甘い(ゆるい)」、「ネジの締め付けが甘い(ゆるんでいる)」のようである。

(70) 自転車のタイヤの空気が甘いと、キチンと入っているときに比べ、加速力や最高速度は劣りますか？

(71) タイヤのエアが甘いと感じたら、「AIRSUPPLY」の本体ケース内部からホースを取り出し、口金をタイヤのバルブに取り付ける。サドルを上下させれば、タイヤに空気が入っていく。

(72) 少し握りが甘いかな？ブレーキの効きが悪いかな？と思ったら、大切なブレーキを今のうちに点検しておきましょう。

(73) ねじは締めて使いますが、締めが甘かったり、振動などの外力がかかれば、ねじのつり合い条件が崩れてゆるみが発生します。

語義⑫：肉体的な痛み・苦痛が比較的強くない

「甘い」は「肉体的な痛み・苦痛が比較的強くない」または、「弱いこと」を表すことができる。例えば、「甘い痛み」、「子犬の甘噛み」という用例で示されているようである。

(74) 喉の奥に、甘い痛みだけが残った。

(75) それからやや強く吸われて、苦痛を感じる寸前に解放される。喉の奥に、甘い痛みだけが残った。

例(74)と(75)の「甘い痛み」というのは、身体の部分として喉の痛みは強くない状態を表わしている。「軽い」、「弱い」、「強くない」といった概念が内包されている。この意味は語義③の「刺激が少ない」との類似性に基づいて拡張していると考えられる。

「甘い」は触覚ドメインへの意味転用について、まず、語義⑩<人や物に触れた時の物理的な感触について、感触が快い、さわり心地がよい>といった状態を表す時に用いられる。「甘い感触」や「甘い手触り」のように、触覚においてのこの種の「甘い」は<人の好ましく快い触覚>を表現している。この種の触覚への転用は、前述の嗅覚・視覚・聴覚を

表現する各語義と同じ、語義①が喚起した好ましく快い感覚との類似性に基づくメタファーで触覚の感覚領域へ転用されたものである。

しかし、語義⑪<感知的に堅牢でない・確実でない>と語義⑫<肉体的な痛み・苦痛が比較的強くない>という二つの意味・用法は、<人の好ましく快い触覚>を表す用法ではなく、「本来ならばきちんと固く締められているべき物」の物理的な触覚について、感知的に堅牢でない・確実でない、或いは本来ある身体の部位にとって強い刺激である痛みは、軽い、弱い、強くないという状況を描写する時に用いられる意味・用法である。

語義⑪は触覚の「堅牢性・確実性」が欠けている、あるべきものの欠如という類似性に基づき、語義③<塩気・辛味が薄い味>からメタファー的に発展してきたものだと考えられる。語義⑫も「痛み」が強くない、その「度合い」は一定の基準に達していないという類似性に基づき、語義③<塩気・辛味が薄い味>からメタファー的に発展してきたものだと考えられる。

程度性から見れば、語義⑪、⑫として使われる「甘い」は、「堅牢性・確実性」や「刺激性」という尺度の下の方の部分だけに範囲を限定されている。

価値評価性から見れば、語義⑩の「甘い感触」や「甘い手触り」などは、プロトタイプの意味からポジティブ性が受け継がれ、プラスの価値評価が付与されているが、語義⑪の「自転車のブレーキレバーの感触が甘い」、「ネジの締め付けが甘い」などは、適格性に欠けるといったマイナ斯的な価値評価性が付与されている。語義⑫<肉体的な痛み・苦痛が比較的強くない>は「甘い痛み」や「子犬の甘噛み」などのように、これを感じる人の具体的な生理的・心理的状况によって、プラスとマイナスの両方が考えられる。

3.3.4 人間活動ドメインへの転義

山梨（2000：126）によれば、日常言語の中には、身体感覚や五感に関わる経験が、「人間の内面描写の叙述に比喩的に使われている例が広く見られる」のである。「甘い」は物事の属性や物事の状態を表すほか、人間の言動・性格・心理状態などにも広がっている。本研究では、「甘い」が人間活動ドメインにおける意味・用法をさらに細かく分類し、語義⑬から語義⑲までの7項目に細分することにした。ここでは、各語義の転義プロセスを考察してみる。

語義⑬：主体に好まれる快い心理感覚（幸福感）

「甘い」は人間自身の行為及び精神活動の経験を通じて得られる主体に好まれる効果や感動、快い満足感といった心理的・感覚的な評価や価値判断のことを描写するのに用いられる。これは、砂糖や蜂蜜のような糖分を含んだものを口にした時の快い気持ちや幸せな気分などから派生していると考えられよう。例で見ると、以下のようなものである。

(76) 信夫は、何ともいえない甘い喜びが、わきあがってくるのを感じた。

(77) しかし多くの場合、女はじつにつまらない理由から泣いているにすぎないし、涙を流すことは甘い愉楽でさえあるのだ。

(78) 芸術家気質で、厄介なところがあるが、作品はとてものナイーブですどくて、甘い雰囲気がある。

(79) かつての甘い期待は裏切られ、逆の苦い失望感だけが残った。

(80) 彼女等が、幼い麻理を、小さい妹として、可愛がってくれてると思ったのは、甘い幻想だった。

例(76)と(77)の「甘い」は「主体に好まれる快い心理感覚」であるが、修飾対象となれるのは「喜び」、「愉楽」などは、プラスのイメージを持つことばである。例(78)の「甘い雰囲気」は同じように、読書行為がもたらした主体に好まれる快い心理的感覚を表すものであり、作品が醸し出す雰囲気はとてもの快いという意味を表している。例(79)と(80)も同じく、「主体に好まれる快い心理感覚」であるが、修飾対象となる「期待」、「幻想」なども、中立的なイメージを持つことばで、そのほか、「夢」、「憧れ」、「記憶」などもこのタイプに属している。

語義⑭：恋や愛情などがあふれて、うっとりとした快い

人間自身の行為及び精神活動の中に、恋や愛情はよく特別な存在として取り扱われる。ヘレンフィッシャー・大野晶子(2005『人はなぜ恋に落ちるのか?—恋と愛情と性欲の脳科学』)は「恋愛状態とは快感の伴う「強迫性神経症」である。」と主張する。強迫性神経症患者と恋愛状態に陥る人の類似点について、本論では展開しないが、人間の恋や愛情などは常に「快感の伴う」精神活動・行為であることは否めないことだろうと思われる。この種の「快感」もよく「甘い」で修飾される。例えば、以下の用例で示されているようである。

(81) 一緒になった二人の結婚生活は、はじめのうちこそ甘く濃やかなものであった。

(82) 結婚したら、ラブラブのもっと甘い生活が待っていると思っていたの。

(83) 自分の耳元にささやいたふじ子の声を思い出すたびに、信夫は甘い感情にひたつた。

(84) 辛いことは忘れ、甘かった思い出だけを持ち続けたからこそ長命を保つことができたのであろう。

砂糖や蜂蜜のようなものは人間に感覚的な快感をもたらすように、愛情や幸せは人間に精神的・心理的に快く感じさせる。「甘い」は(81)、(82)の「生活」と(83)の「ふじ子を思い出す時の感情」を修飾対象としていることから、恋愛関係にある二人が醸し出す「うっとりとした、幸福で親密な様子」という意味で捉えられていると思われる。例(84)の「甘い思い出」は思い出すたびに幸せな気分になれる記憶である。ほかに、「甘いカップル」のような表現もある。たとえば、次の例がある。

(85) 3日、シンディー・ワンの最新曲「陪我到以後」MVに、人気歌手ショウ・ルオが出演。甘いカップルを演じている。

(86) 甘いカップル御用達・バレンタイン前に手作りケーキ展

語義⑬<主体に好まれる快い心理感覚(幸福感)>は人間の快い心理感覚を表す用法である。この場合、「甘い」は「喜び」、「期待」、「夢」などの抽象名詞と組み合わせ、幸福感などのような快い感情を表す。なお、語義⑭<恋や愛情などがあふれて、うっとりとした快い>も、特に、恋や愛情などが人間にもたらした心理的な快感を描くことができる。この種の「甘い」の意味はどこから生じるのかというと、やはり味覚を表す「甘い」と深く関係していると思われる。味覚で得られる快い感覚というポジティブ性は概念化者の心的な面にも写像され、心理的な快感を表す意味となる。これもメタファーの1種だと考えられる。この場合、「甘い」の程度性は「快い」という尺度の上の部分だけに範囲を限定されていると思われる。

次に、語義⑮<人の心を引き付けて迷わせる>の意味拡張プロセスに目を向けよう。

語義⑮：人の心を引き付けて迷わせる(状態・言動)

次の「甘い」の意味・用法は、人間を快く感じさせる点で語義⑬によく似ている。

(87) だが甘い言葉はなくても、椎名から電話がくるだけで里子は満足していた。

森田(1980:14)によれば、人間行為のあり方を表わす「甘い」は、「甘い言葉」や「甘い愛のささやき」など情欲を捉えるようなプラス評価の状態に使える。「甘い」は異性をう

つとりさせ、誘い込むような意味も含まれていると考えられ、言葉の表現に止まらず、他の行為にも用いられる。例を挙げると、「甘い口付け」、「甘い抱擁」などがある。

一方、「甘い」は、「甘い言葉には実がない」のようなマイナス評価の状態にも使える。この場合の「甘い」は人を誘惑するようなマイナスのイメージがあるため、語義⑩と区別すべきである。

(88) 「ずーっと愛し続けるよ」との甘い言葉に乗せられて結婚。

(89) 政府は、「元本保証がついているからこの金融商品は安全ですよ」と甘いささやきで国民を誘惑する。

(90) 悪徳リフォーム業者が甘い言葉で一人暮らしの老人をだました。(Yahoo!ウェブ)

(91) そして、わかってはいても、大半の人はこのコミュニティの甘い誘惑に負けてしまうのです。

(92) ほんのちょっとした気持ちの隙間に入り込もうとする甘い罠にくさびを打つ石。

(93) タニマチの提供する甘い餌に刑事の魂を売り渡してしまう。

例(88)、(89)の「甘い言葉」、「甘いささやき」は、聞き手を喜ばせ、気持ちよく感じさせるうまい話である。「甘い」は「人の心を引き付けて迷わせるようだ」ひいては「ことば巧みな」という概念と結び付けられている。バラの花は美しいけど、そのかげにはトゲがある。それと同じように、甘い言葉はそもそも人に快感をもたらすよいものだが、都合がよすぎる話だと人を騙す危険性も潜んでいる。さらに、例(90)の「甘い」に「不正直な」、「不誠実な」、「インチキな」といった概念も内包されている。他には、例(91)、(92)、(93)の「甘い誘惑」、「甘い罠」、「甘い餌」なども危険な落とし穴に繋がる可能性があるものである。

ただし、例(88)、(89)と異なり、(87)における「甘い言葉」は評価的にマイナスの性質を帯びたものではないようである。聞く人の心をうっとりさせるとさせるような言葉を指すだけで、その裏に潜在する危険性までは強調していない。このように、「甘い言葉」や「甘いささやき」はプラスの意味とマイナスの意味と両方の使い方があると思われる。したがって、心的感覚を起こす人間の言動については、「甘い」はプラス、マイナスという二重的な傾向を示している。

「甘い言葉」、「甘いささやき」に見られる「甘い」は聴覚の「甘い」のように思われるが、よく考えるとこれらの表現は「甘い声」、「甘い音楽」とは本質的な違いがある。「甘い声」と「甘い音楽」における「甘い」は人々に聴覚的な快感をもたらす意味を表す。しか

し、「甘い言葉」と「甘いささやき」は聴覚的な快感に止まらず、直接的な感覚表現から、言葉・ささやきの内容が「甘い」という意味に拡張して使われている。要するに、言葉やささやきの内容が聞き手の心を迷わせるほど「甘い」という意味を表わす。前にも述べたように、「甘い言葉」と「甘いささやき」はプラスとマイナスと両方の使い方がある。そのプラス的性質はプロトタイプの意味——語義①からメタファー的な拡張してきたことは自明のことである。なお、「甘い罠」と「甘い誘惑」に使う「甘い」は、「罠」、「誘惑」などマイナス的性質を帯びた表現によって、危険性が潜んでいるというネガティブな評価性が前面化されているため、もっぱらマイナスの意味として使われる。では、語義②の「甘い」に潜んでいるこの危険性はどこからきたものなのか。食べ物が甘すぎると肥満などの生活習慣病を招く危険性が高く、身体に悪影響を与える。要するに、一定の基準・範囲を超えると身体にマイナスの影響を及ぼす可能性は、「甘い」の潜在的な危険性の由来だと考えられる。「甘い」のプロトタイプの意味——語義①に潜む危険性というネガティブな評価性が語義②に写像され、二者はメタファーによって関連付けられる。程度性からいえば、「甘い」は人を誘い込むような極限的な性質を持っている。すなわち、「甘い言葉」、「甘い誘惑」に使う「甘い」は、危険性が潜んでいるというネガティブな評価性を持っているため、聴覚の「甘い」と大きく区別すべきである。

語義⑥：心理的・精神的刺激の度合いが弱い、緩い

(94) そのときかれは叱られた少年のように泣き出しそうな顔をしていた、あなたは右手のスーツケースを置いてかれに手をさしだした、哀しみの微笑、愛のために溶けそうな甘い哀しみの微笑を送りながら。

(95) かれを裏切っているという甘い罪悪感があなたの涙を誘ったのだ。

(96) 「…どうせダメだってわかってるのにな」少しも纏まらない考えと、不意打ちのように胸を締め付ける甘い感傷に軽く眉を顰める。

例 (94)、(95)、(96) からわかるように、「甘い」は「哀しみ」、「罪悪感」、「感傷」のようなマイナスのイメージを持つことばを修飾することもできる。このタイプの「甘い」は、「甘い」の語義③の「味覚刺激の度合いが弱い、緩い」という意味からの派生であると思われる。つまり、ここの「甘い」はそのマイナスのイメージの「程度が弱い」という意味で使われていると考えられる。よって、例 (94)、(95)、(96) における「甘い」は「薄い」と理解してもよいのである。

語義⑩<心理的・精神的刺激の度合いが弱い、緩い>は、「哀しみ」、「罪悪感」などのようなマイナスのイメージを持つ抽象名詞を修飾し、その「程度」が一定の基準に達しておらず、あるべきものの欠如という類似性に基づき、語義③<塩気・辛味が薄い味>からメタファー的に発展してきたものだと考えられる。

語義⑪：人の思考・判断・行為が慎重さや厳密さが欠如する

日本語の「甘い」は、人間の考えや判断などが不完全で思慮に欠け、また行為が不徹底でしっかりしていない状態を描写するのにも用いられる。

(97) 「きみの考え方は甘いよ」眼鏡のフレームをはずれた目を、土岐は尖らせた。

(98) 「だれかが拾ってくれるかもしれない」というのは無責任な甘い考えです。

(99) 目前の人間の姿は、そんな甘い見方を許さなかった。

(100) 「生徒がやることだから仕方がない」などと甘い判断を教師自身がもってはいない。

(101) ということは、外務省としてはこの辺の認識は大変甘かったわけですね。

(102) 著者は保守派の著述家たちで、九・一一以後のテーマはクリントンの甘い対応がテロ攻撃を招いたというものだ。

(103) たしかに韓国からの観光客なら成田でのチェックも甘くなる。

(104) 現場で僕はしつこいほどに日焼け止めを塗ったが、照ちゃんの塗り方はちょっと甘いように感じた。

(105) 第一級の王族がテロに斃れたわけで、ダイアナ元王妃の事故死といい、英国王室が世界一ガードが甘いと言われる所以である。

(106) シウバはディフェンスが甘いので、打撃をたくさんもらってしまう習性が見られているので、ボブチャンチンがそこを狙ってロシアンフックでもかませば、シウバは終わります。

(107) 人間は自信過剰だと、つい脇が甘くなって失敗するからです。

(108) その意味で言えば、野党の辻元さんたちは脇が甘いよな。

例 (97) ～ (101) における「甘い」の叙述・修飾する対象は「考え方」、「見方」、「判断」、「見通し」、「予想」、「認識」などのような、物事に対する思考・態度を表すもので、その思考や態度に隙や緩みがあり、厳密さが欠如している意味を表している。すなわち、この「甘い」には、「厳密でない」、「思慮に欠ける」といった概念が内包されている。

また、例(102)～(106)が示すように、「甘い」は人の行為(「対応」、「監督」、「審査」、「チェック」、「ガード」、「ディフェンス」など)が緩んで厳しさを欠く状態を表し、特に例(105)、(106)では、防御や攻撃について、守りや攻めが不十分で不徹底的な状態を描写することができる。例(107)、(108)の「脇が甘い」は元来相撲で、相手に付け込まれやすい体勢についていう表現である。転じて、守りや防御が甘いことの喩えとして多く使われる。

この場合の「甘い」は、「甘い」の味覚ドメイン内の語義③から派生している用法であり、マイナスの評価として使われている。

語義⑱：相手に対する態度・姿勢や言動が優し過ぎ、或いは厳しくない

「甘い」はまず、人の性質・性格について、物事に対する態度・姿勢に厳格さや正確さが足りない状態を描写するのに用いられる。下記の例に見られる「甘い」は、本来相手(自分をも含めて)に厳しい態度をとる、或いは厳しいことを要求すべきところ、優しくなって特別扱いしてしまう状況についていう。

(109) 併し私の親は貧乏人であり、それほど甘い親でもない。

(110) 僕はどうも女の子には甘いようですね。

(111) なるほど、中途半端な女学者をつくり出す東北大学は女に甘いということになるだろうが、女性の側からすれば、哲学志望の女子学生をうけ入れる大学は東北大学しかないのだから。

(112) 軍事法廷が何故か海軍に甘かったといふ不審の声も今に至るまであるけれど。

(113) 農水省幹部は「われわれが告発せずに捜査当局が立件すれば、農水省はやはり業界に甘かったと言われてしまう。それは最悪のシナリオだ」と話す。

(114) そういうことに対して甘い顔をするということは、今後のためにもよくないというふうに私は思います。

例(109)、(110)、(111)で示されているように、「甘い」は「親」が「私」に、「僕」が「女の子」に、「東北大学」が「女」に対する態度・姿勢で、「厳しさを欠いている」という意味に使われている。例(112)と(113)における「甘い」には、「寛大な」、「厳しくない」、「生ぬるい」、「至らない点を見逃してくれる」といった概念が内包されている。

つまり、この場合、「甘い」は「厳しい」の対義語として使われている。厳しくない要求や寛大な対応について使い、自分或いは相手に対する態度に厳しさが足りないことを意味

する。

これは味覚ドメイン内の語義③の「刺激の度合いが弱い、緩い」という意味から、「何か
が物足りない、不足している、厳しさが弱い」という意味に派生したのではないかと思わ
れる。なお、「甘える」、「甘やかす」などの派生語はこの用法から生まれたものとされて
いる。

なお、例(114)では、「顔」という名詞は人の態度を意味しているため、容貌を表す「甘
い顔」や「甘い顔立ち」と異なる点で注意が必要である。

語義⑱：法律・基準・規定などが厳格ではない

(115) 米国にも同様の認定制度はあるが、それに比べて、「基準が甘い」という批判の
声もある。

(116) 修正社会主義型の議論が盛んだった頃に、日本はそれを上回る甘い法律を作っ
てしまった。

(117) 食い倒れの大阪に事務所があるので、制限基準が甘いのかもしれないが。

法律や基準などは、人間の精神的行為の生産物である。人間の行動を規定する或いは規
制するためにつくられたものとして、元来一定の厳しさを要求される。上記の例
が示すように、日本語の「甘い」は法律や基準などが求める厳しさに欠けている場合に用
いられる。

語義⑰<人の思考・判断・行為が慎重さや厳密さが欠如する>は、人間の思考・判断な
ど本来一定の厳格さが要求されるものが厳しさに欠けているという意味を表す。これと同
様、語義⑱<相手に対する態度や言動が優しい或いは厳しくない>及び語義⑲<法律・基
準・規定などが厳格ではない>のいずれも厳しさが欠けているという類似性によって、語
義③との対応が成り立つ。語義⑰、⑱、⑲として使われる場合、「甘い」によって叙述・修
飾される主体はそれぞれ「人間の行為」、「行動を行う行為者」、「人間の行為の結果」を表
すものが主である。すなわち、三者は人間活動のどの部分が焦点化されたかによって異な
るが、<プロセス——行為者——結果>というメトニミー関係によって結ばれていると考え
られる。程度性から見れば、語義⑰、⑱、⑲として使われる「甘い」は、「厳しさ」とい
う尺度の下の方の部分だけに範囲を限定されている。また、適格性に欠けているという意
義特徴から、いずれもマイナスの価値評価性を持っている。

語義⑳：(打ち消しの形で)物事や相手が簡単で、単純なものではない

最後は語義㉑<(打ち消しの形で)物事や相手が簡単で、単純なものではない>という意味を見てみよう。

「甘い」は相手を見下したり、過小評価するといった状態を描写するのにも使われる。

(118) 再就職が甘いものでないことは分かる。

(119) 親の七光りが通用するほど芸能界は甘くない。

(120) ところが体験者たちは、現実はそんな甘いものではないと口を揃える。

(121) そういうことで国民をいつまでもごまかせると思っていたら、それは大変な間違いですよ。国民はそんなにもう甘くありません。

(122) 話し合いで解決するほどその問題は甘くない。

(123) 常識的に考えて個人でどうこうできるという甘い問題ではない。

以上の例が示すように、「甘い」は打ち消しの形で、物事の本質がそう単純なものではなく、安易に推量することはいけないという意味を表す。この場合、「甘い」によって叙述・修飾されるものは、人間の思考・行為の対象となるものである。これらの対象物は簡単なものではない、軽視してはいけないという点で共通している。すなわち、例における「甘い」には、物事に対する注意や認識に欠けているさまを表し、「舐めた」、「軽視した」、「馬鹿にした」、「軽く見た」といった概念が内包されている。

『学研』では「甘い」のこの意味・用法について、「たいしたものではない」と記述されているが、ほかの4つの国語辞典にはこれに似た意味項目が見当たらない。また、皆島(2005)以外の先行研究も、この意味・用法については言及していない。

語義㉑は、人間の思考・行為の対象であるものについていう用法であり、必ず打ち消しの形を伴っていることが特徴である。「甘い」の意味拡張をめぐる従来の研究(武藤2001、小田2003など)はほとんどこの種の語義について言及していない。では、語義㉑という意味・用法は何を起点として拡張してきたのか。まず、「甘く見る」という慣用句における「甘い」は、緩くて厳しさが足りないという意味を表わし、語義③<塩気・辛味が薄い味>からメタファー的に発展してきたものだと考えられる。「甘い」と「見る」との組み合わせは「見下す」という意味を生み出し、さらに「甘い」という形容詞に行為の対象の性質を表す機能を担わせていると考えられる。現実には複雑で簡単なものではないから、甘く見てはいけない。また、相手は実力があって簡単には勝てないから、甘く見たら痛い目にあうの

である。要するに、主体の行為と行為・思考の対象者となるものの属性との間には<プロセス—原因>というメトニミー関係が成り立つと考えられる。この場合、概念化者が「甘く見る」という行為を参照点として、行為の対象となるものの属性を認定するという認知プロセスが働きをしていると思われる。このように、語義⑩の拡張プロセスはやや複雑であり、まず「甘い」は語義③を起点にメタファー的に発展し、そして「見る」と組み合わせ、「甘く見る」という慣用句の中で新しい意味を生み出し、さらに<プロセス—原因>というメトニミーによって語義⑩に発展してきたと考えられる。

以上、コーパス調査の検索結果に基づき、「甘い」の人間活動ドメインへの意味の拡張を再整理・分析した。

3.3.5 物事の状態ドメインへの転義

多くの先行研究（武藤 2001、小田 2003、皆島 2005 など）で指摘されているように、日本語の「甘い」は物事の不完全な状態を表すことができる。ここでは、さらに物事の品質・機能や物事の状況・程度という2つの面に分けて、「甘い」が物事の状態を表す際の意味拡張を考察する。

語義⑪：物事の機能・品質などに不備があり、不十分な状態である

(124) フロント・タイヤは冷えているので、舵の効きは少し甘い。

(125) 車間距離を十分にあげない癖があるか、ブレーキの甘い欠陥車の疑いがある。

(126) 五千四百七はオートフォーカスがついているものの、ピントはデジカメに比べ甘いです。

(127) マクロ撮影でピントが甘い写真の大半は手ぶれと被写体ブレです。

(128) 回す所が水、お湯の2つあり、真ん中に吐水口があります。水の方の回しが甘いみたいです。

(129) 三千円からありますが、安いやつはディスクの読込が甘いので、再生できないDVDも多いですよ。

上記(124)～(128)の例が示すように、「甘い」は物事の緩んだ状態、機能が十分果たされていない状況を指している。それは触覚の「語義⑩：感触的に堅牢でない・確実でない」という意味から派生したと思われる。例(124)と(125)における「甘い」は、それ

それスポーツカーの舵や車のブレーキが鈍く、よく効かないことを指す。例(126)と(127)の「ピントが甘い」はカメラのピントが合わずに、写真がぼやけている状態をいう。「ピントが甘い写真」は「ブレでぼやけている写真」のことを指している。例(128)の「水の回しが甘い」は水道の蛇口が緩い状態についていう表現である。また、例(129)の「ディスクの読込が甘い」は、DVDの再生が正常に行われなかったりする状態を表す。いずれも物事の機能が望まれるレベルに達していない状態についての叙述である。この場合、「甘い」によって叙述されるのは、対象物の一部の機能を表すものである。

語義②：物事の状況・程度が満足できない、中途半端な状態

(130) バスはコントロールが命なので、わずかな身体のブレが、ミスや甘いボールにつながりやすいのだ。

(131) 勝負球のスライダーが真ん中寄りに甘く入った。

(132) ボクサーのパンチの切れが甘い。

(133) 今日の相場は甘い。

例(130)、(131)の「甘い球」や「甘いボール」は野球などの球技スポーツによく使われる表現である。その対義語には「厳しい球」がある。「甘い球」は、ボールの角度や速度などが望ましくない状態についていう。

例(132)の「キレ」というのは、総合的に見たパンチの質を表す言葉であるといえ、キレがあるパンチは相手を倒せる。「切れの甘いパンチ」はパンチのスピード、衝撃力、正確性などの状況・程度が満足できない、中途半端な状態を言っている。さらに、「ダンスの切れが甘い」、「ギャグの切れが甘い」、「水の切れが甘い」といったような使い方もある。これらの「～切れが甘い」という用法も人の身体感覚が緩んだ状態の延長線上にあると思われる。

例(133)の「甘い」は株価の動きについて、投資家の期待に応えられない「鈍く、低落気味である」という状況を描写するのに用いられる。「株価がやや安い」、「相場がいくらかくだり気味だ」といった概念が内包されている。「甘い相場」、「相場が甘い」というように使用されている。

語義①と語義②はいずれも物事が本来望まれる基準に達していない状態を表す用法である。この場合の「甘い」は、マイナスの評価を表す意味・用法である。

「ピントが甘い」(語義①)や「甘いボール」(語義②)などの用例から明らかなように、「甘い」は物事の中途半端な状態及び物事の機能・品質の不備についても言える。では、なぜ物事が不完全な状態にあると「甘い」と言うのだろうか。その意味拡張のプロセスについて、武藤(2001)は「<刺激が相対的に弱い>という意義特徴との類似性に基づき、<余裕が残りゆるいさま>を表す」(武藤 2001: 46)と主張している。しかし、<刺激が相対的に弱い>は強弱という程度性についていっているものであり、物事の不完全な状態・中途半端な状態と直接に結び付きにくいと思われる。また、小田(2003: 196)では、「味覚によって起こる弛緩状態と、ものの弛緩状態の間に対応が成り立つ」と述べている。しかし、小田(2003)が「甘いものは、人に快い感覚を生み、リラックスさせ、ふわっと緊張を解く。身体的な緩みのある状態をつくりだす」と指摘するように、「弛緩状態」は不具合を起こすばかりではなく、好ましい状態になることもある。要するに、「弛緩状態」は必ずしもマイナスの価値評価を付与されたものだとは限らないのである。

「甘い塩魚」や「甘いカレー」は期待されていた基準に達していないことを表現できるのと同じ、「舵の効きが甘い」や「カメラのピントが甘い」も望ましい状態ではない。したがって、物事の不完全な状態を表す意味は、語義③<塩気・尋味が薄い味>の適格性に欠けているというマイナスの価値評価性からメタファー的に拡張してきたものだと考えるのも故なきことではない。また、程度性に関しては、語義③と同じく「甘い」は「完全な状態」というスケールの下の方の部分だけに範囲を限定されている。

3.3.6 認知言語学的アプローチによる語義の再分類

以上、日本語の国語辞典や先行研究を踏まえつつ、BCCWJに対するコーパス調査に基づき、「甘い」の意味拡張を考察してきた。再整理した「甘い」の各語義を以下のように示しておく。

「甘い」

I【身体体験】

1. 味覚

語義①：糖分があるような味

語義②：食物や料理などの味が好ましい状態

語義③：口中における刺激が基準に達しておらず、相対的に弱いさま

ア. 塩気が薄い

イ. 香辛料やお酒などの刺激性が低い

2. 嗅覚

語義④：糖分などを持つものの鼻腔における好ましく快い嗅覚刺激

語義⑤：糖分を持たないものの鼻腔における好ましく快い嗅覚刺激

語義⑥：異性をうっとりさせ、誘い込むような嗅覚刺激

3. 視覚

語義⑦：容貌・笑顔が美しく好感を持たせる

語義⑧：(色や服装やファッションなどについて) 可愛くて女らしい

4. 聴覚

語義⑨：人の声や歌声・音楽が心地よい

5. 触覚

語義⑩：人や物に触れた時の物理的な感触が快い、さわり心地がよい

語義⑪：感触的に堅牢でない・確実でない

語義⑫：肉体的な痛み・苦痛が比較的強くない

II 【人間活動】

語義⑬：主体に好まれる快い心理感覚 (幸福感)

語義⑭：恋や愛情などがあふれて、うっとりとした快い

語義⑮：人の心を引き付けて迷わせる (状態・言動)

語義⑯：心理的・精神的刺激の度合いが弱い、緩い

語義⑰：人の思考・判断・行為の慎重さや厳密さが欠如する

語義⑱：相手に対する態度・姿勢や言動が優しい或いは厳しくない

語義⑲：法律・基準・規定などが厳格ではない

語義⑳：(打ち消しの形で) 物事や相手が簡単で、単純なものではない

III 【物事の状態】

語義㉑：物事の機能・品質などに不備があり、不十分な状態

語義㉒：物事の状態・程度が満足できない、中途半端な状態

今回のコーパス調査によって、国語辞典に掲載されていない、或いは独立した意味項目として立てていないといういくつかの意味・用法 (語義②<食物や料理などの味が好ましい状態 (新鮮な味・天然の味)>、語義⑥<異性をうっとりさせ、誘い込むような嗅覚刺

激>、語義⑦<容貌・笑顔が美しく好感を持たせる>、語義⑧<(色や服装やファッションなどについて)可愛くて女らしい>、語義⑩<人や物に触れた時の物理的な感触が快い、さわり心地がよい>、語義⑪<感触的に堅牢でない・確実でない>、語義⑫<肉体的な痛み・苦痛が比較的強くない>、語義⑬<心理的・精神的刺激の度合いが弱い、緩い>など)が見つかった。

また、語義⑪は打ち消しの形式を伴う場合に使われることも明らかである。

3.3.7 多義的意味ネットワーク

以上の検討を踏まえ、味覚形容詞「甘い」の各語義の拡張起点及び拡張方式を表1-5に示す。さらに、以下図1-1に「甘い」の多義的意味によって形成される意味ネットワークの略図を提示する。

表1-5 「甘い」の各語義の拡張方式

語義	拡張の起点	拡張方式
語義①糖分があるような味 (プロトタイプの意味)	原義①甘いという味覚	メトニミー
語義②旨味	語義①糖分があるような味	メタファー 「尺度融合」
語義③刺激の弱い味	語義①糖分があるような味	メタファー 「尺度の一元化」
語義④糖分の快い香り・匂い 語義⑤糖分のない物質の快い香り・匂い 語義⑥異性の快い香り・匂い 語義⑦容貌の美しさ 語義⑧可愛さ・女らしさ 語義⑨歌声・音楽などの心地よさ 語義⑩感触の心地よさ	語義①糖分があるような味	メタファー
語義⑪感触的に堅牢・確実でない	語義③刺激の弱い味	メタファー
語義⑫痛み・苦痛が比較的強くない	語義③刺激の弱い味	メタファー

語義⑬幸福感 語義⑭恋愛	語義①糖分があるような味	メタファー
語義⑮誘惑	語義①糖分があるような味	メタファー
語義⑯心理的・精神的刺激が弱い	語義③刺激の弱い味	メタファー
語義⑰慎重さや厳密さが欠如する 語義⑱態度・姿勢などが厳しくない 語義⑲基準・規定などが厳格でない	語義③刺激の弱い味	メタファー
語義⑳(打ち消し) 簡単・単純でない	語義③刺激の弱い味 慣用句「甘く見る」	メタファー メトニミー
語義㉑機能・品質が不備・不十分だ 語義㉒状況・程度が満足でない	語義③刺激の弱い味	メタファー

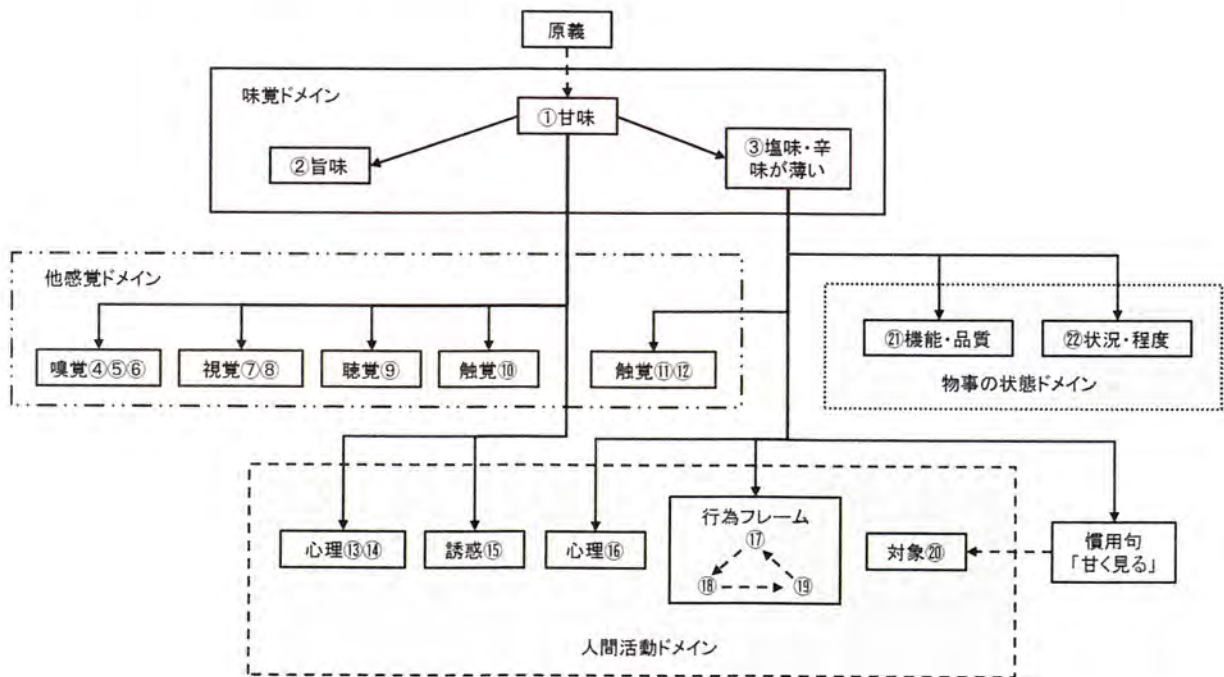


図 1-1 「甘い」の意味ネットワーク

上記の略図において、太線矢印はメタファーリンクを表し、破線矢印はメトニミーリンクを表している。語義①は多義ネットワークにおける拡張の起点となるプロトタイプの意味であると位置付けられる。そのほかの語義は全て語義①を出発点として、そこからメタファー・メトニミーの経路を辿って意味が展開する。

表 1-5 と図 1-1 に見られるように、味覚形容詞「甘い」の意味拡張及び意味ネットワークには次のような特徴が見られる

1. 拡張手段について、「甘い」は主にメタファーによって拡張している。原義からプロトタイプの意味（語義①）、それから慣用句「甘く見る」から語義②<（打ち消しの形で）物事や相手が簡単で、単純なものではない>への転用だけがメトニミーによるものである。鍋島（2007：193）では、価値評価性を伴うと考えられる用語のメタファー的使用を列挙することによって、価値評価性がメタファーを形成しやすいということを確認できた。形容詞「甘い」の意味拡張においてメタファーが最も大きな役割を果たしていることは鍋島（2007）の説を支持すると考えられる。

2. メタファーやメトニミー以外の要素も「甘い」の意味拡張に働きかけているということは明らかになる。例えば、語義①から語義②<新鮮な味・天然の味>と語義③<刺激の弱い味>への拡張では、メタファーがメインでありながらも、語義②には「尺度融合」、語義③には「尺度の一元化」という要素がそれぞれ働きかけている。要するに、意味の拡張プロセスにおいては、メタファーと他の要素の協業によるものもあるということが分かる。

3. 「甘い」の多義的な意味はほとんどメタファーとメトニミーのどちらかによって拡張されてきたものだが、語義②<（打ち消しの形で）物事や相手が簡単で、単純なものではない>は、語義③<刺激の弱い味>を起点にメタファー的に発展し、そして動詞「見る」と組み合わせたり、「甘く見る」という慣用句の中で新しい意味を生み出し、さらにメトニミー的に発展してきたのである。このように、語義②はメタファーとメトニミーの協業によるものだと考えられる。

4. 形容詞「甘い」の意味拡張プロセスにおいて、メタファーやメトニミーが重要な役割を果たしていることは自明なことである。しかし、同じメタファー・メトニミーによる派生だと言っても、必ずしも同質なものとは言えないようである。例えば、メトニミーに関わる「甘い」の意味拡張には、語義①と語義②がある。しかし、意義展開パターンについて、二者はそれぞれ<結果——原因>、<プロセス——原因>である。また、メタファーについても同じである。要するに、メタファーやメトニミーによる意味拡張においては、意義の展開パターンが異なることもあり得る。

5. メタファーによる転義から見れば、「甘い」のポジティブ性かネガティブ性が写像され、他の語義に拡張するケースが多い。従って、メタファーによる「甘い」の意味拡張には、形容詞の価値評価性が深い関わりを持っていることが窺える。西尾（1972）が指摘するよ

うに、形容詞の評価・価値付けの要素は形容詞の避けて通れない性質である。よって、語の意味拡張分析は品詞自体の性質も視野に入れるべきであろう。ここで、「甘い」の各語義の評価性についての分類を次の表 1-6 で示す。

表 1-6 「甘い」の各語義の評価性

プラス (+)	マイナス (-)
語義①糖分があるような味	
語義②旨味	
語義③刺激の弱い味	
語義④糖分の快い香り・匂い	
語義⑤糖分のない物質の快い香り・匂い	
語義⑥異性の快い香り・匂い	
語義⑦容貌の美しさ	
語義⑧可愛さ・女らしさ	
語義⑨歌声・音楽などの心地よさ	
語義⑩感触の心地よさ	
	語義⑪感触的に堅牢・確実でない
語義⑫痛み・苦痛が比較的強くない	
語義⑬幸福感	
語義⑭恋愛	
語義⑮誘惑	
	語義⑯心理的・精神的刺激が弱い
	語義⑰慎重さや厳密さが欠如する
	語義⑱態度・姿勢などが厳しくない
	語義⑲基準・規定などが厳格でない
	語義⑳(打ち消し) 簡単・単純でない
	語義㉑機能・品質が不備・不十分だ
	語義㉒状況・程度が満足でない

6. 人間活動ドメインにおける意味・用法では、マイナス意味を表す3つの用法、語義⑰<人の思考・判断・行為が慎重さや厳密さが欠如する>、語義⑱<相手に対する態度や言動が優しい或いは厳しくない>と語義⑲<法律・基準・規定などが厳格ではない>はメトニミー関係で結ばれている。要するに、各語義の間にもなんらかの関係によって結ばれていることが分かる。篠原(2002)が指摘するように、「基本的には形容詞による事態把握の仕方は、日本語、英語に関わらず、同一のdomain(同一経験、知識体系)内のprofileの選択の差から生ずるメトニミー的認知が関係しているといえる」(篠原2002:268)。

7. 「甘い」の意味拡張の方向性としては、外界の事物に対する身体体験、すなわち味覚の客観的な叙述から、主体の主観的な叙述や感情的な叙述へ拡張する方向性が見られる。山梨(1995)では、言語変化のプロセスのなかには、「具体的な意味内容をもつ表現から、言語主体の主観的な態度や判断を反映するモダリティー的な表現に転化していく傾向」(山梨1995:65)があると指摘されているが、「甘い」の拡張プロセスは、一見するところこの見解を裏付けているように見える。

3.4 認知言語学的アプローチによる“甜”の意味拡張プロセスの分析

本節では、味覚形容詞“甜”の各意味項目の相互関係を明らかにし、またそれぞれがどうやって派生したのかなど、認知的アプローチによって検討したい。

ここでは、北京大学漢語語言学研究中心によって開発された《北京大学汉语语言学研究センター語料庫》(以下、CCLと略称する)から“甜”の実例を収集・分析することによって、“甜”の意味拡張を検討する。以下中国語の用例において、出典を明記していないものは、すべてCCLからのものである。

3.4.1 プロトタイプの意味

語義①: 糖分など甘味成分を持つものが口中における味を描写する場合、“甜”は“像糖或蜜的味道”(「砂糖や蜜のような味」)と意味する。

多くの辞書及び先行研究が言及しているように、“甜”は味覚を表わし、糖分など甘味成分を持つもの(典型的には砂糖や蜜など)が口中における味を意味する。一般的に快く好ましい味として認識されている。本研究では、先行研究及び辞書記述に従い、“甜”のプロトタイプの意味を“像糖或蜜的味道”(「砂糖や蜜のような味」)とする。

(134) 爱吃甜食是孩子的天性, 有些家长喜欢拿糖果哄孩子, 这样会使孩子摄入过量的糖

份，岂不知吃糖过多会影响孩子成长。

(135) 小朋友喜欢吃甜食，吃完甜食之后就觉得开心，喜欢这个口味儿，因为甜食吃了以后它会让人高兴，就是说你脑子里面会有多巴胺一类化学物质的产生，…。

例の(134)、(135)においては、甘い味は子供が機嫌をなおすような優しい味である。

しかし、甘い味はすべて糖分によるものではなく、たとえ糖分の含まれていない物であっても、人間の口中に甘味のような食感が喚起すれば、“甜”（甘い）とも言える。たとえば、“甜茶”（てんちゃ）とは、中国茶の中で植物学上の茶とは異なる木の葉から作られた甘いお茶の総称。古くからある薬草茶の一つである。“甜茶”は甘味成分としてフィロズルチンとイソフィロズルチンを含み、その甘さはショ糖の400あるいは600 - 800倍¹⁴、サッカリンの約2倍である¹⁵。葉を乾燥させることにより甘味が出る。

日本語の「甘い」と同じように、“甜”のプロトタイプの意味と原義とは異なるものである。「甘い」は砂糖をなめたときに生じる味覚である（西尾1972:98）。前述（第4章4.4.1）のように、人間の味覚の1種である甘味を表すのが「甘い」の本来の姿であり、この意味こそ「甘い」の原義である。《王力古汉语词典》（2000:736）によれば、先秦時代には“甜”という漢字がなく、甘い味を表わすのに“甘”という字が使われていたという。《说文解字》では、“甜”は“恬”と書き、“恬，美也。从甘，从舌。舌知甘者（甘いものを舌で感知する）。”という説明がある。要するに、現代中国語の“甜”は古代中国語の“甘”の意味を受け継ぎ、“恬”の字形から発展してきたのであり、その原義も日本語の「甘い」と同じ、“甜味物质（甘いもの・甘味物質）”をなめたときに生じる味覚であると思われる。砂糖や蜜などは“甜味物质”の代表であり、人間の“甜”という味覚を引き起こす原因である。“甜”という味覚と“甜味物质（甘いもの・甘味物質）”の間には<結果—原因>というメトニミー関係が成立する。このように、“甜”のプロトタイプの意味とその原義はメトニミーリンクによって関係付けられる。

3.4.2 味覚ドメイン内の転義

“甜”は語義①<“像糖或蜜的味道”（「砂糖や蜜のような味」）>というプロトタイプの意味以外に、ほかの種の味覚を表すこともできる。

語義②: 野菜・肉など幅広い食物や料理などの味が好ましい状態にあることを描写する場合、“甜”は“美味”（「美味しい」）と意味する。

(136) 生食的藕肥大，肉质脆嫩，水分多而甜，并有清香。

(137) 嫩菱味甜清香，老菱煮熟，越嚼越香。

(138) (牡丹虾) 肉质富有弹性，甘甜浓郁，是做刺身的绝佳美味。

(139) 不管这些可怜的东西如何挖掘出各种各样的通道，她总是能找到方法将他们吃掉。但她一直渴求更甜美的肉。

(140) 香甜可口 訳：おいしくて口に合う。(白水社 『中国語の辞典』)

漢字から見れば、《说文解字》では、“甜，美也（甜は美なり）。”、“甘，美也（甘は美なり）。”と述べて、例(136)と(137)の“甜”は“甘”、“美”と同じ、食物が人に与える好ましく快い味覚——「美味しさ」を意味する。そして、例(138)、(139)、(140)のように、中国語の“甜”は“甘”、“美”、“香”との複合語“甘甜”、“甜美”、“香甜”などを使うことも多いである。

実際人間は五感すべてを使って、食物を認知し、美味しさを感じている。「味」だと感じている感覚の大部分は、後鼻腔性嗅覚（あるいはレトロネイザル嗅覚）と口腔内の体性感覚に起因するものであり、そこに味覚要素の占める割合は多くない¹⁶。さらに実際の食物摂取時には、色や形などの視覚情報、パリパリやシャキシャキなどの聴覚情報、鼻先に漂う香り（前鼻腔性嗅覚あるいはオルトネイザル嗅覚）など、「味」に留まらない様々な感覚が喚起される¹⁷。

語義③：語義①の味を持たないものが口中における好ましく快い感じを表す場合、“甜”は“口感好，醇厚”（「口当たりが良い、芳醇な」）と意味する。

水、露など甘味物質を持たないというだけでなく、口中における刺激もあまりない飲食物について、口当たりの良いさまを“甜”という。

(141) 甜水井。 訳：おいしい水の出る井戸。(白水社 『中国語の辞典』)

(142) “姐姐，把这些药吃了吧。”妹妹端着杯子走过来，用小勺一点点送进我的嘴里，甜丝丝的水流，使我心里感到清亮了许多。

(143) 秫秫叶子摇晃着，把影子晃到小翠身上，又晃到文化子身上。露水凉凉的，甜甜的。

そして、麦・米などの穀物や葡萄などの果物の炭水化物（糖分）が発酵させて造るお酒もよく「甘い後味がする」と言われるが、酒の場合、厳密に言えば、“甜酒”（日本の甘酒）のような語義①の「甘味」のついているものもあるが、ドライワイン（Dry wines）という残糖の少ないものや高粱酒（コウリャンしゅ）など糖分の殆どないものもある。

“甜酒”は麴や酒粕とお米を発酵熟成させ、酵素によりお米の澱粉質がブドウ糖に分解

されたものである。その甘い味は、ふつう、語義①の甘味成分の甘い味として認識されていて、例の(156)のような甘い匂いも発散している(後述3.3.3を参照:P66)。ところで、次の例を見てみよう。

(144) 高密东北乡红高粱怎样变成了香气馥郁、饮后有甘饴回味、醉后不损伤大脑细胞的
高粱酒?

ドライワイン(Dry wines)や中国の高粱酒の場合、果物と穀物の糖分の殆どが酵母によってアルコールに分解され、辛口と謳った酒ではあるが、独特の酸味や渋みと共に、“回甜、回味甘甜(後味が甘い)”の感じがする。

この“回甜、回味甘甜”の甘い感じは甘味物質の甘さではなく、芳醇とか濃醇とか、酒が熟成して、味わいや口当たりが、深くしっかりとしてこくがあることである。水、露などの口当たりの良さと同じ、語義①の口中における好ましく快い味覚的刺激との類似性による意味転用であると考えられる。

日本語の「甘い」と同じように、中国語の“甜”は味覚を表わす場合、対象物は砂糖をはじめ様々であるが、対象物によって“甜”が表わす意味は多少違うのである。これは認知主体である人間が対象物によってその評価基準が異なるためであると考えられる。

砂糖や蜜の甘い味と食物の美味や口当たりの良い味などが皆人の好ましい味であり、ポジティブ性で共通しているため、甘い物の美味しさを評価する尺度と食物・料理の美味や水・酒など口当たりの良さを評価する尺度が融合していると考えられる。すなわち、甘味と美味や口当たりの良い味などは「人の好ましい味」であるという類似性に基づき、評価基準が融合し、“甜”という表現によって、新鮮でコクのある美味しい味や清冽・芳醇で口当たりの良い味などを表すようになったと考えられよう。これはメタファーと味覚領域内の尺度融合という2つのメカニズムの協業によるものだと考えられる。

つまり、“甜”の語義②“美味”(「美味しい」と語義③“口感好、醇厚”(「口当たりが良い、芳醇な」)は、“甜”のプロトタイプの意味のポジティブ性が写像され、更に甘い物の味と食物・料理や水・酒などの味を評価する尺度が融合されたことによって派生してきた意味だと思われる。この場合、“甜”は自由な尺度性を表すものではなく、「美味・口当たりの良さ」という尺度の、著しく上の方の部分だけに範囲を限定され、プラスの価値評価が付与される。

3.4.3 共感覚ドメインへの転義

多くの先行研究が指摘するように、中国語の味覚形容詞“甜”は味覚以外の共感覚にも意味拡張している。ここでは、“甜”が嗅覚・視覚・聴覚・触覚領域への転用を見てみる。

例えば、“甜甜的香味”（語義④⑤）“甜甜的微笑（語義⑥）”、“甜甜的声音”（語義⑦）、“甜甜的吻”（語義⑧）はそれぞれ嗅覚、視覚、聴覚、触覚への拡張用法である。

（1）嗅覚への転用

語義④：糖分など甘味成分を持つものが人の鼻腔における好ましく快い嗅覚を表す場合、“甜”は“(香气) 甜蜜芬芳”（「甘い香り（匂い）」）と意味する。

（145）（糖葫芦）…，那熬糖的学问，蘸糖的技巧是非得练上一番不可的。“趁热吃香哪！”偶尔的一声吆喝，伴着空气中弥漫的甜香，牵住了许多人的脚步。

（146）山上玉蜂闻到玉蜂蜜浆的甜香，纷纷赶来。

“甜”の語義①の味を持つものは通常、ある種の匂いを有することが多いということから、ある匂いが“甜”の語義①を連想させる場合、その匂いを“甜”という。そしてこの嗅覚刺激は、人の食欲を刺激するような好ましいものである。典型的なのは例（145）と（146）の砂糖や蜜の甘い匂い（香り）であるが、蜜腺を持つ花の場合では、例（147）の味覚から例（148）の嗅覚への転用は意味拡張の連続性（関連性）を示すものである。

（147）在这些乡村孩子看来，读书，认字实在是太费劲儿了，他们宁愿去割一筐草，剜一篮子野菜，累了，在湿润润的青草地上打个滚儿；饿了，跑到树下摘几个枣子，撸一把槐花，甜丝丝、香喷喷吃上几口，那有多痛快！

（148）学屋门前的槐树上挂满了一嘟嘟雪白的槐花，和风携着花香从高处扑来，甜腻腻的有些醉人。

そして、語義①「甘い味」と同じ、この派生義④「甘い匂い」についても厳密に砂糖や蜜の匂いとは限らず、より細かく分類すれば、派生的な意味として果糖を含む果物・野菜などの匂いや、乳糖を含むミルク・クリームなどの匂い、そして糖分を含む澱粉質の発酵や加工による匂いを指す場合もある。

ア. 果物・野菜・ジュースなどの甘い匂い

（149）小屋里弥漫着一股苹果的甜香。

（150）（青玉米）青嫩的甜香似乎恢复了你的些许生机。

イ. ミルク・クリームなど（乳糖）の匂い

（151）这一件真的“可以吃”的婚纱，由多名西点师合作，用大量鸡蛋、面粉、奶油并且

混合了各种新鲜水果而制成的蛋糕，创作出婚纱甜香四溢的圆形裙摆。相信这件由超过 50 公斤的甜点装点的婚纱一定会令新娘体会到一种由内而外的甜蜜和幸福。

(152) 寝室散发着瓜子的咸香和冰淇淋的甜香。

ウ. 澱粉質（発酵や加工）の甘い匂い

(153) 他们忙到深夜才把床支好。窑洞已经是一股红薯面的甜香，…。

(154) 夜幕降临，从泛着昏黄灯光的作坊里，《山楂树》、《喀秋莎》的旋律随着面包香甜的气息一起渗出门缝…。

(155) 几天紧张的抢收过后，一片片金黄色的麦田象是被人施了魔术似的，只剩下了毛糙糙的麦茬子，场院里，土路上，人们的衣服头发上，到处都落着星星散散的麦屑，沾着针尖一样的麦芒。田野村庄也弥漫在熟麦香甜的气息里。

(156) 四个伙计，端着木锨，从大缸里铲出一块块生着绿色松花霉点，散发着甜味的高粱坯子，往那热气蒸腾的大甑里一点点抖浇。《红高粱》

語義⑤：語義①の味を持たないものが人の鼻腔における好ましく快い嗅覚を表す場合、“甜”は“(香气) 令人感到魅惑”(「人をうっとりさせるような芳醇な香り」と意味する。

前述の“甜酒”の場合、その甘い匂いは例(23)の“散发着甜味(甘い香り)的高粱坯子”と同じ、語義④のcに当てはまるが、次の例(24)のような糖分のない高粱酒の優しい香りは穀物や果物などの本来の甘い味を連想させるため、“甜”とも言われる。

(157) 伙计们把酒甑罩到木甑上，锅里的蒸汽全没了。只听到火在灶里响，看到木甑在锅上一阵酥白一阵橙黄。一股淡淡的、甜甜的、似酒非酒的味儿从木甑里透出来。

そして、元々果物や蜜腺を持つ花の匂い(語義④)を模倣してできた香水も、実際には語義①の甘い味を持たない物質であるにもかかわらず、その特別な香り(匂い)が芳醇で一種の嗅覚的快い感じを引き起こすため、“甜”ということになる。

(158) 纯黑液体，一旦接触到空气，就会变得无形，带有狂野浓郁的甜香，是一款“如同嘎嘎小姐一样充满性感诱惑的香水”。

例(158)の香水は、人に嗅覚的快感をもたらし、その嗅覚的快感は砂糖・蜜などの甘いものが味覚に与えた好ましく快い感覚と類似するため、異なる二つの感覚が自然に結びつき、感覚同士を混合させた共感覚的表現だと推測される。

お酒、香水の甘い香り(匂い)は普通、嗅覚に明確な刺激を与え、人に感知されることは比較的容易であると思われるが、土や空気など香味成分不明或いは香味成分の殆どな

い物質の匂いが人の好ましく快い感覚を喚起すれば、“甜”と言えるシーンもある。

(159) 每天早晨到公园去吸吸鲜甜的空气。

上記の例が示すように、“甜”は花・果物・香水・空気などの香り（匂い）が快く感じられることを表わすことができる。この場合、単音節の形容詞“甜”は「味」という抽象名詞と組み合わせたり、芳醇な香りを表わす。中国語では名詞“味”は味を表わすとともに、においも表わすものであるため、“甜味”は味覚の「甘い味」と嗅覚の「甘い匂」の両方を表現できる。

甘いものを食べるときの感覚、お菓子や花が放つ芳香を嗅ぐ感覚、愛らしい微笑みを見る感覚、美しい歌声を聴く感覚、愛情溢れるキスの感覚とは、心地よい快感という点で共通している。日本語の「甘い」と同様に、“甜”が共感覚への意味転用は価値評価性に対する主観的な印象の同一化によるものだと考えられる。このように、味覚を表わす“甜”は味覚以外の快感を表わすのは類似性に基づくメタファーである。なお、“甜”が共感覚への拡張用法は評価的にプラスの性質を帯びているのである。

(2) 視覚への転用

語義⑥：“甜”は人の外見や気品などを修飾する時に使われ、“(笑容或相貌) 甜蜜而美好”（「笑顔か容貌が愛らしい様子」）と意味する。

下記の例(160)～(163)は視覚への派生である。

(160) “小姐，你有什么地方不舒服吗？”她轻声地问道，脸上露出甜甜的笑容。

(161) “真好听！谢谢阿姨！”林涛稚嫩的脸蛋上露出两个甜甜的酒窝。

(162) 小波的模样很甜，神气儿也挺逗人；（后略）

(163) 香港歌星奚秀兰唱《阿里山的姑娘》时，有四位身着高山族服装的“甜妹子”伴着优美的歌声翩翩起舞。

例(160)と(161)が示すように、“甜”は“笑容（笑顔）”、“微笑（微笑み）”、“酒窝（えくぼなどの名詞を修飾するとき、人が愛らしく笑う様子を表わすことができる。この甘い笑顔という視覚的的刺激は、見る者に揺すぶられるような、うっとりとした恍惚感と呼び起こす。

また、例(162)と(163)では、“甜”は主に人の外見や気品などを修飾する時に使われ、特に女性の容貌が美しく、人々をうっとりさせるように心地よいという意味で使われる。この場合、“甜”は“姐”と“妹”など女性を表わす人称名詞と結びつき、“甜姐”“甜妹”

として用いられることがある。

(3) 聴覚への転用

語義⑦：美しい歌声や耳に心地よい話し声を表わす場合、“甜”は“(声音) 悦耳动听、令人愉快”（「美しく耳に心地よい歌声・話し声」）と意味する。

中国語の“甜”は美しい歌声や耳に心地よい話し声を表わすこともでき、一般的に子供や若い女性の声を修飾するのに用いられる。次の例(164)(165)における“甜”はこの種の意味・用法である。

(164) “叔叔，请用茶。”小女孩的声音甜甜的。

(165) 韩家有个宝贝闺女，聪明伶俐，懂事又勤快，学习成绩好，歌儿唱得甜。

また、例(166)のように、その“甜甜的声音(甘い声)”が人をうっとりさせるような心地よい声であることがうかがえる。

(166) 他好奇地拨通了电话，一位叫“紫云”的主持人在电话里同他聊天，声音甜甜的，很有诱惑性。

上の例によって示されるように、味覚を表す“甜”は聴覚へ転用された場合、歌声・話し声の持ち主はほとんど女性・子供に限られていて、男性にはあまり使わないようである。

(4) 触覚への転用

語義⑧：異性をうっとりさせるような心地よい触覚を表わす場合、“甜”は“(男女間的) 令人愉悦幸福的触觉感受”（「男女の愛に満ちあふれて楽しく快い触覚」）と意味する。

“甜”の触覚についての用例は少ないが、異性をうっとりさせるような心地よい触覚へ派生するケースも見られる。例えば、「甜甜的初吻(甘いファーストキス)」のようである。

(167) 给我一个甜乖乖(甘いキス)呀。

(168) 她听见她经过穿堂问孩子们的游艺室走去，随即把那扇门推开了。“去找张兔子起来包我的小邦妮。给你亲爹爹一个最甜的吻吧，邦妮——还有你，爱拉。”

3.4.4 人間活動ドメインへの転義

中国語の“甜”は味覚、視覚など人間の身体感覚に関わる経験を表わすほか、人間の言動・心理状態などに拡張され使われている。本研究では、“甜”が人間活動ドメインの転義を更に細分して、語義⑨から語義⑭までの6つの意味・用法をまとめる。ここでは、各語

義の転義プロセスを見てみる。

まず、語義⑨“(心理上)幸福、美好的感觉”(「幸せで心地よい」という意味・用法を見てみる。

語義⑨：人間の幸せで心地よい心理感覚を表わす場合、“甜”は“(心理)幸福、美好”(「幸せで心地よい」と意味する。

“甜”は味覚という感覚的な快感を表わすように、人間の幸せで心地よい心理感覚を表わすこともできる。

(169) 训练很艰苦，但一想到为祖国争光，心里就很甜。

(170) 现在，我想告诉你，生活中本来就有苦有甜，人一生中会有走错路的时候。

例(169)において、“甜”は、幸せで気持ちよいという心理描写に使う、形容詞の述語的用法である。例(170)では、“甜”は名詞的用法であり、「人生は苦あれば楽あり」といわれるように、“甜”は苦勞の対義語「安楽」という意味に用いられる。

この場合の“甜”はプラスの心理感覚を表しているが、後ろに共起することばの性質は三つのタイプに分かれている。

ア. プラスや中立的なイメージを持つことばと共起する場合

(171) 偃身於杨过怀中，不由得大羞，登时全身火热，心中却甜甜的喜悦不胜。

(172) 一夜的冰冻一夜的大风，夜半醒来蜗在被卷里暖着身，暖着心，暖着甜甜的幸福。

(173) 我沉浸在一片甜甜的温馨中。

(174) 她心里充满甜甜的欣慰与自信

(175) 给平平淡淡的家，平平淡淡的生活一个甜甜的回忆，甜甜的欢乐，也给孩子以知识和启迪。

(176) 我们分明看到了这样的希望：再立新功，再创辉煌，早圆甜甜的民政梦。

(177) 罐子装着回忆里的我们甜甜的梦

例(171)～(174)における“甜”はプラスのことばと共起する例は少ないが、「喜悦、欢乐(喜び)」、「欣慰(欣快で満足)」、「幸福(幸せ)」などのことばとの組み合わせが見られる。“甜”はそもそもプラスの気持ちを表し、後ろに共起することばもプラスのイメージを表すことばであるなら、表現上において余計な感じになってしまう。したがって、用例がまれであることも容易に理解できる。

例(175)、(176)、(177)における“甜”は主に“梦”「ゆめ」「回忆」「記憶や思い出」

のような中立的なイメージを持つことばを修飾し、人々が心に描く美しい夢、幻想や思い出を指す。甘いものを口にする時に感じる快い感覚から「主体に好まれる快い心理感覚」に派生していると思われる。

イ. マイナスのイメージを持つことばと共起する場合

(178) 啊，乡愁，甜甜的乡愁，奶奶针线篮里面装着乡愁。

(179) 我目送着汽车，心头升起一丝甜甜的惆怅。

(180) 初恋，一道甜甜的伤

例(178)、(179)、(180)で示しているように、この場合、“甜”は「伤(心を傷つける)」、「惆怅(惆悵たる・嘆き恨むさま)」、「乡愁(郷愁・ノスタルジア)」のようなマイナスのイメージを持つ言葉と共起することが多い。例(178)の「甜甜的乡愁」は「幸せで心地よく故郷をなつかしむ気持」の意味を表し、例(180)の「甜甜的伤」についても同じ初恋の甘酸っぱくで、快さと感傷的な気持ちが入り混じった感じを意味する。つまり、「乡愁」、「伤」、「惆怅」などのマイナスの感情を感じられていると同時に、「幸せで、心地よい」気持ちも感じているという矛盾した心理感覚を表す時に使われる表現である。

語義⑨に使う“甜”は人間の幸せで心地よい心理感覚を表す用法である。味覚で得られる快い感覚というポジティブ性は概念化者の心的な面にも写像され、心理的な快感を表す意味が生じる。

語義⑩：“甜”は特に男女関係における感情を描写するのに頻繁に使用され、“(男女的)亲密爱恋”(「恋愛におい男女の親しい間柄」と意味する。

(181) 他们爱得很甜，又爱得很苦，那是一种艰难岁月里的爱情，纯真得就像透明的水晶。

(182) 我转身照着往常一样坐在能看见她的位子，看着她，心中有股甜甜的暖意，我大口地嚼着汉堡。突然间，我感到呼吸困难，难道这就是爱情的魔力？

そして例(183)、(184)の「甜甜蜜蜜」は、「夫婦」や「恋人」のような男女の関係が親密であることを表す時に使われる表現であり、砂糖や蜂蜜のような糖分を含んだものを口にした時の「快い気持ちや幸せな気持ち」から派生していると考えられる。

(183) 我们都笑他们老夫妻还像新婚夫妇那样甜甜蜜蜜每天必通电话。

(184) 一个小姑娘挎着小伙子的胳膊，倚在他肩膀，正甜甜蜜蜜说着什么。

語義⑩“(男女的)亲密爱恋”(「恋愛において男女の親しい間柄」)は、特に恋愛状態における男女の嬉しくてわくわくする気持ちを取り立てた点で、語義⑨と異なるものである。

しかし、これも人の快い心理感覚の一種であり、味覚で得られる快感のポジティブ性と類似するものである。つまり、語義⑨と語義⑩はプロトタイプの意味の“甜”からメタファーに基づき拡張したものである。

語義⑩：会話行為を指す場合、“甜”は“(话语)使人愉快，使之入迷”(「言葉が巧みで、口先がうまい」)と意味する。

(185) 她嘴巴挺甜，手脚勤快，做事周到，很快就博得了大家的好感。

(186) 几句甜语说得外商心花怒放，连声“OK！”

(187) 科学拒绝甜嘴蜜舌，远离心粗气浮，科学的圣果常被神秘而坚硬的外壳所包裹，(后略)

(188) 有些上级领导官僚主义严重，(中略)，对下面的问题，只知其然，不知其所以然，只好嘴上抹蜜，满口甜言，下面满意，自己省事。

ここでは、“甜”は主に「話す」という会話行為フレームの諸要素、すなわち、会話行為を表わす動詞“说”、言葉を発する手段としての身体部位“嘴”、行為の結果である“话”“言”などと結びつき、口先がうまく人をうっとりさせるような意味を表わす。例(185)と(186)では、“甜”はプラスの意味で使われるのに対して、(187)と(188)ではマイナスの意味として用いられる。なお、“甜言”に“蜜语”を加え、“甜言蜜语”という複合語になり、「男女の睦言」のようなプラスの意味も、「(人を騙すための)甘い言葉」のようなマイナスの意味も表すことができる。

(189) 相传，很久以前有一对热恋中的情侣依海而坐，沉醉在海誓山盟的甜言蜜语之中。

(190) 我被裹着糖衣的慰问品搅花了眼，被甜言蜜语冲昏了头，不知不觉犯了罪，真是一贪失足成千古恨。

要するに、“甜”が語義⑩として使う場合、プラスとマイナス両方の使い方がある。また、語義⑩が表すマイナスの意味は、「度外れ」による否定的な意味だと考えられる。

うまい話に乗りやすいのは人間の弱点である。なぜかというか、自分に都合の良い言葉に聞こえるからであろう。“甜言”に耳を傾ける人は心をくすぐるほど快い。その快感は人が甘いものを口に入れるときの快い感覚とよく似ている。このように、語義⑩での“甜”は語義①からメタファー的に拡張してきたものだと考えられる。先にも述べたように、語義⑦に使う“甜”にはプラスとマイナスの両方の使い方がある。語義⑩に使う“甜”がマイナスの意味を表わすのは、“甜”の語義①に潜む危険性というネガティブ的な評価性に源

があると思われる。また、この種のマイナスの意味は「度外れ」による否定的意味である。このように、“甜”という形容詞にはプラス的性質とマイナス的性質と同時に帯びているのである。プラスかマイナスかのどちらの性質が前面化するかは、“甜”と結びつく他の表現が文脈によって決められているのである。

語義⑫：“甜”は眠る様子を表わし、“(睡覺) 酣暢”(「気持ちよくぐっすり寝る」)と意味する。

辞書や一部の先行研究がすでに言及しているように、“甜”は眠る様子を表わし、気持ちよく寝ている、ぐっすり寝ていることを意味する。例えば、次のような例がある。

(191) 当小杰克逊甜睡在牧场里时，他的母亲却在远离牧场的一家旅馆里生活。

(192) 晚上吃了安娜烧的粥以后甜甜地睡去，竟足足睡了八个钟头！

この種の意味・用法は、中国語の“甜”が持つ独特なものである。日本語の「甘い」は睡眠などの状態について使えないので、似たような意味・用法はない。語義⑪の“甜”の日本語訳としては、「気持ちよく」、「ぐっすり」などの表現が考えられる。

甘いものを食べるときの心地よさと、ぐっすり眠っていることのもちよさは人間に同じような快感をもたらすため、“甜”が眠る様子への転義は類似性に基づくメタファーだと考えられる。

語義⑬：“甜”は楽なわりに報酬がうまい仕事に用いられ、“(工作) 轻松高回报”(「(仕事) 楽なわりに報酬がいい」)と意味する。

(193) 对“面的”司机来说，5公里以下是“甜活儿”，7公里以上是“苦活儿”。

(194) 为了得到一个工程，不论活甜活苦，他从不白了介绍人，…

例(193)と(194)での“甜”は楽なわりに報酬がうまい仕事に用いられている。(193)の“甜活”はタクシーの運転手にとって、走行距離5キロ以内の仕事を指している。(194)での“活甜”は引き受ける仕事が苦勞せずに高額報酬をグットできる意味を表わす。

また、「甜头」という表現があり、「利益」や「うまみ」を表している。用例を通じて見よう。

(195) 现在，一些早期与俄罗斯进行科技合作的中国企业开始尝到甜头，在不断扩大与俄罗斯科技合作的力度。

(196) 聪明的苏州人从文化遗迹保护中尝到了甜头。

このように、中国語の“甜”はやっている仕事の苦勞に対して得ている対価が大きいという意味として用いられる。この場合、“甜”の対義語として使うのは“苦”である（第五章5.3.3を参照）。

人々は甘いものを食べて、身体に必要なエネルギーを求めると同様、仕事することによって報酬・利益を求めている。“酸苹果”より“甜苹果”のほうがおいしいとされるように、“苦活”より“甜活”のほうがおいしいとされるわけである。甘いものを食べることとおいしい仕事をするとは、行為者に利益をもたらす点で相通じるため、語義⑬は“甜”の語義①からメタファー的に拡張されたものだと言える。

語義⑭：人の食べっぷりを描写する場合、“甜”は“(吃饭)香”(「(食欲を誘われ)うまそうに食べる様子」と意味する。

(197) 秀子吃得最甜，一气吃下两大把炒面，又吞下一口雪，把嘴一擦就要去找水。

(198) 渔民们说“战士吃不到的东西，我们吃着不甜，战士们用不到的东西，我们用着不安”。

(199) 他们吃得多香甜哪！

(200) 小伙子香甜地吃了不少葡萄。

例(197)と(198)における“甜”はいずれも第三者が「おいしく味わって食べること」という意味に使われている。本人が実際に食べてはいないが、第三者の食べる様子を見て、食べたら美味しいだろうと思われるさまである。それは人の食べっぷりを見たり聞いたり、その食べ物の匂いを嗅いだりして思われる印象であり、特に、見ていて気持ちのよいほど威勢よく豪快に食べている様子を表す。

先にも言及したように、この種の意味・用法は“甘”から受け継がれたものだと思われる。語義②と類似して、例(199)、(200)では「香甜」という表現が使われており、「香」は中国語においても日本語の「香り」という意味で、人が食事をするとき、嗅覚と味覚がつながっている言語学的な証拠の一つでもある。CCLで出現頻度を調べた結果、この種の用法は極めて少ないことがわかった。さらに人民日報デジタル版¹⁸で調べた結果、用例は1例しか検出できなかった。要するに、中国語の辞典の“甜”の意味記述にはこの種の意味・用法が明記されていないのはその使用頻度が低いからかもしれない。しかし、語義⑭としての“甜”は、食べ物のおいしさを修飾する語義②とは明らかに違うことから、1つの独立した意味項目として立てる必要があると思われる。

人間の基本的な味のうち、“甜”は美味の代表的な味とされている。山本(2005:63)では、「甘いものを摂取したときのおいしさは生まれつきのものである」といい、「老若男女、人種を問わず基本的に甘いものはおいしい」と述べている。中国語の“甜”は“吃”“吃饭”を表わす動作の補語となり、食欲を誘われおいしくたべることを表現できる。美味の代表的な味である“甜”によって、おいしいという意味を表わすのは、より特殊な意味を持つ形式を用いて、より一般的な意味を表すことになり、シネクドキーの1種と見なすことができる。

3.4.5 認知言語学的アプローチによる語義の再分類

以上、中国語の辞書や先行研究を踏まえつつ、CCLに対するコーパス調査に基づき、中国語“甜”の意味拡張を考察してきた。再整理した“甜”の各語義を以下のように示しておく。

“甜”

I 【身体体験】

1. 味覚

語義①：“像糖或蜜的味道”（「砂糖や蜜のような味」）

語義②：“美味”（「美味しい」）

語義③：“口感好、醇厚”（「口当たりが良い、芳醇な」）

2. 嗅覚

語義④：“（香气）甜蜜芬芳”（「（甘みの）甘い香り・匂い」）

語義⑤：“（香气）令人感到魅惑”（「人をうっとりさせるような芳醇な香り」）

3. 視覚

語義⑥：“笑容或相貌甜蜜而美好”（「笑顔か容貌が愛らしい様子」）

4. 聴覚

語義⑦：“声音悦耳动听、令人愉快”（「美しく耳に心地よい歌声・話し声」）

5. 触覚

語義⑧：“男女间令人愉悦幸福的触觉感受”（「男女の愛に満ちあふれて楽しく快い触覚」）

II 【人間活動】

語義⑨：“（心理上）幸福、美好的感觉”（「幸せで心地よい」）

語義⑩：“（男女的）亲密爱恋”（「恋愛において男女の親しい間柄」）

語義⑪：“（话语）使人愉快，使之入迷”（「言葉が巧みで、口先がうまい」）

語義⑫：“（睡覺）酣暢”（「気持ちよくぐっすり寝る」）

語義⑬：“（工作）轻松、高回报”（「（仕事が）楽なわりに報酬がいい」）

語義⑭：“（吃饭）香”（「（食欲を誘われ）うまそうに食べる様子」）

今回のコーパス調査によって、再整理した“甜”の意味用法を3.1.1.2に掲載する中国語の辞典における“甜”の意味記述と比較してみると、中国語の辞典に掲載されていない、或いは独立した意味項目として立てていない“甜”の意味・用法が多数あることも確認できる。

3.4.6 多義的意味ネットワーク

以上の検討を踏まえ、味覚形容詞“甜”の各語義の拡張起点及び拡張方式を表1-7に示す。さらに、以下図1-2に“甜”の多義的意味によって形成される意味ネットワークの略図を提示する。

表1-7 “甜”の各語義の拡張方式

語義	拡張の起点	拡張方式
語義① “像糖或蜜的味道” (プロトタイプの意味)	原義⑩ “甜的味觉感受”	メトニミー
語義② “美味” 語義③ “口感好、醇厚”	語義① “像糖或蜜的味道”	メタファー 「尺度融合」
語義④ “（香气）甜蜜芬芳” 語義⑤ “（香气）令人感到魅惑” 語義⑥ “笑容或相貌甜蜜而美好” 語義⑦ “声音悦耳动听、令人愉快” 語義⑧ “男女间令人愉悦幸福的触觉感受”	語義① “像糖或蜜的味道”	メタファー
語義⑨ “（心理上）幸福、美好的感觉” 語義⑩ “（男女的）亲密爱恋”	語義① “像糖或蜜的味道”	メタファー
語義⑪ “（话语）使人愉快，使之入迷”	語義① “像糖或蜜的味道”	メタファー

語義⑫ “(睡覺) 酣暢”	語義① “像糖或蜜的味道”	メタファー
語義⑬ “(工作) 轻松、高回报”	語義① “像糖或蜜的味道”	メタファー
語義⑭ “(吃饭) 香”	語義① “像糖或蜜的味道”	シネクドキー

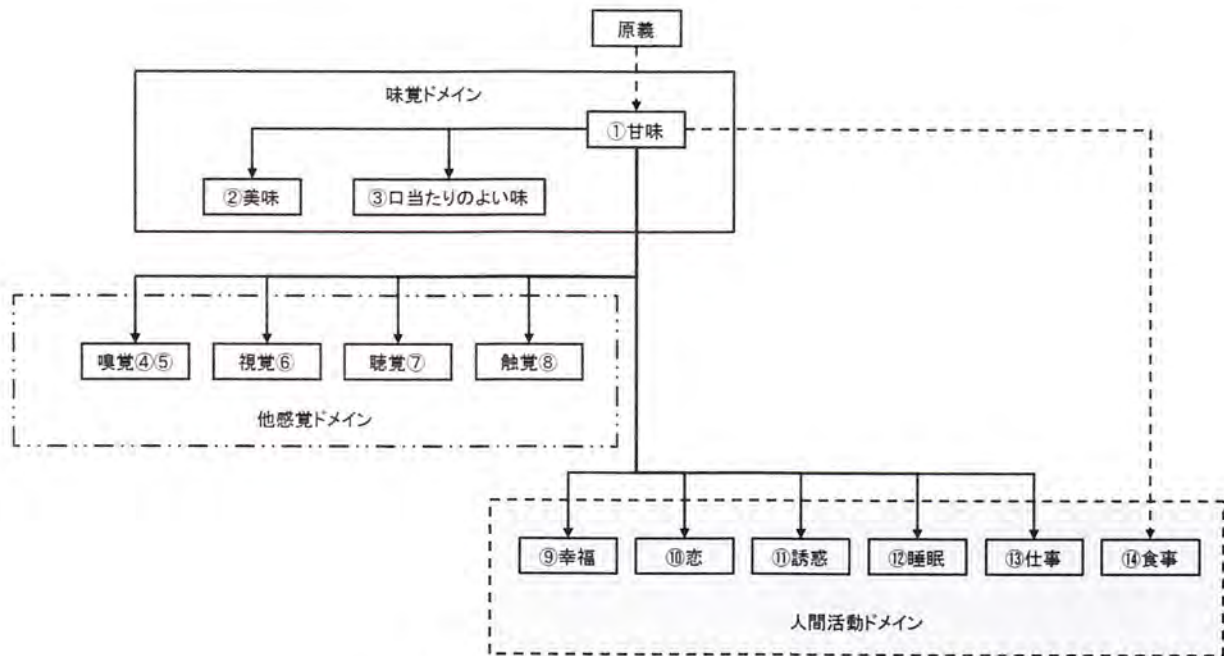


図 1-2 “甜” の意味ネットワーク

上記の略図において、太線矢印はメタファーリンクを表し、破線矢印はメトニミーリンクを表し、点線矢印はシネクドキーを表わしている。語義①は意味ネットワークにおける拡張の起点となるプロトタイプの意味であると位置付けられる。そのほかの語義は全て語義①を出発点として、そこからメタファー・メトニミー・シネクドキーの経路を通して意味が展開する。

表 1-7 と図 1-2 に見られるように、“甜” の意味拡張及び意味ネットワークには次のような特徴が見られる。

1. 形容詞“甜”の各語義は独立した意味のように見えるが、実はメタファー・メトニミー・シネクドキーによって、基本的な意味と派生的な意味が体系的に関係付けられている。拡張手段について、“甜”は主にメタファーによって意味拡張している。また、原義からプロトタイプの意味の語義①への転用はメトニミーであり、語義①から語義⑭への拡張はシネクドキーによるものである。

2. 形容詞“甜”の意味拡張プロセスにおいて、メタファーが重要な役割を果たしている

ことは自明なことである。しかし、同じメタファーによる派生だと言っても、必ずしも同質なものだとは言えないようである。語義⑩には語義①のポジティブ性と潜在的なネガティブ性がともに写像されているのに対して、共感覚への拡張用法はポジティブ性だけが写像されている。

3. メタファーによる転義から見れば、“甜”のポジティブ性、ネガティブ性が写像され、他の語義に拡張するケースが多い。従って、メタファーに基づく“甜”の意味拡張には、形容詞の価値評価性が深い関わりを持っているということが窺える。ここで、“甜”の各語義の評価性についての分類を次の表 1-8 で示す。

表 1-8 “甜”の各語義の評価性

プラス (+)	マイナス (-)
語義① “像糖或蜜的味道”	
語義② “美味”	
語義③ “口感好、醇厚”	
語義④ “(香气) 甜蜜芬芳”	
語義⑤ “(香气) 令人感到魅惑”	
語義⑥ “笑容或相貌甜蜜而美好”	
語義⑦ “声音悦耳动听、令人愉快”	
語義⑧ “男女间令人愉悦幸福的触觉感受”	
語義⑨ “(心理上) 幸福、美好的感觉”	
語義⑩ “(男女的) 亲密爱恋”	
語義⑪ “(话语) 使人愉快, 使之入迷”	
語義⑫ “(睡觉) 酣畅”	
語義⑬ “(工作) 轻松、高回报”	
語義⑭ “(吃饭) 香”	

4. 形容詞“甜”の意味拡張の方向性としては、外界の事物に対する身体体験、すなわち味覚の客観的な叙述から、味覚以外の共感覚、さらに主体の主観的な叙述や感情的な叙述へ拡張する方向性が見られる。

3.5 コーパスに基づく語義の頻度分布に対する定量調査

本節では、3.2と3.3の考察で再整理した「甘い」と“甜”の意味・用法に基づき、個々の語義の出現頻度を調べ、数値化することにより、各語義の使用頻度に見られる傾向性を見てみる。

3.5.1 「甘い」の頻度分布に対する定量調査

前節の考察で再整理した「甘い」の意味・用法に基づき、それぞれの語義の使用頻度を調べ、数値化することにより、その傾向性を見てみる。

3.5.1.1 調査方法とデータ

ここでは、検索アプリケーション「中納言」を利用し、BCCWJから「甘い」のKWIC¹⁹データを収集し、調査を行う。具体的な調査手順は以下の通りである。

1. 形容詞「甘い」の活用形²⁰も考慮に入れ、検索条件を「語彙素」が「甘い」と設定する。
2. BCCWJコーパス全体において、上記の条件で検索を行い、「甘い」のKWICデータを収集した。データ抽出後に、目視による確認作業を行い、「甘い」の形容詞としての用法のみを絞り出し、データを作成した。
3. 前述の3.3.6にまとめた「甘い」の意味分類に基づき、抽出された文の前後の文脈を見ながら、2によって得られたデータの意味・用法を分類した。
4. 計量言語学的手法をとることにより、各語義の頻度分布を調べ、定量化する。

3.5.1.2 調査結果

以下、BCCWJ全体において、「甘い」の各語義の使用頻度及び各意味領域における分布を示す。

表 1-9 BCCWJ における「甘い」の各語義の頻度分布

意味領域		頻度配列	「甘い」の意味・用法	出現頻度	割合%
身体体験 1557 例 60.63%	味覚 1126 例 43.85%	1	① [味：甘味]	1096	42.68%
		2	② [味：旨味]	19	0.74%
		3	③ [味：塩味・刺激性]	11	0.43%
	嗅覚 218 例 8.49%	4	④ [匂い・香り：甘味]	131	5.10%
		5	⑤ [匂い・香り：化学物質]	53	2.06%
		6	⑥ [匂い・香り：異性]	34	1.32%
	視覚 91 例 3.54%	7	⑧ [外見：色や服装など]	64	2.49%
		8	⑦ [外見：容貌・笑顔]	27	1.05%
	聴覚 82 例 3.19%	9	⑨ [声・音：話声・歌声・音楽]	82	3.19%
	触覚 40 例 1.56%	10	⑩ [触感：人（肌など）・物]	22	0.86%
		11	⑪ [触感：物の接着、締め付けなど]	6	0.23%
		12	⑫ [痛み]	12	0.47%
人間活動 941 例 36.64%	13	⑬ [思考・行為]	445	17.33%	
	14	⑭ [態度・接し方]	140	5.45%	
	15	⑮ [心理感覚：幸福]	115	4.48%	
	16	⑯ [思考・行為の対象]	103	4.01%	
	17	⑰ [心理感覚：誘惑]	62	2.41%	
	18	⑱ [心理感覚：恋愛]	44	1.71%	
	19	⑲ [精神的な活動の生産物]	19	0.74%	
	20	⑳ [心理的刺激]	13	0.51%	
物事の状態 70 例 2.73%	21	㉑ [物事の状態・程度]	44	1.71%	
	22	㉒ [物事の機能・品質]	26	1.01%	
計				2568	100%

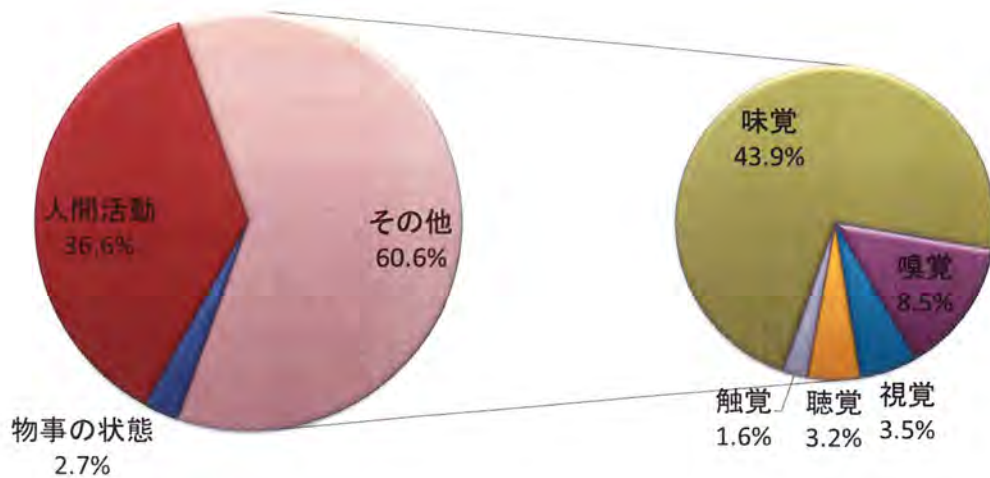


図 1-3 各意味領域における「甘い」の頻度分布

表 1-9 においては、意味領域ごとに、語義を使用頻度順に配列している²¹。表 1-9 と図 1-3 を総合した結果、「甘い」の多義的語義の頻度分布には以下のような特徴がみられる。

1. すべての語義のうち、語義①<糖分があるような味>は 1096 例と比較的高い割合（全体の 4 割以上）で一番多く現れる語義である。また、人間活動ドメインにおける用法のうち、マイナス的な意味を表わす語義⑧<人の思考・判断・行為が慎重さや厳密さが欠如する>は、17.33%の割合で語義①に次いで 2 番目に多く使用されている。

2. 語義①以外に味覚を表す語義②<食物や料理などの味が好ましい状態>と語義③<塩気・辛味が薄い味>のうち、辞書には語義②についてはっきりと記述されていないにもかかわらず、語義②の方が語義③よりも出現頻度が高い。

3. 「甘い」が表す五感以内の意味領域からみれば、味覚を表す語義（語義①、②、③）が最も多く使用され、次に嗅覚（語義④、⑤、⑥）、視覚（語義⑦、⑧）、聴覚（語義⑨）、触覚（語義⑩、⑪、⑫）という順で頻出する。

4. 意味領域ごとの出現頻度から見れば、味覚領域における意味・用法は最も多用されることは明らかである。人間活動という意味領域は味覚領域に次ぎ、「甘い」の出現度数は計 941 例で、全体の 4 割弱を占めている。また、物事の状態を表す「甘い」の意味・用法（⑳<物事の機能・品質などに不備があり、不十分な状態>と語義㉑<物事の状態・程度が満

足できない・中途半端な状態>)の使用頻度はわずか70例であり、かなり少ない。

以上、BCCWJのコーパスデータに基づき、味覚形容詞「甘い」の種々の語義の使用頻度について考察してきた。他の語義に比べて、語義①は圧倒的に使用頻度が高いことは、辞書の中の第一語義としての優位性を見せてくれた。味覚領域において、「甘い」は「甘味」のほか、旨味や塩味が薄いことを表わすこともあるが、その使用例は僅かしか現れなかったことから、極めて稀な用法であることが窺える。また、味覚以外の感覚領域では、視覚と聴覚に比べて、「甘い」は嗅覚に使う用例が高い割合を占めている。嗅覚は味覚と感覚器が隣接していることから、味覚と密接に結びついた感覚として認められる。嗅覚に関する「甘い」の使用例が多いのは、このことと関係すると思われる。また、味覚形容詞「甘い」は感覚表現を超えて、人間活動、物事の状態などの領域にまで転用されている。特に人間活動に関する意味・用法は、全体の4割ぐらゐも占めている。そのうち、人間の思考・行為に使う語義⑦<人の思考・判断・行為が慎重さや厳密さが欠如する>は、派生義の中で最も出現頻度が高い。このような言語事実は、「甘い」のような身体感覚を表す表現は、直接的な感覚を表すものから主体の認識・判断に関わる表現へと機能が拡張していくことをものがたっている。

3.5.2 “甜”の頻度分布に対する定量調査

前節の考察で再整理した“甜”の意味・用法に基づき、それぞれの語義の使用頻度を調べ、数値化することにより、その傾向性を見てみる。

3.5.2.1 調査方法とデータ

本節では、CCLの現代中国語データベースを利用し、単音節形容詞“甜”及びその重ね型“甜甜”の用例を収集し、調査を行う。具体的な調査手順は以下の通りである。

1. CCLの現代中国語データベース全体において、検索条件を“甜”と設定し、“甜”のKWICデータを収集した。
2. データ抽出後に、目視による確認作業を行い、単音節形容詞“甜”と重ね型“甜甜”が使われる用例のみを絞り出し、データ²²を作成した。
3. 前述の3.4.5にまとめた“甜”の意味分類に基づき、抽出された文の前後の文脈を見ながら、2によって得られたデータの意味・用法を分類した。
4. 計量言語学的手法をとることにより、各語義の頻度分布を調べ、定量化する。

3.5.2.2 調査結果

以下、CCL 全体において、“甜”の各語義の使用頻度及び各意味領域における分布を示す。

表 1-10 CCL における“甜”の各語義の頻度分布

意味領域		頻度配列	「甘い」の意味・用法	出現頻度	割合%
身体体験 9591 例 73.06%	味覚 5517 例 42.03%	1	① [味：甘味]	5070	38.62%
		2	③ [味：口当りの良さ]	328	2.50%
		3	② [味：美味]	119	0.91%
	視覚 2649 例 20.18%	4	⑥ [外見：容貌・笑顔]	2649	20.18%
	聴覚 1046 例 7.97%	5	⑦ [声・音：話声・歌声・音楽]	1046	7.97%
	嗅覚 338 例 2.57%	6	④ [匂い・香り：甘味]	249	1.90%
		7	⑤ [匂い・香り：化学物質]	89	0.68%
	触覚 41 例 0.31%	8	⑧ [触感：恋愛]	41	0.30%
人間活動 3536 例 26.94%		9	⑩ [心理感覚：恋愛]	1355	10.32%
		10	⑫ [睡眠の様子]	956	7.28%
		11	⑪ [心理感覚：誘惑]	777	5.92%
		12	⑨ [心理感覚：幸福]	278	2.12%
		13	⑬ [仕事の様子]	119	0.91%
		14	⑭ [食事の様子]	51	0.38%
計				13127	100%

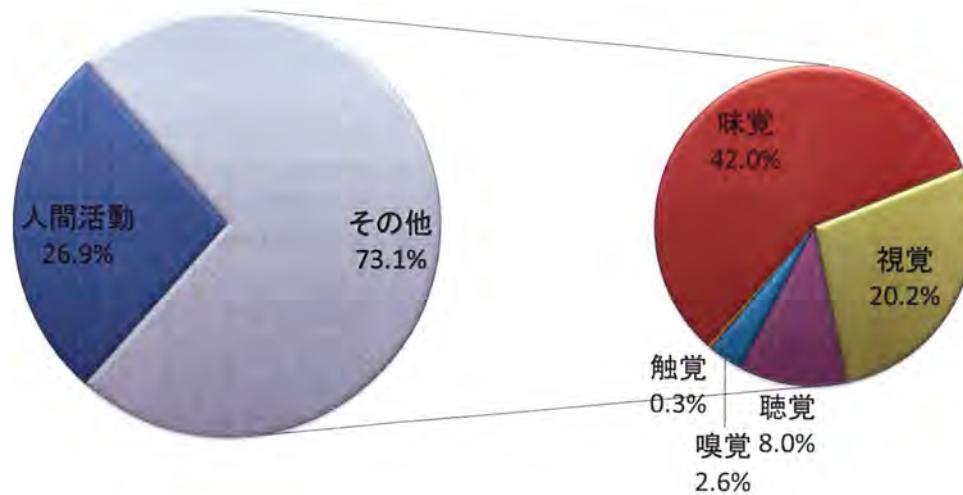


図 1-4 各意味領域における“甜”の頻度分布

表 1-10 においては、意味領域ごとに、“甜”の語義を使用頻度順に配列している²³。表 1-10 と図 1-4 を総合した結果、“甜”の多義的語義の頻度分布には以下のような特徴が見られる。

1. “甜”の語義①は 509 例と比較的高い割合（全体の 4 割弱）で一番多く現れる語義である。また、語義①に次いで出現頻度の高い語義は、語義⑥（20.18%で 2 位）と語義⑩（10.32%で 3 位）である

2. 人間活動という意味領域に見られる“甜”の出現頻度数は計 355 例であり、全体の 26.9%を占めている。人間活動ドメインへの拡張用法に比べ、身体感覚領域における意味・用法は 73.1%で圧倒的に高い割合を占めている。

3. “甜”が表す身体体験領域から見れば、味覚を表す語義（語義①、②、③）が最も多く使用され、次に視覚（語義⑥）、聴覚（語義③）、嗅覚（語義④、⑤）、触覚（語義⑧）という順で頻出する。特に、触覚を表す語義⑧の出現頻度数は僅か 4 例であり、最も使用頻度の低い語義である。

4. 人間活動ドメインに使う意味・用法では、＜恋愛において男女の親しい間柄＞を表す語義⑩は 10.32%の割合で、使用頻度が三番目に高い語義である。一方、おいしく食べるという意味を表す語義⑭は、出現頻度数が 5 例だけであり、また、報酬がいい仕事に使う

語義⑬は使用例全体の0.91%しか占めておらず、語義⑭と同じように、あまり使わない用法である。

以上、CCL のコーパスデータに基づき、中国語の味覚形容詞“甜”の種々の語義の使用頻度について考察してきた。他の語義に比べて、語義①は圧倒的に使用頻度が高いことは、辞書の中の第一語義としての優位性を見せてくれた。また、味覚以外の感覚領域では、聴覚と嗅覚に比べ、“甜”は視覚に使う用例が高い割合を占めている。そして、人間活動に関する意味・用法のうち、人間の心的状態を表す語義⑩は、すべての派生義の中で、3番目に出現頻度が高いものである。このような言語現象から、本来人間の身体的な快感を表す“甜”は、心的な快感を表わすものへと機能していくことが窺えよう。

3.6 「甘い」と“甜”の対照分析

本節では、対照言語学の立場に立って、日本語と中国語の味覚形容詞「甘い」と“甜”を比較・対照し、二者が意味・用法、語義分布、意味拡張などにおける異同について詳しく考察する。

3.6.1 意味・用法における異同

コーパス分析によってまとめられた日本語の「甘い」と中国語の“甜”の意味・用法は、表1-11にまとめておく。

表1-11 「甘い」と“甜”の意味・用法比較対照表

意味領域		意味・用法	甘い	甜
I 身体体験	味覚	糖分があるような味	○	○
		食物や料理などの味が好ましい状態	○	○
		塩気・辛味が薄い味	○	—
		口当たりが良い味	—	○
	嗅覚	甘い物の好ましく快い匂い・香り	○	○
		化学物質の好ましく快い匂い・香り	○	○
		異性をうっとりさせ、誘い込むような嗅覚刺激	○	—
視覚	容貌・笑顔が美しく好感を持たせる	○	○	

		服装などが可愛くて女らしい	○	—
	聴覚	人の声や歌声・音楽が心地よい	○	○
	触覚	(一般的に) 感触が快い、さわり心地がよい	○	—
		感触的に堅牢でない・確実でない	○	—
		肉体的な痛み・苦痛が比較的強くない	○	—
		男女の愛に満ちあふれて快い触覚	○	○
II 人間活動		主体に好まれる快い心理感覚・幸福感	○	○
		愛情があふれて、うっとりとした快い	○	○
		人の心を引き付けて迷わせる	○	○
		心理的・精神的刺激の度合いが弱い	○	—
		人の思考・判断・行為が慎重さや厳密さが欠如する	○	—
		人の態度・姿勢や言動が優しい或いは厳しくない	○	—
		法律・基準・規定などが厳格ではない	○	—
		物事や相手が簡単で、単純なものではない	○	—
		気持ちよくぐっすり寝る	—	○
		楽なわりに報酬がいい仕事	—	○
		美味そうに食べる様子	—	○
III 物事の状態		物事の機能・品質などに不備がある	○	—
		物事の状態・程度が中途半端な状態	○	—

「甘い」と“甜”の個々の意味・用法の検討を踏まえ、二者の共通点と相違点をそれぞれ次のように指摘しておく。

(i) 共通点

1. 日本語の「甘い」と中国語の“甜”は原義とプロトタイプの意味では一致している。「甘い」と“甜”の原義は砂糖などの甘いものを舐めたときの味覚であり、認知主体の身体体験である。篠原(2008)は、「対象の特徴は、あらかじめ対象に備わっているものではなく、知覚者との相互作用から生じた知覚者の心身状態が対象の性質として認知されている」(篠原2008:98)と指摘している。「糖分があるような味」というプロトタイプの意味

は、認知主体の身体体験が対象の性質として読み替えられたものだと考えられる。「甘い」と“甜”の原義とプロトタイプの意味は<結果—原因>に基づくメトニミーによって関係づけられている。

2. 味覚領域内において、日本語の「甘い」と中国語の“甜”はいずれも意味拡張が生じている。「甘い牛サシ」や“滋味甜”などのように、「甘い」と“甜”は美味・旨味を表わす例がよくみられる。

3. 味覚を表す「甘い」と“甜”ではいずれも嗅覚、聴覚、視覚、触覚を表わす共感覚的用法が見られ、好ましく快い感覚を喚起させた状態を表わすために用いられることがある。しかも、「甘い」と“甜”が触覚、視覚一部（ファッション用語）以外の共感覚への転義はほぼ意味的に対応できる。なお、二者は嗅覚、聴覚、視覚への転用がプラスの評価を帯びている点にも通じる。

4. 日本語の「甘い」と中国語の“甜”はいずれも人間活動に関する表現に用いられる。人間の幸せで快い心理感覚を表わす場合、「甘い」と“甜”はプラスの意味で使われる。それに、「甘い」と“甜”はいずれも言葉が巧みであることを表わすことができる。好ましく快い感覚の度合いを過ぎ、「甘い言葉」や“甜言蜜語”に油断したら、物事や人に対する判断を間違えたり、騙される可能性があって、マイナスイメージになる場合もある。

(ii) 相違点

1. 日本語の「甘い」は物事の状態ドメインに拡張できる点で、中国語の“甜”と大きく違う。

2. 日本語の「甘い」は中国語の“甜”とは否定的な意味を表わす点に関して大きく異なる。日本語の「甘い」は物事の中途半端な状態、人間の精神及び行為などが厳しさに欠けているなどマイナス的な意味を表わす用法がある。一方、中国語にはこのような意味・用法は見当たらない。

3. 味覚領域内において、中国語の“甜”は、水、お茶、露、お酒などに使われ、“口感好，醇厚”（「口当たりが良い、芳醇な」）という意味である。“甜”のこの意味・用法は、プロトタイプの意味の「好ましく快い味覚」との類似性による意味転用であると考えられる。

一方、日本語の「甘い」は、味噌、醤油、お酒、カレーなどを修飾し、「塩分や塩気が比較的少なく、アルコール度などが強くなく、口中における刺激が弱い」という意味をもって、「辛くない」とも言える。「甘い」のプロトタイプの意味の「刺激性が強くない」と

の類似性による意味転用であると考えられる。

4. 視覚領域への転用について、「甘い」と“甜”は両方とも視覚への派生は可能であるが、微妙な差異が見られる。中国語において、“甜”は子供や女性にだけ使われるのに対し、日本語において、「甘い」は男性に用いられている。「甘い」は男性の顔立ちを表現する際に、ほとんど「甘いマスク」という決まった形で用いられている。「甘い」は女性の微笑や容姿に用いられる時は、“甜甜的”に訳せばよいのであるが、男性に用いられる場合、“英俊帅气”と訳すべきである。そして、女性に使われるケースは僅かしか見られない。女性の外見は甘くて当然であるため、あえて、言わないようである。

また、日本語の「甘い」はファッション用語として、「甘いピンク」、「甘いリボン」など女の子らしい、可愛い服についても言えるが、中国語の“甜”には、似たような意味・用法はない。

5. 聴覚領域への転用について、「甘い」の語義⑦<音楽や人の歌声・声が心地よい>という意味・用法は、子供や女性に限らず、男性の声についても言えるため、使用上に性別の差が見られないという点で中国語の“甜”とは異なる。

6. 触覚領域への転用について、日本語の「甘い」と中国語の“甜”は、「甘いキス」のような「男女の愛に満ちあふれて快い触覚」を表す場合、類似しているが、「甘い」は「甘い手触り」のように、より一般的に、「物理的な感触が快い、さわり心地がよい」といった状態を表すこともできるようであるが、“甜”にはこのような転用は見当たらないようである。

また、日本語の「甘い」は「(ブレーキのレバーの)握りが甘い」、「甘い痛み」など「感知的に堅牢でない」、「肉体的な痛み・苦痛が比較的強くない」についても言えるが、“甜”には似たような意味・用法はない。

7. 人間活動ドメインにおける意味・用法に関して、中国語の“甜”は“吃饭甜(美味しい食事)”、“甜甜的觉(安らかな眠り)”、“甜活(楽で報酬のいい仕事)”を表わし、「食事」、「睡眠」、「仕事」について用いられる。これらの意味・用法は「甘い」には直接対応しないものである。

3.6.2 語義分布における異同

これまでの考察では、味覚形容詞「甘い」と“甜”の各語義の使用頻度を集計し、語義によって使用頻度が異なることが明らかにした。ここでは、まず「甘い」と“甜”の語義分布に見られる傾向を見てみる。

まず、二者の意味領域ごとの語義分布を見てみる。

日本語の「甘い」の意味・用法は身体体験ドメイン・人間活動ドメイン・物事の状態という3つの意味領域から把握できる。中国語の“甜”には物事の状態を表すような用法はなく、その意味・用法は身体体験ドメイン・人間活動ドメインに広く見られる。「甘い」と“甜”の意味領域ごとの出現頻度は次の表1-12が示すとおりである。

表1-12 「甘い」と“甜”の意味領域ごとの使用頻度

味覚形容詞	身体体験ドメイン		人間活動ドメイン		物事の状態ドメイン		合計
	出現頻度	割合	出現頻度	割合	出現頻度	割合	
「甘い」	2229 例	60.64%	1347 例	36.64%	100 例	2.72%	3676 例
“甜”	963 例	73.07%	355 例	26.93%	0 例	0	1318 例

「甘い」と“甜”の意味領域ごとの語義分布には以下の図1-5が示すような違いがある。

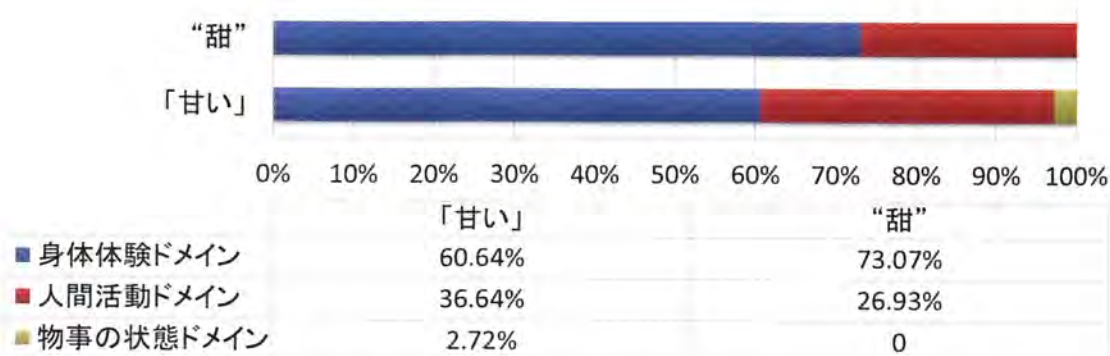


図1-5 「甘い」と“甜”の各意味領域における語義分布の対照

図1-5が示すように、「甘い」と“甜”は両方とも同じ傾向を示しており、身体体験ドメインの意味・用法が圧倒的に多い。しかし、“甜”が身体体験ドメインに使用される用例の出現頻度は全体の73.07%を占めており、身体体験に使われる「甘い」の割合(60.64%)を上回っている。一方、人間活動ドメインについては、「甘い」の使用頻度は全体の36.91%であり、“甜”の出現頻度より1割ほど高い。このように、“甜”に比べて「甘い」は人間活動ドメインに使用される割合が高い一方、身体体験領域に用いられる割合が“甜”より

低いといえよう。

次に、「甘い」と“甜”のプロトタイプの意味と派生義ごとの語義分布についてみてみよう。

プロトタイプの意味と派生義の使用頻度の比重から見れば、「甘い」について出現頻度の合計 3676 例のうちプロトタイプの意味・用法は 1571 例 (42.74%)、派生義は 2105 例 (57.26%) と、全体的に派生義として使用されることが多い。また、“甜”については、出現頻度の合計 1318 例のうちプロトタイプの意味・用法は 509 例 (38.62%)、派生義は 809 例 (61.38%) と、プロトタイプの意味に比べて派生義の使用頻度の方が 2 割ほど高い。

このように、日本語の「甘い」と中国語の“甜”はプロトタイプの意味より、派生義の方が多用される傾向を示している。ただし、個々の派生義の出現頻度に比べて、日本語の「甘い」と中国語の“甜”はいずれもすべての語義のうち、プロトタイプの意味が最も多く使用されている。さらに、「甘い」と“甜”のすべての語義において、出現頻度の高い語義の上位 5 位を表 1-13 に示すと、以下のようになる。

表 1-13 出現頻度上位 5 位の語義

順位	「甘い」		“甜”	
	語義	割合	語義	割合
1	語義① [味：甘味] (プロトタイプの意味)	42.74%	語義① [味：甘味] (プロトタイプの意味)	38.62%
2	語義⑱ [思考・行為]	17.33%	語義⑥ [外見：容貌・笑顔]	20.18%
3	語義⑳ [態度・接し方]	5.44%	語義⑩ [心理感覚：恋愛]	10.32%
4	語義④ [匂い・香り：甘味]	5.09%	語義⑦ [声・歌声・音楽]	7.97%
5	語義⑬ [心理感覚：幸福]	4.49%	語義⑫ [睡眠の様子]	7.28%

表 1-13 から明らかなように、出現頻度上位 5 位の語義のうち、「甘い」と“甜”が共通するのは「甘味」を表すプロトタイプの意味だけであり、しかもいずれの出現頻度数もトップである。

一方、共通するプロトタイプの意味・用法のほか、各語義の出現頻度順位に大きな差が見られる。たとえば、「甘い」では、人の思考・行為が慎重さが欠如する意味を表す語義は 2 位であるのに対して、“甜”においては感覚ドメインの視覚を表す用法は 2 位に立った。

日本語の「甘い」も視覚への転義を持っているが、中国語の“甜”とは出現頻度が異なっている。また、「甘い」では一般的な「幸福感」を表す意味・用法が第5位に数えられるが、“甜”でのこの意味・用法は上位5位のグループに属していない、8位で2.12%である。その上、特別に取り上げられた「恋愛の幸福感・男女の親密感覚」を表す意味・用法について、“甜”では3位であるが、「甘い」では11位で1.71%である。要するに、語義が共通していても、その使用頻度が違うこともあり得る。

最後に、「甘い」と“甜”が感覚ドメインにおける使用頻度に目を向けよう。

「甘い」と“甜”はメタファーに基づき、味覚という固有感覚から嗅覚、聴覚、視覚、触覚へと広く拡張されている。ここでは、感覚ごとに出現頻度を比較しながら、二語が共感覚への転用に見られる異同を明示する。感覚ごとに「甘い」と“甜”の使用頻度を示すと、次のようになる。

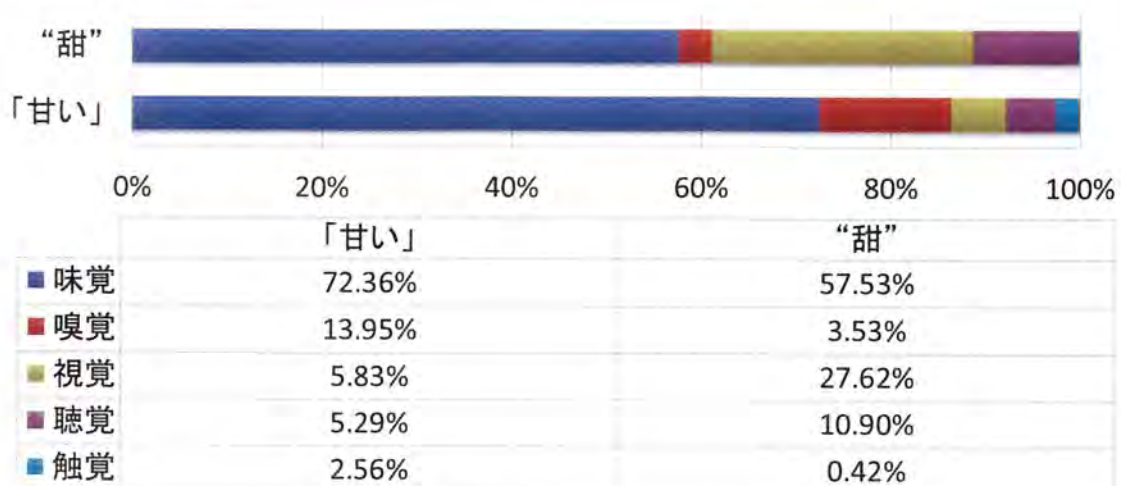


図 1-6 感覚ごとの語義分布の対照

図 1-6 が示すように、感覚領域において、「甘い」と“甜”はいずれも味覚用法を主としている。共感覚への転用の度合に関しては、「甘い」は嗅覚>視覚>聴覚>触覚の順で頻出しているが、“甜”は視覚>聴覚>嗅覚>触覚という順で頻出している。このような点については、似た意味を表す日本語と中国語の味覚形容詞は、他の感覚へ拡張するときの程度が違うことを示唆するのかもしれない。これについて、他の味覚形容詞の意味拡張とも関連して、確かめていく必要がある。感覚領域内での意味拡張においては、「甘い」は嗅覚への転用が最も多く見られる²⁴が、“甜”は視覚への転用が優先に使用されていると考えられようになるのである。

3.6.3 意味拡張の認知的プロセスにおける異同

山梨 (2000) では、人間の認知のプロセスには、「外界にたいする主体の主観的なパースペクティブ、主体の身体性にかかわる視点が反映されている」(山梨 2000 : 118) と指摘している。このように、言葉にも人間の主観的な認知が反映されているはずである。

ここでは、味覚形容詞「甘い」と“甜”の意味・用法はどのような認知モードによって背後から支えられているのかについて検討するために、二語の意味構造及び意味拡張の動機付けにおける共通点と相違点を示したい。

まず、「甘い」と“甜”の意味ネットワークの略図を再掲する。

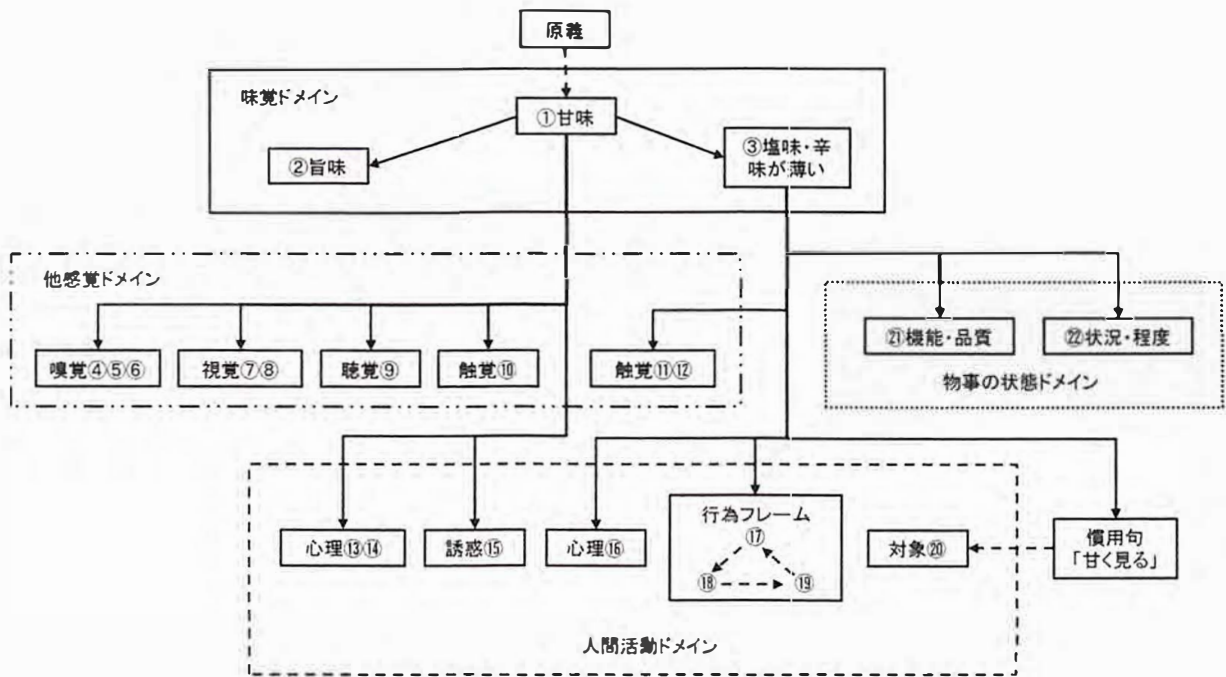


図 1-1 「甘い」の意味ネットワーク (再掲)

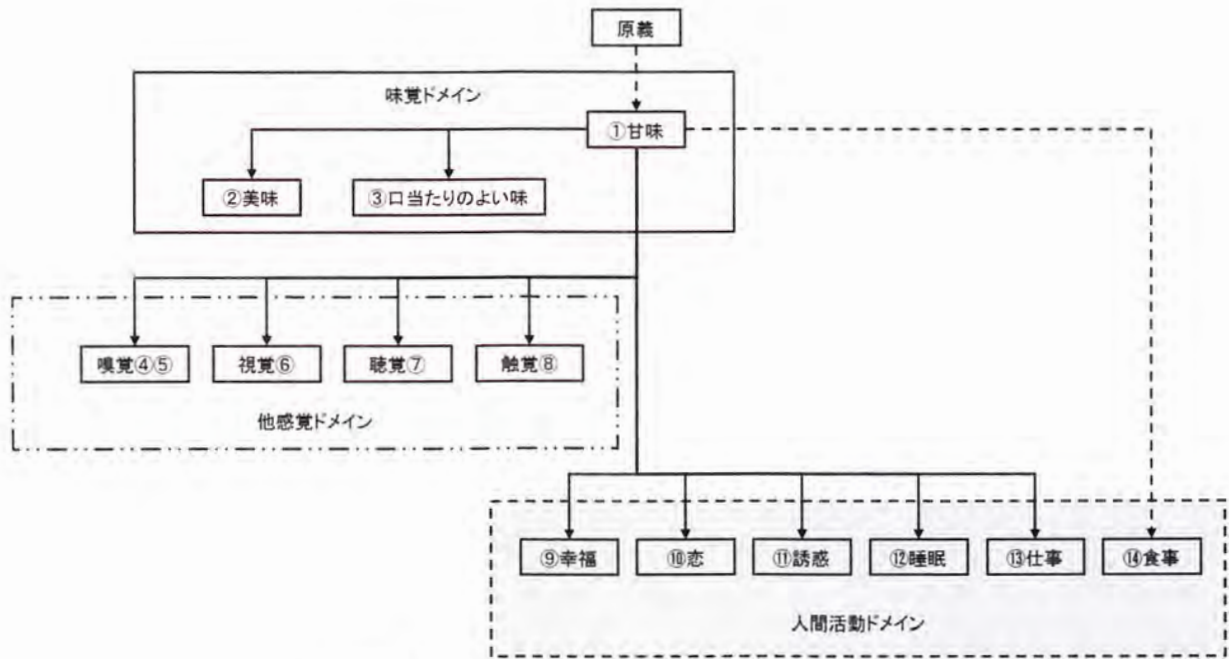


図 1-2 “甜” の意味ネットワーク (再掲)

メタファー・メトニミー・シネクドキーという3つの比喩に基づく意味ネットワークは語の意味を詳細に捉えられるモデルだとされている。このモデルを「甘い」と「甜」の意味拡張分析に適用し、図 1-1 と図 1-2 に示される「甘い」と「甜」の意味構造と意味拡張の認知的プロセスにおける異同を次のようにまとめておく。

(i) 共通点

1. 日本語の「甘い」と中国語の“甜”の意味拡張に見られる認知プロセスの普遍性に目を向けよう。「甘い」と「甜」のプロトタイプの意味はいずれもその原義から結果——原因>というメトニミーによって拡張されたものである。「甘い」と「甜」の原義は人間が甘いものをなめたときに生じた味覚という身体体験を表すものだが、認知作用によってその身体体験をもたらす対象の性質として読み替えられ、メトニミーによってプロトタイプの意味と関連づけられる。西尾 (1972) が指摘するように、味の感覚内容そのものをことばによって述べることは難しいため、「その味のする具体的な物によって示すのが手っ取り早い方法である」(西尾 1972 : 98) とされている。

2. 意味拡張の動機づけに関しては、「甘い」と「甜」は主にメタファーによって拡張が生じている。鍋島 (2007) が言及したように、価値評価性がメタファーを形成しやすいとされている。形容詞「甘い」と“甜”のメタファー的な拡張は潜在されたポジティブの評価

性或いはネガティブ評価性によるものが多い。

3. 意味拡張の方向性について、「甘い」と“甜”は外部事物に対する味覚体験から味覚以外の感覚体験へ、さらに人間の行為・精神領域へと拡張していく傾向を示している。山梨(1995:72)では、「ある種の感覚表現の機能は、直接的な五感に関係する世界を叙述するだけでなく、主体の主観的な認識や判断にかかわる世界を叙述する機能に拡張されている」と指摘している。このように、味覚形容詞「甘い」と“甜”の身体体験から人間活動ドメインへの意味拡張は、身体的経験を共有している人たちの認知プロセスの普遍性が観察される。これらのことは、ほぼ共通する自然環境に置かれる人間は、使用言語が異なっても、身体基盤に基づき外界との相互作用を行い、意味拡張に普遍性が見られることを示している。

(ii) 相違点

1. 全体的にみれば、日本語の「甘い」は中国語の“甜”より意味が広く拡張している。日本語の「甘い」は味覚領域においても意味拡張が派生している。甘味を表わすプロトタイプの意味から魚介類の新鮮で良質な味へ、それと並行して塩気・辛味の薄い味へと意味が広がっていく。

2. 中国語の“甜”の意味ネットワークは、プロトタイプの意味を出発点として、そこからメタファー・シネクドキーの経路を通して、意味が展開する。しかし、日本語の「甘い」に関しては、プロトタイプの意味を出発点として意味が展開すると同時に、プロトタイプの意味から展開した意味は、そこから再びメタファー的に意味が拡張する。例えば、「甘い」の語義③<塩気・辛味が薄い味>はプロトタイプの意味から拡張されてきたものであるが、そこから更に意味が広がり、物事の不完全な状態および人間活動の不徹底さなどのマイナスの意味に展開していく。このように、中国語“甜”より、日本語の「甘い」の意味ネットワークはもっと立体的で複雑のようである。

3. 意味拡張のルートから見れば、日本語の「甘い」の意味展開プロセスにはメタファーとメトニミーが見られるが、中国語の“甜”においては、メタファーとメトニミーの他に、シネクドキーも現れる。要するに、日本語の「甘い」より中国語の“甜”の方が展開していくルートの種類が多い。

4. プロトタイプの意味のメタファー的展開に関しては、中国語の“甜”は主にポジティブ性に基づきメタファー的に拡張している。一方、日本語の「甘い」はポジティブ性によ

るメタファーのほか、強弱を表わす程度性に基づくメタファー的意味展開²⁵もみられる。進藤等（2007）では、感覚知覚語彙の意味拡張の特徴について、「意味拡張は領域全体として起こるというより、そのネガティブ性、ポジティブ性や強弱、客観的・主観的視点の違いなどが写像されていると考えられる」（進藤等 2007:281）と指摘している。このように、日本語の「甘い」のメタファー的意味展開には、そのプロトタイプの意味の価値評価性或いは強弱が写像されているのに対して、中国語の“甜”の場合は価値評価性だけが関与しているようである。楠見（2005）では、心理実験に基づき、味覚形容詞の意味構造は「快—不快」と「強—弱」の2次元を持っていると指摘している。そのうち、「甘い」の基本次元について、『快』であるとともに、強度が『弱い』（楠見 2005:116）と説明している。「甘い」が強弱を表わす程度性に基づくメタファー的意味展開は、「甘い」の「快—弱」という2次元構造による説明ができる。

5. 中国語の“甜”とは異なり、日本語の「甘い」は物事の状態ドメインにも拡張している。「甘い」が物事の状態ドメインにおける2つの意味・用法は、いずれも語義③<塩気・辛味が薄い味>が表す弱い程度性に含まれるネガティブ性に基づきメタファー的に発展してきたものである。日本語の「甘い」が表す「基準未達」²⁶というマイナスの意味はすべて語義③を出発点として発展し、定着してきたものである。要するに、日本語の「甘い」の意味拡張プロセスにおいては、弱い程度性に基づく意味展開は中国語の“甜”と大別するところである。

第4章 コーパスに基づく日・中味覚形容詞の考察 ——「辛い」と“辣”

本章では、認知言語学の視点から、『日・中対訳コーパス』、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』及び《北京大学汉语语言学研究中心语料库》など大規模な言語データベースから味覚形容詞「辛い」と“辣”の使用例を収集・分析し、その意味・用法を対照しながら、考察を行う。

4.1 辞書における「辛い」と“辣”の意味記述

本節では、日・中両言語の辞書における味覚形容詞の意味記述に基づき、「辛い」と“辣”の意味項目を対照しながら、考察を行う。

4.1.1 国語辞典における「辛い」の意味記述

日本語の「辛い」の意味や用法が、前章 3.1.1.1 で挙げた 5 種の国語辞典²⁷でどのように記述されているか、見てみよう。(以下に引用する各辞書における「辛い」の意味の説明はすべて原典通りである。ただし、紙幅の関係上、各意味項目の後ろに掲載されている用例は省略する。また、考察する際の便宜上、意味項目の番号付けを統一させている。原典には振り仮名が付けられているが、ここでは省略する。)

(1) 『日国』

- ①味覚について、舌を刺すような感じのあるさま。
 - i) 唐辛子、生姜、山葵、山椒、胡椒などを舐めたときのように、舌や口をびりびり刺激するような感じのあるさま。
 - ii) 塩の味のあるさま。しおからい。
 - iii) 酸味の強いさま。すい。
 - iv) 酒気の強いさま。アルコール度の高いさま。甘味の少ない濃厚なよい酒の味にいう。
- ②苦痛を感じて、身や心が堪えがたい感じのするさま。
 - i) やりかた、しうちがひどく厳しいさま。ひどい。
- ③むごい。残酷だ。
- ④容赦がない。きびしい。
- ⑤勘定高く人情味のない人が多くてあきれるようなさま。せちがらい。

ii) 苦しい。つらい。せつない。悲痛だ。

iii) 気に食わない。いやだ。

iv) 苦痛を感じるほどはなはだしい。堪えがたいほどにひどい。

v) もう少しでダメなところだ。あぶない。あやうい。すんでのことだ。→からくも、からくして、からき命。

語誌：

①古くは塩の味を形容する語であり、「あまし」と対義の関係にあったと考えられる。塩味にも通ずる舌を刺すような鋭い味覚の辛みを形容する例は平安時代の頃より見られるが、塩味を「しははゆし」、「しほからし」と表現するようになるにしたがって、「からし」は辛味に用いられる例が多くなっていく。

②現代諸方言では辛味を形容するカライが全国的に分布しているものの、塩味を形容するカライも西日本に広く分布している。

(2) 『学研』

① (とうがらしを食べたときのような) 舌を強く刺すような味である。

② 塩味が強い。塩からい。しょっぱい。㊸②は「鹹い」とも書く。

③ (酒などで) あまみが少なく、刺激が強い。

④ (採点・評価などの仕方が) きびしい。厳格である。㊸甘い。

(3) 『新明解』

⇔甘い。

① 【辛い】

i) (トウガラシ・ワサビなどを食べた時に) 舌が強い刺激を受け、思わず涙が出ような感じを受ける様子だ。

ii) < (だれ・なにに二) —> 容赦なく厳しい評価をする様子だ。

② 【鹹い】

塩けが強く感じられる状態。(①と区別して「しおからい」、また、口頭語では「しょっぱい③」とも)

㊸ 【からくも】 絶望的な状態をどうにか乗り越えて、最悪の結果になることだけはまぬかれる様子。

(4) 『岩波』

① 激しく舌を刺すような味だ。

②塩味が強い。しおからい。「鹹い」と書く。

③激しく身にこたえる。

i) きびしい。①、②、③ i) は、⇔甘い。

ii) つらい。苦しい。

iii) <「からくも」の形で>やっこのことで。

(5)『大辞泉』

①トウガラシ・ワサビなどのように、舌やのどを強く刺激するような味である。

②(鹹い) 塩気が多い。しょっぱい。⇔甘い。

③甘みが少なくさっぱりとしていて、ひきしまっている。酒の味などにいう。⇔甘い。

④評価の基準などが厳しい。⇔甘い。

⑤つらい。苦しい。

⑥残酷である。むごい。

⑦危ない。危うい。

⑧気に入らない。いやだ。

上記5つの国語辞典の意味記述をまとめると、日本語の「辛い」の各語義では

①唐辛子、生姜、山葵、山椒、胡椒などを舐めたときのように、舌やのどを強く刺激するような味である。

②塩けが強く感じられる状態。「鹹い」とも書く。「しおからい」、また、口頭語では「しょっぱい」とも

③酸味の強いさま。すい。

④酒気の強いさま。アルコール度の高いさま。甘味の少ない濃厚なよい酒の味にいう。

⑤むごい。残酷だ。

⑥(採点・評価などの仕方が) きびしい。厳格である。

⑦勘定高く人情味のない人が多くてあきれるようなさま。せちがらい。

⑧苦しい。つらい。せつない。悲痛だ。

⑨気に入らない。いやだ。

⑩苦痛を感じるほどはなはだしい。堪えがたいほどにひどい。

⑪㊦【「からくも」の形で】絶望的な状態をどうにか乗り越えて、最悪の結果になることだけはまぬかれる様子。もう少しでダメなところだ。あぶない。あやうい。すんでのことだ。

など11項目（表2-1）があげられる。

表2-1 「辛い」について5つの国語辞典の意味記述

「辛い」の意味項目	日国	学研	新明解	岩波	大辞泉
①唐辛子、生姜、山葵、山椒、胡椒などを舐めたときのように、舌やのどを強く刺激するような味である。	① i	①	① i	①	①
②塩けが強く感じられる状態。「鹹い」とも書く。「しおからい」、また、口頭語では「しょっぱい」とも	① ii	②	②	②	②
③酸味の強いさま。すい。	① iii	—	—	—	—
④酒気の強いさま。アルコール度の高いさま。甘味の少ない濃厚なよい酒の味にいう。	① iv	③	—	—	③
⑤むごい。残酷だ。	② i ㊦	—	—	—	⑥
⑥（採点・評価などの仕方が）きびしい。厳格である。	② i ㊧	④	① ii	③ i	④
⑦勘定高く人情味のない人が多くてあきれるようなさま。せちがらい。	② i ㊨	—	—	—	—
⑧苦しい。つらい。せつない。悲痛だ。	② ii	—	—	③ ii	⑤
⑨気に食わない。いやだ。	② iii	—	—	—	⑧
⑩苦痛を感じるほどはなはだしい。堪えがたいほどにひどい。	② iv	—	—	—	—
⑪派（「からくも」の形で）絶望的な状態をどうにか乗り越えて、最悪の結果になることだけはまぬかれる様子。もう少しでダメなところだ。あぶない。あやうい。すんでのことだ。	② v	—	㊩	③ iii	⑦

*考察する際の便宜上、意味項目の番号付けを統一させている。

4.1.2 中国語の辞典における“辣”の意味記述

本節では、前章3.1.1.2で挙げた5つの中国語の辞典²⁸を利用し、中国語の“辣”の意味記述を調べ、整理してみる。（以下に引用する各辞書における“辣”の意味の説明はすべて原典通りである。考察する際には、便宜上、意味項目の番号付けを統一させている。）

(1) 《古漢》

- ①辛味，像姜、蒜等有刺激性的味道。

②狠毒。

(2)《辞海》

①像姜、蒜等带刺激性的味道；辛味。

②辣味刺激人的感觉器官。

③狠毒。

(3)《现汉大》

①辣味，如姜、蒜等所带的刺激性味道。

②辣味刺激（人的感官）。

③刺痛和灼热的感觉。

④厉害；狠毒。

⑤刚劲犀利。

(4)《现汉》

①形像姜、蒜、辣椒等有刺激性的味道。

②劲辣味刺激（口、鼻或眼）。

③形狠毒。

(5)《新华》

①像姜、蒜、辣椒等有刺激性的味道。

②受辣味刺激。

③狠毒。

上記5つの中国語の辞典の意味記述をまとめると、中国語の“辣”の各語義では

①辛味，像姜、蒜等有刺激性的味道。

②辣味刺激人的感觉器官。

③刺痛和灼热的感觉。

④厉害；狠毒。

⑤刚劲犀利。

などの5項目（表2-2）が記述される。

表2-2 “辣” について5つの中国語の辞典の意味記述

“辣” の意味項目	古汉	辞海	现汉大	现汉	新华
-----------	----	----	-----	----	----

①辛味，像辣椒等的有刺激性的味道。	①	①	①	①	①
②辣味刺激人的感觉器官。	—	②	②	②	②
③刺痛和灼热的感觉。	—	—	③	—	—
④厉害；狠毒。	②	③	④	③	③
⑤刚劲犀利。	—	—	⑤	—	—

*考察する際の便宜上、意味項目の番号付けを統一させている。

4.1.3 「辛い」と“辣”の意味記述の対照

日・中両言語の辞書における「辛い」と“辣”の意味記述には、主に次のような特徴が見られる。

1. 辞書によって、意味立項の配列は多少異なっているが、「唐辛子、生姜、山葵、山椒、胡椒などを舐めたときのように、舌やのどを強く刺激するような味である。」“辛味，像姜、蒜等有刺激性的味道。”を第一義として挙げている点では各辞書が一致している。

2. 品詞性から見れば、「辛い」と“辣”の意味記述は、主に形容詞に集中している。

3. 各辞書による「辛い」と“辣”の意味規定から、「辛い」と“辣”は味覚を表わす本来の語義①以外には、味覚以外の共感覚、人間の心理感覚、人間の行為の様子などのような意味拡張が生じている。

4. 日本語の「辛い」は基本的にはプラスの評価性を帯びていないようであるが、中国語の“辣”はプラスの評価性とマイナスの評価性を両方とも帯びているようである。

辞書における「辛い」と“辣”の各意味記述を対照してまとめると、表2-3のようになる。

表 2-3 「辛い」と“辣”の意味記述の対照

意味記述	「辛い」	“辣”
①唐辛子、生姜、山葵、山椒、胡椒などを舐めたときのように、舌やのどを強く刺激するような味である。	○	○
②辛くて(口や鼻などが)ひりひりする。	—	○
③塩けが強く感じられる状態。「鹹い」とも書く。「しおからい」、また、口頭語では「しょっぱい」とも。	○	—

④酸味の強いさま。すい。	○	—
⑤酒気の強いさま。アルコール度の高いさま。甘味の少ない濃厚なよい酒の味にいう。	○	—
⑥刺痛和灼热的感觉。刺すような痛み、または焼けるような痛み	—	○
⑦むごい。残酷だ。あくどい仕掛け。	○	○
⑧（採点・評価などの仕方が）きびしい。厳格である。	○	—
⑨勘定高く人情味のない人が多くてあきれられるようなさま。せちがらい。	○	—
⑩苦しい。つらい。せつない。悲痛だ。	○	—
⑪気に食わない。いやだ。	○	—
⑫苦痛を感じるほどはなはだしい。堪えがたいほどにひどい。	○	—
⑬（芸術的表現力などは）力強い、たくましい、または鋭い。	—	○
⑭派（「からくも」の形で）絶望的な状態をどうにか乗り越えて、最悪の結果になることだけはまぬかれる様子。もう少しでダメなところだ。あぶない。あやうい。すんでのことだ。	○	—

日・中両言語の辞書における味覚形容詞「辛い」と“辣”について、共通した語義には、①唐辛子、生姜、山葵、山椒、胡椒などを舐めたときのように、舌やのどを強く刺激するような味である。⑦むごい。残酷だ。などの2項目しかあげられない。

中国語の“辣”には、「辛い」の意味項目：

③塩けが強く感じられる状態。「鹹い」とも書く。「しおからい」、また、口頭語では「しよっぱい」とも

④酸味の強いさま。すい。

⑤酒気の強いさま。アルコール度の高いさま。甘味の少ない濃厚なよい酒の味にいう。

⑧（採点・評価などの仕方が）きびしい。厳格である。

⑨勘定高く人情味のない人が多くてあきれられるようなさま。せちがらい。

⑩苦しい。つらい。せつない。悲痛だ。

⑪気に食わない。いやだ。

⑫苦痛を感じるほどはなはだしい。堪えがたいほどにひどい。

⑭派（「からくも」の形で）絶望的な状態をどうにか乗り越えて、最悪の結果になること

だけはまぬかれる様子。もう少しでダメなところだ。あぶない。あやうい。すんでのことだ。

などの9項目に相当する語義記述が存在しない。

一方、「辛い」の意味項目の中に、“辣”の意味項目

②辛くて(口や鼻などが)ひりひりする。辣味刺激人的感觉器官。

⑥刺痛和灼热的感觉。刺すような痛み、または焼けるような痛み

⑬(芸術的表現力などは)力強い、たくましい、または鋭い。

などの3項目と対応できるものは見当たらない。

また、中国語の“辣”について、意味項目⑧衰れむ。⑨時間が長い、久しい。⑩差し迫っている、急を要する。⑪辣菜(ノゲシ・野芥子)。などは古代中国語に限られて、意味項目⑫名字。は固有名詞として使われているが、現代中国語での使用例は極めて稀である。

つまり、辞書の意味記述により、①唐辛子、生姜、山葵、山椒、胡椒などを舐めたときのように、舌やのどを強く刺激するような味である。⑦むごい。残酷だ。などの意味を表す時、日本語の「辛い」と中国語の“辣”との直接翻訳は可能であるが、それ以外の場合では、コミュニケーションに問題が発生する可能性が十分あると思われる。以下、コーパスの実例を見ながら、考察してみよう。

4.2 日・中対訳コーパスに基づく「辛い」と“辣”の意味・用法の考察

本節では、日・中両言語の辞書に述べている意味項目を参考にし、日・中対訳コーパスから収集した用例を分析しながら、「甘い」と“辣”の意味・用法や対訳関係のありさまを考察する。

4.2.1. 対訳関係が成立可能な意味・用法についての考察

①唐辛子のように、舌やのどを強く刺激するような味である。

辞書の意味記述によると、日本語の「辛い」と中国語の“辣”は、味覚形容詞として、同じ「辛味物質(典型的な唐辛子)を舐めたときのように、舌やのどを強く刺激し、ひりひりするような味である」を第一義として挙げている。そのまま互いに訳せばよいのである。例えば、(1)と(2)で示しているようである。

(1) 可惜辣酱太淡薄, 本来S城人是不懂得吃辣的。

訳: 残念なことに、辛子味噌が薄すぎたが、これはS市の人が辛いものをたしなまない

からである。

(2) 食べてみると、甘くて辛い味がおいしい。担々麺でこれくらいおいしいのは、ないかも。

訳：尝了一下，味道又辣又辣很好吃。我从来没吃过这么好吃的担担面。

また、日本語の「辛い」と中国語の“辣”は香辛料による刺激が強い意味を表す場合もある。例えば、「辛口のカレー」「辣味咖喱」は“香辛料较重的咖喱”と理解すべきであろう。

②アルコール度数が高い

日本語の「辛い」と中国語の“辣”は酒類のアルコール度が高く、甘みは少なくさっぱりとした味をいう時に用いられ、「甘くない」といった意味を表す。

例えば、「辛い酒」は“辣味的酒”と訳すればよいのであろう。

(3) 有两个钱，他就去灌了辣湯。

訳：わずかな錢があると、彼は出かけて行って酒をあおってしまう。

例(3)の“辣湯”(直訳すれば「辛い液体」)は「お酒」のことを指すように、日本語において「辛口」という酒の味を表す言葉もあり、対義語は「甘口」である。日本酒やワインなどの醸造酒の製造過程では酵母により糖分がアルコールへと分解されるため、一般的に辛口の酒はアルコール度数が高くなる。「辛口」は“辣口”、“辣味”²⁹⁾と訳してもいいし、コンテキストによって“(酒精)度数高”、“烈”と訳される場合もよくみられる。「ワインは辛い方が好みです」は“红酒我喜欢喝度数高一点的”と訳され、「酒は辛口にかぎる」は“我只喝烈酒”と理解すべきであろう。

③辛そうな匂い

嗅覚における意味派生において、「辛い」と“辣”は同じ使い方を見せているため、互いにそのまま理解し、訳してもよい。例えば、“闻起来很辣”は「辛そうな匂いがする」に訳される。

4.2.2 対訳関係が成立しかねる意味・用法についての考察

まず、中国語の“辣”に見られない日本語の「辛い」の使い方を見てみよう。

④ (塩気や酸味など) 刺激的な味覚

ア. 塩気が強い

まず、「塩気が足りている、塩辛い」という意味で使用される「辛い」はどのように訳されるかを探ってみる。

(4) この味噌汁は少しからいよ。

訳：这个味噌汤有一点咸。

(5) この魚はなるべくからく煮ておいてください。

訳：这道鱼尽量做的咸一点。

イ. 酸味の強いさま

さらに、「酸味の強いさま」を意味する「辛い」を見てみよう。

(6) その酸っぱさが鋭く辛い。

訳：酸味非常够，够酸。

⑤ (採点・評価などの仕方が) きびしい。厳格である。

日本語の「辛い」は「採点や基準が厳しい」ことを表している。

(7) なぜあの自動車学校には、採点の辛い教官が多い。

訳：为什么那家驾校里打分很严的教官那么多？

(8) あの判定は辛すぎる。

訳：那个评判结果过于严格了。

⑥ (言葉などが) 苦痛を感じるほどはなはだしい。堪えがたいほどにひどい。

次に、「ことばの厳しさ」を表現することもできる。

(9) 今の言葉は辛過ぎるね。

訳：你刚刚说的话也太毒(过分)了吧。

⑦ 苦しい、つらい、切ない経験

用例は見つかりにくいですが、「辛い」はまた、「つらい、切ない経験」を修飾するのに用いられている。

(10) げんに私が此の列車のため、ひどいからい目に遭わされた。

訳：就在此时，我因为这趟列车倒了大霉。

この意味で使われる「辛い」は中国語の“辛³⁰”と通じているが、“辛”のことを現代中国語において“辣”で表している。

次は日本語の「辛い」に見られない中国語の“辣”の使い方を整理し、さらに、その具体的な訳し方を示す。

⑧ (人の笑い声や叫び声などが) 激しくてあくどいさま

中国語の“辣”は人間が激しくてあくどい音声を聞き、いやな感じを喚起させた状態を表わすために用いられることがある。すなわち、次の例のように“辣”には、「(声が) ひどく甲高い。(音が) すさまじい」、「度を超していて、きつい、たちが悪い」という意味を含み、「あくどい、激しい」と訳することができる。聴覚に関する“辣”の使用例とその訳語を見てみよう。

(11) 刑讯室里又传来了声音，是徐鹏飞毒辣的笑声。

訳：拷問室からまた声が伝わってきた。それは徐鹏飞のあくどい笑い声であった。

(12) 她已经在做撤回城里的准备，百无聊赖，常常在茅房里发出泼辣的叫声。

訳：彼女はすでに市内に引き上げる準備をしていた。退屈で仕方なく、いつもあばら家で激しい叫び声を出していた。

⑨ (人の視線、目つきが) 熱い、ひりひりするようなさま

中国語において、“辣”は視覚を表す場合、主に、「視線、目つき」を修飾対象としている。「ひりひりするような」、「熱い」と訳されることが多い。

(13) 大娘大婶们一句紧接一句地让着我，一边不住地用火辣辣的目光上下打量着我，还有一个劲儿地议论着我的长相和衣裳，发出一片啧啧的赞叹声。

訳：おばさんたちは次から次へと食べ物を勧めながら、ひりひりするような視線で私を眺め、口々に私の顔立ちや着物をほめた。

(14) 常在他热辣辣的目光中，她的心不知不觉也在起变化。

訳：よく彼の熱い視線で、彼女の気持ちもいつの間にか変化している。

⑩ きわめて熱いことの形容

(15) 因此，他望着那毒辣辣的日头，就有些为难起来，究竟要它过去得快还是慢呢？

訳：彼はギラギラと照りつける太陽を見上げながら、途方に暮れた。いったい太陽が速く進んだほうがいいのか、それともおそいほうがいいのか。

(16) 罗汉大爷生怕骡子踩了人，前后招呼着，天近正午，日头毒辣，他汗水淋淋，一件紫花布褂子湿得透湿。

訳：驢馬が人を踏みはせぬかと羅漢大爺は前や後ろに声をかけつづけた。昼近くの日ざしはすさまじい。かれは汗だくになり、紫更紗の上着はびしょ濡れだった。

⑪ (やけどや鞭などに打たれて) ひりひりする

(17) 棍子打在身上，疼得火辣辣的。

訳：棒で打たれて体がひりひりする。

(18) 直到现在，她的手和臂都发麻，火辣辣的。

訳：今まだ手や臂はカッカッとしびれている。

⑫ (興奮・焦燥・羞恥などで) いらいらする, 焦る。顔がほてる。

(19) 耳朵已经火辣辣的了，现在脸也有点发烧。

訳：耳たぶがひりひりする、顔までほてってきた。

(20) 青苗听了杜大叔的指责，脸上火辣辣的。

訳：青苗は杜伯父さんの非難を聞いて顔が赤くなった。

(21) 道静回想着当年的情况，心里火辣辣地好久都不能入睡。

訳：そのころのことを思い起こすと、道静は胸が熱くなって、いつまでも眠れなかった。

⑬ 大胆である、気迫がある、押しが強い、または乱暴である、がむしゃらである

(22) 青年应当大胆泼辣。

訳：青年は大胆果敢でなければならない。

(23) 这时，谁还能认出这个勇敢的、泼辣的姑娘就是当年那个埋头书案温文尔雅的王晓燕呢。

訳：そのとき、この勇敢で、男まさりの娘が、かつてあんなにもしとやかで、おとなしい、本にばかりかじりついていた王晓燕だと見ぬく者が、いったい、なん人いたことだろうか。

(24) 她说话十分泼辣。

訳：彼女はものの言い方がとてもはきはきしている。

(25)你为什么在“治”了他以后，总后悔自己太泼辣，总在想：“人家不讨厌你？”

訳：あいつをやっつけたあとでなぜいつもひどいことをしたと後悔するの。なぜいつもあの人に嫌われないだろうかと思うの。

(26) 黄梅霜说话很快，眼神很锋利，看得出来这是个性急的泼辣的女人。

訳：黄梅霜はすごく早口で、目つきは鋭く、せっかちで、やり手の女だということが、はた目からもうかがえた。

(27) 火红的顿河马耐不住火辣辣的性格，它们奇怪主人为什么时常垂头丧气地发呆。

訳：火のように赤い毛並みの馬たちは、感じやすく激しい気質で、気落ちしてぼんやりした主人を喜ばない。

上の例文を見てみると、例(22)は男女性別に拘らず普通に使われているのに対し、例(23)と(24)では、特に女性の性格を表しているが、いずれもプラスの意味で使われている。しかし、例(25)と(26)においては、“辣”がマイナスの意味でも使われている。そのほか、例(27)の“辣”は女性の性格を修飾しているのではなく、馬の性格を表すのに用いられている。このような使い方は少ないが、馬を擬人化した表現である。

⑭ テキパキと仕事をこなす

“辣”はまず、「仕事ぶり」を描写するのに使用されている。

(28) 干活儿很泼辣

訳：仕事が大胆で積極的である。

(29) 这当然不是主要的，吸引士兵们到这里来的主要原因，是方兰——年轻漂亮，心眼好，工作泼辣的姑娘。

訳：これは当然主な原因ではない。兵士をここに引き付けた主な原因は方蘭である。彼女は若くてきれいだし、心も優しいし、仕事もてきぱきこなすお嬢さんである。

⑮ 残忍な、無情な、むごいやり方、あくどい仕掛け

最後に、“辣”はやり方や手口を修飾するのに用いられている。

(30) 我决不会对你下什么辣手的。

訳：私はあなたに決して何もあくどいことはしない。

(31) 这需要小心，需要眼光狠，手段辣。

訳：眼力と手段、細心さと冷酷さなどが必要だった。

⑩（言葉、文章などのは）力強い、たくましい、または鋭い、犀利だ。

“辣”はまた、「言葉、文章の特徴」を表現するのに用いられている。

（32）其文胆之大，文风之辣，独步天下！

訳：その文章、気迫がこもって、言語は鋭利で、比類のないものであろう。

⑪書道と絵画作品などの芸術的表現力が強い、（勢いが）盛んなさま

“辣”はさらに、「芸術作品の特徴」を言うのに使われている。

（33）他的山水画笔墨老辣，洒洒脱脱，无拘无束。

訳：彼の山水画は筆先に氣勢が感じられ、こだわりもなく、自由自在である。

4.2.3 本節のまとめ

本節では、日・中対訳コーパスを利用し、日本語の「辛い」と中国語の“辣”における意味・用法の共通点と相違点、両語の対訳関係などについて具体的に考察してみた。その結果を表2-4にまとめておく。

表2-4 「辛い」と“辣”の対訳関係

対訳関係が成立する場合	意味記述	「辛い」	“辣”
	①唐辛子・山葵などのように、舌やのどを強く刺激するような味である		辛い味
②アルコール度数が高いさま		辛い酒	辣味的酒（烈酒）
③辛そうな匂い		辛そうな匂いがする	闻起来很辣
対訳関係が成立し兼ねる場合	I. 「辛い」の“辣”以外の中国語訳		
	意味記述	「辛い」	中国語
	④（塩気や酸味などの）刺激的な味 ア. 塩気が足りている、塩辛い イ. 酸味の強いさま	味噌汁は少し辛い 酸っぱさが鋭く辛い	味噌汤有点咸 酸味够酸
	⑤（採点・評価などの仕方が）きびしい。厳格	辛い採点	严格的打分

である。		
⑥ (言葉などが) 苦痛を感じるほどはなほだし い。堪えがたいほどにひどい。	辛い言葉	话毒, 毒舌
⑦ 苦しい、つらい、切ない経験	辛い目に遭う	倒大霉
II. “辣” の「辛い」以外の日本語訳		
意味記述	日本語	“辣”
⑧ (笑い声や叫び声などが) 激しくてあくどいさま	激しい叫び声	泼辣的叫声
⑨ (視線、目つきが) 熱い、ひりひりするようなさま	ひりひりするような視線	火辣辣的目光
⑩ きわめて熱いことの形容	すさまじい日ざし	火辣辣の日头
⑪ (やけどや鞭などに打たれて) ひりひりする	ひりひりする	火辣辣的疼
⑫ (興奮・焦燥・羞恥などで) いらいらする。焦る。 顔がほてる。	顔がほてってきた	脸上火辣辣的
⑬ 大胆である、気迫がある、押しが強い、または、乱 暴である、がむしゃらである。	大胆果敢 鉄火な女	大胆泼辣 泼辣的女人
⑭ テキパキと仕事をこなす	仕事大胆で積極的	工作泼辣
⑮ 残忍な、無情な、むごいやり方、あくどい仕掛け	腹黒い冷酷さ	心狠手辣
⑯ 言葉、文章などが辛辣である、手厳しい、または鋭 い、犀利だ。	鋭い風刺	辛辣讽刺
⑰ 書道と絵画作品などの芸術的表現力が強い、(勢い が) 盛んなさま。	筆先に氣勢が感じられる	笔墨泼辣

表 2-4 から簡単に分かるように、「辛い」と“辣”の対訳関係から見れば、「辛い」と“辣”の意味派生には顕著な相違が見られる。それはもともと不快な味覚を表す「辛い」は多くのマイナスの意味へ派生していることに対し、中国語“辣”はプラスとマイナスの両方への意味派生が示されている。

次の節では、引き続き認知言語学の視点から、「辛い」と“辣”の差異をもたらす理由を探ってみる。

4.3 認知言語学的アプローチによる「辛い」の意味拡張プロセスの分析

本節では、認知意味論に依拠し、味覚形容詞「辛い」の各意味項目の意味関連を明らかにし、またそれぞれがいかなる原理によって派生したのかなどについて検討する。

ここでは、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』から「辛い」の実例を収集・分析することによって、「辛い」の意味拡張を検討する。以下において、出典を明記していないものは、すべてBCCWJからのものである。

4.3.1 プロトタイプの意味

語義①：唐辛子のように、舌やのどを強く刺激するような味

「辛い」の意味拡張プロセスを追うに当たり、まずはその基点となるプロトタイプの意味を確認することから始める。

日本語の国語辞典及び先行研究（瀬戸 2005）が指摘するように、日本語の「辛い」は唐辛子などを舐めたときのように、舌やのどを強く刺激するような感じを意味する。本来味覚³¹ではなく、神経刺激としての辛味の核心は舌・口腔のパニロイド受容体（カプサイシン受容体）で感じる痛覚³²であり、これに他の条件（唐辛子であれば、発汗および発熱）が統合されたものを辛味と呼んでいる。人は唐辛子のような「辛味成分」の刺激を舌や口に受けると、「辛い」と感じる。要するに、辛味の正体は人間の舌・口腔で感知される痛覚の1種である。この種の刺激的な感じを表すのが「辛い」の本来の姿であり、この意味こそ「辛い」の原義だと思われる。「辛い」の感覚内容そのものをことばによって述べることは難しいため、その刺激的感覚をもたらす具体的な物の性質によって示すのが手っ取り早い方法である。本研究では、先行研究（瀬戸 2005）及び辞書記述に従い、「辛い」のプロトタイプの意味を「唐辛子のように、舌やのどを強く刺激するような味」とする。「辛味成分を口の中に入れるときに生じる痛覚」という原義が「辛い」のプロトタイプの意味とされていない。この意味での「辛い」は、舌で舐めるだけですぐ感じ取られる、具体的な、単純な属性であって、他の意味はここから派生したものと位置づけることができる。「味成分を口の中に入れるときに生じる痛覚」は「辛い」という味覚を引き起こす原因であり、辛味という味覚はその痛感覚によって引き起こされた結果だと考えられる。つまり、二者の間には<結果—原因>という1種のメトニミー関係が成り立つ。メトニミー関係に基づいた「辛い」のプロトタイプの意味の背後には、言葉で把握しにくい身体感覚を、その感覚をもたらす原因いわば具体的な物の性質によって表すという知的メカニズムが働いていると思われる。

プロトタイプの意味の使用例を見てみよう。

(34) あっと顔をしかめるような辛い七味を竹筒に入れていたが、間もなく七味屋を廃してしまった。

(35) 和風なキムチよりも韓国風のしっかりと辛いキムチの方が合うようですよ。

(36) この地ではぴりっと辛い食べ物が好まれる。そして、すえた夫婦生活にどんなソースをつければいいのか困っている。

用例の「辛い七味」と「辛いキムチ」、「辛い食べ物」は唐辛子などの辛み成分が含まれている調味料や食べ物の味を表わしている。このような食べ物を口にした時、「唐辛子やわさびなどの辛みに対し、激しく強い味覚」という意味である。この意味は「辛い」のプロトタイプの意味と見なされる。

プロトタイプの意味としての「辛い」は、「辛味」という尺度の目盛りの上を自由に上下するものである。同じ辛さの料理を食べても、全く平気な人と弱い人がいるが、このとき、「辛い」は小刻みな程度の段階が考えられるため、自由な尺度性をもっているものだと見てもよい。

価値評価性について、子供や香辛料の受容力（耐性）の低い人にとって、「辛い」は一般的に快くなくて嫌な味として認識されているが、辛いものの好きな人は不思議とどんどん辛いものを欲し、おいしい味と考えられる。プロトタイプの意味としての「辛い」は評価する人や評価される対象によって、異なる価値評価が付与されることが考えられる。

4.3.2 味覚ドメイン内の転義

前節で述べたように、「辛い」は語義①<唐辛子などのように、舌やのどを強く刺激するような味である>というプロトタイプの意味以外に、ほかの種の味覚を表すこともできる。ここでは、「辛い」が語義②<口中における刺激がある基準を超え、相対的に強いさま>への転義プロセスを分析してみる。

語義②：口中における刺激がある基準を超え、相対的に強いさま

ア. 幅広い品目の香辛料の（口、のどや鼻などを）灼くような味。ひりひりする。

「辛い」は、食物や調理などの香辛料（生姜、山葵、山椒、胡椒など）による刺激成分・刺激度が比較的高い状態を表している。つまり、「味覚的刺激がある」、「濃い味付け」といった概念が内包されている。例えば、「辛い（辛口の）カレー」で示されているようである。

(37) 「君そんなにわさびを入れると辛いぜ」と主人は心配そうに注意した。

イ. 酒気の強いさま。アルコール度の高いさま。

「辛い」はアルコール度数が高く、甘味の少ない濃厚なよい酒の味をいう時に用いられる。「甘くない」、「辛口の」といった意味が内包されている。例えば、以下の用例で示されている通りである。

(38) だから、「辛い酒が好き」だなんて単純なことは言わず、あれこれと飲み比べると楽しいと思われる。

(39) ワインは辛い方が好みです。

ウ. 塩けが強く感じられる状態。

(40) レンゲに盛られた赤い辛い味噌のようなものを溶かしてみると、ぐっとコクがでてさらに美味くなった。

(41) この味噌汁は少しからいよ。

(42) この魚はなるべくからく煮ておいてください。

用例(40)(41)のように、日本語の「辛い」は「味噌」などを修飾している表現もある。「香辛料などの辛味成分による刺激」ではなく、「塩分による刺激が強い」という意味である。この場合、「辛い」は「鹹い」とも書き、「鹹」の鹵偏は塩を意味している。「しおからい」、また、口頭語では「しょっぱい」とも言う。つまり、「辛い」は味噌汁、醤油、漬物、塩辛などの塩辛い味も表せる。また、第三章に述べたように、塩気が足りない状態は「甘い」という。

エ. 酸味の強いさま、すい。

「辛い」は酸味の強いさまを描写するのにも用いられる。現在では、違和感を覚える人がほとんどであるが、平安時代の古辞書『新選字鏡³³』、『類聚名義抄³⁴』には酸味を表す「辛い」が載せられている。『広辞苑³⁵』などの現代の一部の辞書にも酸味を表す「辛い」が記載されている。

(43) それとその酸っぱさが鋭く辛いということが、体にいいんだという錯覚をいだかせることになる。

(44) ぎっしりつまった身を多めにつまんで、甲羅の中のみそを絡め、ちょっとボン酢をたらして口に運ぶと、みその風味とボン酢の辛さの中から、甘い身の美味しさが口の中に広がる。

つまり、日本語において、「からい」は「三種の味覚（辛味、塩味、酸味）」を表すほかに、さらに、「アルコール度の高さ」や「香辛料の強さ」も表せる。塩味には「塩辛い」、「しょっぱい」、「くどい」、酸味には「酸っぱい」という表現が存在しているにもかかわらず、「辛い」は相当広い味覚の範囲をカバーしている。

第三章の3.3.2で既に述べたように、「甘い」と「辛い」は、塩味という尺度の上で程度の違いによって相対的に対立していると考えられることができる（Jantima1999:147）。塩分量がなんらかの基準に及ばないと「甘い」の条件が成立する。この場合、「甘い」は甘味か美味を表すものではなく、基準より刺激性が弱く、塩気が足りない味という相対的な評価となる。「辛い」のプロトタイプの意味には「強く刺激するような味」という意義特徴が含まれ、刺激が強いという点で、「塩味が強い」、「酸味が強い」、「酒気が強い」と共通しているため、プロトタイプの意味からメタファー的に語義②に発展してきたと考えられる。しかし、メタファー以外に「甘い」と「からい」との間に起こった「尺度の一元化」³⁶も無視してはいけぬ。語義②の意味転用はメタファーや「尺度の一元化」の協業によるものだと考える。

4.3.3 共感覚ドメインへの転義——嗅覚への転用

語義③：辛そうな匂い

本研究のデータ収集によれば、日本語の「辛い」が味覚以外の共感覚への意味拡張は嗅覚への転義に限られている。視覚・聴覚・触覚についての「辛い」の使用例は見当たらないのである。例を見ると、⑨のようである。

(45) サムライウーマンの香りが、スパイシーというより、辛いのです。

ここでの「辛い」は、鼻を刺すような激しく強い嗅覚的刺激を表わす。プロトタイプの意味——語義①の「唐辛子などのものが持つ激しく強い味覚的刺激」と類似性があり、メタファーによって嗅覚に拡張していることであるとされる。

4.3.4 人間活動ドメインへの転義

語義④：(採点・評価などの仕方が)きびしい。厳格である。

日本語の「辛い」は味覚、嗅覚など人間の身体感覚に関わる経験を表わすほか、人や物事に対する評価・態度を表すことができ、「厳しい」、「厳格だ」といった意味が内包されている。

(46) ただ絶対評価の場合、(高校では一般に絶対評価である)、教師によって甘い辛いの差がつく場合が多い。これは点数を合計する時に不公平になる。

(47) 「女子大生に点の辛い中山さんにしては珍しく評価が高いんですよね」

(48) しかし、随分油を搾られたよ、私は決して辛い点をつけない、現に一年で私は満点をつけた生徒もいる、なんてね。

(49) 私はソファーに対するのと同じようにサンドウィッチに対してもかなり評価の辛い方だと思うが、そのサンドウィッチは私の定めた基準線を軽くクリアしていた。

(50) 今の言葉は辛過ぎるね。

(51) あの子は辛口で有名だ。

例(46)～(49)のように、日本語の「辛い」は評価や、点を修飾している用法がある。ここでの「辛い」は「甘い」と対応し、相手に対する扱いが厳しいという意味である。「評価が辛い」は、尺度上の基準を超えて厳しい評価が与えられることである。「点が辛い」というのは、期待より厳しい採点である。また、例(50)、(51)のように、「辛い」は評価のことばなどが辛辣で手きびしいことを表現することもできる。「辛い批評」、「辛口のコメント」という表現がよく用いられる。

この種類の用法は、「他者に対する評価などについての厳しさが強い」という意味で、プロトタイプ的意味——語義①「激しく強い」味覚的刺激との類似性に基づき、メタファーによって拡張していると考えられる。この用法は「甘い」と対応している用法であり、「評価が尺度上の基準を超えて厳しい」という意味を表している。「評価の基準が厳しい」という意味はほかの味覚表現に見られず、「辛い」にしかないのである。判定や採点の結果を知って苦い思いをすることはあっても、判定や採点そのものについて「苦い」とは言わないようである。

語義⑤：苦しい、つらい、切ない経験

味覚用語である「辛い」は「つらい、苦しい」という意味で使用される用例も見られる。

(52) げんに私が此の列車のため、ひどくからい目に遭わされた。

(53) それやこれやで嫉妬したり憎んだりなされますと、もともと罪障ぶかい女人の身、長夜の闇に惑うて地獄のからい目にあわれるかもしれません。

例(52)、(53)の「からい目」は「つらい目」、「苦しい目」という不快感を示している。この「からい」は「苦い」と通じており、ともに、ある経験についての不快感を表してい

る。この意味の「からい」は「つらい」、「にがい」と「くるしい」を並べれば、「辛」と「苦」の字が、味覚と経験の両方の領域に用いられることがわかる。「からい目」は「からき目」という古語のイディオムと関係するのであろう。この意味に通ずる「大変」、「きつい」という意味でも「からい」が用いられる。やや違和感が感じられるが、若者の間では頻繁に使用されているようである。

(54) こんな暑いとき、買い物に行くのはからいっすね。

しかし、不快な経験を表す場合は、「辛い」を「つらい」と読む頻度が非常に高く、あまり「からい」と読まないのである。

4.3.5 認知言語学的アプローチによる語義の再分類

以上、日本語の国語辞典や先行研究を踏まえつつ、BCCWJに対するコーパス調査に基づき、「辛い」の意味拡張を考察してきた。再整理した「辛い」の各語義を以下のように示しておく。

「辛い」

I 【身体体験】

1. 味覚

語義①：唐辛子・山葵などのように、舌やのどを強く刺激するような味である

語義②：口中における刺激がある基準を超え、相対的に強いさま

ア. 香辛料の刺激で(口や鼻などが)辛く感じる、ひりひりする。

イ. 酒気の強いさま。アルコール度の高いさま。

ウ. 塩けが強く感じられる状態。

エ. 酸味の強いさま、すい。

2. 嗅覚

語義③：辛そうな匂い

II 【人間活動】

語義④：(採点・評価などの仕方が)きびしい。厳格である。

語義⑤：苦しい、つらい、切ない経験

今回のコーパス調査によって、国語辞典に掲載されていない、或いは記述の曖昧な意味・用法(語義②<口中における刺激がある基準を超え、相対的に強いさま>、語義③<辛そ

うな匂い>) が見つかった。

4.3.6 多義的意味ネットワーク

以上の検討を踏まえ、味覚形容詞「辛い」の各語義の拡張起点及び拡張方式を表 2-5 に示す。さらに、以下図 2-1 に「辛い」の多義的意味によって形成される意味ネットワークの略図を提示する。

表 2-5 「辛い」の各語義の拡張方式

語義	拡張の起点	拡張方式
語義①唐辛子などのように、舌やのどを強く刺激するような味 (プロトタイプ的意味)	原義①辛いという味覚	メトニミー
語義②刺激の強い味	語義①	メタファー 「尺度の一元化」
語義③辛そうな匂い	語義①	メタファー
語義④ (採点・評価などの仕方が) きびしい。厳格である。	語義①	メタファー
語義⑤苦しい、つらい、切ない経験。	語義①	メタファー

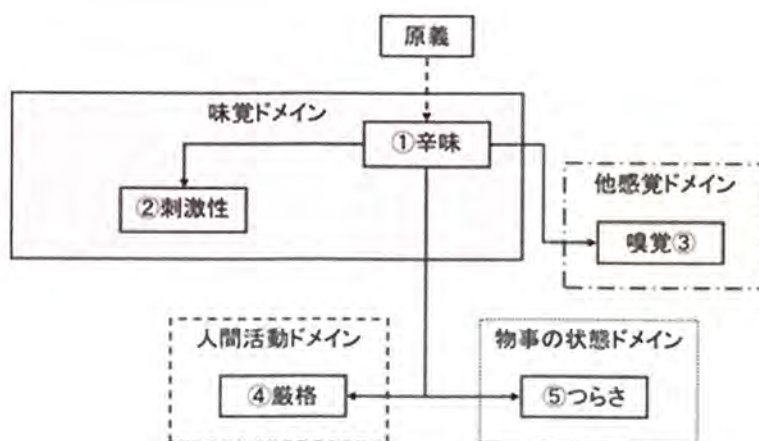


図 2-1 「辛い」の意味ネットワーク

上記の略図において、太線矢印はメタファーリンクを表し、破線矢印はメトニミーリンクを表している。語義①は多義ネットワークにおける拡張の起点となるプロトタイプ的意

味であると位置付けられる。そのほかの語義は全て語義①を出発点として、そこからメタファー・メトニミーの経路を通して意味が展開する。

表 2-5 と図 2-1 に見られるように、味覚形容詞「辛い」の意味拡張及び意味ネットワークには次のような特徴が見られる

1. 拡張手段について、「辛い」は主にメタファーによって拡張している。原義からプロトタイプの意味（語義①）、への転用だけがメトニミーによるものである。

2. メタファーやメトニミー以外の要素も「辛い」の意味拡張に働きかけているということとは明らかになる。例えば、語義①から語義②<刺激の強い味>への拡張では、メタファーがメインでありながらも、「尺度の一元化」という要素が働きかけている。要するに、意味の拡張プロセスにおいては、メタファーと他の要素の協業によるものもあるということが分かる。

3. メタファーによる転義から見れば、「辛い」のポジティブ性がネガティブ性が写像され、他の語義に拡張するケースが多い。ここで、「辛い」の各語義の評価性についての分類を次の表 2-6 で示す。

表 2-6 「辛い」の各語義の評価性

プラス (+)	マイナス (-)
語義①唐辛子などのように、舌やのどを強く刺激するような味である	
語義②香辛料、アルコール、塩、酢などの刺激の強い味。	
語義③：辛そうな匂い	
	語義④きびしい。厳格である。
	語義⑤苦しい、つらい、切ない経験

4. 「辛い」の意味拡張の方向性としては、外界の事物に対する身体体験、すなわち味覚の客観的な叙述から、主体の主観的な叙述や感情的な叙述へ拡張する方向性が見られる。

4.4 認知言語学的アプローチによる“辣”の意味拡張プロセスの分析

本節では、味覚形容詞“辣”の各意味項目の相互関係を明らかにし、またそれぞれがどうやって派生したのかなど、認知的アプローチから検討したい。

ここでは、《北京大学汉语语言学研究中心语料库》から“辣”の実例を収集・分析するこ

とによって、“辣”の意味拡張を検討する。以下中国語の用例において、出典を明記していないものは、すべてCCLのものである。

4.4.1 プロトタイプの意味

語義①：“像辣椒一样的刺激性的味道”（「唐辛子などのような刺激的な味」）

中国語において“辣”は唐辛子のような味を表現し、主に人に刺激の強い味覚体験を与える味を形容している。本研究では、先行研究及び辞書記述に従い、“辣”のプロトタイプの意味を“像辣椒一样的刺激性的味道”（唐辛子などのような刺激的な味）とする。例を挙げると、以下のようなものである。

(55) 不少人说，四川菜和湖南菜都讲究个辣。

(56) 口音知道你是北方人，北方人一般不爱吃辣的，我也没放那么多。

例(55)、(56)では、“辣”は「唐辛子のような刺激の強い味」を表す意味であり、それを口にした時、「ひりひりするような刺激の強い感覚」が与えられる味覚表現である。

前章の「甘い」・「甜」と同じように、“辣”のプロトタイプの意味と原義とは異なるものである。“辣”の字形について、小篆では“𣎵”と書き、《说文解字》や《康熙字典》では、“𣎵”と書く。意味は“辛甚曰𣎵。”“俗作辣，亦作𣎵。”“乃指猛烈之辛味而言，故从‘辛’。辣味入口如灼，有‘刺戾’意。”（辛過ぎることを“𣎵”という。俗字は“辣”と書き、また“𣎵”とも書く。猛烈な辛さのことを表す、故に、「辛偏」をつけた。口に辛い物を入れると、舌がヒリヒリして痛くなることがあり、「逆らう」の意味を持つ。）要するに、現代中国語の“辣”は古代中国語の“辛”の意味を受け継ぎ、“𣎵”の字形から発展してきたのであり、その原義も日本語の「辛い」と同じ、口に唐辛子などの辛味成分を入れるとき、舌やのどを強く刺激するような感じを意味する。

つまり、中国人は唐辛子などの“辣味物質（辛味成分）”の刺激を舌や口に受けると、本来味覚ではなく、痛感覚による刺激だと認知されている感覚が“辣”と感じる。人間の痛感覚の1種である口内の刺激感を表すのが“辣”の本来の姿であり、この意味こそ“辣”の原義だと思われる。唐辛子は“辣味物質（辛味成分）”の代表であり、人間の“辣”という口内の刺激感を引き起こす原因でもある。本研究では、“辣”という口内における刺激感（痛覚）を「味覚」の一種とされる従来の味覚観を取り入れ、「唐辛子などのような辛味成分が持っている刺激性」は“辣”という口内の刺激感（痛覚）を引き起こす原因であり、“辣味”という刺激感（痛覚）は辛味成分の刺激性によって引き起こされた結果だと考え

られる。両者の間には<結果—原因>というメトニミー関係が成立する。このように、“辣”のプロトタイプの意味とその原義はメトニミーリンクによって関係付けられる。

プロトタイプの意味としての“辣”は、「辛味」という尺度の目盛りの上を自由に上下するものである。このとき、“辣”は小刻みな程度の段階が考えられるため、西尾（1972）がいう「自由な尺度性をもっている」ものだと見てもよい。プロトタイプの意味としての“辣”は評価する人や評価される対象によって、異なる価値評価が付与されることが考えられる。“辣”がプラス評価になるかマイナス評価になるかもケースバイケースである。

4.4.2 味覚ドメイン内の転義

語義②：「(香辛料所具有的) 受人喜欢的刺激性味道」(「(香辛料などの) 人に好まれる刺激的な味」)

中国語の“辣”は、香辛料などの「人に好まれる刺激的な味」、「激しく強くて美味しい味覚」という意味を持っている。香辛料（スパイス）は口に入れて刺激を味わうもので、胡椒（コショウ）・唐辛子（レッドペッパー）・丁字（ちょうじ）・肉桂（シナモン）・ナツメグ（肉ざく）・カルダモン・ジンジャーなどが挙げられる。代表的な香辛料である胡椒はインド原産で、ローマ時代から西方に伝えられ、中世ヨーロッパにおいても珍重されて貨幣の代わりとして用いられた。特に大航海時代の香辛料貿易では主要交易品として高額で取引され、大きな富を生み出した。

中国では、中世に始まったことだが、家畜は休耕地に放牧され糞が肥料にされたが、人間の食べる分だけしか穀物が生産できないので、エサのなくなる冬季には飼ってられなくなるため、秋の終わりに屠殺され、塩漬けやソーセージ、ハムといった冬の保存食糧にされた。肉が食べられるのは冬の祝祭の時など特別なときに限られていた。生産性が上がるにつれて、冬場のエサの確保が可能になると家畜を飼う頭数も増えて、官僚、貴族や都市の商人など富裕層が普段から肉を食べるようになった。ゆえに、中国の特権階級の間で、とにかく食べ物＝肉であり、肉さえあれば良く、より珍しい肉を食べきれないほど無闇に積み上げることが贅沢の象徴で、これが権力、財力の表現にもなっていた。

牧草が枯れ、餌が少なくなる冬の前に家畜を屠殺して保存し、一部の香辛料には、肉食の保存性を上げる効果もあったのが事実である一方、塩漬けにされた肉を食べるには、胡椒、唐辛子などの香辛料でにおいを消さなければならなかったため、その需要が急速にのびた。特に元や明の時代に胡椒、唐辛子などの香辛料が大量に輸入されたが、当然、香辛

料を多用したのも貴族、官僚や都市の商人などの特権階級である。庶民や貧困層は乏しい食物で生き延び、富裕層以上は肉を多く食べられる、といったのがその時代の身分の構造だった。

つまり、この時代に贅沢な肉食の味の変化と保存性に役に立ったのが、最初はアラビア商人、後にポルトガル・スペイン商人の持ってきた香辛料であった。肉の味付けと保存のために胡椒、唐辛子などの香辛料が必要であったので、特に上流社会で次第に多量に用いられるようになった。香辛料が多用されていること自体も、権力、財力の象徴になってきた。

(57) 你看人家肩不担担，手不提篮，一年到头，吃香喝辣。

例(57)の“吃香喝辣”という表現は、胡椒や唐辛子などの痛覚に対する刺激ではなく、「いろいろな美味しいものを食べる」、更に「贅沢な食生活」のことを指している。

貴重な香辛料で味付けられた肉などの食物は美味しいものとされ、香辛料の辛さを評価する尺度と食物や料理などの美味しさを評価する尺度が融合していると考えられる。もちろん、尺度融合の前提としては食物の美味しさと香辛料の辛味が人の好ましい味であり、ポジティブ性で共通しているからである。すなわち、美味しさと辛味は「美味・人の好ましい味」であるという類似性に基づき、評価基準が融合し“吃香喝辣”という表現によって、香辛料を付けた美味しい(肉)料理の味、更にいろいろな美味しい食べものを表すようになったと考えられよう。要するに、“辣”の語義②<(香辛料などの)人に好まれる刺激的な味>という意味は、“辣”のプロトタイプの意味のポジティブ性が写像され、そして香辛料の味と肉など食物の味を評価する尺度が融合されたことによって派生してきた意味だと思われる。更に、香辛料がもたらす“辣”という「美味な味覚」は「贅沢な食生活」の特性の一つと考えられ、二者の間には<特性—もの>という1種のメトニミー関係が成り立つ。メトニミー関係に基づいた“辣”の語義②の背後には、具体的な物事を、その物事が持っている特性によって表すという知的メカニズムが働いていると思われる。

つまり、“辣”の語義②はプロトタイプの意味のポジティブ性が写像され、メタファー、味覚領域内の「尺度融合」、メトニミーという3つのメカニズムの協業によるものだと考えてよかろう。

この場合、“辣”は自由な尺度性を表すものではなく、「美味しさ」という尺度の、著しく上の方の部分だけに範囲を限定されている。語義②<(香辛料などの)人に好まれる刺激的な味>としての“辣”は美味しいという意味に使われているため、プラスの価値評価

が付与される。

語義③：“酒精浓度高，刺激性口感强烈”（「アルコール度数が高く、口中における刺激が強い」）

（58）他没钱去看医生，也不肯买点现成的药，只在疼得太厉害的时候，去喝一口酒。酒，辣辣的，走入腹中，暂时麻醉了内部，使他舒服一会儿。

例（58）の“辣”は、「唐辛子やわさびなどが持っている激しく強い味覚的刺激」という意味ではない。お酒を修飾し、「アルコール度数が高く、口中における刺激が強い」という意味を持っている。この用法は、プロトタイプの意味①の「刺激が強い」という意味特徴との類似性に基づいて、メタファーによって拡張していると考えられる。

4.4.3 共感覚ドメインへの転義

本来味覚を表す“辣”は、共感覚に転用されることがある。また、本研究のデータ収集によれば、“辣”は味覚より原始的な触覚への転用も可能であることが証明された。以下は、順をおって共感覚ドメイン（嗅覚・視覚・聴覚・触覚）への“辣”の意味拡張を見てみよう。

（1）嗅覚への転用

語義④：“辛辣刺激的气味”（「辛そうな匂い」）

（59）她突然意识到，这是他身上所带的药材的辛辣气味。

（60）突然，闻到一股辣味，敌人从炸开的口子里放进了毒气。

例（59）、（60）で、“辣”は「匂い」を修飾している。主体は木材、生薬や毒ガスなどのような刺激が強い匂いである。例（59）の“辣味”は生薬、木材から出される刺激の強いにおいを表し、（60）の“辣味”は毒ガスのような刺激の強いにおいを表している。このような匂いを嗅いだ時、辛い味覚的刺激を想起させるから、“辣”と修飾する。ここでの“辣”は、鼻を刺すような激しく強い嗅覚的刺激を表わす。プロトタイプの意味①の「唐辛子などのものが持つ激しく強い味覚的刺激」と類似性があり、メタファーによって嗅覚に拡張していることであると考えられる。この場合は、「唐辛子のような刺激の強い味」という味覚からメタファーによって嗅覚に派生していると思われる。

(2) 視覚への転用

“辣”は視覚へ転用する場合は二つの使い方を持っている。

語義⑤：“带着热烈情感的目光”（「感情の動きが激しい、熱い視線」）

(61) 常在他热辣辣的目光中，他的心不知不觉也在起变化。

(62) 我刚才听了玛格丽特那几句话，激动的心情还没有平静下来，火辣辣的眼睛凝望着她。

例 (61)、(62) では主に人間の視線などを修飾し、“火辣辣的目光、眼睛”は、「感情の動きが激しい、熱い視線」という意味を表す。これは、プロトタイプの意味①の「ひりひりするような刺激の強い」感覚との類似性に基づき、メタファーによって視覚に拡張していると考えられる。

語義⑥：“对异性的吸引力，性感”（「異性の視線をひきつけるセクシーなさま」）

(63) 凯尼塔和莫亚在 1988 年有过一段恋情。据智利报纸称，身材火辣的名模凯尼塔一直喜欢结交名人。

(64) 零点到来，人们欢呼庆贺，焰火腾空，加上辣妹帅哥们的鼓噪，气氛异常热烈。

例 (63) と (64) では“身材火辣”と“辣妹”の“辣”は、主に女性の服装もしくは女性の体つき、スタイルを修飾し、「体つきが魅力的で、セクシーである」という意味であり、「異性の視線をひきつけるセクシーなさま」を表している。そういった使い方は味覚ドメイン内の語義②の「(香辛料などの) 人に好まれる刺激的な味」と通じている。

(3) 聴覚への転用

語義⑦：“激烈、刺耳的声音”（「激しい、きつい声」）

(65) 刑讯室里又传来了声音，是徐鹏飞毒辣的笑声。

(66) 她已经在做撤回城里的准备，百无聊赖，常常在茅房里发出泼辣的叫声。

聴覚への派生において、“辣”は主に「笑い声」、「叫び声」を修飾し、「激しい、きつい声」という意味で使用されている。詳しく言うと、(65) では「毒辣」は笑い声を修飾し、「あくどい」、「悪らつ」という意味を表している。(66) では、「泼辣」は女性の叫び声を表現するのに用いられ、「大胆な」、「激しい」という意味を表している。ここでの“辣”は、耳を刺すような激しく強い聴覚的刺激という意味を持っている。このような激しくきつい声を聞いた時、辛い味覚的刺激を想起させるから、「辛い」と修飾する。この意味は、プロ

トタイプの意味①の「激しく強い味覚的刺激」と類似性がある、メタファーによって聴覚に拡張していると考えられる。

(4) 触覚への転用

語義⑧：“形容极热的感觉，或烧伤、烫伤、鞭打等造成的疼痛”（「体のある部分が持つ激しく強く、ひりひりとする触覚的刺激」）

味覚形容詞“辣”は触覚を表すにも用いられる。例文を通して見てみよう。

(67) 到了晌午，骄阳火辣辣的，妇女们口渴难忍。

(68) 刚刚进入夏季，濑户内海沿岸的阳光就火辣辣的。看到陆虎士满脸的汗水和失望。

(69) 一条条鞭痕烙印在安娜的身上，她周身感到火辣辣的疼痛。

(70) 被子弹打中的感觉真是火辣辣的疼。方枪枪这份后悔呀，好好的我打什么仗啊！

例(67)、(68)では、修飾される客体は太陽の光で、その熱さが人に「ひりひりするほど熱い触覚的刺激」を与えるという意味で使われている。例(69)、(70)は、も人の体を与える感覚であるが、太陽の光によるものではなく、「銃弾」や「鞭」などが体に当たった時に、人に「ひりひりするほど痛い触覚的刺激」を与えるという意味である。これらは、体で感じる熱い触覚的刺激や痛みなどによる感覚表現であり、「体のある部分が持つ激しく強く、ひりひりとする触覚的刺激」という意味として用いられている。これは、プロトタイプの意味①の「激しく強い味覚的刺激」との類似性に基づき、メタファーによって拡張していると考えられる。

4.4.4 人間活動ドメインへの転義

人間の活動ドメインへの意味派生を比較してみると、日本語「辛い」は「(採点・評価などの仕方が)きびしい。厳格である。」を表す用法しか見られないのに対し、中国語の“辣”はよりバリエーションに富んだ意味派生をなしている。

語義⑨：“因羞耻或愤怒而情绪激动，面红耳赤”（「羞恥心などで感情が激しくなり、顔が赤くほてる様子」）

“辣”は激しい感情の動きを表すことができる。实例を通して考察してみよう。

(71) 青苗听了杜大叔的指责脸上火辣辣的。

(72) 我脸上火辣辣，自尊心受到极大伤害。

(73) 刷地一下，十多双眼睛一齐射到了我的身上，似乎在说：瞧，他连这都不知道！我感到羞愧，脸上火辣辣的。

(74) 一切之后的愤怒和火辣辣的羞辱感所制造的流液就不会在夏洛特跑向邮筒时迷蒙了她的眼睛。

例(71)～(74)から分かるように、この場合の“辣”は主に感情の動きについての表現である。「恥ずかしい」などの心理的な原因が、人の体や顔などに、「熱くて、ひりひりするほど刺激」を与えるという意味を表わす場合がある。用例の“火辣辣”は「羞恥心などで感情が激しくなり、顔が赤くほてる様子」を表す表現であり、辛いものを口にした時の味覚の刺激によって、顔が赤くなり、体が熱くなることから拡張していると考えられる。ここの“辣”は人間の精神的痛み、すなわち屈辱感などの心理的感覚を表わしている。

語義⑩：“情感热烈”（「感情の動きが激しく、熱烈な様子である」）

(75) 什么样的女孩儿能够经得住这样热辣辣的，含义深长的情话。

(76) 社会道德所不容，然而他们同常人一样，有着活泼泼的生命和火辣辣的爱情。

例(75)と(76)も感情の動きについての表現であるが、やや異なる意味で使われている。ここでは、男女における感情、すなわち愛情を修飾し、その「感情の動きが激しく、熱烈な様子である」という意味で用いられている。この用法は、“辣”の味覚ドメイン内の転義である語義②の<人に好まれる強く激しい刺激>と類似性がある、メタファーによって拡張していると考えられる。

語義⑪：“（形容女性）性格凶悍，不讲道理”（「性の性格が横暴で、筋を通さない；或いはてきぱきとしている」）

“辣”は、さらに人の性格を描写するのに使用されている。しかし、注意しなければならないのは女性にしか使われないという点である。データ分析の結果からも、男性に用いられる用例が見つからないということが分かる。

(77) 我实际上不过是一个泼辣的女性，不能做贤妻良母，请你从此把我忘掉。

(78) 确实有个跳芭蕾舞的姑娘。有人喜欢泼辣大方的美女，对于他们来说，她长得确实相当出众。可我却不喜欢。

(79) 警官奥维尔是酒吧的常客。镇上的人都知道，奥维尔爱上了生性泼辣的凯蒂。

(80) 是一位泼辣的女性，灵秀的目光中透着倔强与执着。

(81) 原来，赵一曼是位生性泼辣，直爽，追求进步的少女。

ここでは、主に“泼辣”ということばが使われ、女性の性格を修飾している。例(77)の中の“泼辣”は、女性の性格が「横暴で、筋を通さない」という意味を持っている。主に、マイナスの意味に使われる表現であるが、(78)～(81)の“泼辣大方”と“生性泼辣”のようにプラスの意味にも使われている。“泼辣”がプラスの意味に使われる場合は、「性格がてきばきとしている」、「気迫がこもっている」、「果敢だ」という意味を表している。それと同じ使い方で“辣妹子(性格がてきばきとしている女の子)”という表現も存在している。この意味は、“辣”が持つ強い味覚的刺激から、メタファーによって、女性の性格の表現へ拡張していると考えられる。

語義⑫：“有胆识，有魄力，雷厉风行”（「仕事ぶりがてきばきしているさま」）

また、女性の仕事ぶりは「てきばきとしているさま」を描写するのに用いられている。

(82) 以后我有幸见到郑光迪，她性情直爽，工作泼辣能干，曾自己开车巡视全国公路，颇有乃母遗风。

(83) 到这里来的还有一个原因，是有方兰——年轻漂亮、心眼好、工作泼辣的姑娘。这样的姑娘对士兵的特殊魅力。

(84) 张蕊珍原是乡官，工作泼辣，待人热情。

例(82)、(83)、(84)の“辣”は、主には女性の仕事ぶりを修飾し、「てきばき働く」という意味を表しており、プラスの意味に多用されている。この用法は、“辣”の味覚ドメイン内の転義である語義⑫の<人に好まれる強く激しい刺激>と類似性があるため、メタファーによって拡張していると考えられる。

語義⑬：“手段残忍，恶毒”（「(手口、やり方など)が残酷で、悪辣だ」）

更に、“辣”は「手口、やり方」などを修飾するのにも用いられる。「残酷だ」、「腹黒い」、「悪辣だ」といった意味が内包されている。以下は、具体的な用例を通じて見てみよう。

(85) 她心里明白，万青田知道她的底细，这个心狠手辣的人可以随时随地挑起事端，把她弄得无藏身之地。

(86) 她的心术不正，手段毒辣，对谁都肯下毒手。但是，她到底是个人，是个妇人。

例(85)と(86)の“辣”は手口、やり方を修飾の対象にし、何かの目的を実現させるための手段が非常にひどいことを意味している。そのようなやり方は、人に強い刺激を与

えることから、“辣”のプロトタイプの意味①の「強い刺激」との類似性を基づき、メタファーによって拡張していると考えられる。

語義⑭：“文风犀利”（「言葉や文章のスタイル・風格が勢いが激しくて人の心を突き刺すほど鋭いさま」）

“辣”は、言葉、文章などの特徴を表現する際にもよく使用される。具体的にどういう意味を示すかを用例に基づいて考察してみよう。

(87) 律师辛辣的言论刺激着法官们的厚脸皮。

(88) 这种说法原像是奥因斯坦贯有的辛辣言论。军务尚书经常在他的义眼中闪着冷漠的光芒。

(89) 评论家指出她善于使用辛辣讽刺的笔法写生活中的悲剧和喜剧。

(90) 这一时期，季先生大有“初生牛犊不怕虎”之势，文风相当泼辣。为《魏晋清谈思想初论》所作书评，即是显例。

この場合、“辣”はよく“辛辣”という複合語の形で現れ、ことばや文章のスタイル・風格を修飾し、その言葉使いが「勢いが激しくて、人の心を突き刺すほど鋭い」という特徴を持っていることを表す時に使われている。作品は人を感動させ、刺激を与えることは、辛いものを口にした時に感じている刺激に似ているからである。これは、“辣”のプロトタイプの意味である「唐辛子やにんにくのような刺激の強い味」という意味から、メタファーによって拡張していると考えられる。

4.4.5 物事の状態ドメインへの転義

語義⑮：“艺术风格刚劲，有气魄”（「書道、絵画などが気迫がある、氣勢が感じられるさま」）

“辣”はまた、芸術作品の特徴を言う時に用いられ、よく「泼辣」という形で現れている。

(91) 她的许多画作都是在病床上完成的。她的作品在狂放恣肆的构图、泼辣刚健的色彩背后，有着异常微密详尽的笔触。

(92) 他的山水画笔墨泼辣，洒洒脱脱，无拘无束。

例(91)、(92)における「泼辣」は書道、絵画などの芸術作品のスタイル・風格を表す時に使われる表現であるが、ここでは「気迫がある、氣勢が感じられる」という意味を持

っている。「気迫や氣勢のある」芸術作品は大体それを見る人に感動と刺激を与えるのである。それは、香辛料を口にした時に感じた人に好まれる刺激的な味覚体験に似ていることから、語義②<人に好まれる強く激しい刺激>と類似性がある、メタファーによって拡張していると考えられる。

4.4.6 認知言語学的アプローチによる語義の再分類

以上、中国語の辞書や先行研究を踏まえつつ、CCL に対するコーパス調査に基づき、中国語“辣”の意味拡張を考察してきた。再整理した“辣”の各語義を以下のように示しておく。

“辣”

I【身体体験】

1. 味覚

語義①：“像辣椒一样的刺激性的味道”「唐辛子などのような刺激的な味」

語義②：“（香辛料所具有的）受人喜欢的刺激性味道”「（香辛料などの）人に好まれる刺激的な味」

語義③：“酒精浓度高，刺激性口感强烈”「アルコール度数が高く、口中における刺激が強い」

2. 嗅覚

語義④：“辛辣刺激的气味”「辛そうな匂い」

3. 視覚

語義⑤：“带着热烈情感的目光”「感情の動きが激しい、熱い視線」

語義⑥：“对异性的吸引力，性感”「異性の視線をひきつけるセクシーなさま」

4. 聴覚

語義⑦：“激烈、刺耳的声音”「激しい、きつい声」

5. 触覚

語義⑧：“形容极热的感觉，或烧伤、烫伤、鞭打等造成的疼痛”「体のある部分が持つ激しく強く、ひりひりとする触覚的刺激」

II【人間活動】

語義⑨：“因羞耻或愤怒而情绪激动，面红耳赤”「羞恥心などで感情が激しくなり、顔が赤くほてる様子」

語義⑩：“情感热烈”「感情の動きが激しく、熱烈な様子である」

語義⑪：“（形容女性）性格凶悍，不讲道理”「女性の性格が横暴で、筋を通さない；
或いはてきばきとしている」

語義⑫：“有胆识，有魄力，雷厉风行”「仕事ぶりがてきばきしているさま」

語義⑬：“手段残忍，恶毒”「(手口、やり方など) が残酷で、悪辣だ」

語義⑭：“言论尖锐，犀利”「言葉や文章のスタイル・風格が勢いが激しくて人の心を
突き刺すほど鋭いさま」

III【物事の状態】

語義⑮：“艺术风格刚劲，有气魄”「書道、絵画などが気迫がある、氣勢が感じられる
さま」

今回のコーパス調査によって、再整理した“辣”の意味用法を4.1.1.2に掲載する中国語の辞典における“辣”の意味記述と比較してみると、中国語の辞典に掲載されていない、或いは独立した意味項目として立てていない“辣”の意味・用法が多数あることも確認できる。

4.4.7 多義的意味ネットワーク

以上の検討を踏まえ、味覚形容詞“辣”の各語義の拡張起点及び拡張方式を表2-7に示す。さらに、以下図2-2に“辣”の多義的意味によって形成される意味ネットワークの略図を提示する。

表2-7 “辣”の各語義の拡張方式

語義	拡張の起点	拡張方式
語義①しょうが、にんにくなどの刺激的な味	原義⑩辛いという味覚	メトニミー
語義②（香辛料などの）人に好まれる刺激的な味	語義①	メタファー 「尺度融合」 メトニミー
語義③アルコール度数が高く、口中における刺激が強い	語義①	メタファー 「尺度の一元化」

語義④辛そうな匂い	語義①	メタファー
語義⑤感情の動きが激しい熱い視線	語義①	メタファー
語義⑥異性の視線をひきつけるセクシーなさま	語義②	メタファー
語義⑦激しい、きつい声	語義①	メタファー
語義⑧体のある部分が持つ激しく強く、ひりひりとする触覚的刺激	語義①	メタファー
語義⑨羞恥心などで感情が激しくなり、顔が赤くほてる様子	語義①	メタファー
語義⑩感情の動きが激しく、熱烈な様子	語義②	メタファー
語義⑪女性の性格が横暴で、筋を通さない；或いはてきばきとしている	語義①	メタファー
語義⑫仕事ぶりがてきばきしているさま	語義②	メタファー
語義⑬（やり方など）が残酷で、悪辣だ	語義①	メタファー
語義⑭勢いが激しくて、人の心を突き刺すほど鋭い	語義①	メタファー
語義⑮書画などが気迫がある、氣勢が感じられるさま	語義②	メタファー

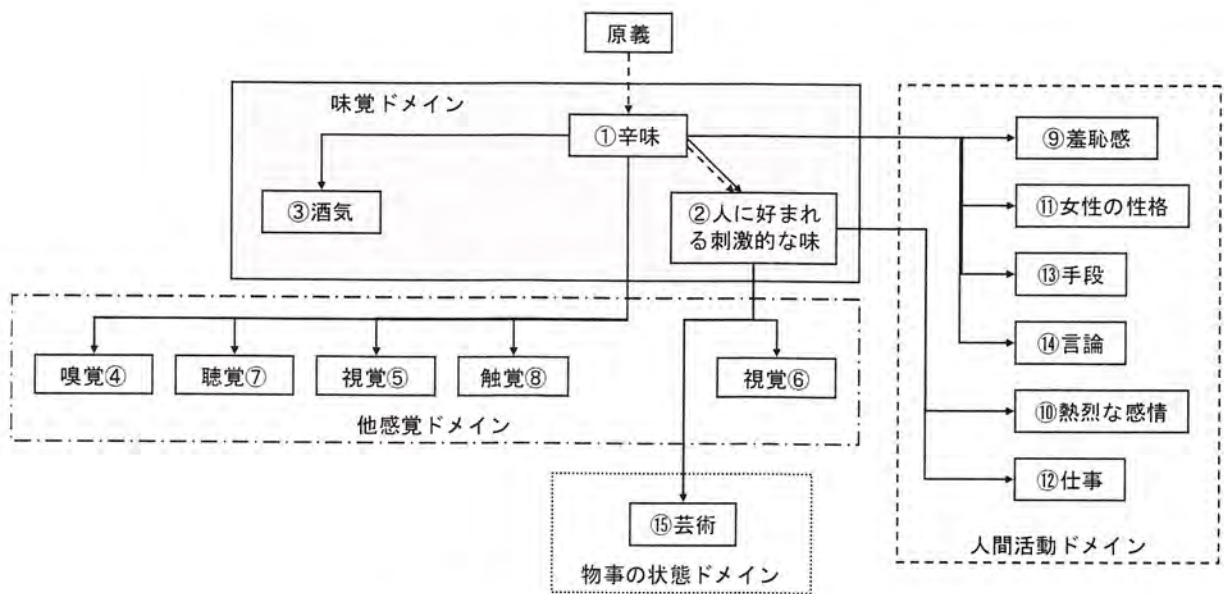


図 2-2 “辣” の意味ネットワーク

上記の略図において、太線矢印はメタファーリンクを表し、破線矢印はメトニミー

リンクを表している。語義①は多義ネットワークにおける拡張の起点となるプロトタイプの意味であると位置付けられる。そのほかの語義は全て語義①を出発点として、そこからメタファー・メトニミーの経路を通して意味が展開する。

表 2-7 と図 2-2 に見られるように、味覚形容詞“辣”の意味拡張及び意味ネットワークには次のような特徴が見られる

1. 拡張手段について、“辣”は主にメタファーによって拡張している。原義からプロトタイプの意味（語義①）と語義②<人に好まれる刺激的な味>への転用だけがメトニミーによるものである。形容詞“辣”の意味拡張においてメタファーが最も大きな役割を果たしていると考えられる。

2. “辣”の多義的な意味はほとんどメタファーとメトニミーのどちらかによって拡張されてきたものだが、語義②<人に好まれる刺激的な味>は、プロトタイプの意味（語義①<しょうが、にんにくなどの刺激的な味>）を起点にメタファー的に発展し、そして動詞“吃”“喝”と組み合わせり、“吃香喝辣”という慣用句の中で「いろいろな美味しいものを食べる」という新しい意味を生み出したのである。さらにメトニミー的に発展していき、「贅沢な食生活」の意味も内包していた。このように、語義②はメタファーとメトニミーの協業によるものだと考えられる。

3. メタファーやメトニミー以外の要素も“辣”の意味拡張に働きかけているということも明らかである。例えば、語義①から語義②<人に好まれる刺激的な味>と語義③<酒気が強いさま>への拡張では、メタファーがメインでありながらも、語義②にはメトニミーと「尺度融合」、語義③には「尺度の一元化」という要素がそれぞれ働きかけている。要するに、意味の拡張プロセスにおいては、メタファーと他の要素の協業によるものもあるということが分かる。

4. 形容詞“辣”の意味拡張プロセスにおいて、メタファーやメトニミーが重要な役割を果たしていることは自明なことである。しかし、同じメタファー・メトニミーによる派生だと言っても、必ずしも同質なものとは言えないようである。例えば、メトニミーに関わる“辣”の意味拡張には、語義①と語義②がある。しかし、意義展開パターンについて、二者はそれぞれ<結果——原因>（「辛味成分」の刺激的な感じ——刺激的感覺をもたらす具体的な物の性質）、<特性——もの>（辛味——美味しい肉食）である。また、メタファーについても同じである。要するに、メタファーやメトニミーによる意味拡張においては、意義の展開パターンが異なることもあり得る。

5. メタファーによる転義から見れば、“辣”のポジティブ性かネガティブ性が写像され、他の語義に拡張するケースが多い。従って、メタファーによる“辣”の意味拡張には、形容詞の価値評価性が深い関わりを持っていることが窺える。ここで、“辣”の各語義の評価性についての分類を次の表 2-8 で示す。

表 2-8 “辣”の各語義の評価性

プラス (+)	マイナス (-)
語義①しょうが、にんにくなどの刺激的な味	
語義②(香辛料などの)人に好まれる刺激的な味	
語義③アルコール度数が高く、口中における刺激が強い	
語義④辛そうな匂い	
語義⑤感情の動きが激しい熱い視線	
語義⑥異性の視線をひきつけるセクシーなさま	
	語義⑦激しい、きつい声
	語義⑧体のある部分が持つ激しく強く、ひりひりとする触覚的刺激
	語義⑨羞恥心などで感情が激しくなり、顔が赤くほてる様子
語義⑩感情の動きが激しく、熱烈な様子である	
語義⑪女性の性格が横暴で、筋を通さない；或いはてきぱきとしている	
語義⑫仕事ぶりがてきぱきしているさま	
	語義⑬(手口、やり方など)が残酷で、悪辣だ
語義⑭言葉や文章のスタイル・風格が勢いが激しくて人の心を突き刺すほど鋭いさま	
語義⑮書道、絵画などが気迫がある、氣勢が感じられるさま	

6. “辣”の意味拡張の方向性としては、外界の事物に対する身体体験、すなわち味覚の客観的な叙述から、主体の主観的な叙述や感情的な叙述へ拡張する方向性が見られる。

4.5 コーパスに基づく語義の頻度分布に対する定量調査

本節では、4.2と4.3の考察で再整理した「辛い」と“辣”の意味・用法に基づき、個々の語義の出現頻度を調べ、数値化することにより、各語義の使用頻度に見られる傾向性を見てみる。

4.5.1 「辛い」の頻度分布に対する定量調査

前節の考察で再整理した「辛い」の意味・用法に基づき、それぞれの語義の使用頻度を調べ、数値化することにより、その傾向性を見てみる。

4.5.1.1 調査方法とデータ

ここでは、検索アプリケーション「中納言」を利用し、BCCWJから「辛い」のKWIC³⁷データを収集し、調査を行う。具体的な調査手順は以下の通りである。

1. 形容詞「辛い」の活用形³⁸も考慮に入れ、検索条件を「語彙素」が「辛い」と設定する。
2. BCCWJ コーパス全体において、上記の条件で検索を行い、「辛い」のKWICデータを収集した。データ抽出後に、目視による確認作業を行い、「辛い」の形容詞としての用法のみを絞り出し、データを作成した。
3. 前述の4.3.5にまとめた「辛い」の意味分類に基づき、抽出された文の前後の文脈を見ながら、2によって得られたデータの意味・用法を分類した。
4. 計量言語学的手法をとることにより、各語義の頻度分布を調べ、定量化する。

4.5.1.2 調査結果

以下、BCCWJ全体において、「辛い」の各語義の使用頻度及び各意味領域における分布を示す。

表 2-9 BCCWJ における「辛い」の各語義の頻度分布

意味領域		頻度配列	「辛い」の意味・用法	出現頻度	割合%	
身体体験 1985 例 80.53%	味覚 1803 例 73.14%	1	① [味：辛味]	970	39.35%	
		2	② [味：刺激性] 833 例 33.79%	ア [香辛料]	286	11.60%
				イ [酒気]	279	11.32%
				ウ [鹹味]	212	8.60%
	エ [酸味]			56	2.27%	
嗅覚 182 例 7.38%	3	③ [匂い・香り：刺激性]	182	7.38%		
人間活動 480 例 19.47%	4	⑤ [経験：つらさ]	302	12.25%		
	5	④ [採点・評価：厳格]	178	7.22%		
計				2465	100%	

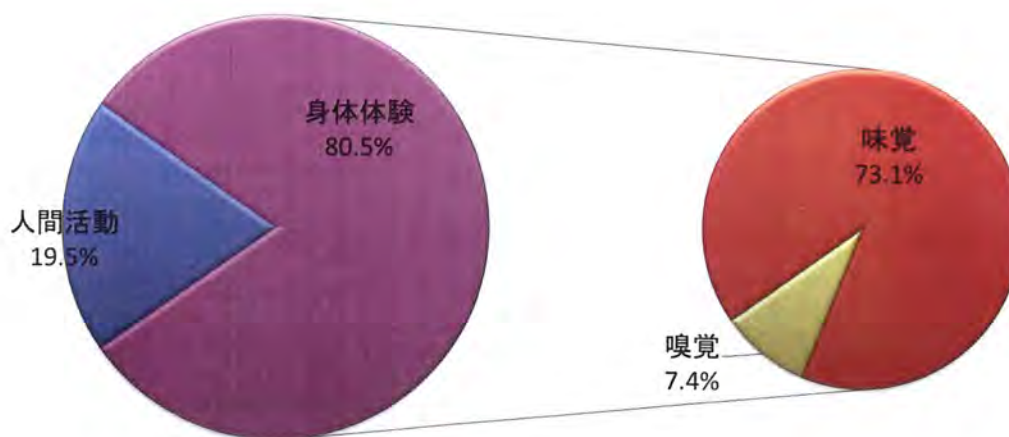


図 2-3 各意味領域における「辛い」の頻度分布

表 2-9 においては、意味領域ごとに、語義を使用頻度順に配列している³⁹。表 2-9 と図 2-3 を総合した結果、「辛い」の多義的語義の頻度分布には以下のような特徴がみられる。

1. すべての語義のうち、語義①<唐辛子のように、舌やのどを強く刺激するような味>は 970 例と比較的高い割合（全体の 4 割近く）で一番多く現れる語義である。また、語義②<口中における刺激がある基準を超え、相対的に強いさま>は、33.79%の割合で語義①に次いで 2 番目に多く使用されている。

2. 味覚の意味領域からみれば、辛味を表す語義①が最も多く使用されるが、刺激的味覚を表す語義②の用例も少なくない。その内、香辛料（語義②のア）、酒気（語義②のイ）、鹹味（語義④）、酸味（語義⑤）という順で頻出する。

3. コーバスのデータにより、「辛い」が味覚以外の共感覚への意味拡張は嗅覚への転義に限られ、出現頻度数は182例で7.4%占めている。なお、視覚・聴覚・触覚についての「辛い」の使用例は見当たらない。

4. 意味領域ごとの出現頻度から見れば、身体体験ドメインにおける意味・用法は最も多用されることは明らかである。物事の状態ドメインでは、「辛い」の出現度数は計302例で、全体の1割強を占めている。また、人間活動を表す「辛い」の意味・用法（語義⑦<きびしい。厳格である。>）の使用頻度は178例であり、常に使用される用法だと思われる。

以上、BCCWJのコーバスデータに基づき、味覚形容詞「辛い」の種々の語義の使用頻度について考察してきた。他の語義に比べて、語義①は圧倒的に使用頻度が高いことは、辞書の中の第一語義としての優位性を見せてくれた。味覚領域において、「辛い」は「辛味」のほか、香辛料の刺激的味覚、酒気、鹹味、酸味などを表わすことができ、多彩な一面を呈したが、酸味を表す使用例は僅かしか現れなかったことから、極めて稀な用法であることが窺える。また、味覚以外の感覚領域では、「辛い」は触覚、視覚、聴覚への拡張が見られなかったが、嗅覚だけに常用される。嗅覚は味覚と感覚器が隣接していることから、味覚と密接に結びついた感覚として認められる。「辛い」が嗅覚だけに拡張するのは、このことと関係すると思われる。また、味覚形容詞「辛い」は感覚表現を超えて、人間活動、物事の状態などの領域にまで転用されているが、その頻度が多くない、2つの領域への拡張例は、合わせて全体の2割ぐらゐを占めている。

4.5.2 “辣”の頻度分布に対する定量調査

前節の考察で再整理した“辣”の意味・用法に基づき、それぞれの語義の使用頻度を調べ、数値化することにより、その傾向性を見してみる。

4.5.2.1 調査方法とデータ

本節では、CCLの現代中国語データベースを利用し、単音節形容詞“辣”及びその重ね型“辣辣”の用例を収集し、調査を行う。具体的な調査手順は以下の通りである。

1. CCLの現代中国語データベース全体において、検索条件を“辣”と設定し、“辣”のKWIC

データを収集した。

2. データ抽出後に、目視による確認作業を行い、単音節形容詞“辣”と重ね型“辣辣”が使われる用例のみを絞り出し、データ¹⁰を作成した。

3. 前述の4.4.6にまとめた“辣”の意味分類に基づき、抽出された文の前後の文脈を見ながら、2によって得られたデータの意味・用法を分類した。

4. 計量言語学的手法をとることにより、各語義の頻度分布を調べ、定量化する。

4.5.2.2 調査結果

以下、CCL全体において、“辣”の各語義の使用頻度及び各意味領域における分布を示す。

表2-10 CCLにおける“辣”の各語義の頻度分布

意味領域		頻度配列	「辛い」の意味・用法	出現頻度	割合%
身体体験 5428例 85.99%	味覚 3351例 53.09%	1	① [味：辛味]	1915	30.34%
		2	② [味：美味・刺激性]	550	8.71%
		3	③ [味：酒気・刺激性]	886	14.04%
	触覚 1331例 21.09%	4	⑧ [痛み]	1331	21.09%
	視覚 666例 10.55%	5	⑥ [外見：性的魅力]	651	10.31%
		6	⑤ [視線：情熱]	15	0.24%
	嗅覚 59例 0.93%	7	④ [匂い・香り：刺激性]	59	0.93%
聴覚 21例 0.33%	8	⑦ [声・音：悲鳴]	21	0.33%	
人間活動 861例 13.64%	9	⑪ [女性の性格：横暴；有能]	400	6.34%	
	10	⑬ [手段：残酷・悪辣]	152	2.41%	
	11	⑨ [心理感覚：羞恥心]	129	2.04%	
	12	⑩ [感情：熱烈]	61	0.97%	
	13	⑫ [仕事：有能]	15	0.24%	
	14	⑭ [言論：犀利]	104	1.65%	
物事の状態 23例 0.36%	15	⑮ [書画：氣迫]	23	0.36%	
計				6312	100%

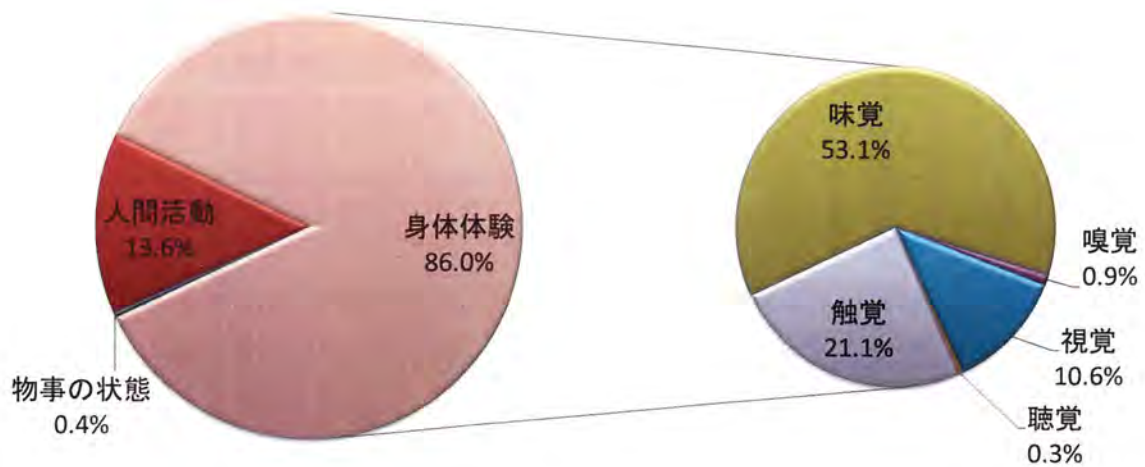


図 2-4 各意味領域における“辣”の頻度分布

表 2-10 においては、意味領域ごとに、“辣”の語義を使用頻度順に配列している¹¹⁾。表 2-10 と図 2-4 を総合した結果、“辣”の多義的語義の頻度分布には以下のような特徴が見られる。

1. “辣”の語義①は 1915 例と比較的高い割合（全体の 3 割）で一番多く現れる語義である。また、語義①のに次いで出現頻度の高い語義は、語義⑧（21.10%で 2 位）と語義③（14.03%で 3 位）である。

2. 意味領域ごとの出現頻度から見れば、人間活動という意味領域に見られる“辣”の出現頻度数は計 861 例であり、全体の 13.64%を占めている。また物事の状態という意味領域に見られる“辣”の出現頻度数は 23 例で 0.36%しか占めていない。人間活動ドメインや物事の状態ドメインへの拡張用法に比べ、身体感覚領域における意味・用法はおよそ 86%で圧倒的に高い割合を占めている。

3. “辣”が表す身体感覚の意味領域から見れば、味覚を表す語義（語義①、②、③）が最も多く使用され、次に触覚（語義⑧）、視覚（語義⑤、⑥）、嗅覚（語義④）、聴覚（語義⑦）という順で頻出する。特に、聴覚を表す語義⑦の出現頻度数は僅か 21 例であり、最も使用頻度の低い語義である。

4. 人間活動ドメインに使う意味・用法では、<女性の性格が横暴で、筋を通さない；或

いはてきばきとしている>を表す語義⑩は 6.3%の割合で、使用頻度が一番高い語義であるが、<感情の動きが激しく、熱烈な様子>を表す語義⑪は、出現頻度数が 15 例だけであり、使用例全体の 0.24%しか占めておらず、“辣”の意味用法の全体から見るとその割合は比較的少ない。

以上、CCL のコーパスデータに基づき、中国語の味覚形容詞“辣”の種々の語義の使用頻度について考察してきた。他の語義に比べて、味覚ドメイン（語義①②③）では使用頻度が高いことは、辞書の中の第一語義としての優位性を見せてくれた。また、味覚以外の感覚領域では、聴覚、嗅覚に比べ、“辣”は触覚に使う用例が高い割合を占め、すべての派生義の中で、2 番目に出現頻度が高いものである。

そして、人間活動に関する意味・用法のうち、人間の性格や仕事ぶりを表す語義⑩⑪は、一番出現頻度が高いものである。このような言語現象から、本来人間の身体的な刺激感を表す“辣”は、心的な刺激感を表わすものへと機能していくことが窺えよう。

4.6 「辛い」と“辣”の対照分析

本節では、対照言語学の立場に立って、日本語と中国語の味覚形容詞「辛い」と“辣”を比較・対照し、二者の意味・用法、語義分布、意味拡張などにおける異同について詳しく考察する。

4.6.1 意味・用法における異同

コーパス分析によってまとめられた日本語の「辛い」と中国語の“辣”の意味・用法は、表 2-11 にまとめておく。

表 2-11 「辛い」と“辣”の意味・用法比較対照表

意味領域		意味・用法		辛い	辣
I 身体体験	味覚	唐辛子の刺激的な味		○	○
		刺激的な味	香辛料などの刺激的な味。	○	○
			(香辛料などの) 人に好まれる刺激的な味。	—	
			塩けが強く感じられる状態。	○	—
			酸味の強いさま、すい。	○	—

		酒気の強いさま。アルコール度の高いさま。	○	○
	嗅覚	辛そうな匂い。	○	○
	視覚	感情の動きが激しい熱い視線。	—	○
		異性の視線をひきつけるセクシーなさま。	—	○
	聴覚	激しい、きつい声。	—	○
	触覚	ひりひりとする触覚的刺激。	—	○
Ⅱ 人間活動		きびしい。厳格である。	○	—
		苦しい、つらい、切ない経験。	○	—
		羞恥心などで感情が激しくなり、顔が赤くほてる様子。	—	○
		感情の動きが激しく、熱烈な様子である。	—	○
		女性の性格が横暴で、筋を通さない; 或いはてきばきとしている	—	○
		仕事ぶりがてきばきしているさま	—	○
		(手口、やり方など) が残酷で、悪辣だ	—	○
		言論、文章などが勢いが激しくて、人の心を突き刺すほど鋭い	—	○
Ⅲ 物事の状態		書画などが気迫がある、氣勢が感じられるさま	—	○

「辛い」と「辣」の個々の意味・用法の検討を踏まえ、二者の共通点と相違点をそれぞれ次のようにまとめておく。

(i) 共通点

1. 日本語の「辛い」と中国語の「辣」は原義とプロトタイプの意味では一致している。「辛い」と「辣」の原義は口に唐辛子などの辛いものを入れたときの痛感覚であり、認知主体の身体体験である。「唐辛子などの刺激的な味」というプロトタイプの意味は、認知主体の身体体験が対象の性質として読み替えられたものだと考えられる。「辛い」と「辣」の原義とプロトタイプの意味は<結果-原因>に基づくメトニミーによって関係づけられている。

2. 味覚領域内において、日本語の「辛い」と中国語の“辣”はいずれも意味拡張が生じている。「辛いカレー」・“辣姜辣蒜”や「辛いお酒」・“酒挺辣的”などのように、「辛い」と“辣”は刺激的味、酒気を表わす例がよくみられる。

3. 味覚を表す「辛い」と“辣”ではいずれも嗅覚を表わす共感覚的用法が見られる。

(ii) 相違点

1. 中国語の“辣”は物事の状態ドメインに拡張できる点で、日本語の「辛い」と大きく違う。

2. 中国語の“辣”は日本語の「辛い」とはプラスな価値評価性を表わす点に関して大きく異なる。中国語の“辣”は「贅沢な食生活」を代表する人に好まれる刺激的な味、異性の視線をひきつけるセクシーな様子、熱烈な感情、てきぱきしている仕事ぶり、書道・絵画の気迫など、プラス的な意味を表わす用法がある。一方、日本語の「辛い」にはこのような意味・用法は見当たらない。

3. 味覚領域内において、日本語の「辛い」に関する味覚ドメイン内の転義は中国語“辣”より豊富で、刺激的味や酒気を表すほかに、鹹味、酸味を表すこともできる。「辛い」は味噌、醤油、酢などを修飾し、「塩分や塩気が比較的に多く、酸味などが強く、口中における刺激が強い」という意味をもって、「味噌汁が辛い（塩からい）」や「酢が辛い」という表現も見られる。「酸味の強いさま」を意味する「辛い」は現代日本語においては、すでに少数であるが、もし遭遇した場合は、単純に“辣”という味と理解したら、誤解が生じてくることに違いがないのである。

一方、中国語の“辣”は、“麻辣鲜香”や“吃香喝辣”などに使われ、香辛料がもたらす“辣”という「美味な味覚」、「贅沢な食生活」という意味である。“辣”のこの意味・用法は、プロトタイプの意味のポジティブ性が写像され、メタファー、味覚領域内の「尺度融合」、メトニミーという3つのメカニズムの協業によるものだと考えられる。

4. 中国語の“辣”はまた聴覚、視覚、触覚を表すことができる。それは日本語の「辛い」が持たない意味・用法である。視覚領域への転用について、中国語の“辣”は“火辣辣的眼神”、“辣妹”、“身材火辣”などのように、感情の動きが激しい熱い視線や女性の性的魅力についても言えるが、日本語「辛い」には、似たような意味・用法はない。

5. 触覚領域への転用について、中国語の“辣”は、“骄阳火辣辣的”“火辣辣的疼”のよ

うに、熱さや痛みなど体のある部分が持つ激しく強く、ひりひりとする触覚的刺激といった状態を表すこともできる。

6. 聴覚領域への転用について、中国語の“辣”は“泼辣的叫声（激しい叫び声）”など「激しい、きつい声」についても言えるが、日本語の「辛い」には似たような意味・用法はない。

7. 人間活動ドメインにおける意味・用法に関して、日本語「辛い」の派生表現が豊富ではないが、その一方、中国語“辣”がこの意味領域において、多彩な派生表現が見られる。中国語の“辣”は激しい感情の動き、羞恥感、熱烈な愛情、女性の横暴な性格やてきぱきしている仕事ぶり、残酷で悪辣な手口、言葉について用いられる。一方、日本語の「辛い」は「辛い採点」、「辛い目」のように、評価の厳しさや苦しい、つらい、切ない経験について用いられる。これらの意味・用法について、“辣”と「辛い」は直接対応しないものである。

4.6.2 語義分布における異同

これまでの考察では、味覚形容詞「辛い」と“辣”の各語義の出現頻度を集計し、語義によって使用頻度が異なることを明らかにした。ここでは、まず「辛い」と“辣”の語義分布に見られる傾向を見てみる。

まず、二者の意味領域ごとの語義分布を見てみる。

中国語の“辣”の意味・用法は身体体験ドメイン・人間活動ドメイン・物事の状態という3つの意味領域から把握できる。日本語の「辛い」には物事の状態を表すような表現はなく、人間活動ドメインへの転用も少数であり、その意味・用法は主に身体体験ドメインに集中されている。「辛い」と“辣”の意味領域ごとの出現頻度は次の表 2-12 が示すとおりである。

表 2-12 「辛い」と“辣”の意味領域ごとの使用頻度

味覚形容詞 \ 意味領域	身体体験ドメイン		人間活動ドメイン		物事の状態ドメイン		合計
	出現頻度	割合	出現頻度	割合	出現頻度	割合	
「辛い」	1985 例	80.53%	480 例	19.47%	0 例	0	2465 例
“辣”	5428 例	85.99%	861 例	13.64%	23 例	0.36%	6312 例

「辛い」と「辣」の意味領域ごとの語義分布には以下の図 2-5 が示すような違いがある。

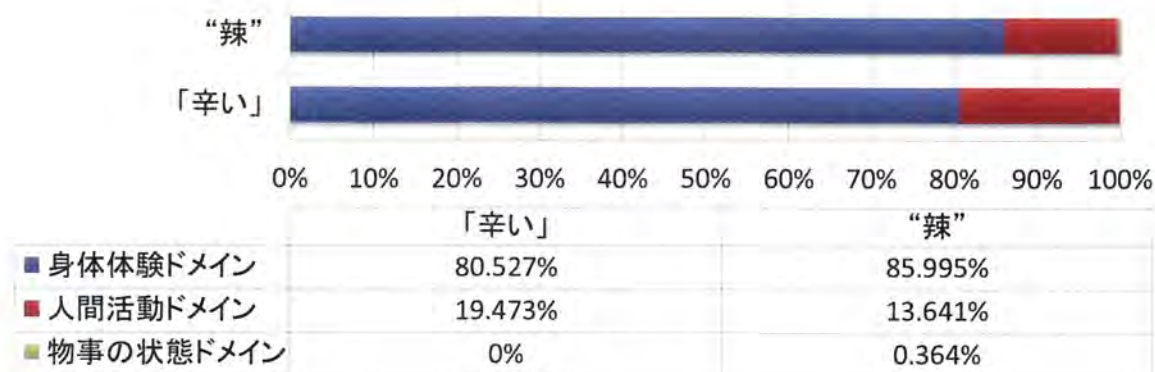


図 2-5 「辛い」と「辣」の各意味領域における語義分布の対照

図 2-5 が示すように、「辛い」と「辣」は両方とも同じ傾向を示しており、身体体験ドメインの意味・用法が圧倒的に多い。しかし、「辣」が身体体験ドメインに使用される用例の出現頻度は全体の 85.99% を占めており、身体体験に使われる「辛い」の割合 (80.53%) を上回っている。一方、人間活動ドメインについては、「辛い」の使用頻度は全体の二割未満であるが、「辣」の出現頻度より高い。このように、「辣」に比べて「辛い」は人間活動ドメインに使用される割合が高い一方、身体体験領域に用いられる割合が「辣」より低いといえよう。

次に、「辛い」と「辣」のプロトタイプの意味と派生義ごとの語義分布についてみてみよう。

プロトタイプの意味と派生義の使用頻度の比重から見れば、「辛い」について出現頻度の合計 2465 例のうちプロトタイプの意味・用法は 970 例 (39.35%)、派生義は 1495 例 (60.65%) と、全体的に派生義として使用されることが多い。また、「辣」については、出現頻度の合計 6312 例のうちプロトタイプの意味・用法は 1915 例 (30.34%)、派生義は 4397 例 (69.66%) と、プロトタイプの意味に比べて派生義の使用頻度の方が倍以上高いと見られる。

このように、日本語の「辛い」と中国語の「辣」はプロトタイプの意味より、派生義の方が多用される傾向を示している。ただし、個々の派生義の出現頻度に比べて、日本語の「辛い」と中国語の「辣」はいずれもすべての語義のうち、プロトタイプの意味が最も多く使用されている。さらに、「辛い」と「辣」のすべての語義において、出現頻度の高い語

義の上位5位を表2-13に示すと、以下のようになる。

表2-13 出現頻度上位5位の語義

順位	「辛い」		“辣”	
	語義	割合	語義	割合
1	語義① [味：辛味] (プロトタイプの意味)	39.35%	語義① [味：辛味] (プロトタイプの意味)	30.34%
2	語義⑧ [経験：つらさ]	12.25%	語義⑧ [痛み]	21.09%
3	語義② [味：香辛料]	11.60%	語義③ [味：酒気・刺激性]	14.04%
4	語義③ [味：酒気]	11.32%	語義⑧ [外見：性的魅力]	10.31%
5	語義④ [味：鹹味]	8.60%	語義② [味：美味・刺激性]	8.71%

表2-13から明らかなように、出現頻度上位5位の語義のうち、「辛い」と“辣”が共通するのはまず「辛味」を表すプロトタイプの意味・用法が挙げられ、しかもいずれの出現頻度数もトップである。また「酒気」や「香辛料の刺激的味」を表す拡張義も上位5位のグループに属している。

一方、共通するプロトタイプの意味・用法のほか、各語義の出現頻度順位に大きな差が見られる。たとえば、「辛い」では、つらい経験を表す語義⑧は2位であるのに対して、“辣”においては「痛み」を表す感覚ドメインの触覚表現は2位にのぼった。また、“辣”では一般的な「女性の性的魅力」を表す意味・用法が第4位に挙げられることに対し、「辛い」では「鹹味」を表す意味・用法は上位5位のグループに属する。

最後に、「辛い」と“辣”が感覚ドメインにおける使用頻度に目を向けてみる。

「辛い」と“辣”はメタファーに基づき、味覚という固有感覚から共感覚へと拡張されている。ここでは、感覚ごとに出現頻度を比較しながら、二語が共感覚への転用に見られる異同を明示する。

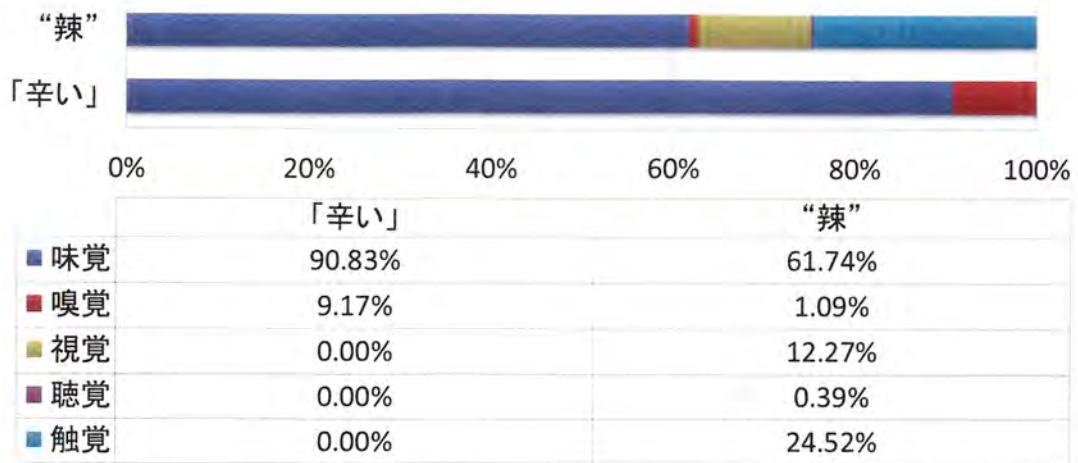


図 2-6 感覚ごとの語義分布の対照

図 2-6 が示すように、感覚領域において、「辛い」と「辣」はいずれも味覚用法を主としている。共感覚への転用の度合に関しては、「辣」は触覚>視覚>嗅覚>聴覚の順で頻出しているが、「辛い」は嗅覚への転用しか見られない。

4. 6. 3 意味拡張の認知的プロセスにおける異同

本節では、「辛い」と「辣」の意味構造及び意味拡張の認知的プロセスにおける共通点と相違点を検討したい。

まず、「辛い」と「辣」の意味ネットワークの略図を再掲する。

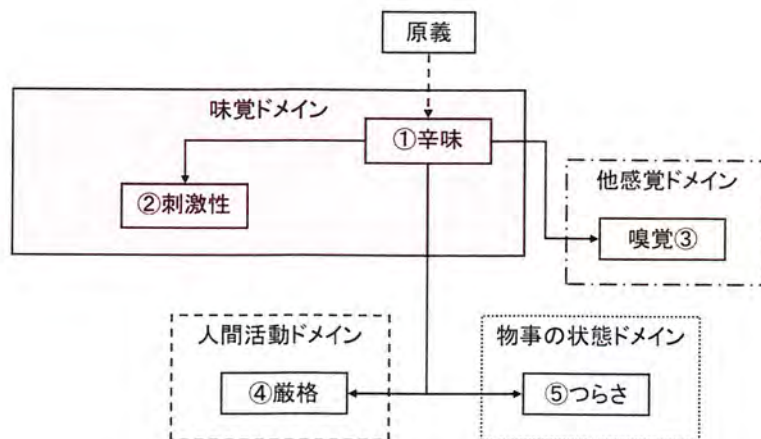


図 2-1 「辛い」の意味ネットワーク（再掲）

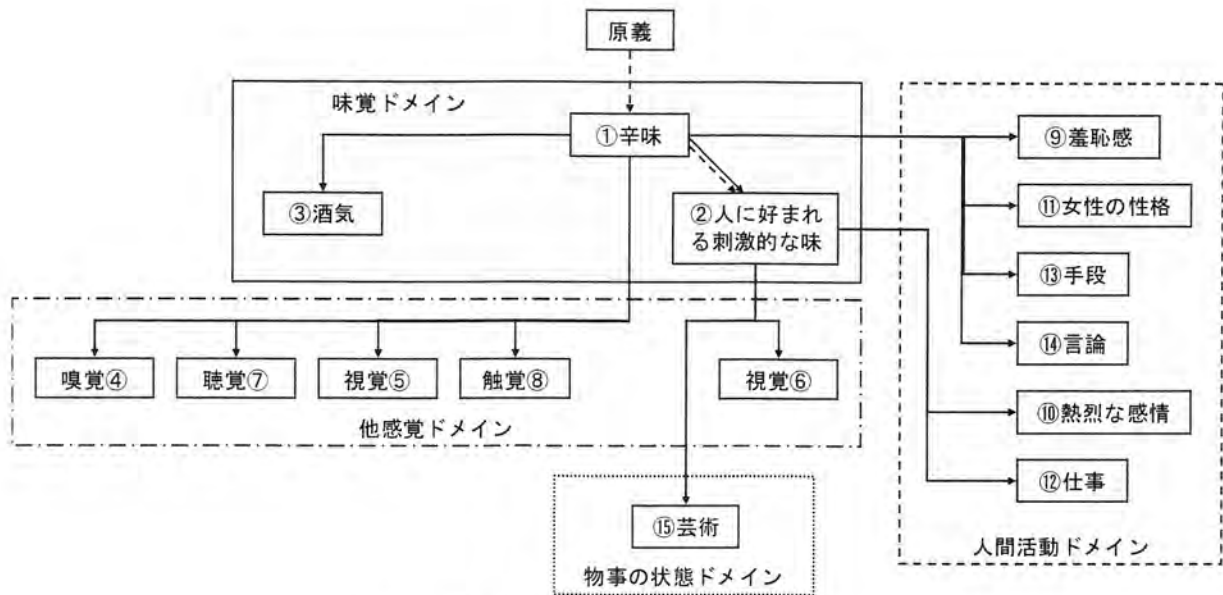


図 2-2 “辣” の意味ネットワーク (再掲)

図 2-1 と図 2-2 に示される「辛い」と“辣” の意味ネットワークの異同を次のようにまとめておく。

(i) 共通点

1. 「辛い」と“辣”のプロトタイプ的意味はいずれもその原義から<結果—原因>というメトニミーに基づき発展してきたのである。「辛い」と“辣”の原義は元来人間の身体体験を表すものだが、認知作用によってその身体体験をもたらす対象の性質として読み替えられ、メトニミーによってプロトタイプ的な意味と関連づけられる。
2. 意味拡張の動機づけに関しては、「辛い」と“辣”は主にメタファーによって拡張が生じている。「辛い」と“辣”のメタファー的な拡張はネガティブ的評価性或いは潜在されたポジティブ的評価性によるものが多い。
3. 意味拡張の方向性について、「辛い」と“辣”は外部事物に対する味覚体験から味覚以外の感覚体験へ、さらに人間の行為・精神領域へと拡張していく傾向を示している。

(ii) 相違点

1. 全体的にみれば、中国語の“辣”は日本語の「辛い」より意味が広く拡張している。中国語の“辣”は物事の状態ドメインにおいても意味拡張が派生している。しかし、味覚ドメインにおいて、日本語の「辛い」は中国語の“辣”より広く拡張している。「辛い」は

辛味を表わすプロトタイプの意味から香辛料の刺激的な味へ、それと並行して塩気・酒気・酸味へと意味が豊富に広がっていくが、中国語の“辣”はただ香辛料の美味な味と酒気だけに拡張している。

2. 日本語の「辛い」の意味ネットワークは、プロトタイプの意味を出発点として、そこからメタファー・メトニミーの経路を通して、意義が展開する。しかし、中国語の“辣”に関しては、プロトタイプの意味を出発点として意義が展開すると同時に、プロトタイプの意味から展開した意義は、そこから再びメタファー的に意義が拡張する。例えば、“辣”の語義②< (香辛料などの) 人に好まれる刺激的な味>はプロトタイプの意味から拡張されてきたものであるが、そこから更に意味が広がり、女性の性的魅力、熱烈な感情、てきぱきしている仕事ぶり、書画の気迫などのプラスの意味に展開していく。このように、日本語の「辛い」より、中国語“辣”の意味ネットワークはもっと複雑である。

3. 意味拡張のルートから見れば、日本語の「辛い」の意味展開プロセスにはメタファーとメトニミーが見られるが、中国語の“辣”においては、メタファーとメトニミーの他に、シネクドキーも現れる。要するに、日本語の「辛い」より中国語の“辣”の方が展開していくルートの種類が多い。

4. プロトタイプの意味のメタファー的展開に関しては、日本語の「辛い」は主にネガティブ性に基づきメタファー的に拡張している。中国語の“辣”はネガティブ性によるメタファーのほか、潜在のポジティブ性と強弱を表わす程度性に基づくメタファー的意義展開もみられる¹²⁾。このように、中国語の“辣”のメタファー的意義展開には、そのプロトタイプの意味の価値評価性或いは強弱が写像されているのに対して、日本語の「辛い」の場合は価値評価性だけが関与しているようである。

第5章 コーパスに基づく日・中味覚形容詞の考察 ——「苦い」と“苦”

本章では、認知言語学の視点から、『日・中対訳コーパス』、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』及び《北京大学汉语语言学研究センター語料庫》など大規模な言語データベースから味覚形容詞「苦い」と“苦”の使用例を収集・分析し、その意味・用法を対照しながら、考察を行う。

5.1 辞書における「苦い」と“苦”の意味記述

本節では、日・中両言語の辞書における味覚形容詞の意味記述に基づき、「苦い」と“苦”の意味項目を対照しながら、考察を行う。

5.1.1 国語辞典における「苦い」の意味記述

日本語の「苦い」の意味や用法が、第三章 3.1.1.1 で挙げた5種の国語辞典でどのように記述されているか、見てみよう。(以下に引用する各辞書における「苦い」の意味の説明はすべて原典通りである。ただし、紙幅の関係上、各意味項目の後ろに掲載されている用例は省略する。また、考察する際の便宜上、意味項目の番号付けを統一させている。原典には振り仮名が付けられているが、ここでは省略する。)

(1) 『日国』

- ①味覚について、舌を刺激し、不快な感じのあるさま。
- ②①の味に似て、不快である。面白くない。不機嫌である。いとわしい。にがにがしい。
- ③つらい。くるしい。また、痛み、悔いなどを伴った気持であるさま。

(2) 『学研』

- ①(食物などを口に入れたとき)顔をしかめたくくなるような味を舌に感じる。④熊の胆、さんまの腸、濃すぎるお茶などの味は苦い。④抽象的なものにもいう。
- ②不快である。不機嫌である。
- ③(あとで思い出すのもいやなくらいに)つらい。くるしい。

(3) 『新明解』

- ①ビールや、ミルクや甘味料が一切入っていないコーヒー・チョコレートなどを口にしたら(共通して)感じられる味だ。(一般に子供には不快な味だと感じられるが、成長す

るにつれて、アユやサンマの内臓・フキノトウなどの苦い味がうまみとして感じられることがある。)

②初めて経験した時には不快に感じられるが、後になってみれば自分の未熟さや思慮に足りなさなどがわかって、将来の戒めとなる様子だ。

(4) 『岩波』

①濃い緑茶を口にふくんだ時に舌の根の方で感ずるような、(普通には不快な)味である。

②苦い①の味に似て、いやだ。

i) 非難したくなる気持ちで不機嫌だ。

ii) 二度とは味わいたくないほど、つらい。身にしみて苦しい。

(5) 『大辞泉』

①舌を刺激し、口がゆがむような嫌な味である。→五味(ごみ)

②不快である。おもしろくない。にがにがしい。

③つらくて苦しい。その事を考えたり思い出したりするのも嫌である。

上記5つの国語辞典の意味記述をまとめると、日本語の「苦い」の各語義では

①熊の胆、さんまの腸、濃すぎるお茶などを口にした時に(共通して)感じられる(普通には不快な)味だ。

②不快である。面白くない。不機嫌である。いとわしい。にがにがしい。

③つらい。くるしい。

など3項目(表3-1)があげられる。

表3-1 「苦い」について5つの国語辞典の意味記述

「苦い」の意味項目	日国	学研	新明解	岩波	大辞泉
①熊の胆、さんまの腸、濃すぎるお茶などを口にした時に(共通して)感じられる(普通には不快な)味だ。	①	①	①	①	①
②不快である。面白くない。不機嫌である。いとわしい。にがにがしい。	②	②	②	② i	②
③つらい。くるしい。	③	③	—	② ii	③

*考察する際の便宜上、意味項目の番号付けを統一させている。

5.1.2 中国語の辞典における“苦”の意味記述

本節では、第三章 3.1.1.2 で挙げた 5 つの中国語の辞典を利用し、中国語の“苦”の意味記述を調べ、整理してみる。(以下に引用する各辞書における“苦”の意味の説明はすべて原典通りである。考察する際には、便宜上、意味項目の番号付けを統一させている。)

(1) 《古漢》

- ①苦菜。⑤味道苦，与“甜”相对。
- ②劳苦，辛苦。⑦刻苦。
- ③痛苦，困苦。⑧使痛苦。
- ④苦于，为……所苦。
- ⑤困辱，折磨。
- ⑥悲悯，怜悯。
- ⑦竭力，极。
- ⑧过分，多。
- ⑨久。
- ⑩急。

(2) 《辞海》

- ①五味之一。今指如胆汁或黄连的味道。
- ②苦菜，即荼。
- ③刻苦；勤劳。
- ④困苦；忧苦。
- ⑤苦于。
- ⑥竭力；极。
- ⑦急。

(3) 《现汉大》


- ①五味之一。像胆汁或黄连的味道。与“甘”相对。
- ②痛苦；困苦。
- ③忧伤；愁苦。
- ④艰难而繁重。
- ⑤苦于，困于。
- ⑥辛勤；刻苦。


⑦极力；竭力。


⑧副词。尤甚，很。表示程度。

(4)《现汉》


①像胆汁或黄连的味道（跟“甘、甜”相对）。


②难受；痛苦。

③使痛苦；使难受。

④苦于。

⑤有耐心地；尽力地。

⑥<方>除去得太多；损耗太过。

⑦姓。

(5)《新华》

①像胆汁或黄连的味道。与“甜”“甘”相对。

②痛苦。

③辛苦；使辛苦。

④因某种原因而感到痛苦或困难。

⑤副词。竭力地；辛勤地。

上記5つの中国語の辞典の意味記述をまとめると、中国語の“苦”の各語義では

①苦菜。

②像胆汁或黄连的味道。与“甜”“甘”相对。

③劳苦，辛苦；刻苦。

④痛苦；困苦。使痛苦。

⑤苦于，为……所苦。

⑥悲悯，怜悯。

⑦极力；竭力。

⑧过分，尤甚，很。表示程度。

⑨久。

⑩急。

⑪姓氏。

などの11項目（表3-2）が記述される。

表 3-2 “苦” について 5 つの中国語の辞典の意味記述

“苦” の意味項目	古漢	辞海	現漢大	現漢	新华
①像胆汁或黄连的味道。与“甜”“甘”相对。(熊の胆、黄连、濃すぎるお茶などを口にした時に(共通して)感じられる(普通には不快な)味だ。)	①④	①	①	①	①
②苦菜。(ノグシ・野芥子)	①	②	—	—	—
③劳苦, 辛苦; 刻苦。(大変な、苦勞する)	②	③	⑥	—	③
④痛苦; 困苦。(気持ち・生活・仕事などが苦しい、つらい、貧しい。苦しめる、苦勞をかける。)	③⑤	④	②③④	②③	②④
⑤苦于, 为……所苦。(…に苦しむ。)	④	⑤	⑤	④	—
⑥悲悯, 怜悯。(哀れむ。)	⑥	—	—	—	—
⑦极力; 竭力。(辛抱強く、極力、一生懸命に。)	⑦	⑥	⑦	⑤	—
⑧过分, 尤甚, 很。表示程度。(度を越している、極端である、ひどい。)	⑧	—	⑧	⑥	⑤
⑨久。(時間が長い、久しい。)	⑨	—	—	—	—
⑩急。(差し迫っている、急を要する。)	⑩	⑦	—	—	—
⑪姓氏。(名字。)	—	—	—	⑦	—

*考察する際の便宜上、意味項目の番号付けを統一させている。

5.1.3 「苦い」と“苦”の意味記述の対照

日・中両言語の辞書における「苦い」と“苦”の意味記述には、主に次のような特徴が見られる。

1. 辞書によって、意味立項の配列は多少異なっているが、「熊の胆、濃すぎるお茶などを口にした時に(共通して)感じられる(普通には不快な)味だ」「像胆汁或黄连的味道」を第一義として挙げている点では各辞書が一致している。

2. 品詞性から見れば、“苦”は主に形容詞としての役割を果たしているが、《古漢》の語義③の㊦、《現漢》の語義③、《新华》の③に記載されている例が示すように、動詞的な用法もある。この場合、“苦”は“使……痛苦; 使……辛苦(人を苦しめる)”という使役の意味を持つ。それに対し、「苦い」の意味記述は、主に形容詞に集中して、ほかの用法は

あまり言及されていなかった。

3. 各辞書による「苦い」と“苦”の意味規定から、「苦い」と“苦”は味覚を表わす本来の語義①以外には、味覚以外の共感覚、人間の心理感覚、人間の動作の様子などの意味拡張が生じている。

4. 中国語の“苦”は基本的にはプラス的评价性を帯びていないようであるが、日本語の「苦い」はプラス的评价性とマイナス的评价性を両方とも帯びているようである。特に、『新明解』では、味覚を表す「苦い」について、「普通には不快な味であるが、人が成長するにつれて、コーヒー・フキノトウなどの苦い味がうまみとして感じられることがある」と述べ、さらに、語義②では、「苦い」不快感について、「初めて経験した時には不快に感じられるが、後になってみれば自分の未熟さや思慮に足りなさなどがわかって、将来の戒めとなる様子だ」といい、「苦い」には一般的に認められたネガティブ性のほかに、潜在的なポジティブ性を持つこともうかがえる。

辞書における「苦い」と“苦”の各意味記述を対照してまとめると、表3-3のようになる。

表3-3 「苦い」と“苦”の意味記述の対照

意味記述	「苦い」	“苦”
味覚①熊の胆、黄連、濃すぎるお茶などを口にした時に（共通して）感じられる（普通には不快な）味だ。	○	○
②不快である；面白くない；不機嫌である；いとわしい；にがにがしい。	○	—
③苦しい、つらい。苦しめる。	○	○
④大変な、苦勞する。	—	○
⑤…に苦しむ。	—	○
⑥辛抱強く、極力、一生懸命に。	—	○
⑦度を越している、極端である、ひどい。	—	○
⑧哀れむ。	—	⊕
⑨時間が長い、久しい。	—	⊕
⑩差し迫っている、急を要する。	—	⊕

⑪苦菜（ノゲシ・野芥子）。	—	㊦
⑫名字。	—	㊧

*㊦印を付けるのは古漢語（古代の中国語）における意味項目であり、㊧印は固有名詞のことを表す。

日・中両言語の辞書における味覚形容詞「苦い」と“苦”について、共通した語義には、①熊の胆、黄連、濃すぎるお茶などを口にした時に（共通して）感じられる（普通には不快な）味だ。③苦しい、つらい。苦しめる。などの2項目しかあげられない。

中国語の“苦”では「苦い」の意味項目②不快である；面白くない；不機嫌である；いとわしい；にがにがしい。に相当する語義記述が存在しない。

一方、「苦い」の意味項目の中に、“苦”の意味項目④大変な、苦勞する。⑤…に苦しむ。⑥辛抱強く、極力、一生懸命に。⑦度を越している、極端である、ひどい。⑧哀れむ。⑨時間が長い、久しい。⑩差し迫っている、急を要する。⑪苦菜（ノゲシ・野芥子）。⑫名字。と対応できるものは見当たらない。

また、中国語の“苦”について、意味項目⑧哀れむ。⑨時間が長い、久しい。⑩差し迫っている、急を要する。⑪苦菜（ノゲシ・野芥子）。などは古代中国語に限られて、意味項目⑫名字は固有名詞として使われているが、現代中国語での使用例は極めて稀である。

つまり、辞書の意味記述により、①熊の胆、黄連、濃すぎるお茶などを口にした時に（共通して）感じられる（普通には不快な）味だ。③苦しい、つらい。苦しめる。などの意味を表す時、日本語の「苦い」と中国語の“苦”との直接翻訳は可能であるが、それ以外の場合は、翻訳に問題が発生する可能性が十分あると思われる。以下、コーパスの実例を見ながら、考察してみよう。

5.2 日・中対訳コーパスに基づく「苦い」と“苦”の意味・用法の考察

本節では、日・中両言語の辞書に述べている意味項目を参考にし、日・中対訳コーパスから収集した用例を分析しながら、「苦い」と“苦”の意味・用法や対訳関係のありさまを考察する。

5.2.1. 対訳関係が成立可能な意味・用法についての考察

①薬や毒などの、舌を刺激し、快くない味。

辞書の意味記述によると、日本語の「苦い」と中国語の“苦”は、味覚形容詞として、

同じ「熊の胆、黄連、濃すぎるお茶などの、舌を刺激し、快くない味」を第一義として挙げている。対訳の用例をもって確認してみよう。

(1) 実はゆうべ茶を買ってくれと頼んで置いたのだが、こんな苦い濃い茶はいやだ。

訳：实际上，这茶是我昨天晚上托他买来的。可是，这样又浓又苦的茶我不爱喝。

(2) 苦瓜为什么很苦？

訳：ゴーヤはなぜ苦いのか。

用例の「苦い濃い茶」、「苦瓜很苦」はお茶や野菜などの飲食物の味を表している。そのほか、「胆汁」や、「お薬」や、「コーヒー」などを修飾することもでき、そのまま、直訳すればよいのである。

② 煙草や、槐の枝や、艾の葉などの不愉快な匂い。

(3) 紙烟有一种苦臭的霉味。

訳：卷タバコは苦くカビ臭い。

例(3)から分かるように、「苦い」と“苦”が匂いを修飾し、煙草や、槐の枝や、艾の葉などの不愉快な匂いを表している。このような嗅覚における転用例はそのまま互いの言語に訳せばよいであろう。

③ [表情などが] 悲しい、快くない。

(4) 父は苦い顔をした。

訳：父亲露出一脸苦相。/父亲开始愁眉苦脸了。

日本語「苦い」と中国語“苦”は両方とも表情を修飾するのに用いられる。

しかし、例(5)と例(6)のように、「苦い顔」は必ずしも「苦脸」と訳されるとは限らないのである。

(5) 少年は青年の顔を仰いだが、青年はそれを認めかねるように苦い顔をした。

訳：少年仰望着青年的脸，可青年象辨认不出对方来似的，显得很难过。

(6) 先生は苦い顔をした。

訳：医生显出了为难的神色。

用例から分かるように、「苦い顔」は「苦脸」と訳されるほか、また、前後文の意味によって、“难过(悲しい)” “为难(困った)”などに翻訳されている。

④生理的に痛いこと。

中国語の“苦”は肉体的な痛みを表すことができる。

(7) 他们受尽了污辱、谩骂和皮肉之苦的斗争。

訳：彼らは侮辱・悪罵や肉体を痛めつける闘争に遭った。

(8) 他知道，任何申辩只能招致皮肉受苦，他缄默了。

訳：彼はどんな弁明もただ痛いめに遭うだけなのを知っていたので、沈黙した。

また、中国語において“痛苦”ということばで表しているのに対し、日本語では「苦痛」ということばを用いているが、「*苦い痛み」という表現はないようだ。

⑤精神的に苦しい、或いは気分的に不愉快な心理的感覚

主体に快くない感覚を与える事象を表す「苦い」は中国語“苦”と共通しているが、訳す際には、必ずしもそのまま訳されているとは限らないのである。

(9) 金涛和徐悦悦带给怀月儿的，是幸福还是痛苦？

訳：金濤と徐悦悦が懐月児にもたらしたものは幸福だろうか、苦痛だろうか。

(10) しかし、二十数年の長い努力の後、溢れるような期待は苦い失望へと変わっていった。

訳：然而，20余年不懈努力的结果，满心期待化为苦涩的失望。

(11) すなわち、対支二十一カ条要求がアメリカをはじめとする列強の反対を呼びおこし、中国における排日運動を始めさせただけで、結局なにも得ずに終わったという苦い経験への反省がそこにはあった。

訳：这就是说，对华二十一条的要求只是引起了以美国为首的列强的激烈反对，和激起了中国的排日运动，结果，以一无所获而告终。和平外交就是对这种痛苦经验的反省。

(12) 漱石が一貫して、人間の真実の生き方を追求し、近代日本の内部にある虚偽性をえぐり出して行った背景仁、幼い日の苦い体験が生きている。

訳：在他那对于真正人生的一贯追求和对于近代日本内部的虚伪性的揭露的背景之中，可以明显地看出他少年时代痛苦经历的身影。

(13) 在毛泽东时代，中国那些备受瞩目的经济发展计划，有过数度遇挫的苦难历史。

訳：中国には、毛沢東時代に、いくども国民に示した経済発展計画が頓挫した苦い歴史がある。

(14) ぬくもり系男子”でおなじみ、俳優・千葉雄大も苦い過去を持つひとり。

訳：以暖男形象为大众熟知的演员千叶雄大也有自己苦涩的过往。

(15) 苦い真実は甘い嘘にまさる。

訳：苦涩的真相亦胜过甜蜜的谎言。

例のように、「苦い」は「失望」、「歴史」、「過去」、「真実」などの事実や事象を表す言葉と結びつき、大体の場合は“痛苦”、“苦涩”と訳せばよいのであるが、「生理的に痛いこと」という意味ではなく、「心を感じる苦しみや痛み。」のことをいい、語義④と大別すべきであると思われる。

しかし、「苦い現実」の場合、「苦い」が表している意味は中国語“苦”にも内包されているが、固定の組み合わせとして、“痛苦的现实 (CCL の検索結果：14 例)”、“苦涩的现实 (CCL の検索結果：1 例)”“艰苦的现实 (CCL の検索結果：1 例)”などはあまり見られない表現であろう。対訳コーパスのデータから見れば、「苦い現実」は“残酷的现实「残酷な現実」(CCL の検索結果：118 例)”に訳したほうが自然であろう。

(16) ただ、その原料のカカオを作る途上国の農家や労働者たちは、想像を絶するほどの“苦い”現実にさらされている。

訳：然而，在许多发展中国家，生产可可原料的农民和工人必须面对超乎人们想象的残酷现实。

(17) 走苦至此，沉重至极！我实在无勇气直面这惨痛、苦涩的现实（唯一の例），我也不忍心去揭开轻柔面纱后边的疮疤。

(18) 还有其他基于艰苦的现实（唯一の例）而产生的恐惧和希望。

⑥相手が手ごわい、戦いが長く続いて激しい

もう一つの使い方においても両者は共通している。それは「相手が手ごわい、戦いが長く続いて激しい」という意味で使われる場合である。両方とも「苦戦（苦战）」という表現が現れているが、「苦い戦い」は“惨烈的激战”と理解すべきだろう。

(19) 来期に苦戦しないように、もっと大口のクライアントを増やしておいた方がよさそうですね。

訳：为了下一期不进行苦战，可能增加更多的大客户会更好吧。

(20) 第二次世界大戦の中で最も苦い戦いのいくつかは、この列島で発生した。

訳：二战中机场最惨烈的战役，就发生在这个群岛。

5.2.2 対訳関係が成立しかねる意味・用法についての考察

まず、中国語の“苦”に見られない日本語の「苦い」の使い方を見てみよう。

⑦ (音声など) 快くない、不愉快だ

(21) 「タール・ヴァロンまで行き着くには体力をつけないと」マツトは低く苦い笑い声を漏らした。

例(21)は、笑い声を修飾している。ここでの「苦い」は快くない、不愉快であるという意味をもっている。この笑い声を聞いたとき、普通の人間は苦しく、不機嫌に感じられる。類似の表現は中国語の中にも存在する。

(22) 老秦摇摇头，苦笑一声，没说什么。

しかし、日本語の「苦い」の聴覚への転用は、「笑い声」についての個別の言語現象だけでなく、様々な場合に普遍的に用いられる。「苦い曲」を「悲凉的曲子」に、「苦い響き」を「悲怆的声响」に、というふうに言い換えられる。

次に日本語の「苦い」に見られない中国語の“苦”の使い方を整理し、さらに、その具体的な訳し方を示そう。

⑧ 身体的に寒いこと

中国語の“苦”はまた、身体的に寒いと感じる場合に用いられる。

(23) 北方苦寒地区

訳：北方の厳寒地域

⑨ 大変な、苦勞する

中国語の“苦”は「大変な、苦勞する」という意味で、様々な場合に普遍的に用いられる。

(24) 妈妈不必自己苦了。

訳：お母さんは自分で苦勞をしなくてもいいんだ。

(25) 中国的革命是伟大的，但革命以后的路程更长，工作更伟大，更艰苦。

訳：中国の革命は偉大であるが、革命後の道のりはもっと長く、その仕事はもっと偉大であり、もっと困難である。

(26) 他们常常同我说起，当初他们一路出来，怎样的辛苦，危险；他们怎样的一块逃警报，有好几次几乎炸死；K病了好几场，有一次患很重的猩红热，几乎送了命。

訳：ふたりはよくわたしに話したのです。北京から脱出してくる途中、どんなに辛くて、危なかったか、どんなにいっしょに警報で逃げて、何度も爆撃で死にそうになったとか、Kがよく病気をして、一度は重い猩紅熱にかかって、命を落としそうになったとか。

(27) 蓝花花是个胆大又苦命的女子。

訳：藍花花は勇敢だが哀しい運命にある娘のことだ。

⑩辛抱強い、力を尽くす

「辛抱強い、力を尽くす」という意味を表す対訳の用例をしてみる。

(28) 猫鼠合鸣之中她苦苦地挣扎，却总也挣不脱，最后不知是谁，不知是谁在她枕边嘿地冷笑了三声，又象是对着她的耳朵吹气，她大叫一声，睁开眼睛，泪流满面，冷汗布满了全身。

訳：猫と鼠の一大競鳴の中で、彼女は死物狂いで足掻いたが逃げだせない。最後に誰かが彼女の枕元でへへへと薄気味悪く冷笑し、耳元に息を吹きかけた。大声を挙げて彼女は目を開いた。顔中涙に濡れ、全身冷汗でグッショリだ。

(29) 当爸爸激昂慷慨而又苦口婆心不厌其烦地给倪萍讲挺起胸来、挺起腰板来的重要的时候，她的反感不下于妈妈。

訳：パパがむきになって飽きもせずクドクドと、胸を張り背筋を伸ばして歩くことの重要性を言いたてる時、倪萍の反感はママのそれにけして劣ることはない。

⑪一生懸命である、まじめな

中国語の“苦”は、「一生懸命である、まじめな」という意味で一般的に用いられている。

(30) “书到用时方恨少，事非经过不知难”，“忠厚传家久，诗书继世长”，“家有良田千顷，不如薄艺随身”，然后是一个又一个苦读的故事。

訳：「書は用うる時その少なきを恨み、事は体験せざる時その難しさを知らず」、「忠厚家に伝わること久しく、詩書世に継がること長し」、「家に千頃の良田ありとも、薄芸を身につくりに如かず」その後は刻苦勉強の物語をつぎつぎにしてくれる。

(31) 虽然，方丹在刻苦学习，各方面都不肯落在伙伴们后面，但是，她缺少集体生活，缺少思想进步方面的引导。

訳: もちろん方丹は一生懸命勉強している。でも彼女には思想を進歩させる手伝いをする人々や集団生活が欠けている。

(32) 在灯下, 她曾一遍又一遍地刻苦学习过毛主席著作, 认真地写下了一本又一本的学习心得; 在灯下, 她曾一次次奋笔疾书, 写出一篇篇深刻有力的批判文章, 刻出一份份激动人心的传单号外。

訳: 燕寧は、同じ明かりの下で毛主席の著作を熱心に勉強し、理解したことを書き留め、筆を奮って次々に力強く深みのある批判文を書き、心をゆさぶるピラや号外を刷り上げた。

⑫憎たらしい

中国語の“苦”は「憎たらしい」という意味を表すことができ、“苦毒的言語”は「憎たらしい言葉」、「憎しみの言葉」と翻訳されるのであろう。日本語の「苦い」に見られない用法だが、前章4.2.4味覚形容詞「辛い」の語義④と通じている部分がある。

⑬まずしい、貧乏だ

「まずしい、貧乏だ」という意味で用いられる中国語の“苦”の用例を見てみよう。

(33) 但当一个贫苦的小孩趔了“财神爷”，敲着他们的院门，高声喊叫送财神爷来了！

訳: 貧しい男の子が「福の神」の画をわんさと抱えて家の門を叩き「福の神のご到来」と叫んだ。

(34) 他的心头闪过一种惋惜之情，想起挣扎终生，在黎明前倒下去的乐二叔，还有怀着深仇大恨，埋在三尺黄土下的父母和无数的穷苦人。

訳: 一瞬、無念の思いがかれの胸を横切った。生涯をあげきつづけ、夜明けを前にして働いた楽二叔を想い、憎しみの念に燃えながら、どまんじゅうの三尺したに埋もれた父母と無数の貧乏人を想った。

5.2.3 本節のまとめ

本節では、日・中対訳コーパスを利用し、日本語の「苦い」と中国語の“苦”における意味・用法の共通点と相違点、両語の対訳関係などについて具体的に考察してみた。その結果を表3-4にまとめておく。

表 3-4 「苦い」と“苦”の対訳関係

対訳関係が成立する場合	意味記述	「苦い」	“苦”
	①薬や毒などの、舌を刺激し、快くない味。	ゴーヤは苦い	苦瓜苦
	②煙草や、槐の枝や、艾の葉などの不愉快な匂い。	苦いような臭い	苦臭
	③ [表情などが] 悲しい、快くない。	苦い顔	(愁眉) 苦臉
	④生理的に痛いこと	痛苦	苦痛
	⑤精神的に苦しい、或いは気分的に不愉快な心理的感觉	苦い経験	痛苦经验
		苦い現実*	(痛苦) 残酷的现实
	⑥相手が手ごわい、戦いが長く続いて激しい	苦戦	苦战
対訳関係が成立し兼ねる場合	I. 「苦い」の“苦”以外の中国語訳		
	意味記述	「苦い」	中国語
	⑦ (音声など) 快くない、不愉快だ	苦い曲	悲涼の曲子
	II. “苦”の「苦い」以外の日本語訳		
	意味記述	日本語	“苦”
	⑧身体的に寒いこと	ひどく寒い	苦寒
	⑨大変な、苦勞する	辛い	苦
		困難	辛苦
	⑩辛抱強い、力を尽くす	哀しい運命	苦命
		飽きもせず、何	苦口 (婆心)
		度も言う	苦劝
	⑪一生懸命である、まじめな	死物狂いで	苦苦地 (挣扎)
		一生懸命	苦读
⑫憎たらしい	刻苦 (やや硬い表現)	刻苦	
	憎たらしい言葉	苦毒的言语	
⑬まずしい、貧乏だ	貧しい男の子	贫苦的小孩	

表 3-4 から簡単に分かるように、「苦い」と“苦”の対訳関係から見れば、「苦い」と“苦”の意味派生には顕著な相違が見られる。それはもともと不快な味覚を表す「苦い」は多く

のマイナスの意味へ派生していることに対し、中国語“苦”はプラスとマイナスの両方への意味派生が示されている。

次の節では、引き続き認知言語学の視点から、「苦い」と“苦”の差異をもたらす理由を探ってみる。

5.2 認知言語学的アプローチによる「苦い」の意味拡張プロセスの分析

本節では、認知意味論に依拠し、味覚形容詞「苦い」の各意味項目の意味関連を明らかにし、またそれぞれがいかなる原理によって派生したのかなどについて検討する。

ここでは、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』から「苦い」の実例を収集・分析することによって、「苦い」の意味拡張を検討する。以下において、出典を明記していないものは、すべてBCCWJからのものである。

5.3.1 プロトタイプの意味

語義①：薬や毒など苦味成分の、舌を刺激し、口がゆがむような味

「苦い」の意味拡張プロセスを追うに当たり、まずはその基点となるプロトタイプの意味を確認することから始める。

日本語の「苦い」は味覚を表し、薬や毒など苦味成分を持つもの（典型的には黄連おうれんや胆汁たんじゅうなど）が口中における味を意味する。一般的に快くなくて嫌な味として認識されている。人は胆汁や黄連のような薬物や毒物などの苦味成分の刺激を舌に受けると、「苦い」と感じる。要するに、人間の味覚の1種である苦味を表すのが「苦い」の本来の姿であり、この意味こそ「苦い」の原義だと思われる。

前述した通り、「苦い」などのような味覚形容詞は、味の感覚内容そのものをことばによって述べることは難しいため、その味とする具体的な物の性質によって示すのが手取り早い方法である。本研究では、「苦い」のプロトタイプの意味を「薬や毒など苦味成分の、舌を刺激し、口がゆがむような味」とする。「苦味成分をなめたときに生じる味覚」という原義が「苦い」のプロトタイプの意味とされていない。この意味での「苦い」は、舌で舐めるだけですぐ感じ取られる、具体的な、単純な属性であって、他の意味はここから派生したものとして位置づけることができる。

「苦味成分の持っている味」は「苦い」という味覚を引き起こす原因であり、苦味という味覚はその味によって引き起こされた結果だと考えられる。二者の間にはく結果——原

困>というメトニミー関係が成り立つ。

(35) 彦左衛門は、苦い薬を飲まされたような顔で言いました。

(36) 実はゆうべ茶を買ってくれと頼んでおいたのだが、こんな苦い濃い茶はいやだ。

(37) ラメルブルターニュ地方特産の塩とバター、砂糖を使ったキャラメル。甘すぎない、ほろ苦い味。

例 (35)、(36) の「苦い薬」、「苦い濃い茶」は薬や植物の味を表している。そのほか、「胆汁」や「毒物」などの味を修飾することもできる。ここの「苦い」は「舌を刺激し、口がゆがむような嫌な味」というおいしくない味として使われているが、感覚される対象物によって、その「苦い」という味覚は階層性を成している。

つまり、プロトタイプの意味としての「苦い」は、「苦味」という尺度の目盛りの上を自由に上下するものである。このとき、「苦い」は小刻みな程度の段階が考えられるため、自由な尺度性をもっているものだと見てもよい。

一方、例 (37) の「甘すぎない、ほろ苦い味」はわずかに苦味を感じる、という感覚を表す言葉であり、美味しい味覚とされている。本来おいしくない味とされていたが、いまや、チョコレート、クッキー、コーヒー、ビールなど、苦味を売り物にする商品も数多くある。もはや、甘いだけでは物足りなく、甘さをおさえ、苦味のきいた大人の味がはやされているときえ言えよう。したがって、プロトタイプの意味としての「苦い」は評価する人や評価される対象によって、異なる価値評価が付与されることが考えられる。

5.3.2 共感覚ドメインへの転義

日本語の味覚形容詞「苦い」は味覚以外の共感覚にも意味拡張している。ここでは、「苦い」の嗅覚・視覚・聴覚領域への転用を見してみる。

(1) 嗅覚への転用

語義②：刺激的な匂い

(38) 苦い煙草の味が口の中にひろがって、信介の気分を一層重苦しいものにした。

(39) ワキに汗をかくと、苦いにおいがする。

(40) このゴボウを細かく切って干したものを焙煎するとタンポポコーヒーができる。ほろ苦い香りに根っこを掘りあげた苦労も手伝って、なんとも言えない味わい深い一杯となるだろう。

例 (38)、(39)「苦い煙草の匂い」、「ワキの苦いにおい」で示されているように、味覚形容詞である「苦い」は嗅覚の表現としても使われている。煙草、槐の枝や艾の葉、そして腋臭などの攻撃的に不快である特徴的な匂いを表している。「苦い」という味覚は、多くの人間に不機嫌に感じられる感覚である。このような匂いを嗅いだ時、鼻に対する刺激は苦い味覚的刺激と類似するから、「苦い」と修飾する。

例 (40) の「ほろ苦い香り」というのは、タンポポコーヒーが口に入れると広がる芳ばしい苦味と芳醇な香りを表わしている。「大人の味わい」¹³と認識され、「刺激が程よい」、「深いコク」、「風味豊かな余韻」といった概念が内包されている。この意味は語義①の「刺激的な感覚」との類似性に基づいて共感覚比喻によって拡張していると考えられる。

価値評価性から見れば、語義②の「ワキの苦い匂い」や「煙草の苦い匂い」などは、プロトタイプの意味からネガティブ性が受け継がれ、マイナスの価値評価が付与されているが、抹茶、コーヒーなどの「ほろ苦い香り」などは、「適当な刺激」というプラス的な価値評価性が付与されている。

つまり、語義②：刺激的な匂いは「ワキの苦いにおい」や「ほろ苦い香り」などのように、これを感じる人の具体的な生理的・心理的状況によって、プラスとマイナスの両方が考えられる。

(2) 視覚への転用

語義③：不愉快な心情が見て取れる表情のこと

(41) 村川をはじめとする数人の漁師が、苦い顔をして眺めていたが、文句を言いに来ようとはしなかった。

(42) 男は、あの時の痛みを思い出したのか、苦い表情になった。

(43) 時に三十男に見える京吉の苦味走った顔は、キョトンとすると、急に十二三の少年——いや少女のように可憐で無邪気な表情になる。

例 (41) の「苦い顔」は「不愉快そうな顔」、「不機嫌そうな顔」、「眉をひそめるような苦々しい顔」という意味で使われている。この使い方の「苦い」は味覚の「苦い」味を味わった時の嫌な感覚と通じている。また、例 (43) のように「苦味走った顔」という慣用表現も存在している。この表現も同じ発想法からできたものと考えられる。つまり、この意味は、プロトタイプの意味である苦いものを口にした時の「不機嫌な感覚」と類似性があるので、メタファーによって、拡張していると考えられる。

(3) 聴覚への転用

語義④：人が味わいたくない、また快くない、不愉快な音声

(44) 苦い響きか、甘美な響きか。オンラインカジノにおいてもそれは同様だ。

(45) 17歳でこんな苦い曲を作り上げたなんて。

(46) 「タール・ヴァロンまで行き着くには体力をつけないと」マツは低く苦い笑い声を漏らした。

例(44)、(45)の「苦い響き」、「苦い曲」で示されたように、音楽や音声を言葉で説明しようとする、比喩を用いざるを得ないと思われる。前章で述べた通り、この比喩で、「甘い音楽」、「甘美な響き」のように味覚で喩えることもありうるが、危険を知らせる不快な味覚「苦い」は音楽などを修飾する聴覚表現にも用いられる。例(46)は、人の音声(笑い声)を修飾している。ここでの苦いは快くない、不愉快であるという意味をもっている。メロディー部がぐだぐだな音楽は人に味わいたくない感じをし、またある音声を聞いたとき、普通の人間に苦しく、不機嫌に感じられるから、「苦い」を用いて表している。この意味は共感覚比喩によって聴覚へ拡張していると考えられる。

現在、苦味のきいた食べ物がはやされているが、もともとは毒物や危険物のシグナルとされていた。苦い物を食べてしまうと、人々は大体不愉快な思いをし、快くない感覚に陥る。煎りたての漢方薬の苦い臭いを嗅ぐ時に、人々はさぞ嫌だと重い気持ちになるであろう。悲しい曲を聴く時も、気が沈んで、快くなく感じるであろう。また、不愉快な思いをすると、人々は苦い顔をするのも不思議ではないであろう。

「苦い」は視覚・聴覚ドメインへの意味転用はすべて「苦い」がもともと示す味覚の意味と結びつき、心地よくない不快感という点で共通している。本来味覚を表わす「苦い」は視覚・聴覚の不快感を表わすのは類似性に基づくメタファーである。プロトタイプの意味からネガティブ性が受け継がれ、マイナスの価値評価が付与されている。程度性からいえば、「快くない」という尺度の上の部分だけに範囲を限定されている。

嗅覚ドメインへの意味転用について、「ワキの苦いにおい」や「苦い煙草の匂い」のように、嗅覚においてのこの種の「苦い」は<人の好ましくない不快な嗅覚>を表現している。この種の嗅覚への転用は、前述の視覚・聴覚を表現する各語義と同じ、語義①が喚起した好ましくない不快な感覚との類似性に基づくメタファーで嗅覚の感覚領域へ転用されたも

のである。プロトタイプの意味からネガティブ性が受け継がれ、マイナスの価値評価が付与されている。程度性からいえば、「快くない」という尺度の上の部分だけに範囲を限定されている。

一方、この「刺激的な匂い」という意味・用法は、また「ほろ苦い香り」のように、嗅覚を感じる人の具体的な生理的・心理的状況によって、プラスの価値評価が考えられる。これは「苦い」のプロトタイプの意味から「適当な刺激」というポジティブ性が受け継がれ、プラスの価値評価が付与されている。程度性からいえば、「刺激の度合い」という尺度の中部である「適当」の部分だけに範囲を限定されている。

5.3.3 人間活動ドメインへの転義

日本語の「苦い」は味覚、視覚など人間の身体感覚に関わる経験を表わすほか、人間の言動・心理状態などに拡張され使われている。本研究では、「苦い」が人間活動ドメインへの転義を、語義⑤と語義⑥の2つの意味・用法をまとめる。ここでは、各語義の転義プロセスを見てみる。

語義⑤：主体に好まれない、嫌な心理感覚

「苦い」は人間自身の行為及び精神活動の経験を通じて得られる主体に好まれない、嫌な心理感覚といったマイナスの心理的・感覚的な評価や価値判断のことを描写するのに用いられる。胆汁や黄蓮のような薬物や毒物などの味は舌を刺激し、口がゆがむような嫌な味である。「苦い」のこの用法は、苦味成分を含んだものを口にした時の快くない気持ちや嫌な気分などから派生していると考えられよう。例で見ると、以下のようなものである。

(47) そういう苦い批評を加えるテューターは歓迎されるわけがなかった。

(48) とりわけ堅固でならした、禁止の柵も、みごとに打ち破ってみせ、死だって、みずから選んだのだから、何もしないよりは、ほるかにましだったに違いない。だから彼女は、まるで無縁な赤の他人にさえ、苦い悔恨の情を思いださせ、共犯者のおびえをさそいだすこともできたのだ。 よろしい、ぼくももう一度だけ、運よく生きのびた仮面に、機会を与えてやるとしよう。

(49) 過去の苦い教訓を活かしてジダン不在時を想定する。

(50) 国が統制すべきものではないわけだが、戦前の教育への国家統制に対する苦い反省が、この件については生かされたともいえる。

例 (47) と (48) の「苦い」は「主体に好まれない、嫌な心理感覚」であるが、修飾対象となれるのは「悔恨」、「批評」などは、マイナスのイメージを持つことばである。

例 (49) と (50) も同じく、「主体に好まれない、嫌な心理感覚」であるが、修飾対象となる「教訓」、「反省」などは中立のイメージを持つことばである。

用例が示すように、「苦い」の修飾する対象は「悔恨」、「教訓」、「反省」、「批評」などである。そのような嫌な体験、思い出したくもない出来事はいずれも不機嫌な気持ちにつながり、考えたり思い出したりするのも嫌で、まるで苦くないものを食べた後の嫌な気持ちである。この用法は、メタファーによって拡張しているものであると考えられる。

語義⑥：苦しい、つらい、快くない心理感覚

また、「苦い」は「苦しい、つらい、快くない心理感覚」を表すこともできる。

(51) 秘密の宝を持たなかったとすれば、もちろんかれは当然のことながら苦い気持ちになったことであろう。

例 (51) の「苦い気持ち」は人間の心理感覚を表しているものである。つらい、悲しい、悩み苦しんでいるという意味である。このような気持ちは、苦い味覚感覚と類似性に基づき、メタファーによって拡張していると考えられる。ただし、使用される時に、プラスのイメージのことばと、中立のイメージを持つことばと、マイナスのイメージを持つことばと共起するという三つのタイプに分かれている。以下は、順をおって具体的に分析してみよう。

a. プラスのイメージを持つことばと共起する場合

(52) ラフェがかすかに口もとを引きしめるのを見て、キャリンは苦い喜びを感じた。彼の痛いところをついたのだ。

例 (52) では、「苦い」は「喜び」というプラスのイメージを持つことばを修飾し、うれしいと思うはずのことに苦しみを感じ、矛盾した心理状態を上手に表現している。

しかし、現在使用しているコーパスからデータ分析を行うと、「苦い」はプラスのイメージを持つことばを修飾する用例は極めて少なく、「苦い喜び」ぐらいであることが分かる。しかも、この表現は英語原文に対する翻訳なので、英語をそのまま直訳した可能性が高いと想定され、本来の日本語においては不自然な使い方であると言えよう。

b. 中立のイメージを持つことばと共起する場合

(53) 中学から高校にかけて、あの初恋の苦い経験をした田崎は、その傷跡の痛みを紛

らわそうとした。

(54) こんな痛くて苦い感情は、瀬里には持て余す。

(55) しかしそう思う一方で、これまで頭の芯にわだかまっていた苦い思いがいつの間にか薄れてしまっていることにも聡い少女は気づいている。

(56) 二人は、過去の苦い記憶を悉く忘れて、本当の姉妹のやうに愛し合った。瑠璃子が、勝平の死んだ後も、莊田家に止まつてゐるのは、一つは、美奈子に対する愛のためであると云つてもよかつた。

(57) 何度も苦い思いをさせられた女だった。だが、奈落の底へ彼女が突き落されたいまは、哀れと思わぬわけにいかなかった。

(58) ことわざは、庶民が自分たちの苦い体験の中から生みだし、蓄積し、伝承してきた庶民の財産であり、庶民の規範である。

以上の用例において、「苦い」は「記憶」、「経験」、「感情」、「思い」のような中立的なことばと共起し、主体には、過去の深い悲しみや苦しみについて、好まれない「苦しい」、「つらい」、「快くない」心理感覚を表している。データから見ると、「苦い」が中立のイメージを持つことばを修飾する用例数は非常に豊富である。

c. マイナスのイメージを持つことばと共起する場合

(59) 今夜も彼と出かけるんだけどね」ハニーはそんな会話を耳にするたびに、ほろ苦い嫉妬心に酔う。

(60) 希望の高校受験に失敗した十五歳の春、その苦い挫折感の中から少年・前原幸夫が志したのが、税理士の道であった。

(61) 人間的なつながりを断って、患者を実験の動物のように扱うことだった。菅は加藤の描いた絵を写真とくらべながら苦い敗北感のこみあげてくるのに耐えていた。黒い鉛筆でぬられた加藤の絵は決してうまいものではない。

用例 (59)、(60)、(61) から分かるように、「苦い」はマイナスのイメージを持つことばを修飾することもできる。こういった用例も数多く見られるので、普遍的な使い方であると思われる。

語義⑤：主体に好まれない、嫌な心理感覚は人間の不機嫌な心理感覚を表す用法である。この場合、「苦い」は「悔恨」、「教訓」、「批評」などの抽象名詞と組み合わせ、嫌悪感や抵抗感などのような快くない感情を表す。なお、語義⑥<苦しい、つらい、快く

ない心理感覚>も、特に、生活や仕事、恋などの失敗や悲しみ、苦しみなどが人間にもたらした心理的な不快感を描くことができる。この種の「苦い」の意味はどこから生じるのかという、やはり味覚を表す「苦い」と深く関係していると思われる。味覚で得られる快くない感覚というネガティブ性は概念化者の心的な面にも写像され、心理的な不快感を表す意味となる。これもメタファーの1種だと考えられる。この場合、「苦い」の程度性は「快い」という尺度の下の部分だけに範囲を限定されていると思われる。

5.3.4 認知言語学的アプローチによる語義の再分類

以上、日本語の国語辞典や先行研究を踏まえつつ、BCCWJに対するコーパス調査に基づき、「苦い」の意味拡張を考察してきた。再整理した「苦い」の各語義を以下のように示しておく。

「苦い」

I【身体体験】

1. 味覚

語義①：葉や毒など苦味成分の、舌を刺激し、口がゆがむような味

2. 嗅覚

語義②：刺激的な匂い

3. 視覚

語義③：不愉快な心情が見て取れる表情のこと

4. 聴覚

語義④：人に味わいたくない、また快くない、不愉快な音声

II【人間活動】

語義⑤：主体に好まれない、嫌な心理感覚

語義⑥：苦しい、つらい、快くない心理感覚

今回のコーパス調査によって、国語辞典に掲載されていない、或いは独立した意味項目として立てていないといういくつかの意味・用法（語義②<刺激的な匂い>、語義③<不愉快な心情が見て取れる表情のこと>、語義④<人に味わいたくない、また快くない、不愉快な音声>など）が見つかった。

5.3.5 多義的意味ネットワーク

以上の検討を踏まえ、味覚形容詞「苦い」の各語義の拡張起点及び拡張方式を表3-5に示す。さらに、以下図3-1に「苦い」の多義的意味によって形成される意味ネットワークの略図を提示する。

表 3-5 「苦い」の各語義の拡張方式

語義	拡張の起点	拡張方式
語義①苦味成分の味 (プロトタイプの意味)	原義①苦いという味覚	メトニミー
語義②刺激的な匂い 語義③不愉快な心情が見て取れる表情 語義④人に味わいたくない、不快な音声 語義⑤嫌悪感 語義⑥苦しみ、つらさ	語義①苦味成分の味	メタファー

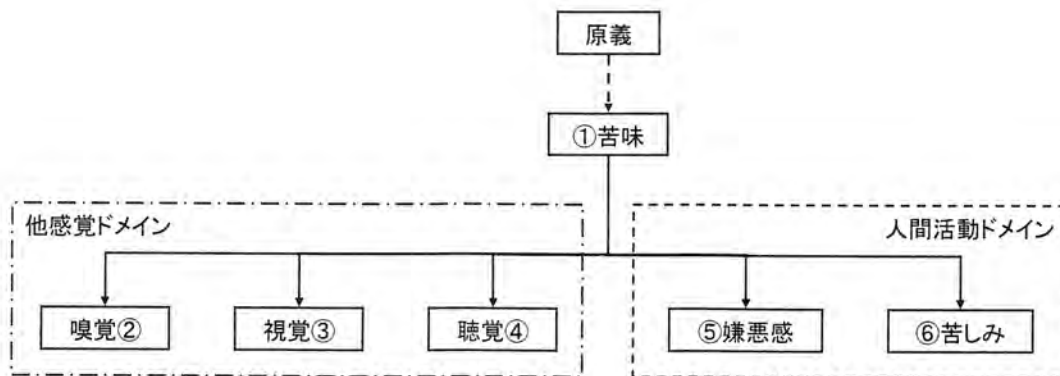


図 3-1 「苦い」の意味ネットワーク

上記の略図において、太線矢印はメタファーリンクを表し、破線矢印はメトニミーリンクを表している。語義①は多義ネットワークにおける拡張の起点となるプロトタイプの意味であると位置付けられる。そのほかの語義は全て語義①を出発点として、そこからメタファー・メトニミーの経路を通して意義が展開する。

表 3-5 と図 3-1 に見られるように、味覚形容詞「苦い」の意味拡張及び意味ネット

ワークには次のような特徴が見られる

1. 拡張手段について、「苦い」は主にメタファーによって拡張している。原義からプロトタイプの意味（語義①）への転用だけがメトニミーによるものである。

2. 形容詞「苦い」の意味拡張プロセスにおいて、メタファーやメトニミーが重要な役割を果たしていることは自明なことである。しかし、同じメタファー・メトニミーによる派生だと言っても、必ずしも同質なものだとは言えないようである。要するに、メタファーやメトニミーによる意味拡張においては、意義の展開パターンが異なることもあり得る。

3. メタファーによる転義から見れば、「苦い」のネガティブ性が写像され、他の語義に拡張するケースが多い。従って、メタファーによる「苦い」の意味拡張には、形容詞の価値評価性が深い関わりを持っていることが窺える。ここで、「苦い」の各語義の評価性についての分類を次の表 3-6 で示す。

表 3-6 「苦い」の各語義の評価性

プラス (+)	マイナス (-)
	語義①苦味成分の味
	語義②刺激的な匂い
	語義③不愉快な心情が見て取れる表情
	語義④人に味わいたくない、不快な音声
	語義⑤嫌悪感
	語義⑥苦しみ、つらさ

4. 「苦い」の意味拡張の方向性としては、外界の事物に対する身体体験、すなわち味覚の客観的な叙述から、主体の主観的な叙述や感情的な叙述へ拡張する方向性が見られる。

5.4 認知言語学的アプローチによる“苦”の意味拡張プロセスの分析

本節では、味覚形容詞“苦”の各意味項目の相互関係を明らかにし、またそれぞれがどうやって派生したのかなど、認知的アプローチによって検討したい。

ここでは、《北京大学汉语语言学研究中心语料库》から“苦”の実例を収集・分析するこ

とによって、“苦”の意味拡張を検討する。以下中国語の用例において、出典を明記していないものは、すべてCCLのものである。

5.4.1 プロトタイプの意味

語義①：“像胆汁或黄连的味道”（「熊の胆、黄連などを口にした時に共通して感じられる味」）。

中国語において“苦”は胆汁や黄蓮のような味を表現し、主に人に不快感を与える味を形容している。本研究では、先行研究及び辞書記述に従い、“苦”のプロトタイプの意味を“像胆汁或黄连的味道（熊の胆、黄連などを口にした時に共通して感じられる味）。”とする。例を挙げると、以下のようである。

（62）没吃过黄连的人，很难知道它的苦味道；没和武工队交过锋，当然不知道武工队的厉害。

（63）过些时候不论再吃酸的柠檬还是很苦的橙子，都感觉到香甜可口，因此当地人称它为神秘果。

（64）它含有 0.3%-1%的挥发芳香油，使啤酒致香；含 4%的苦味素，使啤酒带有特殊的爽口苦味，但入口不久即消失。

例（62）の“黄连的苦味道”という味は基本的に快くない口の中の感覚であり、ひいては危険なサインであるとすらされている。例（63）の“苦的橙子（苦いオレンジ）”は「甘味がなく、おいしくない」オレンジのことを言っている。しかし、例（64）のように、“爽口苦味”「さわやかでおいしい」とされる苦い味もある。例えば、ビールやコーヒーなどの特殊な苦味である。

前章の「甘い」・“甜”と同じように、“苦”のプロトタイプの意味と原義とは異なるものである。“苦”は苦味成分を口にしたときに生じる味覚である。人間の味覚の1種である苦味を表すのが“苦”の本来の姿であり、この意味こそ“苦”の原義である。中国語の“苦”の原義もそれによって表される味覚にあるわけである。熊の胆、黄連などは“苦味物質”の代表であり、人間の“苦”という味覚を引き起こす原因であり、二者の間には<結果—原因>というメトニミー関係が成立する。このように、“苦”のプロトタイプの意味とその原義はメトニミーリンクによって関係付けられる。

5.4.2 共感覚ドメインへの転義

中国語の味覚形容詞“苦”は味覚以外の共感覚にも意味拡張している。

例えば、“苦臭”（語義②）“苦笑（表情）”（語義③）、“苦笑（声）”（語義④）、“苦寒・痛苦”（語義⑤⑥）はそれぞれ嗅覚、視覚、聴覚、触覚への拡張用法である。ここでは、“苦”が嗅覚・視覚・聴覚・触覚領域への転用について、用例を通じてその使い方を見てみよう。

（1）嗅覚への転用

語義②：“刺激性気味”（「人の鼻腔における鋭く、刺激的な嗅覚」）

“苦”の鋭く、刺激的な味覚経験は「味覚」以外の感覚にも転用される。その中の一つが「嗅覚」であり、香り・匂いなどが受け入れるあるいは耐えるのが難しいことを意味する。

（65）纸烟有一种苦臭的霉味。

（66）史福岗仍然是文雅地一笑，他建议他们一起出去喝一杯咖啡。这个建议本身已经大大平息了倪吾诚的愤怒，而当倪吾诚的嗅觉神经融化在咖啡的苦香中的时候，他确实觉得有点幸福了。

例（65）では、「苦臭（苦くてくさい）」ということばを使い、タバコのしけつたにおいを表現している。例（66）の中では、「苦香（苦い香り）」ということばはコーヒー特有の苦くて香ばしい香りをうまく表現している。

語義②の“苦”の価値評価性から見れば、“苦臭的霉味”や“咖啡的苦香”などは、それを体験する人の好みによって、プラスとマイナスの両方が考えられる。

（2）視覚への転用

語義③：“不愉快的表情”（「不愉快な心情が見て取れる表情、または愉快でない心境を表す表情」）

（67）有一天，周处见桥头坐着几个老人，一个个愁眉苦脸，就上前挑衅说：“你们这些老不死的，有什么不高兴的？”

（68）我苦笑了一下告诉她，什么不错呀，还在原地踏步，一点起色也没有。

例（67）の“愁眉苦脸（眉をひそめて苦い顔をする）”は老人たちの「機嫌がよくない」、「困った様子」、「不安を抱えている顔」のことを言っている。例（68）の“苦笑（苦笑い）”は「うれしくないのに、無理して作った笑顔」のことを表現している。普通は快くない、愉快でない気持ちを表わす表情を修飾し、にがにがしく、不快な意味である。この意味は、

プロトタイプの意味である苦いものを口にした時の「不機嫌な感覚」と類似性があるので、メタファーによって、拡張していると考えられる。

(3) 聴覚への転用

語義④：“不愉快的笑声”（「にがにがしく思いながら、しかたなく笑うこと」）

他人または自分の行動やおかれた状況の愚かしさ・こっけいさに、不快感やとまどいの気持ちをもちながら、しかたなく笑い声を出す場合、“苦”は「にがにがしい、不愉快である」という意味をもっている。

(69) 老秦摇摇头，苦笑一声，没说什么。

例(69)は、笑い声を修飾している。ここでの“苦”は快くない、不愉快であるという意味をもっている。この笑い声を聞いたとき、普通の人間に苦しく、不機嫌に感じられるから、「苦い」を用いて表している。この意味は共感覚比喩によって聴覚へ拡張していると考えられる。なお、日本語の「苦い」の聴覚への転用は、様々な場合に普遍的に用いられる。しかしながら、中国語“苦”の聴覚への転用例はただ“苦笑”といった笑い声を修飾する表現に限られており、一般的ではないと思われる。それも心理的に好ましくないものへの身体的反応と思われる。

(4) 触覚への転用

語義⑤：“冷”（「寒い」）

中国語の“苦”は、触覚を表す使い方が見られる。まず、「寒い様子」を描写するのに用いられる。例えば、例(70)、(71)で示されているようである。

(70) 宝剑锋自磨砺来，梅花香自苦寒来

(71) 在苦寒的大草原上，他们进行着惨烈的战斗。

語義⑥：“疼痛”（「生理的な痛み」）

次に、“苦”は生理的に痛いことを表現するのにも使用されている。例で示すと、以下のようである。

(72) 光头送了一口气，如果眼前这人不还钱，硬要带柳如云走，那么他也只能暂时放过柳如云，反正他是自认打不过叶东，为了免受皮肉之苦，只能这样。

(73) 想要变得年轻而有活力，并不是简单的拉拉捏捏就能完成的，现在，很多的年轻女

性是要挨刀子、受些皮肉之苦的。

(74) 数年后全身出现骨痛、神经痛，延续几年后不能行动，连呼吸都十分痛苦，最后骨骼软化萎缩，自然骨折，直至不能吃饭，在百般疼痛中死去。

(75) 这些药物，将帮助人们与疾病作斗争，为患者减轻痛苦，延长寿命。

例 (72)、(73) のように、中国語でよく言われる“皮肉之苦”は「肉体的痛み」を指す、この意味として使われる“苦”はまた例 (74)、(75) のように“痛苦”という形で現れる。“痛”によって、生理的苦しい状態を“苦”になったと思われ、それもまた“苦”がもたらす嫌な味覚体験とも関係していると考えられよう。

5.4.3 人間活動ドメインへの転義

中国語の“苦”は味覚、視覚など人間の身体感覚に関わる経験を表わすほか、人間の言動・心理状態などに拡張され使われている。本研究では、“苦”が人間活動ドメインの転義を更に細分して、語義⑦から語義⑩までの4つの意味・用法をまとめる。

味覚という感覚的な不快感を表わすように、“苦”はまず、人間の心理的な不快感を表わすことができる。“苦”は心理的な不快感という意味区分において、主に二種類の心理感覚を表わすことができる。

一つ目は人間の不幸、悲しみ、または不満を感じさせる心理感覚（不幸感や孤独感、喪失感など）を表わし、“苦”は“悲哀、可怜（悲しい、かわいそうな）”と意味する。

二つ目は精神的に苦しい、或いは気分的に不愉快な心理感覚を表し、“不愉快、烦恼”「不愉快な」、「息苦しい」という意味である

この二つの心理感覚は微妙に異なるが、両方とも“苦”がもたらす快くない感覚（不快感）から派生されたと考えられよう。ここでは、各語義の転義プロセスを、実例を通して詳しく見てみよう。

語義⑦：“悲哀、可怜”（「悲しい、かわいそうな」）

人間の不幸、悲しみ、または不満を感じさせる心理感覚（不幸感や孤独感、喪失感など）を表わす場合、“苦”は“悲哀、可怜”（「悲しい、かわいそうな」）を意味する

(76) 有的人只顾自己的享受，甚至把自己的幸福建筑在别人的痛苦之上。

(77) 蓝花花是个胆大又苦命的女子。

(78) “我相信每一个侨胞都有自己的伤心往事和苦涩的回忆。” 陈裔桥说。

例 (76) では、“苦” は名詞的用法であり、「人生は苦あれば楽あり」といわれるように、“苦” は安楽の対義語「苦勞」という意味に用いられる。例 (77) において、“苦” は、運命などの「不幸でかわいそうな」という心理感覚に使い、形容詞の述語的用法である。用例 (78) のように、“苦” の対象は記憶や体験、人生の経歴などである。その苦しい人生や不幸な運命、また思い出したくもないつらい記憶や体験などはいずれも皆つらいことであり、考えたり思い出したりするのも不快感が湧いてくる。

語義⑧：“心情不愉快、烦恼”（「不愉快な」、「息苦しい」）

(79) 不过，在难耐与苦闷之时，他真的接受了夫人的建议：抽烟，喝酒。

(80) 开初，我感到很大的苦闷和寂寞，怀念着母校和那里的友人。

用例の“苦闷” は人間の悩み苦しんでいる心理感覚を表しているものであり、苦難または逆境に耐える精神的な不快感を描写している

語義⑦と語義⑧に使う“苦” は人間の不幸、悲しみ、または不満を感じさせる心理感覚や、精神的に苦しい、或いは気分的に不愉快な心理感覚を表す用法である。味覚で得られる“苦” の快くない感覚というネガティブ性は概念化者の心的な面にも写像され、心理的な不快感を表す意味が生じる。

味覚の“苦” はもともと舌を刺激する嫌な味を表しているのに、人間活動という領域へ意味を派生する場合に、マイナスの意味展開もあれば、プラスの意味展開もある。

語義⑨：“拼命、刻苦努力”（「物事に懸命に取り組むこと」）

“苦” は人間の仕事ぶり・勉強ぶりなどについて、物事に懸命に取り組む状態を描写するのに用いられる。

(81) 从一年级到三年级的学生都在埋头苦读，我下课后总有学生问我在哪些参考书里可以找到讲课的有关内容。

(82) 她的功夫是经过苦练的，为了练功夫，她的手心和脚心都磨出了老茧。

(83) 不少洋务官僚对外语很重视，曾国藩、李鸿章等都严令自己的子女苦学外语。

例 (81)、(82)、(83) で示されているように、“苦” は仕事・勉強・練習に対する人の態

度・姿勢あるいは言動を描写するのに使用される。ここでの“苦”には、「まじめな」といった概念が内包され、「一生懸命に精を出している」という意味に使われている。

語義⑩：“極力、竭力”（「辛抱強い、力を尽くす」）

（84）我苦口婆心，劝人研究厚黑学，意在使大家都变成内行，假如有人要使点厚黑学，硬是说明了来干，施者受者，大家心安理顺。

（85）我没有听她苦口婆心的劝阻，辞了电视台的工作来到了北京。

（86）他对别人的苦言相劝置之不理。

（87）结婚是人生最美满快乐的事，我和我内人都是个中人，假使结婚不快乐，我们应该苦劝两位别结婚，还肯做媒么？

用例（84）～（87）の“苦口”と“苦言”は、「辛抱強く」、「力を尽くす」といった概念が内包され、親身になって何度も説いて勧め、くどくどと説得するという意味である。

価値評価性から見れば、語義⑦の“苦命”や語義⑧の“苦悶”などは、プロトタイプの意味からネガティブ性が受け継がれ、マイナスの価値評価が付与され、そのマイナス的な意味派生は容易に理解できる。だが、語義⑨“拼命、刻苦努力”（「物事に懸命に取り組むこと」）と語義⑩“極力、竭力”（「辛抱強い、力を尽くす」）のようなプラス的な意味派生はどのように理解すればよいのであろう。それは漢方医学や仏教から受けた影響によるものであると考えられる。

一般的に、苦味を呈する成分は毒物である事が多く、人は苦味を感じた時、それを吐き出すことで自分の体を守ることができる。しかし、苦味を含む物質は時には薬にもなる。

漢方医学で、「苦味」には、五臓の「心」（心臓・血管系）を強化し、身体に溜まった余分な熱を冷まし、体内の余分な水分や老廃物を取り除き、神経を鎮静させる作用があるとされている。

「春は苦味、夏は酸味、秋は辛味、冬は脂（あぶら）と合点して食え」これは、明治の陸軍漢方医であり、薬剤師でもあった食養生の始、石塚左玄が書いた『食物養生法』¹¹にある一節である。春の山菜には苦いものが多いが、春はこの「苦味」を摂ることがとても重要である。冬眠から目覚めた熊は、まず始めにふきのとうなどの山菜を食べると言われている。それは春の山菜が持つ苦味を利用し、冬場に溜まった宿便や「毒」を排泄しようとしているのだと思われる。中国人も春になると、ふきのとうや、タラの芽、うど、わらび、

つくし、タケノコなど、苦味を持った山菜を昔から食べてきた。中国人は、数千年という時間の中で、経験的に苦味の山菜の効能を知り、食文化に取り入れてきたのである。つまり、苦味物質の「人間を健康に保つ」効能性は、“苦”の潜在的なポジティブ性の由来だと考えられる。

また、仏教の教えでは、お釈迦様は「この世は苦なり」と喝破された。「四苦八苦」というように、生老病死は人として避けられない“苦”である。中国人の人生観として、「苦は、即ち楽なり」と達観するのは難しいが、苦しみにとらわれないようにすることはできるはずであろう。そもそも、人間の認識は外界に依存するため、四苦八苦の世の中であるから、当然ではあるが、結果を出すために何をしなければならないのかを明確にするには、結果や目標が常に必要となり、また、その結果に対して意味付けをして価値評価を下すのである。勝つと楽しい、うまくいくと楽しい、目標に達成すれば楽しいと、人間の認識は結果に依存して「楽しさ」というポジティブな心理感覚を作り出そうとして、結果にしがみつくのである。「結果が出たら…」、「これが終わったら…」、「これに勝ったら…」、「うまくいったら…」と、人間の認識は「苦しければ苦しいほど良いことがある」、「この苦しさにこそ意味がある」、「この苦しさに耐えることが大事」などと、旧根性的なポジティブ思考で対処していこうとして、「一生懸命を楽しむ」と考えるのである。つまり、中国文化において、“苦”が常に意識され、それを成功にとっての必要なものと見なされている。その思考習慣が、中国人の人生観を磨き、育てていくのである。したがって、中国語において、以下のような“苦”をプラス思考で考える表現が大量に存在するのである。例えば、“良药苦口（良薬は口に苦し）”“苦尽甘来（苦しみ尽きて楽あり→苦しかった日が終わり幸せな日がある）”“忆苦思甜（苦難を思い出し、今の幸せをかみしめる）”“吃得苦中苦，方为人上人（苦勞を重ならなければ、人の上に立てない）”などである。

語義⑨の“苦读”“苦练”と語義⑩の“苦口婆心”に使う“苦”は、プロトタイプの意味に潜む効能性というポジティブ的な評価性が語義⑨、語義⑩に写像され、二者はメタファーによって関連付けられる。程度性からいえば、ここでの“苦”は人が「耐えなければならない、乗り越えなければならない」極限的な性質を持っている。

すなわち、味覚の“苦”が人間活動ドメインへの意味転用は価値評価性に対する主観的な印象の同一化によるものだと考えられる。

語義⑦の「苦命」や語義⑧の「苦悶」などは、“苦”のプロトタイプの意味——語義①からネガティブ性が受け継がれ、マイナスの価値評価が付与されているが、語義⑨の“苦读”

“苦练”と語義⑩“苦口婆心”に使う“苦”は、効能性が潜んでいるというポジティブな評価性を持っているため、語義⑦の“苦命”や語義⑧の“苦闷”などと大きく区別すべきである。

語義⑪：“艰难、繁重”（「大変な」、「苦勞する」）

“苦”は、また「大変な」、「苦勞する」という意味を表している。

(88) 除了报酬少得可怜，群众演员也是所有演员中最辛苦的。

(89) 虽然苦熬10个小时很累，但对于北漂的我来说，确实是一份不薄的收入。

(90) 尽管驾驶小艇是件苦差事，但海员们并不抱怨。

（第三章3.3.4の例（59）を再掲する）

(59) 对“面的”司机来说，5公里以下是“甜活儿”，7公里以上是“苦活儿”。

例（88）、（89）の“辛苦”、“苦熬”は、困難または試練などのような煩わしいか苛立たしいか大変な環境、出来事に消耗とっていいほどの努力によって乗り越えようとする状態を描写するのに用いられる。用例（90）の“苦差事”、“苦活儿”は苦勞ばかりで実入りが無い仕事で、人に苦痛だけを感じさせる役目である。この用法は、「苦い」という快くない、不機嫌な心理感覚を想起させるから、“苦”と修飾している。苦い食べ物を口にした時の感覚と類似性があり、メタファーによって拡張していると考えられる。一方、この場合の“苦”は、マイナスの価値評価を表す意味・用法であり、第三章3.4.4語義⑬の例（59）の“乐（楽、安易）”を表す“甜”の対義語として使われている。つまり、「苦—甜」という味覚を表す尺度によって「困難—安易」という難易度を表し、「尺度融合」という認知機構もこの意味の展開に関与していると考えられる。

語義⑫：“可恶的”（「憎たらしい」、「嫌味の差した」）

さらに、用例はまれに見られないが、「憎たらしい」、「嫌味の差した」の意味として使われるケースもある。この場合の“苦”も、マイナスの価値評価を表す意味・用法である。

(91) 他们磨舌如刀，发出苦毒的言语，好像比准了箭。

語義⑬：“遭遇劲敌，战斗持续而激烈”（「相手が手ごわい」、「戦いが長く継続され、激しい」）

最後に、「相手が手ごわい」、「戦いが長く継続され、激しい」様子を描写するのに用いら

れる。

(92) 曾是世界排名第一的俄罗斯选手萨芬苦战 5 盘, 击败了对手, 晋级下一轮比赛。

(93) 中国队第二单打、新锐林丹苦战 3 局, 以 3:15、15:13 和 15:6 艰难击败马来西亚选手李宗伟, 使中国队以 2:1 领先。

この使い方は例 (92) と (93) で示されている通りに、「苦战 (苦戦すること)」という決まった表現が使用され、「苦しみながら戦い、また容易に勝つことのできない戦いのこと」を意味する。

苦い味覚によって起こる「刺激的な感覚」という意味特徴との類似性に基づき、語義①からメタファー的に発展してきたものだと考えられる。この場合、“苦”もプロトタイプの意味の価値評価性を受け継がれ、必ずしもマイナスの価値評価を付与されたものだとは限らないのである。

5.4.4 物事の状態ドメインへの転義

中国語の“苦”は物事の困難や不幸なもしくは苦痛な状態を表すことができる。ここでは、その人の能力では処置しかねる状況あるいは状態で、耐え忍ぶため、あるいは克服するために非常な努力を必要とする。

語義④：“形容时代或环境的苦楚”（「時代や境遇などの辛さ」）

(94) 年轻人没过过苦日子。

(95) 不少男人希望美丽温柔的女性为他们吃苦, 不问酬劳心无旁骛地挨一辈子, 郑博文有权嫌她硬邦邦。

(96) 这是一个跟他吃尽千辛万苦, 也不抱怨的好心眼的小个子女人。

(97) 这些干部把青春献给了雪山草地, 苦了自己, 苦了他们的妻子女儿。

例 (94) のように、“苦日子”は「苦しい日々」という意味である。例 (95)、(96) の中の“苦”は名詞のように使われて、人生の難関や生活の辛さを表わす。“千辛万苦”は「言い尽せないほどの苦勞」という意味である。用例 (97) の“苦了自己”、“苦了妻儿”は自分や妻と子供に苦痛を感じさせるという意味である。ここでの“苦”は動詞のように使われて、心や身体につらさを感じさせることを表わしている。

ここでの“苦”は物事の状態を修飾して、プロトタイプの意味からメタファーによって拡張していると思われる。

語義⑮：“特指穷困、贫穷”（特に「まずしい」、「貧乏」のことを指す）

中国語の“苦”は生活のつらさを描写し、特に「まずしい」、「貧乏」という生活状態を指している。

(98) 早年，由于生活贫苦，他参加过北洋军阀的旧军队。

(99) 尽管他们在北漂的风雨中挣扎得很累，生活得很清苦，但彼此很相爱！

上記(98)、(99)の例が示すように、“贫苦”も“清苦”も経済的に豊かでない状況を指している。

5.4.5 認知言語学的アプローチによる語義の再分類

以上、中国語の辞書や先行研究を踏まえつつ、CCLに対するコーパス調査に基づき、中国語の“苦”の意味拡張を考察してきた。再整理した“苦”の各語義を以下のように示しておく。

“苦”

I 【身体体験】

1. 味覚

語義①：“像胆汁或黄连的刺激性味道”（「熊の胆、黄連などを口にした時に共通して感じられる刺激的な味（普通には不快な味とみられる）」）

2. 嗅覚

語義②：“刺激性气味”（「人の鼻腔における鋭く、刺激的な嗅覚」）

3. 視覚

語義③：“不愉快的表情”（「不愉快な心情が見て取れる表情、または愉快でない心境を表す表情」）

4. 聴覚

語義④：“不愉快的笑声”（「にがにがしく思いながら、しかたなく笑うこと」）

5. 触覚

語義⑤：“冷”（「寒い」）

語義⑥：“疼痛”（「生理的な痛み」）

II 【人間活動】

語義⑦：“悲哀、可怜”（「悲しい、かわいそうな」）

- 語義⑧：“心情不愉快、烦恼”（「不愉快な、息苦しい」）
 語義⑨：“拼命、刻苦努力”（「物事に懸命に取り組むこと」）
 語義⑩：“極力、竭力”（「辛抱強い、力を尽くす」）
 語義⑪：“艰难、繁重”（「大変な、苦勞する」）
 語義⑫：“可惡的”（「憎たらしい、嫌味の差した」）
 語義⑬：“遭遇劲敌, 战斗持续而激烈”（「相手が手ごわい、戦いが長く継続され、激しい」）

III 【物事の状態】

- 語義⑭：“时代或环境的苦楚”（「時代や境遇などの辛さ」）
 語義⑮：“特指穷困、贫穷”（「特にまずしい、貧乏のことを指す」）

今回のコーパス調査によって、再整理した“苦”の意味用法を5.1.1.2に掲載する中国語の辞典における“苦”の意味記述と比較してみると、中国語の辞典に掲載されていない、或いは独立した意味項目として立てていない“苦”の意味・用法が多数あることも確認できる。

5.4.6 多義的意味ネットワーク

以上の検討を踏まえ、味覚形容詞“苦”の各語義の拡張起点及び拡張方式を表3-7に示す。さらに、以下図3-2に“苦”の多義的意味によって形成される意味ネットワークの略図を提示する。

表 3-7 “苦”の各語義の拡張方式

語義	拡張の起点	拡張方式
語義①像胆汁或黄连的刺激性味道 (プロトタイプの意味)	原義⑩苦的味觉感受	メトニミー
語義②刺激性气味 語義③不愉快的表情 語義④不愉快的笑声 語義⑤冷 語義⑥疼痛	語義①像胆汁或黄连的刺激性味道	メタファー

語義⑦悲哀、可憐 語義⑧心情不愉快、煩惱	語義①像胆汁或黄连的刺激性味道	メタファー
語義⑨極力、竭力 語義⑩拼命、刻苦努力	語義①像胆汁或黄连的刺激性味道	メタファー
語義⑪艰难、繁重	語義①像胆汁或黄连的刺激性味道	メタファー 尺度融合
語義⑫可惡的 語義⑬遭遇劲敌, 战斗持续而激烈	語義①像胆汁或黄连的刺激性味道	メタファー
語義⑭时代或环境的苦楚 語義⑮特指穷困、贫穷	語義①像胆汁或黄连的刺激性味道	メタファー

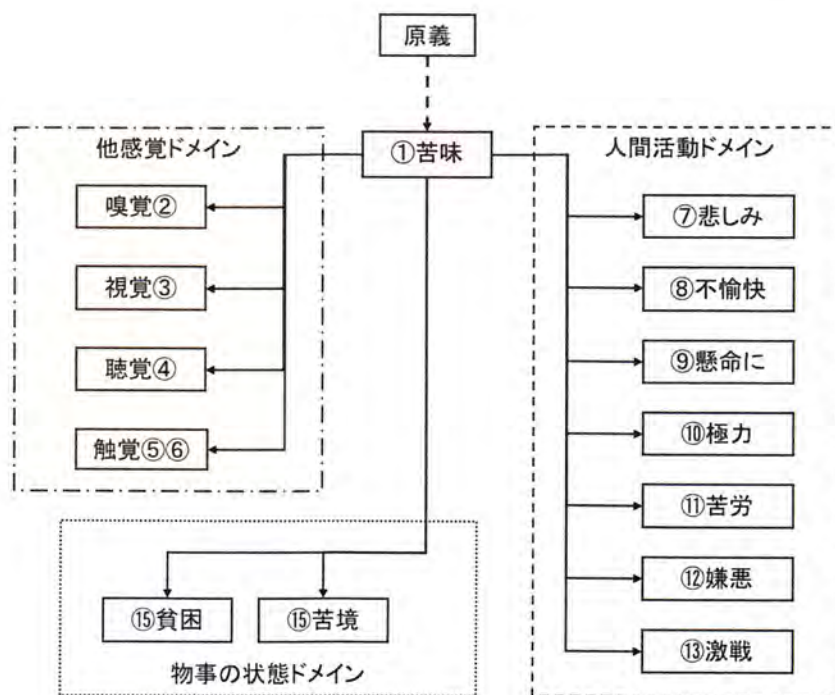


図 3-2 “苦” の意味ネットワーク

上記の略図において、太線矢印はメタファーリンクを表し、破線矢印はメトニミーリンクを表している。語義①は多義ネットワークにおける拡張の起点となるプロトタイプ的意味であると位置付けられる。そのほかの語義は全て語義①を出発点として、そこからメタファー・メトニミーの経路を通して意義が展開する。

表 3-7 と図 3-2 に見られるように、味覚形容詞“苦”の意味拡張及び意味ネットワーク

には次のような特徴が見られる

1. 拡張手段について、“苦”は原義からプロトタイプ的意味（語義①）への転用だけがメトニミーによるものであるが、ほかの意味領域への派生は、主にメタファーによって拡張している。

2. メタファーやメトニミー以外の要素も“苦”の意味拡張に働きかけているということは明らかになる。例えば、語義①から語義⑩< 艰难、繁重（大変な、苦勞する）>への拡張では、メタファーがメインでありながらも、「尺度融合」という要素が働きかけている。要するに、意味の拡張プロセスにおいては、メタファーと他の要素の協業によるものもあるということが分かる。

3. メタファーによる転義から見れば、“苦”のポジティブ性かネガティブ性が写像され、他の語義に拡張するケースが多い。ここで、“苦”の各語義の評価性についての分類を次の表 3-8 で示す。

表 3-8 “苦”の各語義の評価性

プラス (+)	マイナス (-)
語義①熊の胆、黄連などのような味	
語義②刺激的な嗅覚	
	語義③不愉快な心情が見て取れる表情
	語義④苦々しく思いながら、仕方なく笑う声
	語義⑤寒い
	語義⑥生理的な痛み
	語義⑦悲しい、かわいそうな
	語義⑧不愉快な、息苦しい
語義⑨辛抱強い、力を尽くす	
語義⑩物事に懸命に取り組むこと	
	語義⑪大変な、苦勞する
	語義⑫憎たらしい、嫌味の差した
語義⑬相手が手ごわい、戦いが長く継続され、激しい	
	語義⑭時代や境遇などの辛さ
	語義⑮特に「まずしい、貧乏」のことを指す

5. “苦”の意味拡張の方向性としては、外界の事物に対する身体体験、すなわち味覚の客観的な叙述から、主体の主観的な叙述や感情的な叙述へ拡張する方向性が見られる。

5.5 コーパスに基づく語義の頻度分布に対する定量調査

本節では、5.2と5.3の考察で再整理した「苦い」と“苦”の意味・用法に基づき、個々の語義の出現頻度を調べ、数値化することにより、各語義の使用頻度に見られる傾向性を見てみる。

5.5.1 「苦い」の頻度分布に対する定量調査

前節の考察で再整理した「苦い」の意味・用法に基づき、それぞれの語義の使用頻度を調べ、数値化することにより、その傾向性を見てみる。

5.5.1.1 調査方法とデータ

ここでは、検索アプリケーション「中納言」を利用し、BCCWJから「苦い」のKWICデータを収集し、調査を行う。具体的な調査手順は以下の通りである。

1. 形容詞「苦い」の活用形¹⁶も考慮に入れ、検索条件を「語彙素」が「苦い」と設定する。
2. BCCWJコーパス全体において、上記の条件で検索を行い、「苦い」のKWICデータを収集した。データ抽出後に、目視による確認作業を行い、「苦い」の形容詞としての用法のみを絞り出し、データを作成した。
3. 前述の5.3.4にまとめた「苦い」の意味分類に基づき、抽出された文の前後の文脈を見ながら、2によって得られたデータの意味・用法を分類した。
4. 計量言語学的手法をとることにより、各語義の頻度分布を調べ、定量化する。

5.5.1.2 調査結果

以下、BCCWJ全体において、「苦い」の各語義の使用頻度及び各意味領域における分布を示す。

表 3-9 BCCWJにおける「苦い」の各語義の頻度分布

意味領域		頻度配列	「苦い」の意味・用法	出現頻度	割合%
身体体験 382 例 67.25%	味覚	1	① [味：苦味]	194	34.15%
	視覚	2	③ [表情：不快]	132	23.24%
	嗅覚	3	② [匂い・香り：苦味]	35	6.16%
	聴覚	4	④ [音・声：不快]	21	3.70%
人間活動 186 例 32.75%		5	⑥ [心理感覚：つらさ]	165	29.05%
		6	⑤ [心理感覚：嫌悪]	21	3.70%
計				568	100%

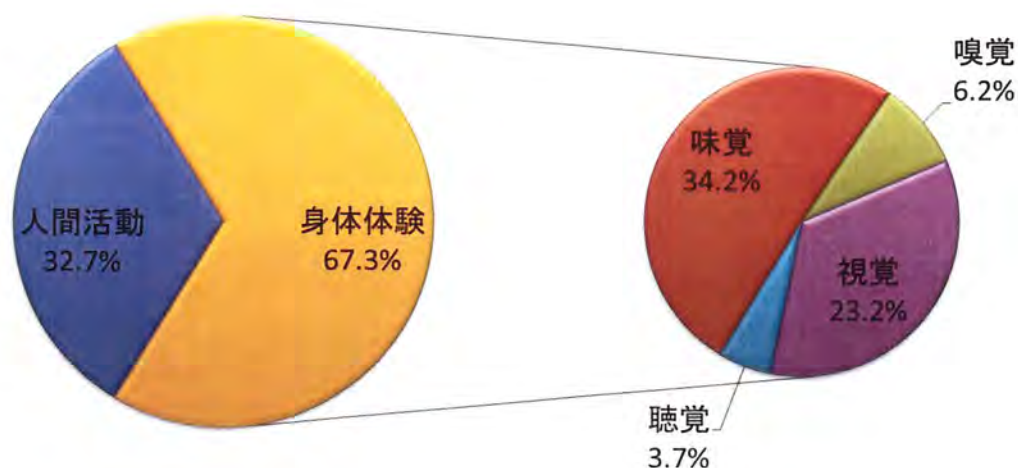


図 3-3 各意味領域における「苦い」の頻度分布

表 3-9 においては、意味領域ごとに、語義を使用頻度順に配列している¹⁶⁾。表 3-9 と図 3-3 を総合した結果、「苦い」の多義的語義の頻度分布には以下のような特徴がみられる。

1. すべての語義のうち、語義①<苦味成分の、舌を刺激し、口がゆがむような味>は 190 例と比較的高い割合（全体の 3 割以上）で一番多く現れる語義である。また、心理感覚を表わす語義⑥<苦しい、つらい>は、29.05%の割合で語義①に次いで 2 番目に多く使用されている。

2. 「苦い」が表す五感以内の意味領域からみれば、味覚を表す語義①が最も多く使用され、次に視覚（語義③）、嗅覚（語義②）、聴覚（語義④）という順で頻出する。

3. 意味領域ごとの出現頻度から見れば、味覚領域における意味・用法は最も多用されることは明らかである。人間活動という意味領域は味覚領域に次ぎ、「苦い」の出現度数は計186例で、全体の3割ぐらゐを占めている。

以上、BCCWJのコーパスデータに基づき、味覚形容詞「苦い」の種々の語義の使用頻度について考察してきた。他の語義に比べて、味覚を表す語義①は圧倒的に使用頻度が高いことは、辞書の中の第一語義としての優位性を見せてくれた。また、味覚以外の感覚領域では、嗅覚と聴覚に比べて、「苦い」は視覚に使う用例が高い割合を占めている。

また、味覚形容詞「苦い」は感覚表現を超えて、人間活動の領域にまで転用されている。人間活動に関する意味・用法も、全体の3割ぐらゐも占めている。そのうち、人間の心理感覚を表す語義⑥<苦しい、つらい>は、派生義の中で最も出現頻度が高い。このような言語事実は、「苦い」のような身体感覚を表す表現は、直接的な感覚を表すものから主体の心理感覚に関わる表現へと機能が拡張していくことをものごとっている。

5.5.2 “苦”の頻度分布に対する定量調査

前節の考察で再整理した“苦”の意味・用法に基づき、それぞれの語義の使用頻度を調べ、数値化することにより、その傾向性を見てみる。

5.5.2.1 調査方法とデータ

本節では、CCLの現代中国語データベースを利用し、単音節形容詞“苦”及びその重ね型“苦苦”の用例を収集し、調査を行う。具体的な調査手順は以下の通りである。

1. CCLの現代中国語データベース全体において、検索条件を“苦”と設定し、“苦”のKWICデータを収集した。

2. データ抽出後に、目視による確認作業を行い、単音節形容詞“苦”と重ね型“苦苦”が使われる用例のみを絞り出し、データ¹⁷を作成した。

3. 前述の5.4.5にまとめた“苦”の意味分類に基づき、抽出された文の前後の文脈を見ながら、2によって得られたデータの意味・用法を分類した。

4. 計量言語学的手法をとることにより、各語義の頻度分布を調べ、定量化する。

5.5.2.2 調査結果

以下、CCL 全体において、“苦”の各語義の使用頻度及び各意味領域における分布を示す。

表 3-10 CCL における“苦”の各語義の頻度分布

意味領域		頻度配列	「苦い」の意味・用法	出現頻度	割合%
身体体験 50473 例 43.84%	味覚 46497 例 40.39%	1	① [味：苦味]	46497	40.39%
	視覚 3108 例 2.70%	2	③ [表情：不快]	3108	2.70%
	触覚 702 例 0.61%	3	⑥ [痛み]	391	0.34%
		4	⑤ [寒さ]	311	0.27%
	聴覚 150 例 0.13%	5	④ [笑い声：不快]	150	0.13%
	嗅覚 16 例 0.014%	6	② [匂い・香り：刺激性]	16	0.014%
人間活動 50389 例 43.77%		7	⑪ [仕事：苦勞]	22374	19.44%
		8	⑦ [心理感覚：悲哀]	21470	18.65%
		9	⑨ [行為：懸命に]	2901	2.52%
		10	⑬ [戦闘・対抗：激烈]	1704	1.48%
		11	⑧ [心理感覚：苦惱]	1404	1.28%
		12	⑩ [行為（説得）：極力]	530	0.46%
		13	⑫ [言論：憎悪]	6	0.005%
物事の状態 1474 例 12.38%		14	⑭ [苦境]	12783	11.10%
		15	⑮ [貧困]	1474	1.28%
計				115119	100%

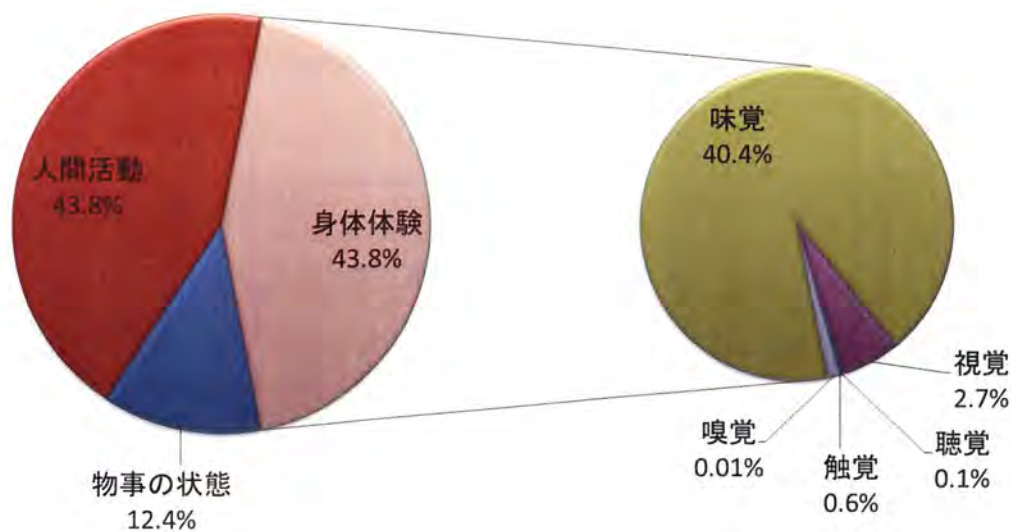


図 3-4 各意味領域における“苦”の頻度分布

表 3-10 においては、意味領域ごとに、“苦”の語義を使用頻度順に配列している¹⁸。表 3-10 と図 3-4 を総合した結果、“苦”の多義的語義の頻度分布には以下のような特徴が見られる。

1. “苦”の語義①は 46497 例と比較的高い割合（全体の 4 割）で一番多く現れる語義である。また、語義①の次いで出現頻度の高い語義は、語義⑩“艰难、繁重”（大変な、苦勞する）（19.44%で 2 位）と語義⑦“悲哀、可怜”（悲しい、かわいそうな）（18.65%で 3 位）である

2. 人間活動という意味領域に見られる“苦”の出現頻度数は計 50389 例であり、全体の 43.77%を占めている。人間活動ドメインへの拡張用法に比べ、身体感覚領域における意味・用法も 43.84%で、両者はほぼ同じぐらいの割合を占めている。

3. “苦”が表す五感以内の意味領域から見れば、味覚を表す語義①が最も多く使用され、次に視覚（語義③）、触覚（語義⑤⑥）、聴覚（語義④）、嗅覚（語義②）、という順で頻出する。特に、嗅覚を表す語義⑧の出現頻度数は僅か 16 例（0.014%）であり、あまり使われない用法である。

4. 人間活動ドメインに使う意味・用法では、“艰难、繁重”（大変な、苦勞する）を表す語義⑩は 19.44%の割合で、使用頻度が 2 番目に高い語義である。一方、“可惡的”（憎た

らしい、嫌味の差した) という意味を表す語義⑫は、出現頻度数が6例だけであり最も使用頻度の低い語義である。

以上、CCL のコーパスデータに基づき、中国語の味覚形容詞“苦”の種々の語義の使用頻度について考察してきた。他の語義に比べて、語義①が圧倒的に使用頻度が高いことは、辞書の中の第一語義としての優位性を見せてくれた。また、味覚以外の感覚領域では、聴覚と嗅覚に比べ、“苦”は視覚に使う用例が高い割合を占めている。そして、人間活動に関する意味・用法のうち、人間の心的状態を表す語義⑩は、すべての派生義の中で、3番目に出現頻度が高いものである。このような言語現象から、本来人間の身体的な不快感を表す“苦”は、心的な不快感を表わすものへと機能していくことが窺えよう。

5.6 「苦い」と“苦” 対照分析

本節では、対照言語学の立場に立って、日本語と中国語の味覚形容詞「苦い」と“苦”を比較・対照し、二者が意味・用法、語義分布、意味拡張などにおける異同について詳しく考察する。

5.6.1 意味・用法における異同

コーパス分析によってまとめられた日本語の「苦い」と中国語の“苦”の意味・用法は、表3-11にまとめておく。

表3-11 「苦い」と“苦”の意味・用法比較対照表

意味領域		意味・用法	苦い	苦
I 身体体験	味覚	薬や毒など苦味成分のような味	○	○
	嗅覚	刺激的な匂い	○	○
	視覚	不愉快な心情が見て取れる表情	○	○
	聴覚	人に味わいたくない、また快くない、不愉快な音声	○	△笑い声
	触覚	寒い		—
生理的な痛み			—	○
II 人間活動		主体に好まれない、嫌な心理感覚	○	△言葉
		苦しい、つらい、快くない心理感覚	○	○

	悲しい、かわいそうな	—	○
	物事に懸命に取り組むこと	—	○
	辛抱強い、力を尽くす	—	○
	大変な、苦勞する	—	○
	相手が手ごわい、戦いが長く継続され、激しい	—	○
Ⅲ物事の状態	時代や境遇などの辛さ	—	○
	特に「まずしい、貧乏」のことを指す	—	○

「苦い」と“苦”の個々の意味・用法の検討を踏まえ、二者の共通点と相違点をそれぞれ次のようにまとめておく。

(i) 共通点

1. 日本語の「苦い」と中国語の“苦”は原義とプロトタイプの意味では一致している。「苦い」と“苦”の原義は薬や毒など苦味成分を舐めたときの味覚であり、認知主体の身体体験である。「薬や毒など苦味成分のような味」というプロトタイプの意味は、認知主体の身体体験が対象の性質として読み替えられたものだと考えられる。「苦い」と“苦”の原義とプロトタイプの意味は<結果—原因>に基づくメトニミーによって関係づけられている。

2. 味覚を表す「苦い」と“苦”ではいずれも嗅覚、聴覚、視覚を表わす共感覚的用法が見られる。しかも、「苦い」と“苦”が触覚、聴覚一部（音楽）以外の共感覚への転義はほぼ意味的に対応できる。なお、二者は嗅覚、聴覚、視覚への転用がマイナス的評価を帯びている点にも通じる。

3. 日本語の「苦い」と中国語の“苦”はいずれも人間活動に関する表現に用いられ、人間の苦しい、つらい、快くない心理感覚を表わすことができる。心理的感覚についての表現において、後ろに共起することばの性質には関係なく、日本語の「苦い」はほぼ、「精神的に苦しい」、「気分的に不愉快だ」という意味で使われている。この使い方は中国語“苦”と共通している。それに、「苦い」と“苦”はいずれもある言論や言葉に対し、好まれない、嫌な心理感覚を表わすことができる。なお、上述の意味・用法について、マイナス的価値評価性という点でも両者は共通している。

(ii) 相違点

1. 中国語の“苦”は物事の状態ドメインに拡張できる点で、日本語の「苦い」と大きく違う。

1. 中国語の“苦”は日本語の「苦い」とはポジティブな価値評価性を表わす点に関して大きく異なる。中国語の“苦”は物事に懸命に取り組むことや、辛抱強い、力を尽くすことなどプラス的な意味を表わす用法がある。一方、日本語にはこのような意味・用法は見当たらない。

2. 聴覚領域への転用について、中国語の“苦”は、ただ“苦笑”という“笑い声”を修飾する特別な場面に限られているが、日本語の「苦い」は様々な場合に普遍的に用いられる。たとえば「苦い曲」、「苦い響き」の中の「苦い」をそのまま中国語“苦”に訳したら、理解しがたいものになるのであろう。したがって、「苦い曲」を“悲凉的曲子”に、「苦い響き」を“悲怆的声响”に、というふうに言い換えるべきであろう。

3. 触覚領域への転用について、中国語の“苦”はまた、身体的に寒いと感ずる場合に用いられる。しかし、日本語にはそのような使い方がまったく存在しないのである。この場合は大体“苦寒”ということばに代表されている。これを日本語に訳す時に、「ひどく寒い」、「厳寒」などと訳されることが多く、「苦い」ということばには一切かわりを持たないのである。ここの“苦”を程度副詞「非常に」、「大変」と理解する見方もあるが、“寒”という文字と組み合わせることによって、“苦”ということばも「寒い」という意味を持つようになったと思われる。この使い方は味覚における嫌な感覚（マイナス的価値評価性）とも通じているようである。なお、生理的痛みについて、中国語では“皮肉之苦（肉体の痛み）”“痛苦”というようなことばで表しているのに対し、日本語では「苦痛」ということばを用いているが、「*苦い痛み」という表現はないようだ。

4. 人間活動ドメインにおける意味・用法に関して、中国語の“苦”は「大変な、苦勞する」という意味で、様々な場合に普遍的に用いられるのに対し、日本語における使用はほとんど「苦勞」、「苦行」といった表現に限られており、一般的ではないのである。また、中国語において、“苦言相劝”、“苦口婆心”という表現があり、「辛抱強く、飽きもせず、何度も言う」という意味を表している。日本語の「苦い」には見られない用法であるが、日本語の「酸っぱい」に共通している用法であるところがあるようである。“苦口”はある程度「口を酸っぱくする」と通じている。なお、“苦”は、「一生懸命である、まじめな」という意味で一般的に用いられているのに対し、日本語においては「苦い」ではなく

て、「刻苦」、「刻苦勉励」という二つのことばに集結しているだけのようである。日本語の「刻苦」は「一生懸命でまじめである」という意味合いを持っているが、日本語において、やや硬い表現とされているため、使う場面も限られていて、そういった意味で使われる中国語の“苦”を訳す時に、「一生懸命」、「まじめ」、「熱心」といったふうに訳される場合が多いようである。

5.6.2 語義分布における異同

これまでの考察では、味覚形容詞「苦い」と“苦”の各語義の出現頻度を集計し、語義によって使用頻度が異なることを明らかにした。ここでは、まず「苦い」と“苦”の語義分布に見られる傾向を見てみる。

まず、二者の意味領域ごとの語義分布を見てみる。

「苦い」の意味・用法は身体体験ドメイン・人間活動ドメイン・物事の状態という3つの意味領域から把握できる。中国語の“苦”には物事の状態を表すような用法はなく、その意味・用法は身体体験ドメイン・人間活動ドメインに広く見られる。「苦い」と“苦”の意味領域ごとの出現頻度は次の表 3-12 が示すとおりである。

表 3-12 「苦い」と“苦”の意味領域ごとの使用頻度

味覚形容詞 \ 意味領域	身体体験ドメイン		人間活動ドメイン		物事の状態ドメイン		合計
	出現頻度	割合	出現頻度	割合	出現頻度	割合	
「苦い」	382 例	67.25%	186 例	32.75%	0 例	0	568 例
“苦”	50473 例	43.84%	50389 例	43.77%	14257 例	12.38%	115119 例

「苦い」と“苦”の意味領域ごとの語義分布には以下の図 3-5 が示すような違いがある。

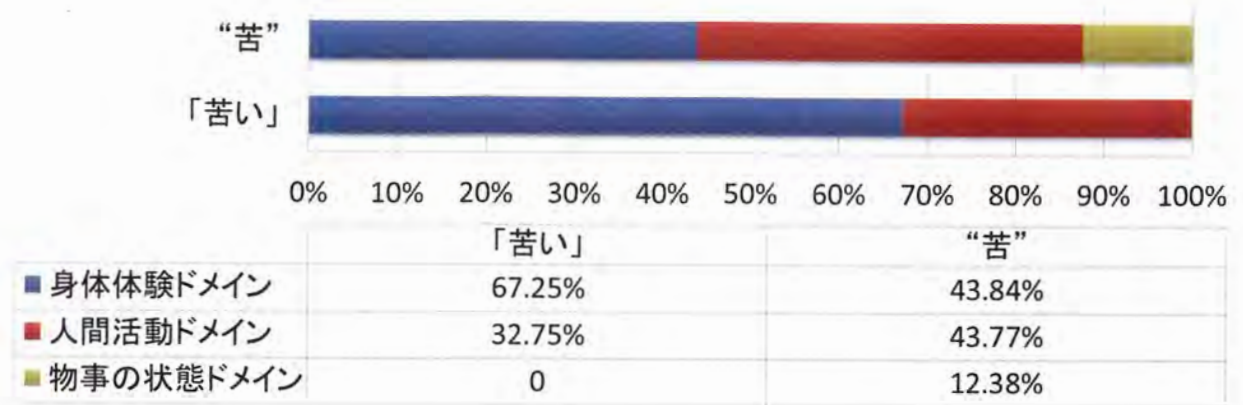


図 3-5 「苦い」と「苦」の各意味領域における語義分布の対照

図 3-5 が示すように、「苦い」と「苦」はそれぞれ違う傾向を示している。「苦い」は身体体験ドメインの意味・用法が 7 割に近い、圧倒的に多いが、「苦」が身体体験ドメインにおける用例の使用頻度 (43.84%) は「苦い」より 2 割ぐらい低い。一方、人間活動ドメインについては、「苦」の使用頻度は全体の 43.77% であり、「苦い」の使用頻度より高い。「苦」が人間活動ドメインにおける用例の使用頻度 (43.84%) は全体の 4 割しか占めていない。身体体験ドメインに使用される用例 (43.77%) とほぼ同じである。このように、「苦」に比べて「苦い」は身体体験領域に使用される割合が高い一方、人間活動ドメインに用いられる割合が「苦」より低いといえよう。

次に、「苦い」と「苦」のプロトタイプの意味と派生義ごとの語義分布についてみてみよう。

プロトタイプの意味と派生義の使用頻度の比重から見れば、「苦い」について出現頻度の合計 568 例のうちプロトタイプの意味・用法は 194 例 (34.15%)、派生義は 374 例 (65.85%) と、プロトタイプの意味に比べて派生義の使用頻度の方が 3 割ほど高い。また、「苦」については、出現頻度の合計 115119 例のうちプロトタイプの意味・用法は 46497 例 (40.39%)、派生義は 68622 例 (59.61%) と、全体的に派生義として使用されることも多い。

このように、日本語の「苦い」と中国語の“苦”はプロトタイプの意味より、派生義の方が多用される傾向を示している。ただし、個々の派生義の出現頻度に比べて、日本語の「苦い」と中国語の“苦”はいずれもすべての語義のうち、プロトタイプの意味が最も多く使用されている。さらに、「苦い」と“苦”のすべての語義において、出現頻度の高い語義の上位 5 位を表 3-13 に示すと、以下ようになる。

表 3-13 出現頻度上位 5 位の語義

順位	「苦い」		“苦”	
	語義	割合	語義	割合
1	① [味：苦味] (プロトタイプ的意味)	34.15%	① [味：苦味] (プロトタイプ的意味)	40.39%
2	⑥ [心理感覚：つらさ]	29.05%	⑩ [苦勞]	19.44%
3	③ [表情：不快]	23.24%	⑦ [心理感覚：悲哀]	18.65%
4	② [匂い・香り：苦味]	6.16%	⑭ [苦境]	11.10%
5	④ [音・声：不快] ⑤ [心理感覚：嫌悪]	3.70% 3.70%	③ [表情：不快]	2.70%

表 3-13 から明らかなように、出現頻度上位 5 位の語義のうち、「苦い」と“苦”が共通するのはまず「甘味」を表すプロトタイプ的意味・用法があげられる。しかもいずれの出現頻度数もトップである。

一方、共通するプロトタイプ的意味・用法のほか、各語義の出現頻度順位に大きな差が見られる。たとえば、「苦い」では、<苦しい、つらい、快くない心理感覚>を表す語義⑥は 2 位であるのに対して、“苦”においては<大変な、苦勞する>を表す語義⑩は 2 位にのぼった。中国語の“苦”も視覚への転義（わずか 2.70%）を持っているが、日本語の「苦い」とは出現頻度（23.24%）に比べ、かなり大きな差がある。

また、「苦い」では不快な音声を表す意味・用法が第 5 位に数えられるが、“苦”でのこの意味・用法は上位 5 位のグループに属していない、13 位で 0.13%である。要するに、語義が共通していても、その使用頻度が違うこともあり得る。

最後に、「苦い」と“苦”が感覚ドメインにおける使用頻度に目を向けてみる。

「苦い」と“苦”はメタファーに基づき、味覚という固有感覚から嗅覚、聴覚、視覚、触覚へと広く拡張されている。ここでは、感覚ごとに出現頻度を比較しながら、二語が共感覚への転用に見られる異同を明示する。感覚ごとに「苦い」と“苦”の使用頻度を示すと、次のようになる。

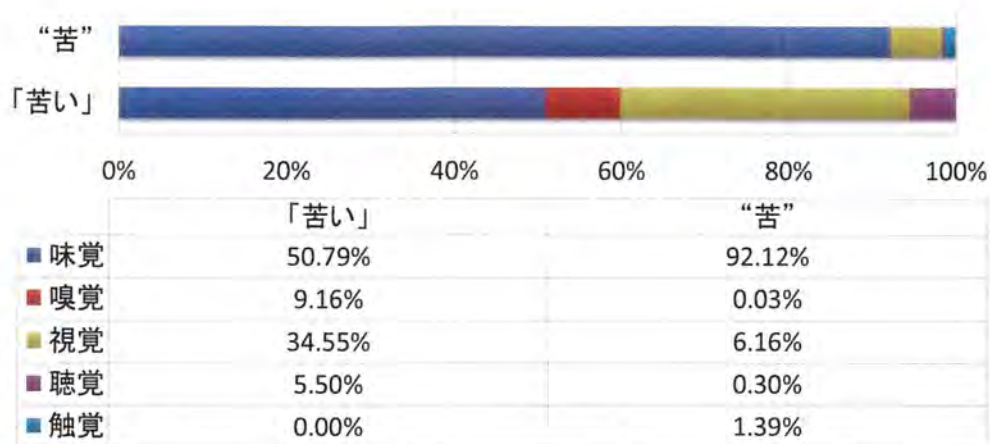


図 3-6 感覚ごとの語義分布の対照

図 3-6 が示すように、感覚領域において、「苦い」と「苦」はいずれも味覚用法を主としている。共感覚への転用の度合に関しては、「苦い」は視覚>嗅覚>聴覚の順で頻出しているが、「苦」は視覚>触覚>聴覚>嗅覚という順で頻出している。感覚領域内での意味拡張においては、「苦い」と「苦」はいずれも視覚への転用が最も多く見られるが、両者とも視覚への転用が優先に使用されていると考えられようになるのである。触覚領域への転用は「苦い」には見当たらないが、「苦」には 2 番目に多い使用頻度で多用されるが、従来の「一方向性仮説」と違う傾向が見られる。

このように、「苦い」と「苦」が共感覚への転義において、異なる語義分布が見られることが明らかである。

5.6.3 意味拡張の認知的プロセスにおける異同

本節では、「苦い」と「苦」の意味構造及び意味拡張の認知的プロセスにおける共通点と相違点を検討したい。

まず、「苦い」と「苦」の意味ネットワークの略図を再掲する。

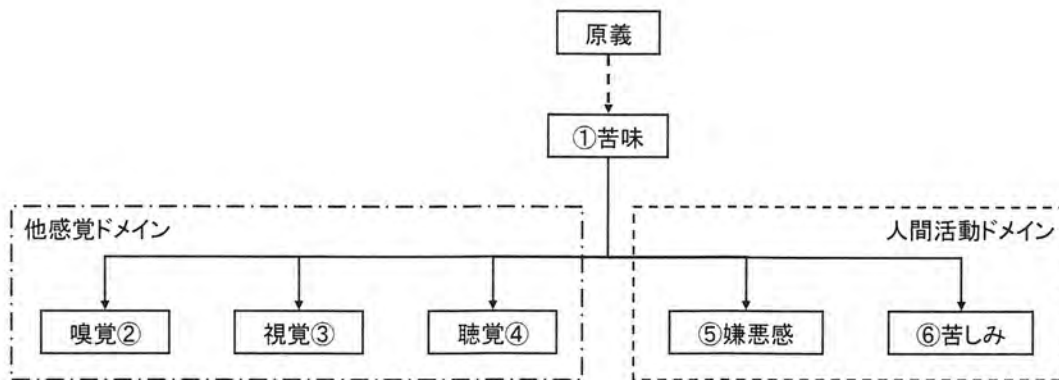


図 3-1 「苦い」の意味ネットワーク（再掲）

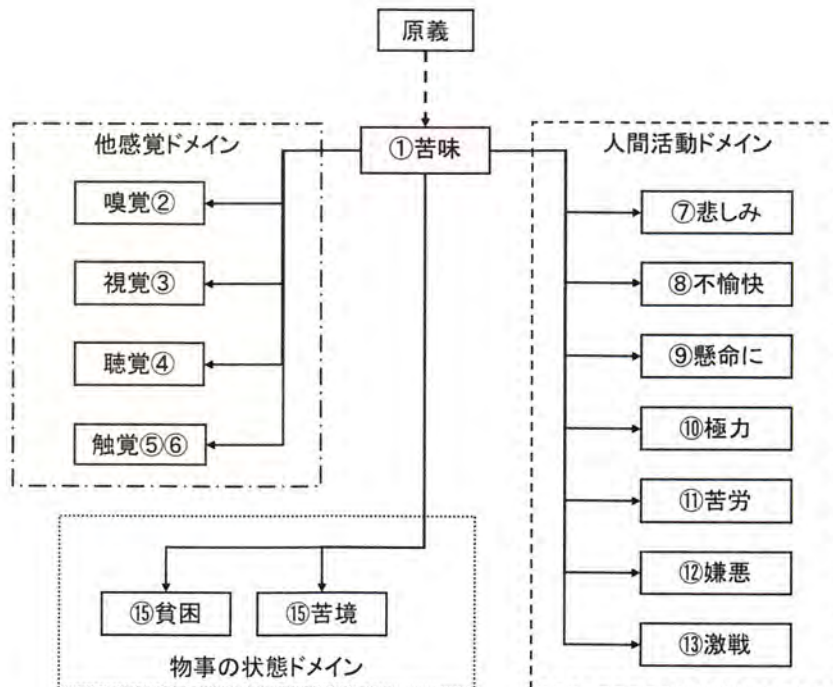


図 3-2 “苦”の意味ネットワーク（再掲）

図 3-1 と図 3-2 に示される「苦い」と“苦”の意味ネットワークの異同を次のようにまとめておく。

(i) 共通点

1. 日本語の「苦い」と中国語の“苦”の意味拡張に見られる認知プロセスの普遍性に目を向けよう。「苦い」と“苦”のプロトタイプの意味はいずれもその原義から<結果—原因>というメトニミーに基づき発展してきたのである。「苦い」と“苦”の原義は元来人間

の身体体験を表すものだが、認知作用によってその身体体験をもたらす対象の性質として読み替えられ、メトニミーによってプロトタイプの意味と関連づけられる。

2. 意味拡張の動機づけに関しては、「苦い」と“苦”は主にメタファーによって拡張が生じている。「苦い」と“苦”のメタファー的な拡張はネガティブ評価性或いは潜在されたポジティブ的评价性によるものが多い。

3. 意味拡張の方向性について、「苦い」と“苦”は外部事物に対する味覚体験から味覚以外の感覚体験へ、さらに人間の行為・精神領域へと拡張していく傾向を示している。このように、味覚形容詞「苦い」と“苦”が身体体験から人間活動ドメインへの意義展開からは、身体的経験を共有している人たちの認知プロセスの普遍性が観察される。これらのことは、ほぼ共通する自然環境に置かれる人間は、使用言語が異なっても、身体基盤に基づき外界との相互作用を行い、意味拡張に普遍性が見られることを示している。

(ii) 相違点

1. 全体的にみれば、中国語の“苦”は日本語の「苦い」より意味が広く拡張している。

2. プロトタイプの意味のメタファー的展開に関しては、日本語の「苦い」は主にネガティブ性に基づきメタファー的に拡張している。一方、中国語の“苦”はネガティブ性によるメタファーのほか、潜在されたポジティブ性や強弱を表わす程度性に基づくメタファー的意義展開もみられる¹⁹。要するに、中国語の“苦”のメタファー的意義展開には、そのプロトタイプの意味の価値評価性或いは強弱が写像されているのに対して、日本語の「苦い」の場合は価値評価性だけが関与しているようである。楠見(2005)では、心理実験に基づき、味覚形容詞の意味構造は「快—不快」と「強—弱」の2次元を持っていると指摘している。そのうち、「苦い」の基本次元について、『不快』であるとともに、強度が『強い』(楠見2005:116)と説明している。“苦”が強弱を表わす程度性に基づくメタファー的意義展開は、“苦”の「不快—強」という2次元構造による説明ができる。

3. 日本語の「苦い」とは異なり、中国語の“苦”は物事の状態ドメインにも拡張している。“苦”が物事の状態ドメインにおける2つの意味・用法(貧困、苦境)は、いずれも語義①<薬や毒など苦味成分のような味>が表す「強い」という程度性(きつい)に含まれるネガティブ性に基づきメタファー的に発展してきたものである。一方、中国語の“苦”が表す語義⑨<物事に懸命に取り組むこと>と語義⑩<辛抱強い、力を尽くすこと>というプラスの意味は、すべてプロトタイプの意味に潜む効能性というポジティブ的な

評価性を出発点として発展し、定着してきものである。程度性からいえば、ここでの“苦”も人が「耐えなければならない、乗り越えなければならない」極限的な性質を持っている。要するに、中国語の“苦”の意味拡張プロセスにおいては、強い程度性に基づく意義展開は日本語の「苦い」と大別するところである。

第6章 コーパスに基づく日・中味覚形容詞の考察 ——「酸っぱい」と“酸”

本章では、認知言語学の視点から、『日・中対訳コーパス』、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』及び《北京大学汉语语言学研究中心语料库》など大規模な言語データベースから味覚形容詞「酸っぱい」と“酸”の使用例を収集・分析し、その意味・用法を対照しながら、考察を行う。

6.1 辞書における「酸っぱい」と“酸”の意味記述

本節では、日・中両言語の辞書における味覚形容詞の意味記述に基づき、「酸っぱい」と“酸”の意味項目を対照しながら、考察を行う。

6.1.1 国語辞典における「酸っぱい」の意味記述

本節では、第三章3.1.1.1で挙げた5種の国語辞典に見られる「酸っぱい」の意味記述を見てみることにする。(以下に引用する各辞書における「酸っぱい」の意味の説明はすべて原典通りである。ただし、紙幅の関係上、各意味項目の後ろに掲載されている用例は省略する。また、考察する際の便宜上、意味項目の番号付けを統一させている。原典には振り仮名が付けられているが、ここでは省略する。)

(1) 『日国』

- ①酸味がある。
- ②(本来酸味のない食物が酸味を持つようになるのは、古くなって腐るからであるところから)盛んな時期を過ぎる。終りに近い。
- ③景気が悪い。調子が悪い。都合が悪いなどの意の俗語。
- ④時機が悪い、折が悪いことをいう、盗人仲間の隠語。

(2) 『学研』

- ①酸い。酸味のある。
- ②(転じて)不快である。

(3) 『新明解』

梅干しやレモンを口に含んだときに感じられる味だ。古くは「酸い」とも。

(4) 『岩波』

酸い。

(5) 『大辞泉』

酸味がある。口を窄（つぼ）めたくなるような味だ。すい。

上記5つの国語辞典の意味記述をまとめると、日本語の「酸っぱい」の各語義では

①梅干しやレモンを口に含んだときに感じられる味だ。口を窄（つぼ）めたくなるような味だ。すい。

②（本来酸味のない食物が酸味を持つようになるのは、古くなって腐るからであるところから）盛んな時期を過ぎる。終りに近い。

③景気が悪い。調子が悪い。都合が悪いなどの意の俗語。

④時機が悪い、折が悪いことをいう、盗人仲間の隠語。

⑤（転じて）不快である。

など15項目（表4-1）があげられる。

表4-1 「酸っぱい」について5つの国語辞典の意味記述

「酸っぱい」の意味項目	日国	学研	新明解	岩波	大辞泉
①梅干しやレモンを口に含んだときに感じられる味だ。口を窄（つぼ）めたくなるような味だ。すい。	①	①	①	①	①
②（本来酸味のない食物が酸味を持つようになるのは、古くなって腐るからであるところから）盛んな時期を過ぎる。終りに近い。	②	—	—	—	—
③景気が悪い。調子が悪い。都合が悪いなどの意の俗語。	③	—	—	—	—
④時機が悪い、折が悪いことをいう、盗人仲間の隠語。	④	—	—	—	—
⑤（転じて）不快である。	—	②	—	—	—

*考察する際の便宜上、意味項目の番号付けを統一させている。

6.1.2 中国語の辞典における“酸”の意味記述

本節では、第三章3.1.1.2で挙げた5つの中国語の辞典を利用し、中国語の“酸”の意味記述を調べ、整理してみる。（以下に引用する各辞書における“酸”の意味の説明はすべて原典通りである。考察する際には、便宜上、意味項目の番号付けを統一させている。）

(1) 《古漢》

①醋。

②醋味，酸味。

③酸痛。

④辛酸，悲痛。

⑤迂腐，寒酸。

(2)《辞海》

①醋的味道。

②通“痠”。酸痛。

③悲痛。

④迂腐或寒酸。

⑤通常指在水溶液中进行电离而产生水合氢离子的化合物。

(3)《现汉大》

①像醋一样的气味或味道。

②特指胃酸，胃液。

③因疾病或疲劳引起的肌肉微痛而无力的感觉。

④悲伤；凄凉。

⑤寒酸；迂腐。

⑥指因男女关系而引起的嫉妒。

⑦能在水溶液中电离出氢离子的化合物的总称。

(4)《现汉》

①囿电解质电离时所生成的正离子全部是氢离子的化合物。

②囿像醋的气味或味道。

③囿悲痛；伤心。

④囿迂腐（多用于讥讽文人）。

⑤囿因疲劳或疾病引起的微痛而无力的感觉。

(5)《新华》

①通常指电离时生成的阳离子完全是氢离子的化合物。

②像醋的气味或味道。

③伤心；悲痛。

④迂腐。

⑤因疲劳或疾病引起的微痛无力的感觉。

上記5つの中国語の辞典の意味記述をまとめると、中国語の“酸”の各語義では

①囙醋。

②囙电解质电离时所生成的正离子全部是氢离子的化合物。

③囙指胃酸，胃液。

④囙像醋的气味或味道。

⑤囙因疲劳或疾病引起的肌肉微痛而无力的感觉。

⑥囙悲痛；伤心；辛酸；凄凉

⑦囙指因男女关系而引起的嫉妒。

⑧囙迂腐，寒酸（多用于讥讽文人）。

などの8項目（表4-2）が記述される。

表4-2 “酸”について5つの中国語の辞典の意味記述

“酸”の意味項目	古漢	辞海	現漢大	現漢	新华
①囙醋。	①	—	—	—	—
②囙电解质电离时所生成的正离子全部是氢离子的化合物。	—	⑤	⑦	①	①
③囙指胃酸，胃液。	—	—	②	—	—
④囙像醋的气味或味道。	②	①	①	②	②
⑤囙因疲劳或疾病引起的肌肉微痛而无力的感觉。	③	②	③	⑤	⑤
⑥囙悲痛；伤心；辛酸；凄凉。	④	③	④	③	③
⑦囙指因男女关系而引起的嫉妒。	—	—	⑤	—	—
⑧囙迂腐，寒酸（多用于讥讽文人）。	⑤	④	⑥	④	④

*考察する際の便宜上、意味項目の番号付けを統一させている。

6.1.3 「酸っぱい」と“酸”の意味記述の対照

日・中両言語の辞書における「酸っぱい」と“酸”の意味記述には、主に次のような特徴が見られる。

1. 辞書によって、意味立項の配列は多少異なっているが、日本語の「酸っぱい」は「酸味がある」を第一義として挙げていることと同じ、中国語の“酸”も形容詞として使う場

合、“像醋的气味或味道”を第一義として挙げている。

2. 品詞性から見れば、“酸”は主に形容詞としての役割を果たしているが、《古漢》の語義①、《辞海》の語義⑤、《現漢大》の語義②と⑦、《現漢》の語義①、《新华》の語義①に記載されている例が示すように、名詞的な用法もある。この場合、“酸”は主に「酢や胃酸など酸っぱい味のする酸性物質」、或いは「水溶液中で水素イオンを放出する物質」の意味を持つ。それに対し、「酸っぱい」の意味記述は、主に形容詞に集中して、ほかの用法はあまり言及されていなかった。

3. 各辞書による「酸っぱい」と“酸”の意味規定から見れば、“酸”は五つの中国語の辞典の意味記述の中で、味覚を表わす語義以外に、味覚以外の共感覚、人間の心理感覚、人間の動作の様子などのような意味拡張が生じていることに対し、日本語の「酸っぱい」の意味について、『日国』ではやや細かく記述していたが、『学研』『新明解』『岩波』『大辞泉』など四つの国語辞典ではあまり詳しく説明していなかったとも言えるだろう。

4. 日本語の「酸っぱい」は基本的にはプラス的评价性を帯びていないようであるが、中国語の“酸”も主にマイナス的评价性を帯びているようである。

辞書における「酸っぱい」と“酸”の各意味記述を対照してまとめると、表4-3のようになる。

表4-3 「酸っぱい」と“酸”の意味記述の対照

意味記述	「酸っぱい」	“酸”
①酢・梅干し・レモンなどを口に含んだときに感じられる味だ。口を窄（つぼ）めたくなるような味だ。すい。	○	○
②酢のような匂い	—	○
③疲労や疾患、激しい運動などで筋肉を使い過ぎることによって起こる痛み。だるくて痛むこと。四肢脱力感と関節痛も含める。	—	○
④いたましいこと。あまりの悲しさやつらさに耐えられないほどであること。	—	○
⑤自分の愛する者の愛情が、他の人に向けられるのを恨み憎むこと。やきもち。恪氣(りんき)。	—	○
⑥古い観念にとらわれて融通がきかない。時代遅れである。また、貧	—	○

相な格好や貧乏でみすぼらしい様子をいう。		
⑦(本来酸味のない食物が酸味を持つようになるのは、古くなって腐るからであるところから)盛んな時期を過ぎる。終りに近い。	○	—
⑧景気が悪い。調子が悪い。都合が悪いなどの意の俗語。	○	—
⑨時機が悪い、折が悪いことをいう、盗人仲間の隠語。	○	—
⑩不快である。	○	—
⑪酢。	—	㊦
⑫水溶液中で水素イオンを放出する物質。	—	㊧
⑬胃酸。	—	㊧

*㊦印を付けるのは古漢語(古代の中国語)における意味項目。㊧印は固有名詞のことを表す。

日・中両言語の辞書における味覚形容詞「酸っぱい」と“酸”について、共通した語義には、ただ①酢・梅干し・レモンなどを口に含んだときに感じられる味だ。口を窄(つぼ)めたくなるような味だ。すい。の1項目しかあげられない。

中国語の“酸”では「酸っぱい」の意味項目⑦盛んな時期を過ぎる。終りに近い。；⑧景気が悪い。調子が悪い。都合が悪いなどの意の俗語。；⑨時機が悪い、折が悪いことをいう、盗人仲間の隠語。；⑩不快である。に相当する語義記述が存在しない。

一方、「酸っぱい」の意味項目の中に、“酸”の意味項目②酢のような匂い。；③疲労や疾患、激しい運動などで筋肉を使い過ぎることによって起こる痛み。だるくて痛むこと。四肢脱力感と関節痛も含める。；④いたましいこと。あまりの悲しさやつらさに耐えられないほどであること。；⑤自分の愛する者の愛情が、他の人に向けられるのを恨み憎むこと。やきもち。愷気(りんき)。；⑥古い観念にとらわれて融通がきかない。時代遅れである。また、貧相な格好や貧乏でみすぼらしい様子をいう。と対応できるものは見当たらない。

また、“酸”について、意味項目⑪酢。は、名詞としての使い方であり、古代中国語に限られて、意味項目⑫水溶液中で水素イオンを放出する物質。と⑬<胃酸。>は固有名詞として使われている。

辞書の意味記述により、①酢・梅干し・レモンなどを口に含んだときに感じられる味だ。口を窄(つぼ)めたくなるような味だ。すい。の意味を表す時、日本語の「酸っぱい」と中国語の“酸”との直接翻訳は可能であるが、それ以外の場合では、翻訳に問題が発生する可能性が十分あると思われる。以下、コーパスの実例を見ながら、考察してみよう。

6.2 日・中対訳コーパスに基づく「酸っぱい」と“酸”の意味・用法の考察

本節では、日・中両言語の辞書に述べている意味項目を参考にし、日・中対訳コーパスから収集した用例を分析しながら、「酸っぱい」と“酸”の意味・用法や対訳関係のありさまを考察する。

6.2.1. 対訳関係が成立可能な意味・用法についての考察

①酢・梅干し・レモンなどを口に含んだときに感じられる味だ。口を窄（つぼ）めたくなるような味だ。すい。

(1) 手の届かない葡萄の房を、あれは酸っぱいのだと罵ったのは、イソップ物語の中の狐であった。

訳：够不到的葡萄，就说它是酸的，这是伊索寓言中所描写的狐狸。

(2) 铙钩入肉时发出的噗味声令人齿底生津，像吃了酸杏子一般慢悠悠地拖过来。

訳：や熊手が肉にぶすりつきささって、すっぱい杏を食べたように歯ぐきがじんとした、ゆっくりと引きよせた。

(3) あれ、この牛乳、酸っぱくなっている。

訳：咦，这个牛奶怎么变酸了。

(4) 为什么食物发酵后会变酸呢？

訳：なぜ食物が発酵したあと、酸っぱくなるんですか。

以上の用例から分かるように、「酸っぱい」と“酸”は味覚的意味を表す時に、互いにそのまま訳せばよいのである。

②酢のような匂い

(5) 酸っぱい臭いが部屋に充満した。私には泣く力もなくなっていた。

訳：房间里满是酸臭味。我连哭泣的力气都没有了。

(6) 悪臭物質として、刺激臭のプロピオン酸、腐った卵のような硫化水素、腐ったバターのような酪酸、酸っぱいにおいのする酢酸などである。

訳：所谓恶臭物质，既有刺鼻的丙酸，也有臭鸡蛋味的硫化氢，臭黄油一样的丁酸，还有酸臭的醋酸。

例(5)と(6)のように、「酸っぱい臭い」、「酸っぱい匂い」を訳す時は文字通りに、“酸

臭” “酸味（嗅覚）” に訳すればよいと思われる。

6.2.2 対訳関係が成立しかねる意味・用法についての考察

③（音声など）悲しい。

（7）哀鸿酸嘶暮声急。

（8）俄见女郎绷婴儿，自穴中出，举首酸嘶，怨望无已。

例（7）と（8）は「酸っぱい声」と訳したら、意味不明な文章になってしまう。原文の意味を十分に理解したうえ、ここの“酸嘶”は「悲しい声」、「悲痛な叫び」、「悲鳴」と解釈されるべきである。

④疲れや病気が引き起こす筋肉の痛みと無力感

「疲れや病気が引き起こす筋肉の痛みと無力感」、「だるくて痛むこと」という意味で使われる用例を見てみよう。

（9）倪藻赞叹着，觉得小腿有些酸。

訳：驚嘆しながら、倪藻は足がだるくなってきた。

（10）头转昏了，腿走酸了，才能把那粮食粒儿变成面。

訳：頭がボーッとなり、足が疲れきった頃にならないと、小麦は粉にならなかった。

この意味として使用される“酸”は日本語に訳すと、主に「だるい」、「疲れた」、「力が抜けた」、「凝っている」となる。

⑤泣くことによって引き起こされる鼻の不快感

泣くことによって引き起こされる不快感の用例を紹介しよう。

（11）倪吾诚听了高兴，继而又觉鼻酸。

訳：倪吾誠は聞いて満足しつつ、同時にツンと鼻に衝き上げてくるものがある。）

（12）我的鼻子一阵阵发酸，不知为什么总想哭出来。

訳：鼻の奥がむずむずして泣き出したいような気分だ。

この意味で用いられる“酸”は鼻と共起することが多く、一般的に「ツンと来る」、「ツーンとしてくる」、「むずむずする」、「じんとする」といったふうに日本語へ訳される。

⑥つらい、苦しい

(13) 说得倪萍心酸起来，愧悔天地，嗷嗷地哭。

訳：聞いている内に倪萍は悲しくなってきた酷く後悔し、ワンワン泣きだした。

(14) 近来虽然泪少了，可是心却常常酸痛，好像眼泪都流在心里似的。

訳：近ころ涙は減ったようですが、心はかえっていつも苦しくて、涙が胸の中へ流れてゆくみたい。

(15) “晓梦……”我望着她，心里酸酸的，谭静抬手悄悄抹了一下眼睛，维娜却发出一声压抑的抽泣。

訳：「晓夢……」せつなくてしかたがない。譚静は指先でそつと涙をぬぐい、維娜は押し殺した声ですすり泣いた。

用例が示すように、「つらい心理感覚」を表す“酸”は「悲しい」、「苦しい」、「切ない」などのように訳されている。

⑦ やきもち。愠気。

この意味として使われる“酸”は次の例文のように日本語に訳されている。

(16) 柳原拍手道：“这还像句话！”话音里仿佛有三分酸意。

訳：柳原は手を打って、「そうこなくちゃあ」と言った。その言葉にはちよっぴりやきもちが感じられました。

(17) 你看他那酸溜溜的样儿有什么爱头呢？

訳：あんなやきもち焼きの、もったいぶった男、どこがいいのよ。

(18) “这么说，孙悦保你是无私的了？”我酸溜溜地问。

訳：「それじゃ、孫悦があなたの側に立ったのは無私だったって言うの？」私は嫉妬をむき出しにして言った。

⑧ 盛んな時期を過ぎ、ダメになる

日本語の「酸っぱい」は「盛んな時期を過ぎ、ダメになる」という意味がある。例えば、以下の例文のようである。

(19) 役者は酸っぱくてもいい。

訳：哪怕是过气的演员也行。

⑨ 何度も繰り返し、くどいと思われるほど

「酸っぱい」はまた、「何度も繰り返し、くどいと思われるほど」という意味で使用されている。具体例を見てみよう。

(20) 口を酸っぱくして言う。

訳：把嘴都说酸了，把嘴都说干了。

⑩考え方がかたい、融通がきかない

(21) 在他身上，儒雅和酸腐紧紧纠缠在一起。

訳：彼の場合、学者風の鷹揚さと古くさい硬さがいつもないまぜになっている。

(22) 一开始，濮阳荪还只不过是语句酸腐。

訳：はじめのうち、ことばは陳腐だが。

⑪貧相な格好や貧乏でみすぼらしい様子

(23) 这个从不让外人进来的屋里，十分寒酸。

訳：滅多に人をいれない屋内はみすぼらしい限りだ。

(24) 其实是为了炫耀她的阔气和神气，激激我们这些穷酸秀才。

訳：実は、自分の羽振りの良さをひけらかし、われわれ貧乏書生の神経を逆なでしているのである。

⑫わざとらしい、嫌味に聞こえる、あつかましいこと

(25) “花瓶”的声调似乎温柔了些，少了些酸气，多了点同情。

訳：「職場の花」の口調はいくらか和らぎ、厭味な調子は薄れて同情的になっていた。

(26) 他那个人台上犯酸台下也犯酸，是让人起腻。

訳：あの人だね。舞台でも、平生でもあつかましくって本当にいやになるの。

6.2.3 本節のまとめ

本節では、日・中対訳コーパスを利用し、日本語の「酸っぱい」と中国語の“酸”における意味・用法の共通点と相違点、両語の対訳関係などについて具体的に考察してみた。その結果を表 4-4 にまとめておく。

表 4-4 「酸っぱい」と“酸”の対訳関係

対訳関係 が成立す る場合	意味記述	「酸っぱい」	“酸”
	①酢のような味。すい。	酸っぱい葡萄	酸葡萄
	②酢のような匂い。	酸っぱい臭い	酸臭
	⑥つらい、苦しい	酸っぱい思い	辛酸的感受
対訳関係 が成立し かねる場 合	I. “酸”の「酸っぱい」以外の日本語訳		
	意味記述	日本語	“酸”
	③（音声など）悲しい。	悲しい声	酸嘶
	④疲れや病気が引き起こす筋肉の痛みと無力感	足が疲れきった	腿酸
	⑤泣くことによって引き起こされる鼻の不快感	鼻にツンと来る	鼻酸
	⑥つらい、苦しい	せつない、悲しい	心酸
	⑦やきもち。格気。	やきもち	酸意
	⑩考え方がかたい、融通がきかない	古くさい硬さ	酸腐
	⑪貧相な格好や貧乏でみすぼらしい様子	みすぼらしい	寒酸
	⑫わざとらしい、嫌味に聞こえる、あつかましいこと	厭味な調子	酸气
	II. 「酸っぱい」の“酸”以外の中国語訳		
	意味記述	「酸っぱい」	中国語
	⑧盛んな時期を過ぎ、ダメになる	酸っぱい役者	过气的演员
	⑨何度も繰り返す、くどいと思われるほど	口を酸っぱくして言う	嘴都说干了

*⑩印を付けるのは古漢語（古代の中国語）における意味用法である。

表 4-4 から簡単に分かるように、「酸っぱい」と“酸”の対訳関係から見れば、「酸っぱい」と“酸”の意味派生には顕著な相違が見られる。

次の節では、引き続き認知言語学の視点から、「酸っぱい」と“酸”の差異をもたらす理由を探ってみる。

6.3 認知言語学的アプローチによる「酸っぱい」の意味拡張プロセスの分析

本節では、認知意味論に依拠し、味覚形容詞「酸っぱい」の各意味項目の意味関連を明らかにし、またそれぞれがいかなる原理によって派生したのかなどについて検討する。

ここでは、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』から「酸っぱい」の実例を収集・分析することによって、「酸っぱい」の意味拡張を検討する。以下において、出典を明記していないものは、すべてBCCWJからのものである。

6.3.1 プロトタイプの意味

語義①：酢のような味である。すい。

「酸っぱい」の意味拡張プロセスを追うに当たり、まずはその基点となるプロトタイプの意味を確認することから始める。日本語の「酸っぱい」とは、「酸味がある」、「酸い」という意味である。名詞「酢」の形容詞化で、酢のような味、また、梅干し・レモンなどを口に含んだときに感じられ、口を窄めたくなるような感じを意味する。人は「酸味成分」の刺激を舌や口に受けると、「酸っぱい」と感じる。要するに、味覚の1種である酸味を表すのが「酸っぱい」の本来の姿であり、この意味こそ「酸っぱい」の原義だと思われる。「酸っぱい」の感覚内容そのものをことばによって述べることは難しいため、その刺激的感觉をもたらす具体的な物⁵⁰の性質によって示すのが手っ取り早い方法である。

本研究では、「酸っぱい」のプロトタイプの意味を「酢のような味である。すい。」とする。「酸味成分を口に含んだときに生じる味覚」という原義が「酸っぱい」のプロトタイプの意味とされていない。この意味での「酸っぱい」は、舌で舐めるだけですぐ感じ取られる、具体的な、単純な属性であって、他の意味はここから派生したものとして位置づけることができる。

「酸味成分の持っている味」は「酸っぱい」という味覚を引き起こす原因であり、酸味という味覚はその味によって引き起こされた結果だと考えられる。二者の間には<結果—原因>というメトニミー関係が成り立つ。

プロトタイプの意味の使用例を見てみよう。

(27) 赤いリンゴをイメージする人もいれば、顔が曲がりそうなほど、酸っぱい青リンゴをイメージする人がいるかもしれない。

(28) そしてレモンとか夏みかんとかの酸っぱいものをたくさん買ってくるんだ。

プロトタイプの意味としての「酸っぱい」は、「酸味」という尺度の目盛りの上を自由に上下するものである。このとき、「酸っぱい」は小刻みな程度の段階が考えられるため、自由な尺度性をもっているものだと見てもよい。プロトタイプの意味としての「酸

っぱい」は評価する人や評価される対象によって、異なる価値評価が付与されることが考えられる。

6.3.2 味覚ドメイン内の転義

前節で述べたように、「酸っぱい」は語義①<酔のような味である。すい。>というプロトタイプの意味以外に、「物が発酵した時もしくは腐った後の味」を表すこともできる。

語義②：物が発酵した時もしくは腐った後の味

(29) ビリッと辛みのきいた甘酸っぱい中国風の白菜漬け。

(30) あれ、この牛乳、酸っぱくなっている。

酸味は、本来、腐ったものや未熟なものを示す味として認識されるが、食経験を重ねるにつれて、食欲増進やエネルギー代謝に関わる有機酸を示す味として好まれるようになると考えられている。つまり、酸味についてはわざと物を腐らせ、美味しくさせる場合と、物が古くなり、自然に腐った場合がある。前者は発酵させることで美味しくなり、例えば、ヨーグルト、漬物などがある。例文(25)はまさにその状況を指しており、日・中両国の人々にとっての独特の酸味である。後者の場合は、時間が経つことにより、菌が入り、食べられなくなったことを指している。例文(26)で示しているように、ただ単に味が酸っぱくただけではなく、腐敗した味、変質した味を描写するのに用いられている。

6.3.3 共感覚ドメインへの転義

本来味覚を表す「酸っぱい」は、共感覚に転用されることがある。

従来の「一方向性仮説」によれば、味覚を表すことばは嗅覚、視覚、聴覚への転用が可能である。しかし、味覚形容詞「酸っぱい」に関する実例を当たってみると、嗅覚・視覚にしか意味拡張をなしていないことが分かる。以下は、その実例を見てみよう。

(1) 嗅覚への転用

語義③：酔のような匂い

(31) 部屋のなかはずこしだけ酸っぱい匂いがした。ヒカルは妙に懐かしい気分になった。

(32) この牛乳は酸っぱいにおいがする。

(33) まわりのどこかから生臭いような酸っぱいような嫌な臭気がしてきた。空地全体にただよっているようであった。

これらの用例は、「酸っぱい」と“酸”が匂いを修飾しているのである。主体は主に臭気や、汗などの不愉快で嫌な匂いである。このような匂いを嗅いだ時、鼻を覆いたくなり、酸っぱい味覚的刺激を想起させるから、「酸っぱい」と“酸”を使って表している。プロトタイプの意味との類似性に基づき、共感覚比喻によって味覚領域から嗅覚領域へ拡張していると考えられる。

雑誌や小説を当たってみると、「酸っぱい」は味覚から嗅覚へ転用されている用例は容易に見つかる。しかし、「甘い」との複合語「甘酸っぱい」の形で出現されることも少なくないようである。

(34) ポーチの下では腐った果実の甘酸っぱい臭いにジャスミンの香りが混じり、もっと薄暗い一角では糞の臭気がただよう。

(35) その瞬間、女の身体の柔らかな弾力が伝わってくる。甘酸っぱい汗と香水が混ざった匂いが、弘志を包み込んだ。

(2) 視覚への転用

語義④：酸味を口にするとき、口をすぼめた独特な表情

(36) 小鴨に果汁だけ飲ませてみたら一瞬酸っぱい顔したけど意外にもおかわりを催促してきました！

(37) いずれにせよ、そのセリフだけで相当にまずかったらしく、リエラはなんとも言えない酸っぱい顔つきをした。

(38) こうはいったが和泉屋次郎吉、たいして嬉しそうな顔もしない。むしろ酸っぱい顔をした。

酸味を口にすると無意識のうちに口をすぼめた独特な表情になるが、これは、唾液腺を刺激して唾液分泌を促したり、唾液を口の中に溜めたりすることで、本来、腐ったものなどを示す味である酸味を中和して洗い流すためと考えられている。前の用例で、日本語の「酸っぱい」は顔を対象としている。「酸っぱい顔」は顔の味が酸っぱいという意味ではない、その顔つきが酸っぱいものを口にした時の表情と同じであるから、「酸っぱい」と修飾するものである。「酸っぱい」のこの用法は、プロトタイプの意味と類似性があるから、共

感覚比喩によって拡張していると考えられる。

6.3.4 人間活動ドメインへの転義

日本語の「酸っぱい」は味覚、嗅覚など人間の身体感覚に関わる経験を表わすほか、人間の言動・心理状態などに拡張され使われている。本研究では、「酸っぱい」が人間活動ドメインへの転義を更に細分して、語義⑤と語義⑥の意味・用法をまとめる。ここでは、各語義の転義プロセスを見てみる。

語義⑤：主体に好まれない、不快である、嫌な心理感覚

まず、語義⑤「主体に好まれない、不快である、嫌な心理感覚」という意味・用法を見てみる。

(39) 酸っぱい思いがふえた。酸っぱい苦勞がふえた。

例(39)のように、「酸っぱい」が修飾している語は「思い」である。その「思い」は「不快で悲しい」という意味である。その「思い」を思い出したら、「酸っぱい」という心的な感覚を起こすから、「酸っぱい」と修飾している。これは、酸っぱいものを食べたときの味覚と類似性があるから、メタファーによって拡張していると考えられる。

味覚としての「酸っぱい」はもともと快い味ではないため、心理感覚を表す時にも、プラスのイメージを持つことばと共起しにくいことが予想される。コーパスの用例を分析してみると、「酸っぱい」は中立のイメージを持つことばと共起し、マイナスの意味を表すケースが多いことが分かる。

(40) 馴染みでも無いのに、こんな酸っぱい内幕までぶちまけて話したのだ。

(41) 人生はどこか酸っぱいものであることが実感的にわかってきたのは40代に入ってからだった。酸っぱい思いが増えた。

(42) 深海魚の話題では釣り針が届くのに少々、深すぎたようだ。そんな酸っぱい思い出を胃液のように溢れさせながら、校舎の間に立つ。周辺にスマキンの気配はない。

(43) 単にその食感が好ましいといった水準を超えて、なにやら子袋という臓器に対する精神的な執着と依存が見え隠れしていた。そんな姿が思い出されて、少し酸っぱい気分になった。脂肪が稲妻模様を描いている血色のカルビと真っ白な子袋が脳裏に並列された。

(44) あのと時の声が、あのと時の眼差しが、今このとき静かにあたしを見つめている大西に重なって、胸が酸っぱい気持ちで一杯になる。

例(40)の中の「酸っぱい内幕」は「情けない苦しい生活の秘密」という意味である。例(41)の「酸っぱいもの」は「人生は大変である」ことを表し、「酸っぱい思い」は「心苦しい思い、快くない思い」という意味に使われている。また、(42)(43)(44)の用例を見てみると、「酸っぱい」の後に続く「思い出」、「気分」、「気持ち」は、いずれも中立のイメージを持つことばであるが、「酸っぱい」と共起することによって、用例全体の意味はマイナスになる。それは「酸っぱい」がマイナスの心理感覚を表すにふさわしいということが言えよう。

「酸っぱい」の心理感覚を表す用例を調べていると、また、「甘い」との複合語「甘酸っぱい」の用例が大量に見られることが分かる。したがって、ここでは、心理感覚を表すのに用いられる「甘酸っぱい」についても分析してみよう。

「甘酸っぱい」は快さと感傷のまじったような気持ちを描写するのによく使用され、「酸っぱい」より幅広い使い方を見せている。中立のイメージを持つことばと共起するほか、プラスのイメージを持つことばとマイナスのイメージを持つことばと共起する用例も見られる。

a. プラスのイメージを持つことばと共起する場合

(45) 杉本は節子とデュエットしながら、とうに忘れていた甘酸っぱい青春の輝きと後悔とをごちゃごちゃにして、三十数年前へ飛翔して行った。

b. 中立のイメージを持つことばと共起する場合

(46) こんな青春時代の甘酸っぱい思い出がよみがえる作品の一方で、ユーモアを交えたポエムもあります。

(47) ディズニーランド行った日は、女はヘッドボードに風船くくりつけて、少女の頃の甘酸っぱい夢が見たいのよ。

(48) さずがお父さんだと感心するしだいです」、「いくらか耳は悪くなっているかもしれん」甘酸っぱいものにくすぐられながら、私は言った。

c. マイナスのイメージを持つことばと共起する場合

(49) ダムの仕事が終り、次の現場に発つとき、見送った館崎は甘酸っぱい感傷を味わった。

「甘酸っぱい」は「楽しさ、物悲しさなどが入りまじった言いがたい気持ち」を表しているが、楽しい部分と悲しい部分はどちらが強く感じられるかによって、修飾されることばの性質が決まる。例えば、「甘酸っぱい青春の輝き」の場合は「甘い」部分が強く感じら

れ、「甘酸っぱい感傷」の場合は「酸っぱい」部分が強く感じられていると考えられる。中立のイメージを持つことばと共起する場合は、楽しい気持ちと悲しい気持ちは、ほぼ同じ程度であると思われる。しかし、いずれにせよ、「甘酸っぱい」気持ちはその人にとっての懐かしい気持ちであり、貴重な経験であることが言えよう。したがって、全体的にプラスの気持ちを表すことが多いのである。

語義⑥：同じことばを何度も繰り返す、嫌と思われるほど

また、日本語の「酸っぱい」は「同じことばを何度も繰り返す、嫌と思われるほど」という意味で用いられている。よく、「口を酸っぱくして言う」、「口が酸っぱくなるほど」、「口酸っぱく言う」といった決まった形で使用される。具体的に示すと、以下のようである。

(50) この権利を得たい者は全校の生徒ことごとくであろう。しかし選挙は極めて公平であらねばならぬ事を、教師は平生から口を酸っぱくして教えている。

(51) 時々自分の口調と言っていることが、その昔私自身の母親が繰り返して口が酸っぱくなる程言っていたことと、そっくりだと苦笑する。あれほど彼女が絶望視していたその娘が、今、小さな子供たちに、ああしろ、こうしろと命令している。

(52) たとえこのような訓令が発せられないとしても、政治問題に口ばしを入れたり、またどちらか一方に力を貸すということは、探検の全事業を致命的なものにするということとは、われわれは酸っぱいほど知っていた。

前述の例のような使い方は、口数多く話す時に、科学的に口中が酸性になるという説から来ていると思われる。口の中に多くの細菌がいるが、その中の齶蝕原因菌という菌が砂糖やデンプンなどから酸を作り出すという。ずっとしゃべり続けると、この作用が活発になり、口の中に生成された酸を飲み込むと、結果的に口が酸っぱくなるのも不思議ではないのであろう。

6.3.5 物事の状態ドメインへの転義

語義⑦：盛んな時期を過ぎ、ダメになる

「酸っぱい」は物事の状態ドメインという意味区分において、役者や俳優などが「盛んな時期を過ぎ、ダメになる」という意味がある。この使い方はあまり普遍的ではないので、用例も少ない。用例(53)を通して見てみよう。

(53) 実は神戸の新開地で常打ち芝居がある。そこへ一人欲しいので、コケ脅しに使いたいのですから、役者は酸っぱくてもいいので。

例(53)の「役者は酸っぱくてもいい」というのは扱き使いたいから、来させる役者は人気がなくなった人でもいいということを意味している。本来酸味のない食物が酸味を持つようになるのは、古くなって腐るからであるところから、この用例(43)の「酸っぱい」は物が腐敗し、新鮮でなくなったという「酸っぱい」の味覚ドメイン内の語義②と通じている。この使い方は「酸っぱい」の味覚ドメイン内の語義②から派生したと思われる

6.3.6 認知言語学的アプローチによる語義の再分類

以上、日本語の国語辞典や先行研究を踏まえつつ、BCCWJに対するコーパス調査に基づき、「甘い」の意味拡張を考察してきた。再整理した「甘い」の各語義を以下のように示しておく。

「酸っぱい」

I【身体体験】

1. 味覚

語義①：酢のような味である。すい。

語義②：物が発酵した時もしくは腐った後の味

2. 嗅覚

語義③：酢のような匂い

3. 視覚

語義④：酸味を口にするとき、口をすぼめた独特な表情

II【人間活動】

語義⑤：主体に好まれない、不快である、嫌な心理感覚

語義⑥：同じことばを何度も繰り返す、嫌と思われるほど

III【物事の状態】

語義⑦：盛んな時期を過ぎ、ダメになる

今回のコーパス調査によって、国語辞典に掲載されていない、或いは独立した意味項目として立てていないといういくつかの意味・用法（語義②<物が発酵した時もしくは腐った後の味>、語義③<酢のような匂い>、語義④<酸味を口にするとき、口をすぼめた独

特な表情>、語義⑥<同じことばを何度も繰り返し、嫌と思われるほど>など) が見つかった。

6.3.7 多義的意味ネットワーク

以上の検討を踏まえ、味覚形容詞「酸っぱい」の各語義の拡張起点及び拡張方式を表 4-5 に示す。さらに、以下図 4-1 に「酸っぱい」の多義的意味によって形成される意味ネットワークの略図を提示する。

表 4-5 「酸っぱい」の各語義の拡張方式

語義	拡張の起点	拡張方式
語義①酔のような味 (プロトタイプの意味)	原義①酸いという味覚	メトニミー
語義②物が発酵した時もしくは腐った後の味	語義①	メタファー
語義③酔のような匂い	語義①	メタファー
語義④酸味を口にすると、口をすぼめた独特な表情	語義①	メタファー
語義⑤主体に好まれない、不快である、嫌な心理感覚	語義①	メタファー
語義⑥同じことばを何度も繰り返し、嫌と思われるほど	語義②	メトニミー
語義⑦盛んな時期を過ぎ、ダメになる	語義②	メタファー

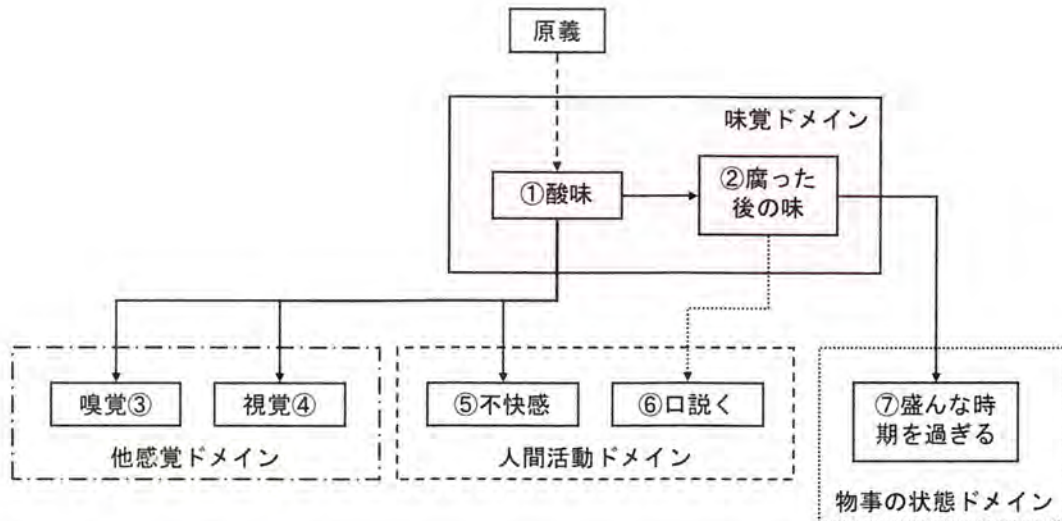


図 4-1 「酸っぱい」の意味ネットワーク

上記の略図において、太線矢印はメタファーリンクを表し、破線矢印はメトニミーリンクを表し、点線矢印はシネクドキーを表わしている。語義①は意味ネットワークにおける拡張の起点となるプロトタイプの意味であると位置付けられる。そのほかの語義は全て語義①を出発点として、そこからメタファー・メトニミー・シネクドキーの経路を通して意味が展開する。

表 4-5 と図 4-1 に見られるように、「酸っぱい」の意味拡張及び意味ネットワークには次のような特徴が見られる。

1. 拡張手段について、「酸っぱい」は主にメタファーによって拡張している。原義からプロトタイプの意味（語義①）、語義②〈物が発酵した時もしくは腐った後の味〉から語義⑥〈同じことばを何度も繰り返す、嫌と思われるほど〉への転用だけがメトニミーによるものである。

2. 「酸っぱい」の多義的な意味はほとんどメタファーとメトニミーのどちらかによって拡張されてきたものだが、語義⑦〈盛んな時期を過ぎ、ダメになる〉は、語義②〈物が発酵した時もしくは腐った後の味〉を起点にメタファー的に発展してきた。

3. メタファーによる転義から見れば、「酸っぱい」のネガティブ性が写像され、他の語義に拡張するケースが多い。従って、メタファーによる「酸っぱい」の意味拡張には、形容詞の価値評価性が深い関わりを持っていることが窺える。ここで、「酸っぱい」の各語義の評価性についての分類を次の表 4-6 で示す。

表 4-6 「酸っぱい」の各語義の評価性

プラス (+)	マイナス (-)
	語義①酢のような味
	語義②物が発酵した時もしくは腐った後の味
	語義③酢のような匂い
	語義④酸味を口にすると、口をすぼめた独特な表情
	語義⑤主体に好まれない、嫌な心理感覚
	語義⑥同じことばを何度も繰り返す。
	語義⑦盛んな時期を過ぎ、ダメになる

4. 「酸っぱい」の意味拡張の方向性としては、外界の事物に対する身体体験、すなわち味覚の客観的な叙述から、味覚以外の共感覚、さらに主体の主観的な叙述や感情的な叙述へ拡張する方向性が見られる。

6.4 認知言語学的アプローチによる“酸”の意味拡張プロセスの分析

本節では、味覚形容詞“酸”の各意味項目の相互関係を明らかにし、またそれぞれがどうやって派生したのかなど、認知的アプローチによって検討したい。

ここでは、北京大学漢語語言学研究中心によって開発された《北京大学汉语语言学研究センター語料庫》(以下、CCLと略称する)から“酸”の実例を収集・分析することによって、“酸”の意味拡張を検討する。以下中国語の用例において、出典を明記していないものは、すべてCCLのものである。

6.4.1 プロトタイプの意味

語義①：“像醋一样的味道”（「酢のような味」）

前節が述べたように「味覚」は食品中の成分が糖やアミノ酸のように生体にとって必要か、あるいは腐敗物、毒物のように有害かを弁別するために必要な感覚といわれる。

“甜”、“辣”、“苦”と同じ、中国語において、“酸”も味覚を表し、レモン・みかんのような果物や酢などの調味料など酸味成分を持つものが口中における味を意味する。

本研究では、“酸”のプロトタイプの意味を「酸味成分の、舌を刺激し、口を窄めたく

なるような味」とする。

(54) 这种果实看起来很平常，但吃了它之后，过些时候不论再吃酸的柠檬还是很苦的橙子，都感觉到香甜可口。

(55) 白酱油，芝麻油，花生油，还有咸菜海蜇头！山西的老醋裂牙儿酸，赛过酸石榴！
哈哈！

(56) 荔中绝品是莆田的“陈紫”，有鸡蛋大，果壳紫色，果浆甜中透酸，宋代文豪苏东坡有“日啖荔枝三百颗，不辞长作岭南人”的名句。

例(54)、(55)、(56)の「酸っぱいレモン、夏みかん」や「酸老醋、酸石榴」で示されているように、「酸」は果物や食物などの「酢のような味」を表現するのに用いられている。レモンや酢などは“酸味物質”の代表であり、人間の“酸”という味覚を引き起こす原因である。“酸”という味覚と“酸味物質（酸いもの・酸味成分）”の間にはく結果——原因>というメトニミー関係が成立する。このように、“酸”のプロトタイプの意味とその原義はメトニミーリンクによって関係付けられる。

6.4.2 味覚ドメイン内の転義

語義②：“发酵或腐败的味道”（「物が発酵され、もしくは、腐った時の味」）

“酸”は日本語の「酸っぱい」と同様に、物が発酵され、もしくは、腐った時の味を表している。

(57) 白菜等用开水烫过后，经发酵变酸了的叫酸菜。

(58) 蜂蜜变酸了变稀了还能喝吗？

“酸奶（ヨーグルト）”“酸菜（キムチ）”の“酸”の味もその使い方に属している。乳酸菌が入っている為に酸っぱくなり、プロトタイプの意味との類似に基づき、語義①からメタファー的に発展してきたものだと考えられる。

6.4.3 共感覚ドメインへの転義

中国語“酸”は味覚を除いて嗅覚、聴覚、触覚に意味の拡張をしており、視覚への転用例は見られないのである。

(1) 嗅覚への転用

語義③：“像醋一样的气味”（「酢のような匂い、不愉快で嫌な臭気」）

(59) 在高温和刺鼻的酸味中，宋燕在醋缸边一干就是 10 年！

(60) 屋子又暗又小，点着一盏冒着烟的油灯，一股劣质酒酸味弥漫了了整个屋子。

(61) 我父亲那件充满汗酸味的棉袄在霉烂和破旧的掠夺下已经消失，就像我的父亲一样消失。

例 (59) のように、“酸”はまず酢の匂いを修飾することができる。また、例 (60)、(61) では、“酸”は質の悪い安酒や汗などの臭気や、不愉快で嫌な匂いを修飾している。このような匂いを嗅いだ時、鼻を覆いたくなり、酸っぱい味覚的刺激を想起させるから、“酸”を使って表している。プロトタイプの意味との類似性に基づき、メタファーによって味覚領域から嗅覚領域へ拡張していると考えられる。

(2) 聴覚への転用

語義④：“哀鸣、悲叹”（「悲しい声」）

(62) 永痛长病母，五年委沟溪。生我不得力，终身两酸嘶。

例 (62) の“酸嘶”は悲しい声を表している。このような使い方は唐詩など昔の文章によく見られるが、現代中国語において、味覚形容詞“酸”が聴覚に用いられる用例は極めて少ない。

(63) 我这里望中原，思故里，不由我感叹酸嘶。

(64) 寂寞凄凉的心底，经不住月光底寒晖，当不起秋虫的酸鸣，也流出无限的悲哀。

(3) 触觉への転用

中国語において、“酸”は触觉を表すのによく用いられる。

語義⑤：“因疲劳或疾病引起的微痛而无力的感觉。”（「疲れや病気によって引き起こされる痛みと無力感」）

まず、“酸”は疲れや病気によって引き起こされる痛みと無力感を描写するのに使用されている。以下は具体的な用例を見ていくことにする。

(65) 黑影儿出了胡同口，野求想追上去，可是他的腿酸得要命。低下头，他长叹了一口气。

(66) 这个工作很简单，不需要动脑子，但却是个苦差使，我一站就是一天，站得腰酸腿疼。

(67) 第一次做模特是个坐姿，一早上四节课上下来我的四肢又酸又僵，但看到学生的画后我的成就感彻底将我的劳累驱散。

例 (65)、(66)、(67) の中で、“腿酸”、“腰酸”、“四肢酸”という表現がある。用例から分かるように、“酸”はよく、“足、腰、首、肩”などの身体部位の疲れを表すのに使われる。この“酸”は病気や疲れなどのせいで、体がだるくて痛いという感じである。

語義⑥：“形容因悲痛伤心而引起眼鼻的不适感。”（「泣くことによって引き起こされる目や鼻の不快感」）

次に、“酸”は泣くことによって引き起こされる目や鼻の不快感を表すのに用いられている。

(68) 所有的人，都听得鼻酸，但，若鸿又把自己心中的门，紧紧关闭了。

(69) 范吉射眼睛酸酸的说：“没想到你还这样有良心。”

例 (68)、(69) において、鼻や目が感じる“酸”は疲れによるものではなく、人間の情緒の起伏が激しい、或いは泣きたい時、涙腺が刺激され、鼻や目の付近の筋肉が収縮することによって生じた感覚である。このような感じは酸っぱいものを食べる時、唾液腺が刺激を受け、唾液腺の付近の筋肉が収縮する感じと類似するから、「酸っぱい」で修飾し、メタファーによって拡張していると考えられる。

6.4.4 人間活動ドメインへの転義

人間活動についての“酸”の表現は、大きく分けて二つのタイプがある。以下の例文を通して具体的に分析してみよう。

(1) 人の心理感覚を表す場合

語義⑦：“悲痛、伤心”（「悲しく苦しい心理的感觉」）

まず、“酸”は「つらい気持ち」を描写するのに使用されている。

(70) 霓喜长长地叹了口气道：“别提孩子了！抱在手里，我心里只是酸酸的，也不知明天他还是我的孩子不是。

(71) “未料老祖母已如此年迈力衰了，真令人心酸呵！可能将不久于人世吧！我长年在
外，不能随传祖母左右。”

用例が示すように、中国語の味覚形容詞“酸”は「心」が「酸っぱい」などの表現で「気持ちが悲しくなる、つらくなる」状態を表現している。この意味は、酸っぱいものを食べた時、好ましくない感覚から、メタファーによって拡張していると考えられる。

また、中国語において「つらい気持ち」を表すのに、“辛酸”ということばがあり、“酸”より、そのつらい気持ちを一層立てている。

語義⑧：“指因男女关系而引起的嫉妒。”（「自分の愛する者の愛情が、他の人に向けられるのを恨み憎むこと」）

“酸”は「やきもち、愠気」を描写することができる。

(72) “少上纪妈屋里去，老了老了的，还这么杌杌颠颠的！”太太的酸意和真正山西醋一样，越老越有劲。

(73) 韩某每次看到妻子和男人在一起谈话、说笑，心中就像倒了醋瓶一样酸溜溜的，回家后经常对妻子骂骂，甚至大打出手。

例(72)と(73)のように“酸意”、“酸溜溜”は「自分の愛する者の愛情が、他の人に向けられるのを恨み憎むこと」をうまく表現している。それまで抱いていた優越感や独占感などを突然に失うようになったことに気づいたときの感覚を表わしている。この意味は酸っぱいものを口にした時の感覚との類似性に基づき、メタファーによって拡張していると考えられる。代表的な“酸味”は「酢の味」なので、中国語には“吃醋（酢を食べる、つまり、日本語で言うやきもちを焼く）”という表現もよく用いられる。

以上の用例から分かるように、中国語“酸”は心理感覚を描写する時に、基本的にマイナスのイメージを表している。

(2) 人の気質・性格や思考・行為の性質を表す場合

語義⑨：“性格刁钻、刻薄”（「性格が強すぎ、残酷で薄情であること」）

(74) 戴维斯·希格比，此人外表好似和善，实际上却十分尖酸刻薄，而又喜爱喧闹。

(75) 从门里冲出来一个干瘦的男人，与刘果撞了个对眼，瘦男人用尖酸刻薄的目光瞪着刘果，说，你这人下流不下流，偷听什么？

例(74)では、“尖酸刻薄”という表現で、人の「性格が強すぎ、残酷で薄情であること」を意味する。また、例(75)の“尖酸”は「厳しくてとげとげしい」目つきを表している。

語義⑩：“待人冷酷，使人感觉没有人情味。”（「人の手口・やり方・手段などがとげとげしく、情け容赦ない」）

(76) 后来他出版的杂文集，也尖酸泼辣，言必有物，为杂文中的上乘。

(77) 如果我一本正经地写，那么公众就会看不明白。如果不够尖酸刻薄，他们就会说枯燥乏味。

同じ“尖酸”でも、例(76)、(77)においては、エッセイ集の中の文章は「ずばりと鋭く指摘している」という意味として用いられている。つまり、同じ「やり方や言うことが辛辣で手厳しい」という意味を表す“尖酸”は、用例(76)ではマイナスの意味を表しているのに対し、例(77)ではプラスの意味を表しているということが分かる。

語義⑩：“迂腐”（「考え方がかたい、融通がきかない」）

“酸”は「融通がきかない」ことを言っている。

(78) 于是这些老师便一个个都活灵活现，绝没有那种从标本里脱出来的酸腐气。

これらの用例のように、中国語の味覚形容詞“酸”は、人の気質を表わす時に使われている。用例の“酸”は古い準則でこだわって、融通をきかすことが分からなく、生気がなく、時宜に合わないという意味である。

6.4.5 物事の状態ドメインへの転義

中国語の味覚形容詞“酸”は、人間の活動ドメインのほか、物事の状態を修飾することもできる。

語義⑪：“简陋或过于俭朴而显得不体面”（「貧乏な、みすぼらしいさま」）

(79) 昔日以昼夜服务闻名的这方小店，现在已一改以往的“穷酸相”，门脸装潢得富丽堂皇，字号换成了喜神婚纱摄影厅。

(80) 身价数以十亿计的老板，他们往往就象隔壁的老伯，衣着简单，甚至寒酸。

中国語において、“穷酸”、“寒酸”の使い方がよく見える。用例の“穷酸”、“寒酸”という二つのことばは「貧乏な、みすぼらしい、まずしい」ことを意味している。このような表現は最初、書生を主体として、貧乏であるという意味である。今、書生だけでなく、普通の人間も修飾することができる。

6.4.6 認知言語学的アプローチによる語義の再分類

以上、中国語の辞書や先行研究を踏まえつつ、CCLに対するコーパス調査に基づき、中

国語の“酸”の意味拡張を考察してきた。再整理した“酸”の各語義を以下のように示しておく。

“酸”

I【身体体験】

1. 味覚

語義①：“像醋一样的味道”（「酢のような味である。すい。」）

語義②：“发酵或腐败的味道”（「物が発酵した時もしくは腐った後の味」）

2. 嗅覚

語義③：“像醋一样的气味”（「酢のような匂い」）

3. 聴覚

語義④：“哀鸣、悲叹”（「悲しい声」）

4. 触覚

語義⑤：“因疲劳或疾病引起的微痛而无力的感觉。”（「疲れや病気によって引き起こされる痛みと無力」）

語義⑥：“形容因悲痛伤心而引起眼鼻的不适感。”（「泣くことによって引き起こされる目や鼻の不快感」）

II【人間活動】

語義⑦：“悲痛、伤心”（「悲しく苦しい心理的感觉」）

語義⑧：“指因男女关系而引起的嫉妒。”（「自分の愛する者の愛情が、他の人に向けられるのを恨み憎むこと」）

語義⑨：“性格刁钻、刻薄”（「性格が強すぎ、残酷で薄情であること」）

語義⑩：“待人冷酷，使人感觉没有人情味。”（「人の手口・やり方・手段などがとげとげしく、情け容赦ない」）

語義⑪：“迂腐”（「考え方がかたい、融通がきかない」）

III【物事の状態】

語義⑫：“简陋或过于俭朴而显得不体面”（「貧乏な、みすぼらしいさま」）

6.4.7 多義的意味ネットワーク

以上の検討を踏まえ、味覚形容詞“酸”の各語義の拡張起点及び拡張方式を表4-7に示す。さらに、以下図4-2に“酸”の多義的意味によって形成される意味ネットワークの略

図を提示する。

表 4-7 “酸” の各語義の拡張方式

語義	拡張の起点	拡張方式
語義①酢のような味 (プロトタイプの意味)	原義⑩酸いという味覚	メトニミー
語義②物が発酵した時もしくは腐った後の味	語義①	メタファー
語義③酢のような匂い 語義④悲しい声 語義⑤体の痛みと無力感 語義⑥目や鼻の不快感	語義①	メタファー
語義⑦悲しく苦しい心理的感覚 語義⑧やきもち、恪気 語義⑨性格が強すぎ、残酷で薄情である 語義⑩とげとげしく、情け容赦ない	語義①	メタファー
語義⑪考え方がかたい、融通がきかない	語義②	メタファー
語義⑫貧乏な、みすぼらしいさま	語義②	メタファー

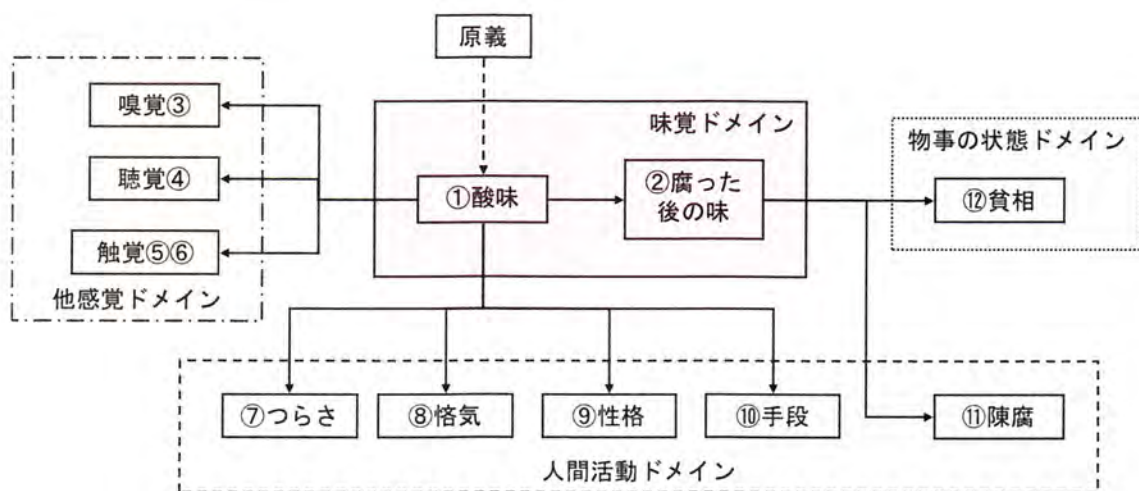


図 4-2 “酸” の意味ネットワーク

上記の略図において、太線矢印はメタファーリンクを表し、破線矢印はメトニミーリンク

クを表している。語義①は多義ネットワークにおける拡張の起点となるプロトタイプの意味であると位置付けられる。そのほかの語義は全て語義①を出発点として、そこからメタファー・メトニミーの経路を通して意味が展開する。

表 4-7 と図 4-2 に見られるように、味覚形容詞“酸”の意味拡張及び意味ネットワークには次のような特徴が見られる

1. 拡張手段について、“酸”は主にメタファーによって拡張している。原義からプロトタイプの意味（語義①）への転用だけがメトニミーによるものである。

2. メタファーによる転義から見れば、“酸”のネガティブ性が写像され、他の語義に拡張するケースが多い。従って、メタファーによる「酸」の意味拡張には、形容詞の価値評価性が深い関わりを持っていることが窺える。ここで、「酸」の各語義の評価性についての分類を次の表 4-8 で示す。

表 4-8 “酸”の各語義の評価性

プラス (+)	マイナス (-)
語義①酢のような味	
語義②物が発酵した時もしくは腐った後の味	
	語義③酢のような匂い
	語義④悲しい声
	語義⑤体の痛みと無力感
	語義⑥目や鼻の不快感
	語義⑦悲しく苦しい心理的感覚
	語義⑧やきもち、恪気
	語義⑨性格が強すぎ、残酷で薄情である
語義⑩とげとげしく、情け容赦ない	
	語義⑪考え方がかたい、融通がきかない
	語義⑫貧乏な、みすぼらしいさま

3. “酸”の意味拡張の方向性としては、外界の事物に対する身体体験、すなわち味覚の客観的な叙述から、主体の主観的な叙述や感情的な叙述へ拡張する方向性が見られる。

6.5 コーパスに基づく語義の頻度分布に対する定量調査

本節では、6.2 と 6.3 の考察で再整理した日本語の「酸っぱい」と中国語の“酸”の意味・用法に基づき、個々の語義の出現頻度を調べ、数値化することにより、各語義の使用頻度に見られる傾向性を見てみる。

6.5.1 「酸っぱい」の頻度分布に対する定量調査

前節の考察で再整理した「酸っぱい」の意味・用法に基づき、それぞれの語義の使用頻度を調べ、数値化することにより、その傾向性を見てみる。

6.5.1.1 調査方法とデータ

ここでは、検索アプリケーション「中納言」を利用し、BCCWJから「酸っぱい」のKWICデータを収集し、調査を行う。具体的な調査手順は以下の通りである。

1. 形容詞「酸っぱい」の活用形¹⁾も考慮に入れ、検索条件を「語彙素」が「酸っぱい」と設定する。
2. BCCWJ コーパス全体において、上記の条件で検索を行い、「酸っぱい」のKWICデータを収集した。データ抽出後に、目視による確認作業を行い、「酸っぱい」の形容詞としての用法のみを絞り出し、データを作成した。
3. 前述の6.3.6にまとめた「酸っぱい」の意味分類に基づき、抽出された文の前後の文脈を見ながら、2によって得られたデータの意味・用法を分類した。
4. 計量言語学的手法をとることにより、各語義の頻度分布を調べ、定量化する。

6.5.1.2 調査結果

以下、BCCWJ全体において、「酸っぱい」の各語義の使用頻度及び各意味領域における分布を示す。

表 4-9 BCCWJ における「酸っぱい」の各語義の頻度分布

意味領域		頻度配列	「酸っぱい」の意味・用法	出現頻度	割合%
身体体験 180 例 87.38%	味覚 127 例 61.65%	1	① [味：酸味]	121	58.74%
		2	② [味：発酵・腐敗]	6	2.91%
	嗅覚	3	③ [匂い・香り：酸味・発酵・腐敗]	48	23.30%
	視覚	4	④ [表情：不快]	5	2.43%
人間活動 22 例 10.68%		5	⑥ [行為：反復]	18	8.74%
		6	⑤ [心理感覚：不快]	4	1.94%
物事の状態		7	⑦ [物事の状態：退廃]	4	1.94%
計				206	100%

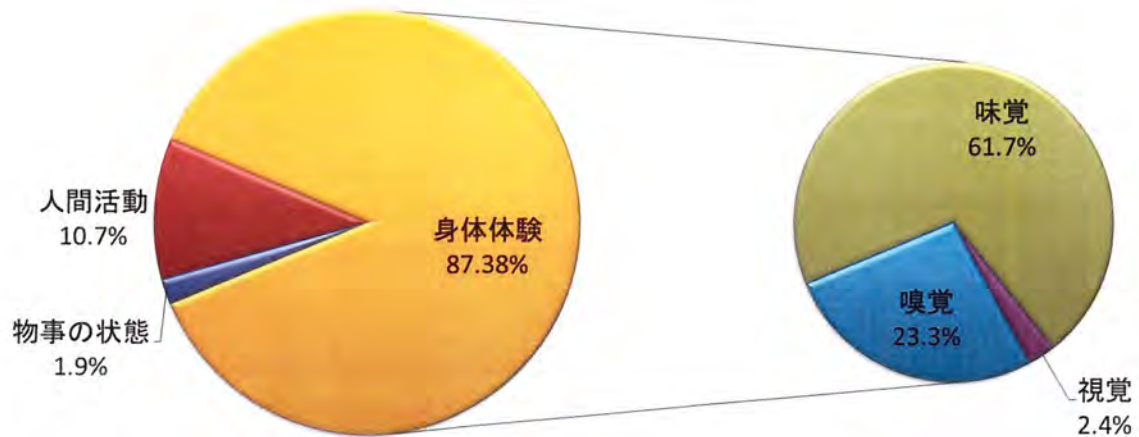


図 4-3 各意味領域における「酸っぱい」の頻度分布

表 4-9 においては、意味領域ごとに、語義を使用頻度順に配列している⁵²。表 4-9 と図 4-3 を総合した結果、「酸っぱい」の多義的語義の頻度分布には以下のような特徴がみられる。

1. すべての語義のうち、語義①<酢のような味である。すい。>は 121 例と比較的高い割合（全体の 6 割近い）で一番多く現れる語義である。また、嗅覚を表わす語義③<酢の

ような匂い>は、23.30%の割合で語義①に次いで2番目に多く使用されている。

2. 人間活動ドメインにおける用法のうち、マイナス的な意味を表わす語義⑥<同じことばを何度も繰り返し、嫌と思われるほど>、辞書には語義⑥についてはっきりと記述されていないにもかかわらず、3番目に頻度の高い語義である。

3. 「酸っぱい」が表す五感以内の意味領域からみれば、味覚を表す語義（語義①、②）が最も多く使用され、次に嗅覚（語義③）、視覚（語義④）という順で頻出する。

4. 意味領域ごとの出現頻度から見れば、味覚領域における意味・用法は最も多用されることは明らかである。人間活動という意味領域は味覚領域に次ぎ、「酸っぱい」の出現度数は計22例で、全体の1割しか占めていない。また、物事の状態を表す「酸っぱい」の意味・用法（語義⑦<盛んな時期を過ぎ、ダメになる>）の使用頻度はわずか4例であり、かなり少ない。

以上、BCCWJのコーパスデータに基づき、味覚形容詞「酸っぱい」の種々の語義の使用頻度について考察してきた。他の語義に比べて、語義①は圧倒的に使用頻度が高いことは、辞書の中の第一語義としての優位性を見せてくれた。味覚領域において、「酸っぱい」は「酸味」のほか、発酵や腐敗が進んだことを表わすこともできる。また、味覚以外の感覚領域では、視覚に比べて、「酸っぱい」は嗅覚に使う用例が高い割合を占めている。嗅覚は味覚と感覚器が隣接していることから、味覚と密接に結びついた感覚として認められる。嗅覚に関する「酸っぱい」の使用例が多いのは、このことと関係すると思われる。また、味覚形容詞「酸っぱい」は感覚表現を超えて、人間活動、物事の状態などの領域にまで転用されている。このような言語事実は、「酸っぱい」のような身体感覚を表す表現は、直接的な感覚を表すものから主体の認識・判断に関わる表現へと機能が拡張していくことをものごとがたっている。

6.5.2 “酸”の頻度分布に対する定量調査

前節の考察で再整理した“酸”の意味・用法に基づき、それぞれの語義の使用頻度を調べ、数値化することにより、その傾向性を見てみる。

6.5.2.1 調査方法とデータ

本節では、CCLの現代中国語データベースを利用し、単音節形容詞“酸”及びその重ね型“酸酸”の用例を収集し、調査を行う。具体的な調査手順は以下の通りである。

1. CCL の現代中国語データベース全体において、検索条件を“酸”と設定し、“酸”のKWICデータを収集した。

2. データ抽出後に、目視による確認作業を行い、単音節形容詞“酸”と重ね型“酸酸”が使われる用例のみを絞り出し、データ³³を作成した。

3. 前述の6.4.6にまとめた“酸”の意味分類に基づき、抽出された文の前後の文脈を見ながら、2によって得られたデータの意味・用法を分類した。

4. 計量言語学的手法をとることにより、各語義の頻度分布を調べ、定量化する。

6.5.2.2 調査結果

以下、CCL 全体において、“酸”の各語義の使用頻度及び各意味領域における分布を示す。

表 4-10 CCL における“酸”の各語義の頻度分布

意味領域		頻度配列	“酸”の意味・用法	出現頻度	割合%
身体体験 7285 例 65.13%	味覚 5770 例 51.58%	1	① [味：酸味]	5249	46.92%
		2	② [味：発酵・腐敗]	521	4.66%
	触覚 1409 例 12.60%	3	⑤ [体幹：痛み・無力感]	1259	11.26%
		4	⑥ [目・鼻：不快感]	150	1.34%
	嗅覚 104 例 0.93%	5	③ [匂い・香り：酸味・発酵・腐敗]	104	0.93%
	聴覚 2 例 0.02%	6	④ [声：悲哀]	2	0.02%
人間活動 3377 例 30.19%		7	⑦ [心理感覚：悲哀]	2874	25.69%
		8	⑧ [心理感覚：愠気]	207	1.85%
		9	⑨ [性格：刻薄]	138	1.90%
		10	⑪ [人の気質・考え方：陳腐]	83	0.74%
		11	⑩ [手段：不人情]	75	0.67%
物事の状態 524 例 4.68%	12	⑫ [生活の有様：貧相]	524	4.68%	
計				11186	100%

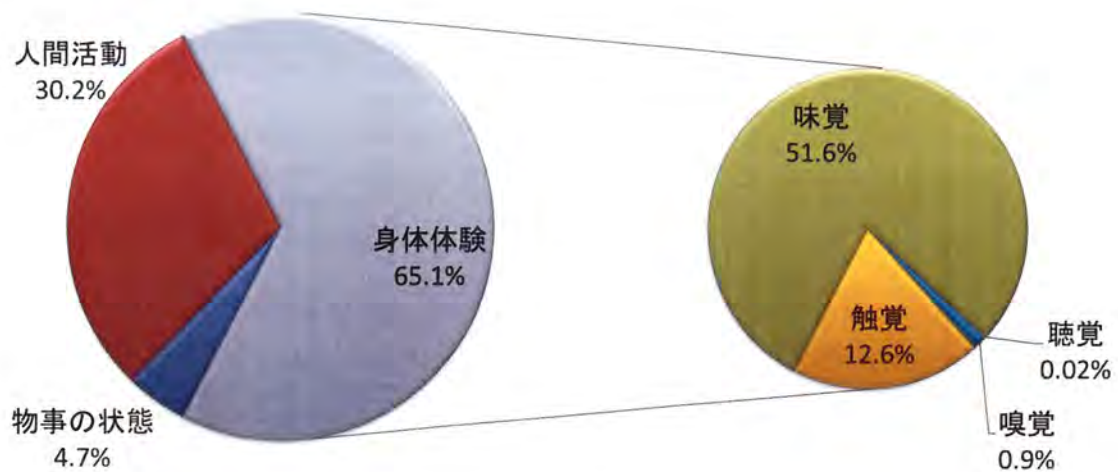


図 4-4 各意味領域における“酸”の頻度分布

表 4-10 においては、意味領域ごとに、“酸”の語義を使用頻度順に配列している⁵¹。表 4-10 と図 4-4 を総合した結果、“酸”の多義的語義の頻度分布には以下のような特徴が見られる。

1. “酸”の語義①は 5249 例と比較的高い割合（全体の 4 割以上）で一番多く現れる語義である。また、語義①の次いで出現頻度の高い語義は、語義⑦（25.69%で 2 位）と語義⑤（11.26%で 3 位）である

2. 人間活動という意味領域に見られる“酸”の出現頻度数は計 3377 例であり、全体の 3 割を占めている。人間活動ドメインへの拡張用法に比べ、身体感覚領域における意味・用法は 65.13%で圧倒的に高い割合を占めている。

3. “酸”が表す五感以内の意味領域から見れば、味覚を表す語義（語義①、②）が最も多く使用され、次に触覚（語義⑤、⑥）、嗅覚（語義③）、聴覚（語義④）という順で頻出する。特に、聴覚を表す語義④の出現頻度数は僅か 2 例であり、最も使用頻度の低い語義である。

4. 人間活動ドメインに使う意味・用法では、＜悲しく苦しい心理的感覚＞を表す語義⑦は 25.69%の割合で、使用頻度が 2 番目に高い語義である。一方、人の手口・やり方・手段などがとげとげしく、情け容赦ないという意味を表す語義⑩は、出現頻度数が 75 例だけで

あり、また、考え方がかたい、融通がきかないという意味を表す語義⑩は使用例全体の0.74%しか占めておらず、語義⑩と同じように、あまり使わない用法である。

以上、CCL のコーパスデータに基づき、中国語の味覚形容詞“酸”の種々の語義の使用頻度について考察してきた。他の語義に比べて、語義①は圧倒的に使用頻度が高いことは、辞書の中の第一語義としての優位性を見せてくれた。また、味覚以外の感覚領域では、聴覚と嗅覚に比べ、“酸”は触覚に使う用例が高い割合を占めている。そして、人間活動に関する意味・用法のうち、人間の心的状態を表す語義⑦は、すべての派生義の中で、2番目に出現頻度が高いものである。このような言語現象から、本来人間の身体的な不快感を表す“酸”は、心的な不快感を表わすものへと機能していくことが窺えよう。

6.6 「酸っぱい」と“酸”対照分析

本節では、対照言語学の立場に立って、日本語と中国語の味覚形容詞「酸っぱい」と“酸”を比較・対照し、二者が意味・用法、語義分布、意味拡張などにおける異同について詳しく考察する。

6.6.1 意味・用法における異同

コーパス分析によってまとめられた日本語の「酸っぱい」と中国語の“酸”の意味・用法は、表4-11にまとめておく。

表4-11 「酸っぱい」と“酸”の意味・用法比較対照表

意味領域		意味・用法	酸っぱい	酸
I 身体体験	味覚	酢のような味である。すい。	○	○
		物が発酵した時もしくは腐った後の味	○	○
	嗅覚	酢のような匂い	○	○
	視覚	酸味を口にすると、口をすぼめた独特な表情	○	—
	聴覚	悲しい声	—	○
	触覚	疲れや病気によって引き起こされる痛みと無力感	—	○
泣くことによって引き起こされる目や鼻の不快感		—	○	
II 人間活動		主体に好まれない、不快である、嫌な心理感覚	○	○

	同じことばを何度も繰り返す、嫌と思われるほど	○	—
	やきもち、愠気	—	○
	性格が強すぎ、残酷で薄情であること	—	○
	とげとげしく、情け容赦ない	—	○
	考え方がかたい、融通がきかない	—	○
Ⅲ物事の状態	盛んな時期を過ぎ、ダメになる	○	—
	貧乏な、みすぼらしいさま	—	○

「酸っぱい」と“酸”の個々の意味・用法の検討を踏まえ、二者の共通点と相違点をそれぞれ次のようにまとめておく。

(i) 共通点

1. 日本語の「酸っぱい」と中国語の“酸”は原義とプロトタイプの意味では一致している。「酸っぱい」と“酸”の原義は酢・梅干し・レモンなどを口に含んだときに感じられる味覚であり、認知主体の身体体験である。「酢のような味である。すい。」というプロトタイプの意味は、認知主体の身体体験が対象の性質として読み替えられたものだと考えられる。「酸っぱい」と“酸”の原義とプロトタイプの意味は<結果—原因>に基づくメトニミーによって関係づけられている。

2. 味覚領域内において、日本語の「酸っぱい」と中国語の“酸”はいずれも意味拡張が生じている。「酸っぱい牛乳（腐った牛乳）」や“酸奶（ヨーグル）”などのように、「酸っぱい」と“酸”は腐敗の味・発酵の味を表わす例がよくみられる。ただし、腐ったものを示す味として使われる「酸っぱい」は中国語に訳される場合、時には“馊”（すえる）とも訳される。

3. 味覚を表す「酸っぱい」と“酸”ではいずれも嗅覚を表わす共感的用法が見られる。「酸っぱい臭い」、「酸っぱい匂い」と“酸臭”“酸味（嗅覚）”はほぼ意味的に対応できると思われる。なお、二者は嗅覚への転用はマイナスの評価を帯びている点が同じである。

4. 日本語の「酸っぱい」と中国語の“酸”はいずれも人間活動に関する表現に用いられ、好まれない、不快である、嫌な心理感覚を表わすことができ、二者はマイナスの価値的評価性である点で共通している。

(ii) 相違点

1. 日本語の「酸っぱい」と中国語の“酸”はそれぞれ、物事の状態ドメインに拡張できるが、日本語の「酸っぱい」は「物事の盛んな時期を過ぎ、ダメになる」というマイナス的な意味を表わす用法がある。一方、中国語にはこのような意味・用法は見当たらないが、「貧乏な、みすぼらしいさま」を表わす用法は中国語の“酸”に特有の使い方がある。

2. 視覚領域への転用について、日本語の「酸っぱい」は「酸っぱい顔」、「酸っぱい表情」など「酸味を口にすると、口をすぼめた独特な表情」についても言えるが、中国語の“酸”には、似たような意味・用法はない。

3. 聴覚領域への転用について、中国語「酸」にしか見られない用法である。李白の詩に“哀鴻酸嘶暮声急”という文があるが、ここの「酸っぱい声」は「悲しい声」、「悲痛な叫び」、「悲鳴」と解釈される。

4. 触覚領域への転用について、中国語の“酸”は触覚（体の感覚）を表すことができるが、それは日本語の「酸っぱい」にまったく見られない用法である。

5. 人間活動ドメインにおける意味・用法に関して、日本語の「酸っぱい」と中国語の“酸”は両方とも「つらい、苦しい」という気持ちを表すことができるが、日本語の用例は極めて少なく、中国語の「酸」ほど頻繁に使用されていないのである。また、“酸”は「つらい、悲しい気持ち」を表す以外に、「自分の愛する者の愛情が、他の人に向けられるのを恨み憎むこと」を表すこともできる。これも中国語の独特の使い方と言えよう。なお、「同じことばを何度も繰り返す、嫌と思われるほど」という意味で使う「酸っぱい」は中国語に訳す時に、そのまま“酸”と訳してもよいが、意味の拡張ルートが少々異なっている。ここの「酸っぱい」は「何度も繰り返す、くどい」という意味になるが、“酸”は「疲れるほど」という身体感覚（“酸”の語義④に参照）から派生してきたと思われる。

6.6.2 語義分布における異同

これまでの考察では、味覚形容詞「酸っぱい」と“酸”の各語義の出現頻度を集計し、語義によって使用頻度が異なることを明らかにした。ここでは、まず「酸っぱい」と“酸”の語義分布に見られる傾向を見てみる。

まず、二者の意味領域ごとの語義分布を見てみる。

日本語の「酸っぱい」と中国語の“酸”の意味・用法は身体体験ドメイン・人間活動ドメイン・物事の状態という3つの意味領域から把握できる。「酸っぱい」と“酸”の意味領

域ごとの出現頻度は次の表 4-12 が示すとおりである。

表 4-12 「酸っぱい」と「酸」の意味領域ごとの使用頻度

味覚形容詞	身体体験ドメイン		人間活動ドメイン		物事の状態ドメイン		合計
	出現頻度	割合	出現頻度	割合	出現頻度	割合	
「酸っぱい」	180 例	87.38%	22 例	10.68%	4 例	1.94%	206 例
“酸”	7285 例	65.13%	3377 例	30.19%	524 例	4.68%	11186 例

「酸っぱい」と「酸」の意味領域ごとの語義分布には以下の図 4-5 が示すような違いがある。



図 4-5 「酸っぱい」と「酸」の各意味領域における語義分布の対照

図 4-5 が示すように、「酸っぱい」と「酸」は両方とも同じ傾向を示しており、身体体験ドメインの意味・用法が圧倒的に多い。しかし、「酸っぱい」が身体体験ドメインに使用される用例の出現頻度は全体の 87.38% を占めており、身体体験に使われる「酸」の割合 (65.13%) を上回っている。一方、人間活動ドメインについては、「酸」の使用頻度は全体の 30.91% であり、「酸っぱい」の出現頻度より 2 割ほど高い。このように、「酸っぱい」に比べて「酸」は人間活動ドメインに使用される割合が高い一方、身体体験領域に用いられる割合が「酸っぱい」より低いといえよう。

次に、「酸っぱい」と「酸」のプロトタイプの意味と派生義ごとの語義分布についてみてみよう。

プロトタイプの意味と派生義の使用頻度の比重から見れば、「酸っぱい」について出現頻度の合計 206 例のうちプロトタイプの意味・用法は 121 例 (58.74%)、派生義は 85 例 (41.26%) と、全体的にプロトタイプの意味として使用されることが多い。また、「酸」については、出現頻度の合計 11186 例のうちプロトタイプの意味・用法は 5249 例 (46.92%)、派生義は 5937 例 (53.08%) と、プロトタイプの意味に比べて派生義の使用頻度の方が確かに高いが、大きな差ではないように見える。

このように、日本語の「酸っぱい」と中国語の“酸”はプロトタイプの意味と派生義の使用頻度の比重がほぼ等しいという傾向を示している。ただし、個々の派生義の出現頻度に比べて、日本語の「酸っぱい」と中国語の“酸”はいずれもすべての語義のうち、プロトタイプの意味が最も多く使用されている。さらに、「酸っぱい」と“酸”のすべての語義において、出現頻度の高い語義の上位 5 位を表 4-13 に示すと、以下のようになる。

表 4-13 出現頻度上位 5 位の語義

順位	「酸っぱい」		“酸”	
	語義	割合	語義	割合
1	語義① [味：酸味] (プロトタイプの意味)	58.74%	語義① [味：酸味] (プロトタイプの意味)	46.92%
2	語義③ [匂い・香り：酸味・発酵・腐敗]	23.30%	語義⑦ [心理感覚：悲哀]	25.69%
3	語義⑥ [行為：反復]	8.74%	語義⑤ [体幹：痛み・無力感]	11.26%
4	語義② [味：発酵・腐敗]	2.91%	語義⑫ [生活の有様：貧相]	4.68%
5	語義④ [表情：不快]	2.43%	語義② [味：発酵・腐敗]	4.66%

表 4-13 から明らかなように、出現頻度上位 5 位の語義のうち、「酸っぱい」と“酸”が共通するのはまず「酸味」を表すプロトタイプの意味・用法であり、しかもいずれの出現頻度数もトップである。次に挙げられるのは発酵・腐敗の味を表す語義②であり、それぞれ第 4 位と第 5 位に数えられる。

一方、プロトタイプの意味・用法のほか、各語義の出現頻度順位に大きな差が見られる。たとえば、「酸っぱい」では、感覚ドメインの嗅覚（酸味・発酵・腐敗の香り・匂い）を表す語義は 2 位であるのに対して、“酸”において悲しく苦しい心理的感覚を表す用法は 2

位にのぼった。“酸”での嗅覚（酸味・発酵・腐敗の香り・匂い）を表す意味・用法は上位5位のグループに属していない、9位で0.93%である。また、日本語の「酸っぱい」も心理的感覚への転義を持っているが、中国語の“酸”とは出現頻度が異なっている。要するに、語義が共通していても、その使用頻度が違うこともあり得る。

最後に、「酸っぱい」と“酸”が感覚ドメインにおける使用頻度に目を向けてみる。

日本語における「酸っぱい」はメタファーに基づき、味覚という固有感覚から嗅覚、視覚へと拡張されているが、中国語の“酸”の使い方は嗅覚、視覚だけではなく、触覚、聴覚まで、日本語の「酸っぱい」より幅広い展開を見せている。ここでは、感覚ごとに出現頻度を比較しながら、二語が共感覚への転用に見られる異同を明示する。感覚ごとに「酸っぱい」と“酸”の使用頻度を示すと、次のようになる。

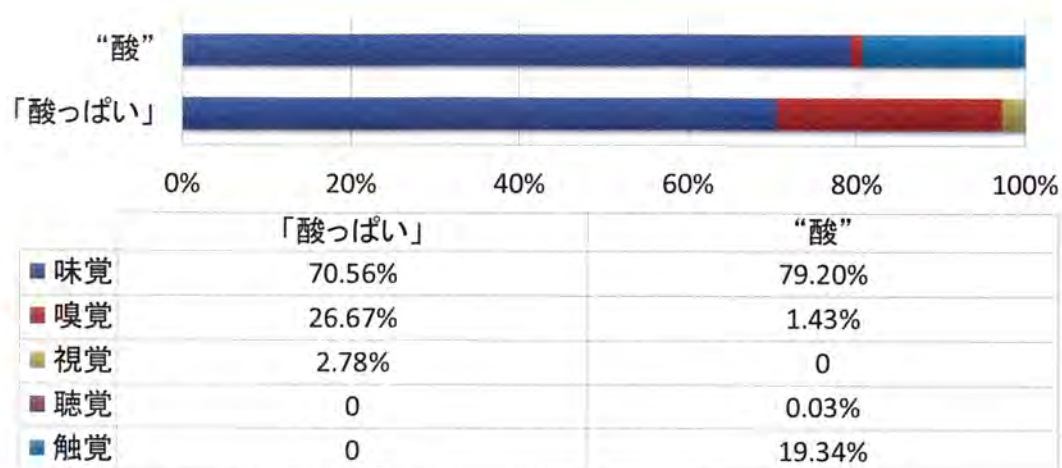


図 4-6 感覚ごとの語義分布の対照

図 4-6 が示すように、感覚領域において、「酸っぱい」と“酸”はいずれも味覚用法を主としている。共感覚への転用の度合に関しては、「酸っぱい」は嗅覚>視覚であるが、“酸”は視触覚>嗅覚>聴覚という順で頻出している。感覚領域内での意味拡張においては、「酸っぱい」は嗅覚への転用が最も多く見られる⁵⁵が、“酸”は触覚への転用が優先に使用されていると考えられようになるのである。

このように、「酸っぱい」と“酸”が共感覚への転義において、異なる語義分布が見られることは明らかとなった。

6.6.3 意味拡張の認知的プロセスにおける異同

本節では、「酸っぱい」と「酸」の意味構造及び意味拡張の認知的プロセスにおける共通点と相違点を検討したい。

まず、「酸っぱい」と「酸」の意味ネットワークの略図を再掲する。

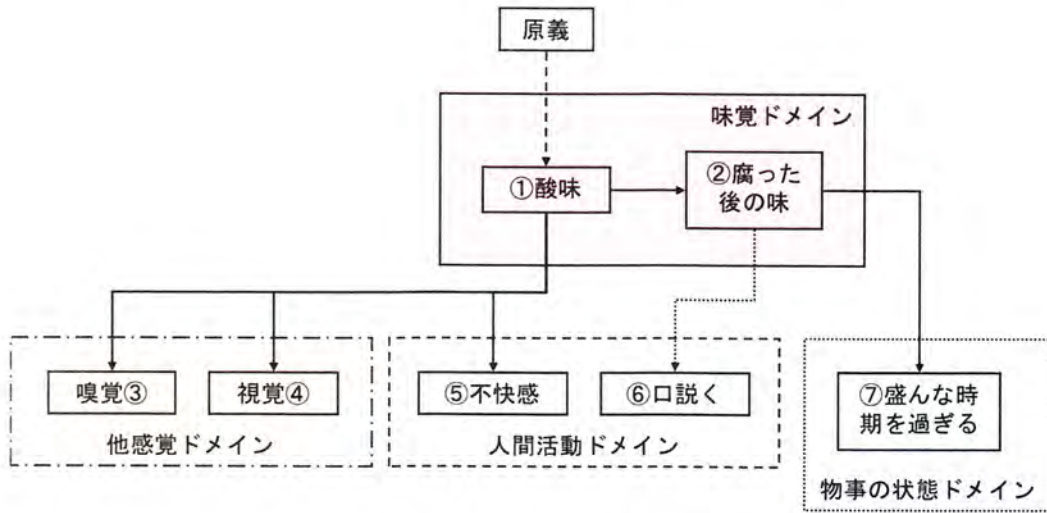


図 4-1 「酸っぱい」の意味ネットワーク (再掲)

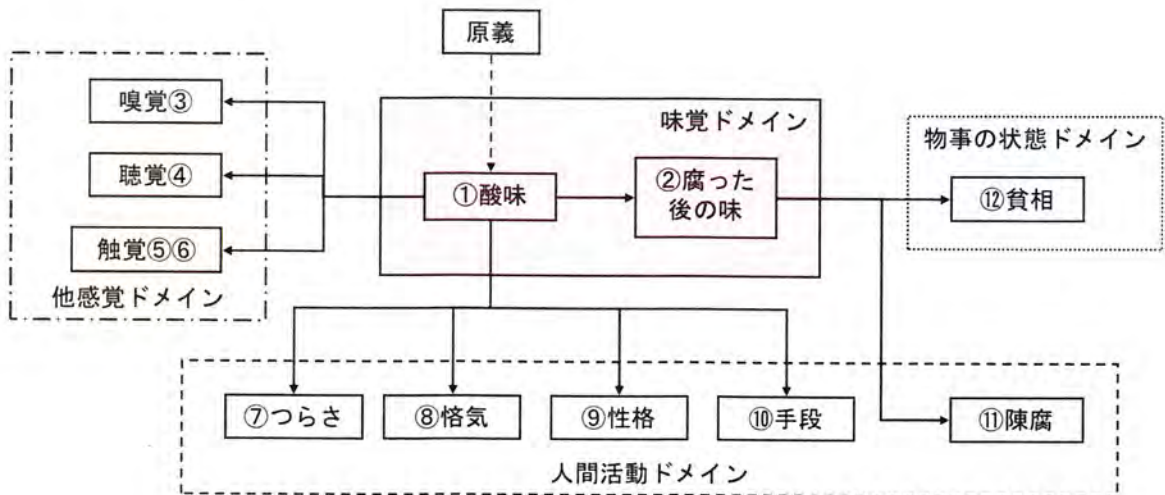


図 4-2 “酸”の意味ネットワーク (再掲)

図 4-1 と図 4-2 に示される「酸っぱい」と「酸」の意味ネットワークの異同を次のようにまとめておく。

(i) 共通点

1. 日本語の「酸っぱい」と中国語の“酸”の意味拡張に見られる認知プロセスの普遍性に目を向けよう。「酸っぱい」と“酸”のプロトタイプの意味はいずれもその原義から結果—原因>というメトニミーに基づき発展してきたのである。「酸っぱい」と“酸”の原義は元来人間の身体体験を表すものだが、認知作用によってその身体体験をもたらす対象の性質として読み替えられ、メトニミーによってプロトタイプの意味と関連づけられる。

2. 「酸っぱい」と“酸”の意味ネットワークは、プロトタイプの意味を出発点として意義が展開すると同時に、プロトタイプの意味から展開した意義は、そこから再び意義が拡張する。例えば、「酸っぱい」の語義②<発酵・腐敗の味>はプロトタイプの意味から拡張されてきたものであるが、そこから更に意味が広がり、行為を反復的に行うことというマイナスの意味にシネクドキー的展開をしていく。同じ、“酸”の語義②<発酵・腐敗の味>もプロトタイプの意味から拡張されてきたものであるが、そこから更に意味が広がり、人間活動ドメインの「考え方がかたい、融通がきかない」や物事の状態ドメインの「貧乏な、みすぼらしいさま」などマイナスの意味にメタファー的展開をしていく。

3. 意味拡張の動機づけに関しては、「酸っぱい」と“酸”は主にメタファーによって拡張が生じている。「酸っぱい」と“酸”のメタファー的な拡張はネガティブ評価性によるものが多い。

4. 意味拡張の方向性について、「酸っぱい」と“酸”は外部事物に対する味覚体験から味覚以外の感覚体験へ、さらに人間の行為・精神領域へと拡張していく傾向を示している。

5. 日本語の「酸っぱい」と中国語の“酸”はみな物事の状態ドメインに拡張している。両者が物事の状態ドメインにおける2つの意味・用法は、いずれも語義②<発酵・腐敗の味>が表すネガティブ性に基づき拡張してきたものである。「盛んな時期を過ぎた」、「陳腐」などのように、「酸っぱい」と“酸”が表す「格落ち」というマイナスの意味はすべて語義②の「新鮮で上質な味」が「腐った味」になることを出発点として発展し、定着してきたものである。

(ii) 相違点

1. 全体的にみれば、中国語の“酸”は日本語の「酸っぱい」より意味が広く拡張している。

2. 意味拡張のルートから見れば、日本語の「酸っぱい」の意味展開プロセスにはメタフ

ァーとメトニミーが見られるが、中国語の“酸”においては、メタファーとメトニミーの他に、シネクドキーも現れる。要するに、日本語の「酸っぱい」より中国語の“酸”の方が展開していくルートの種類が多い。

第7章 終章

7.1 まとめ

本研究では、意味記述・分析をめぐる従来の研究で取り残された問題点を踏まえつつ、コーパス言語学、認知意味論、対照言語学などに依拠し、日本語の味覚形容詞「甘い」、「辛い」、「苦い」、「酸っぱい」と中国語の味覚形容詞“甜”、“辣”、“苦”、“酸”を研究対象として、その意味拡張に焦点を当て、用例に基づいてそれぞれ意味・用法の記述・分析を体系的に行ってきた。

本研究の意味分析は、まず、豊富な資料が収集された大規模な均衡コーパスを活用することにより、「甘い、辛い、苦い、酸っぱい」と“甜、辣、苦、酸”の意味・用法を抽出し、各語義を認定した。また、認知言語学的アプローチによる各語義の関連を解明した。さらに、「甘い、辛い、苦い、酸っぱい」と“甜、辣、苦、酸”を意味・用法、語義分布、意味構造及び拡張プロセスなどにおける類似点・相違点を比較して対照研究を行った。

7.1.1 「甘い、辛い、苦い、酸っぱい」と“甜、辣、苦、酸”の意味・用法における異同

本研究では、辞書及び先行研究の意味記述を踏まえながら、大規模なコーパスを活用し、「甘い」・“甜”、「辛い」・“辣”、「苦い」・“苦”、「酸っぱい」・“酸”の意味・用法を「身体体験」、「人間活動」及び「物事の状態」という3つの領域から捉え、それぞれ抽出した。国語辞典に掲載されていない、或いは記述の曖昧な意味・用法もいくつか見つけた。

各拡張領域内の意味・用法を中心に、次の表 1-11 から表 4-11（再掲）までの「意味・用法比較対照表」に「甘い」・“甜”、「辛い」・“辣”、「苦い」・“苦”、「酸っぱい」・“酸”の異同をまとめていた。

表 1-11 「甘い」と“甜”の意味・用法比較対照表

意味領域		意味・用法	甘い	甜
I 身体体験	味覚	糖分があるような味	○	○
		食物や料理などの味が好ましい状態	○	○
		塩気・辛味が薄い味	○	—

		口当たりが良い味	—	○
	嗅覚	甘い物の好ましく快い匂い・香り	○	○
		化学物質の好ましく快い匂い・香り	○	○
		異性をうっとりさせ、誘い込むような嗅覚刺激	○	—
	視覚	容貌・笑顔が美しく好感を持たせる	○	○
		服装などが可愛くて女らしい	○	—
	聴覚	人の声や歌声・音楽が心地よい	○	○
	触覚	感触が快い、さわり心地がよい	○	—
		感触的に堅牢でない・確実でない	○	—
		肉体的な痛み・苦痛が比較的強くない	○	—
		*男女の愛に満ちあふれて快い触覚	○	○
Ⅱ 人間活動		主体に好まれる快い心理感覚・幸福感	○	○
		愛情があふれて、うっとりとした快い	○	○
		人の心を引き付けて迷わせる	○	○
		心理的・精神的刺激の度合いが弱い	○	—
		人の思考・判断・行為が慎重さや厳密さが欠如する	○	—
		人の態度・姿勢や言動が優しい或いは厳しくない	○	—
		法律・基準・規定などが厳格ではない	○	—
		物事や相手が簡単で、単純なものではない	○	—
		気持ちよくぐっすり寝る	—	○
		楽なわりに報酬がいい仕事	—	○
		美味そうに食べる様子	—	○
Ⅲ 物事の状態		物事の機能・品質などに不備がある	○	—
		物事の状態・程度が中途半端な状態	○	—

「甘い」と「甜」の意味・用法の共通点と相違点をそれぞれ次のようにまとめておく。

(i) 共通点

日本語の「甘い」と中国語の「甜」は原義とプロトタイプの意味では一致している。「甘

い」と“甜”の原義は砂糖などの甘いものを舐めたときの味覚であり、認知主体の身体体験である。「糖分があるような味」というプロトタイプ的意味は、認知主体の身体体験が対象の性質として読み替えられたものだと考えられる。

味覚領域内において、日本語の「甘い」と中国語の“甜”はいずれも意味拡張が生じる。「甘い牛サシ」や“滋味甜”などのように、「甘い」と“甜”は美味・旨味を表わす例がよくみられる。また、味覚を表す「甘い」と“甜”はいずれも嗅覚、聴覚、視覚、触覚を表わす共感覚的用法が見られる。例えば、「甘い香り」・“甜香”、「甘いマスク」・“甜甜的笑脸”、「甘い声」・“声音甜”、「甘いキス」・“甜甜的吻”などの例がある。

人間活動に関する表現について、幸せで快い心理感覚を表わす場合、「甘い」と“甜”は同じプラスの意味で使われる。それに、「甘い」と“甜”はいずれも言葉が巧みであることを表わすが、好ましく快い感覚の度合いを過ぎ、「甘い言葉」や“甜言蜜语”に油断したら、物事や人に対する判断を間違えとか、騙される可能性があつて、マイナスイメージになる場合もある。

(ii) 相違点

まず“甜”と違い、「甘い」は物事の状態ドメインに拡張できる。例えば、「ピントが甘い」は“对焦没对准，焦距没调整好”と、「相場が甘い」は“股市行情低迷（不好）”と理解されるべきである。また、否定的な意味を表わす点に関して「甘い」と“甜”は大きく異なる。「甘い考え」や「基準が甘い」などのように、「甘い」は物事の中途半端な状態、人間の精神及び行為などが厳しさに欠けているなどマイナス的な意味を表わす用法がある。一方、“甜”にはこのような意味・用法は見当たらない。

次に、味覚領域内において、中国語の“甜”は、水、お茶、露、お酒などに使われ、“口感好，醇厚”（「口当たりが良い、芳醇な」）という意味である。“甜”のこの意味・用法は、プロトタイプ的意味の「好ましく快い味覚」との類似性による意味転用であると考えられる。一方、日本語の「甘い」は、味噌、醤油、お酒、カレーなどを修飾し、「塩分や塩気が比較的少なく、アルコール度などが強くなく、口中における刺激が弱い」という意味をもって、「辛くない」とも言える。「甘い」のプロトタイプ的意味の「刺激性が強くない」との類似性による意味転用であると考えられる。

さらに、共感覚ドメインへの転用について、「甘い」と“甜”は両方とも視覚への派生は可能であるが、“甜”は子供や女性にだけ使われるのに対し、「甘い」は男性に用いられて

いる。聴覚領域への転用について、「甘い」は、子供や女性に限らず、男性の声についても言えるため、使用上に性別の差が見られないという点で中国語の“甜”とは異なる。触覚領域への転用について、日本語の「甘い」と中国語の“甜”は、「甘いキス」のような「男女の愛に満ちあふれて快い触覚」を表す場合、類似しているが、「甘い」は「甘い手触り」のように、より一般的に、「物理的な感触が快い、さわり心地がよい」といった状態を表すこともできるようであるが、“甜”にはこのような転用は見当たらないようである。また、日本語の「甘い」は「(ブレーキのレバーの) 握りが甘い」、「甘い痛み」など「感触的に堅牢でない」、「肉体的な痛み・苦痛が比較的強くない」についても言えるが、“甜”には似たような意味・用法はない。

最後に、人間活動ドメインにおける意味・用法に関して、中国語の“甜”は“吃饭甜(美味しい食事)”、“甜甜的觉(安らかな眠り)”、“甜活(楽で報酬のいい仕事)”を表わし、「食事」、「睡眠」、「仕事」について用いられる。これらの意味・用法は「甘い」には直接対応しないものである。

表 2-11 「辛い」と“辣”の意味・用法比較対照表

意味領域		意味・用法		辛い	辣	
I 身体体験	味覚	唐辛子の刺激的な味		○	○	
		刺激的な味	香辛料などの刺激的な味。		○	○
			(香辛料などの) 人に好まれる刺激的な味。		—	
			塩けが強く感じられる状態。		○	—
			酸味の強いさま、すい。		○	—
			酒気の強いさま。アルコール度の高いさま。		○	○
	嗅覚	辛そうな匂い。		○	○	
	視覚	感情の動きが激しい熱い視線。		—	○	
		異性の視線をひきつけるセクシーなさま。		—	○	
	聴覚	激しい、きつい声。		—	○	
触覚	ひりひりとする触覚的刺激。		—	○		
II 人間活動	きびしい。厳格である。		○	—		
	苦しい、つらい、切ない経験。		○	—		

	羞恥心などで感情が激しくなり、顔が赤くほてる様子。	—	○
	感情の動きが激しく、熱烈な様子である。	—	○
	女性の性格が横暴で、筋を通さない；或いはてきぱきとしている	—	○
	仕事ぶりがてきぱきしているさま	—	○
	(手口、やり方など) が残酷で、悪辣だ	—	○
	言論、文章などが勢いが激しくて、人の心を突き刺すほど鋭い	—	○
Ⅲ物事の状態	書画などが気迫がある、氣勢が感じられるさま	—	○

「辛い」と「辣」の意味・用法の共通点と相違点をそれぞれ次のようにまとめておく。

(i) 共通点

日本語の「辛い」と中国語の“辣”は原義とプロトタイプの意味では一致している。「辛い」と“辣”の原義は口に唐辛子などの辛いものを入れたときの痛感覚であり、認知主体の身体体験である。「唐辛子などの刺激的な味」というプロトタイプの意味は、認知主体の身体体験が対象の性質として読み替えられたものだと考えられる。味覚領域内において、日本語の「辛い」と中国語の“辣”はいずれも意味拡張が生じている。「辛いカレー」・“辣姜辣蒜”や「辛いお酒」・“酒挺辣的”などのように、「辛い」と“辣”は刺激的味、酒気を表わす例がよくみられる。また、「香りが辛い」・“辣味儿(辛い匂い)”のように、「辛い」と“辣”では嗅覚を表わす共感覚的用法も見られる。

(ii) 相違点

“辣”には“吃香喝辣(「贅沢な食生活」を代表する人に好まれる刺激的な味)”、“辣妹(異性の視線をひきつけるセクシーな様子)”、“火辣的爱情(熱烈な愛情)”、“泼辣的行事风格(てきぱきしている仕事ぶり)”、“笔力老辣(書画などが気迫がある)”など、プラスの意味を表わす用法があるが、物事の状態ドメインへの拡張も見られる。「辛い」にはこのような意味・用法は見当たらない。

味覚領域内において、「辛い」に関する味覚ドメイン内の転義は中国語“辣”より豊富で、

刺激的味や酒気を表すほかに、鹹味、酸味を表すこともできるが、現代日本語においては、すでに少数である。もし「味噌汁は少しからい」や「酸っぱさが鋭くからい」などのような日本語表現に遭遇した場合、単純に“辣（辛い）”という味と理解したら、誤解が生じてくることになる。一方、中国語の“辣”は、“麻辣鲜香”や“吃香喝辣”などに使われ、香辛料がもたらす“辣”という「美味な味覚」、「贅沢な食生活」という意味である。

“辣”は聴覚、視覚、触覚を表すことができる。それは日本語の「辛い」が持たない意味・用法である。視覚領域への転用について、中国語の“辣”は“火辣辣的眼神”、“辣妹”、“身材火辣”などのように、感情の動きが激しい熱い視線や女性の性的魅力についても言える。また、触覚領域への転用について、“辣”は、“骄阳火辣辣的”“火辣辣的疼”のように、熱さや痛みなど体のある部分が持つ激しく強く、ひりひりとする触覚的刺激といった状態を表すこともできる。聴覚領域への転用について、中国語の“辣”は“泼辣的叫声（激しい叫び声）”など「激しい、きつい声」についても言える。

人間活動ドメインにおいて、“辣”にはまた“脸上火辣辣的（激しい感情の動き、羞恥感）”、“火辣的情话（熱烈な愛情）”、“泼辣的女人（女性の横暴な性格）”、“作风泼辣（てきぱきしている仕事ぶり）”、“心狠手辣、呛辣的发言（残酷で悪辣な手口、言葉）”など多彩な派生表現が見られている。一方、日本語の「辛い」は「辛い採点（打分严格）」、「辛い目（倒霉、糟糕的境遇）」のように、評価の厳しさや苦しい、つらい、切ない経験について用いられる。これらの意味・用法について、“辣”と「辛い」は直接対応しないものである。

表 3-11 「苦い」と「苦」の意味・用法比較対照表

意味領域		意味・用法	苦い	苦
I 身体体験	味覚	葉や毒など苦味成分のような味	○	○
	嗅覚	刺激的な匂い	○	○
	視覚	不愉快な心情が見て取れる表情	○	○
	聴覚	人に味わいたくない、また快くない、不愉快な音声	○	△笑い声
	触覚	寒い	—	○
生理的な痛み		—	○	
II 人間活動		主体に好まれない、嫌な心理感覚	○	△言葉
		苦しい、つらい、快くない心理感覚	○	○

	悲しい、かわいそうな	—	○
	物事に懸命に取り組むこと	—	○
	辛抱強い、力を尽くす	—	○
	大変な、苦勞する	—	○
	相手が手ごわい、戦いが長く継続され、激しい	—	○
Ⅲ物事の状態	時代や境遇などの辛さ	—	○
	特に「まずしい、貧乏」のことを指す	—	○

「苦い」と“苦”の意味・用法の共通点と相違点をそれぞれ次のようにまとめておく。

(i) 共通点

日本語の「苦い」と中国語の“苦”は原義とプロトタイプの意味では一致している。「苦い」と“苦”の原義は薬や毒など苦味成分を舐めたときの味覚であり、認知主体の身体体験である。「薬や毒など苦味成分のような味」というプロトタイプの意味は、認知主体の身体体験が対象の性質として読み替えられたものだと考えられる。「苦い匂い」・“苦臭味”、「苦い笑い声」・“苦笑”、「苦い顔」・“苦臉”などのように、「苦い」と“苦”ではいずれも嗅覚、聴覚、視覚を表わす共感的用法が見られ、さらに、「苦い気持ち」・“心里苦”のような人間活動に関する表現にも用いられ、人間の苦しい、つらい、快くない心理感覚を表わすことができる。なお、上述の意味・用法について、マイナス的価値評価性という点で二者は共通している。

(ii) 相違点

“苦”と「苦い」はポジティブな価値評価性を表わす点に関して大きく異なる。“苦”は“苦学（物事に懸命に取り組むこと）”、“苦熬（辛抱強い）”、“苦言・苦口（力を尽くすこと）”などプラス的な意味を表わす用法がある。一方、「苦い」にはこのような意味・用法は見当たらない。

聴覚領域への転用について、中国語の“苦”は、ただ“苦笑”という“笑い声”を修飾する特別な場面に限られているが、日本語の「苦い」は「苦い響き」や「苦い曲」など様々な場合に普遍的に用いられる。一方、触覚領域への転用について、中国語の“苦”はまた、“苦寒”のように身体的に寒いと感じる場合に用いられる。しかし、日本語にはそのよう

な使い方がまったく存在しないのである。

人間活動ドメインにおける意味・用法に関して、中国語の“苦”は「大変な、苦勞する」という意味で、“苦熬”、“苦差事”、“苦活”など、様々な場合に普遍的に用いられるのに対し、日本語における使用はほとんど「苦勞」、「苦行」といった表現に限られており、一般的ではない。また、中国語において、“苦言相劝”、“苦口婆心”という表現があり、「辛抱強く、飽きもせずに、何度も言う」という意味を表している。日本語の「苦い」には見られない用法であるが、日本語の「酸っぱい」に共通している用法であるところがあるようである。“苦口”はある程度「口を酸っぱくする」と通じている。なお、“苦”は、「一生懸命である、まじめな」という意味で一般的に用いられているのに対し、日本語においては「苦い」ではなくて、「刻苦」、「刻苦勉勵」という二つのことばに集結しているだけのようなのである。日本語の「刻苦」は「一生懸命でまじめである」という意味合いを持っているが、日本語において、やや硬い表現とされているため、使う場面も限られていて、そういった意味で使われる中国語の“苦”を訳す時に、「一生懸命」、「まじめ」、「熱心」といったふうに訳される場合が多いようである。

表 4-11 「酸っぱい」と“酸”の意味・用法比較対照表

意味領域		意味・用法	酸っぱい	酸
I 身体体験	味覚	酔のような味である。すい。	○	○
		物が発酵した時もしくは腐った後の味	○	○
	嗅覚	酔のような匂い	○	○
	視覚	酸味を口にすると、口をすぼめた独特な表情	○	—
	聴覚	悲しい声	—	○
	触覚	疲れや病気によって引き起こされる痛みと無力感	—	○
		泣くことによって引き起こされる目や鼻の不快感	—	○
II 人間活動		主体に好まれない、不快である、嫌な心理感覚	○	○
		同じことばを何度も繰り返す、嫌と思われるほど	○	—
		やきもち、格気	—	○
		性格が強すぎ、残酷で薄情であること	—	○
		とげとげしく、情け容赦ない	—	○

	考え方がかたい、融通がきかない	—	○
Ⅲ物事の状態	盛んな時期を過ぎ、ダメになる	○	—
	貧乏な、みすぼらしいさま	—	○

「酸っぱい」と“酸”の意味・用法の共通点と相違点をそれぞれ次のようにまとめておく。

(i) 共通点

日本語の「酸っぱい」と中国語の“酸”は原義とプロトタイプの意味では一致している。「酸っぱい」と“酸”の原義は酢・梅干し・レモンなどを口に含んだときに感じられる味覚であり、認知主体の身体体験である。「酢のような味である。すい。」というプロトタイプの意味は、認知主体の身体体験が対象の性質として読み替えられたものだと考えられる。味覚領域内において、日本語の「酸っぱい」と中国語の“酸”はいずれも意味拡張が生じている。「酸っぱい牛乳（腐った牛乳）」や“酸奶（ヨーグルト）”などのように、「酸っぱい」と“酸”は腐敗の味・発酵の味を表わす例がよくみられる。ただし、腐ったものを示す味として使われる「酸っぱい」は中国語に訳される場合、時には“馊”（すえる）とも訳される。「酸っぱい」と“酸”では嗅覚を表わす共感覚的用法が見られる。「酸っぱい臭い」、「酸っぱい匂い」と“酸臭”“酸味（嗅覚）”はほぼ意味的に対応できると思われる。なお、二者の嗅覚への転用はマイナス的評価を帯びている点と同じである。また、「酸っぱい気分」、「心里发酸」のように、「酸っぱい」と“酸”はいずれも人間活動に関する表現に用いられ、好まれない、不快である、嫌な心理感覚を表わすことができ、二者はマイナスの価値的評価性である点で共通している。

(ii) 相違点

日本語の「酸っぱい」と中国語の“酸”は各自、物事の状態ドメインに拡張できるが、「酸っぱい役者」の「酸っぱい」は「物事の盛んな時期を過ぎ、ダメになる」というマイナス的な意味を表わす用法がある。一方、中国語にはこのような意味・用法は見当たらないが、「貧乏な、みすぼらしいさま」を表わす“穷酸・寒酸”は中国語の“酸”特有の使い方である。

視覚領域への転用について、日本語の「酸っぱい」は「酸っぱい顔」、「酸っぱい表情」

など「酸味を口にすると、口をすぼめた独特な表情」についても言えるが、中国語の“酸”には、似たような意味・用法はない。聴覚領域への転用について、“酸”では“酸嘶・酸鸣”という用法があるが、ここの「酸っぱい声」は「悲しい声」、「悲痛な叫び」、「悲鳴」と解釈される。さらに、“酸”は“腰酸・腿酸”など触覚（体の感覚）を表すことができるが、それは日本語の「酸っぱい」にまったく見られない用法である。

人間活動ドメインにおける意味・用法に関して、「酸っぱい」と“酸”は両方とも「つらい、苦しい」という気持ちを表すことができるが、日本語の用例は極めて少ないが、中国語の“酸”は“心酸”などのように頻繁に使用されている。また、“酸”は「つらい、悲しい気持ち」を表す以外に、“酸溜溜”のような「やきもち」を表すこともできる。これも中国語の独特の使い方と言えよう。なお、「同じことばを何度も繰り返し、嫌と思われるほど」という意味で使う「酸っぱい」は中国語に訳す時に、そのまま“酸”と訳してもよいが、意味の拡張ルートが少々異なっている。例えば、「口が酸っぱくなる程言っていた」の「酸っぱい」は「何度も繰り返す、くどい」という意味になるが、“嘴都说酸了”の“酸”は「疲れるほど」という身体感覚（“酸”の語義⑤に参照）から派生してきたと思われる。

7.1.2 「甘い、辛い、苦い、酸っぱい」と“甜、辣、苦、酸”の語義分布における異同

「甘い、辛い、苦い、酸っぱい」と“甜、辣、苦、酸”の意味・用法は身体体験ドメイン・人間活動ドメイン・物事の状態ドメインという3つの意味領域から把握できる。各意味領域の各語義の出現頻度を集計し、語義によって使用頻度が異なることを明らかにした。「甘い、辛い、苦い、酸っぱい」と“甜、辣、苦、酸”は同じ傾向を示しており、いずれも身体体験ドメインの意味・用法が圧倒的に多い。

プロトタイプの意味と派生義の使用頻度の比重から見れば、全体的にプロトタイプの意味として使用されることが多い。「甘い、辛い、苦い」と“甜、辣、苦”はプロトタイプの意味より、派生義の方が多用される傾向を示している。一方、「酸っぱい」と“酸”はプロトタイプの意味と派生義の使用頻度の比重がほぼ等しいという傾向を示している。ただし、個々の派生義の出現頻度に比べて、「甘い、辛い、苦い、酸っぱい」と“甜、辣、苦、酸”はいずれもすべての語義のうち、プロトタイプの意味が最も多く使用されている。

感覚ごとに出現頻度を比較しながら、「甘い、辛い、苦い、酸っぱい」と“甜、辣、苦、酸”が共感覚への転用に見られる異同を明示した。感覚領域において、「甘い、辛い、苦い、

酸っぱい」と「甜、辣、苦、酸」はいずれも味覚用法を主としている。共感覚ドメインの各語義の使用頻度に関しては、次の表 5-3 にまとめておく。

表 5-3 感覚ごとの各語義の使用頻度

日・中両言語 の味覚形容詞	感覚ごとの各語義の使用頻度
甘い	味覚>嗅覚>視覚>聴覚>触覚
甜	味覚>視覚>聴覚>嗅覚>触覚
辛い	味覚>嗅覚
辣	味覚>触覚>視覚>嗅覚>聴覚
苦い	味覚>視覚>嗅覚>聴覚
苦	味覚>視覚>触覚>聴覚>嗅覚
酸っぱい	味覚>嗅覚>視覚
酸	味覚>触覚>嗅覚>聴覚

7.1.3 「甘い、辛い、苦い、酸っぱい」と「甜、辣、苦、酸」の意味拡張における異同

7.1.1 に再掲する「意味・用法比較対照表」から、個々の味覚形容詞の意味・用法の数が異なるということが観察される。

日本語のほうは、「甘い」22、「辛い」5、「苦い」6、「酸っぱい」7で、中国語のほうは、「甜」14、「辣」15、「苦」15、「酸」12である。

「身体体験」、「人間活動」及び「物事の状態」という3つの領域において、拡張の度合いは個々の味覚形容詞によって異なることが見られる。日本語の四つの味覚形容詞は「甘い>酸っぱい>苦い>辛い」の順で広い。そのなかで、「甘い」は顕著に広く拡張している。中国語の四つの味覚形容詞は「苦=辣>甜>酸」の順で広い。そのなかで、「苦」と「辣」は広く拡張している。

また、感覚領域において、各味覚形容詞は本来の味覚から他の感覚へ拡張する度合（拡張義の数）が違う。感覚ごとの拡張度合いは拡張義の数で示し、次の表 5-2 にまとめておく。

表 5-2 感覚ごとの拡張度合い

日・中両言語の 味覚形容詞	感覚ごとの拡張度合い
甘い	味覚 3=嗅覚 3=触覚 3>視覚 2>聴覚 1
甜	味覚 3>嗅覚 2>視覚 1=聴覚 1=触覚 1
辛い	味覚 2>嗅覚 1
辣	味覚 3>視覚 2>嗅覚 1=聴覚 1=触覚 1
苦い	味覚 1=視覚 1=嗅覚 1=聴覚 1
苦	触覚 2>味覚 1=視覚 1=聴覚 1=嗅覚 1
酸っぱい	味覚 2>嗅覚 1=視覚 1
酸	味覚 2=触覚 2>嗅覚 1=聴覚 1

7.2 反省点及び今後の研究課題

本研究は味覚形容詞を研究課題にしているが、五味の中の「甘い」・“甜”、「辛い」・“辣”、「苦い」・“苦”、「酸っぱい」・“酸”しか扱っていない。今後は、本研究においてまだ残されている「塩辛い」・“咸”に関しても認知的なアプローチによって、分析すると共に、味覚形容詞のより全面的記述と分析を目指していきたいと考えている。

また、日本語の味覚形容詞を分析する際には単純語の形で研究しているが、中国語の場合は単純語と複合語を区別せずに、分析を行った。両言語のことばの特徴にも関係しているが、今後は単純語と複合語をきちんと区別し、分析する必要があると考える。そして、中国語において、“甜”と“辣”の文語表現に“甘”、“辛”があり、本来ならば、“甘”と“辛”についても考察をせねばならないが、本稿では少し提示しただけで、詳しく分析していなかった。これも今後の研究課題にしたいと思う。

最後に、本研究は、味覚形容詞を意味派生に焦点を当て、主に言語学的な側面から分析したが、今後は、言語現象の背景である日・中両国の文化的な面から考察する必要があると考える。コーパスデータ全般を研究資源として、言語学の枠を超え、文化学、社会学をも包摂した異分野との関係を研究していきたいと考えている。

¹ 松本 曜 (2003) 『シリーズ認知言語学入門 3 認知意味論』 p73

² 奥田靖雄 (1985) は、語の意味を抽出する際に豊富な用例が必要であると述べ、具体的には次のような

指摘がある。

単語の語彙的な意味は一般的のものであって、いちいちの使用につきまとうイメージではない。したがって、意味を確認するためには、余分なイメージをきりすてながら、一般化を行わなければならないのである。このためには、豊富な用例が必要である。わずかばかりの用例、たまたま思いついた用例から意味をひきだすと、個別的なもの、偶然的なもの、副次的なものをきりすてることに失敗する。意味規定の正確さは用例の量に依存している。

(奥田 1985 : 12 下線筆者)

³ 詳細につき、<http://cpc.people.com.cn/GB/219457/219506/219508/219527/14640267.html> を参照されたい。

⁴ 詳細につき、http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/doc.html#01 を参照されたい。

⁵ 詳細につき、http://ecl.pku.edu.cn:8080/cc1_corpus/CCLCorpus_Readme.html を参照されたい。

⁶ 山梨正明 (2000 : 179) によれば、認知言語学のアプローチは、プロトタイプ理論のカテゴリー観に基づいている。

カテゴリーの成員は、すべてが同等の資格でそのカテゴリーに帰属するのではなく、そのカテゴリーの中心の成員から周辺の成員まで段階的なグレイディエンスをもって分布している

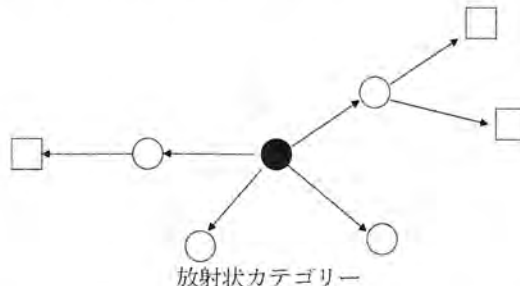
山梨 (2000 : 195)

辻 幸夫 (編) (2003 : 159) では、「放射状カテゴリーは中心と周辺のスキーマ>に基づいて想定されたカテゴリーのモデル」であるとしている。放射状カテゴリーについて、次のような記述がある。

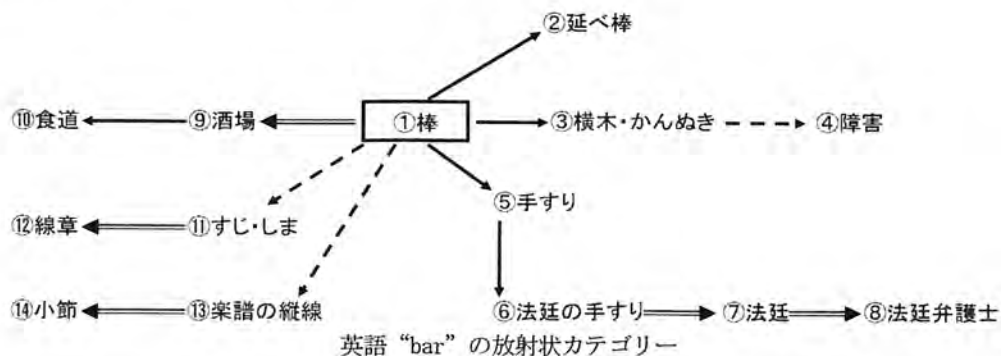
放射状カテゴリーは、Lakoff (1987) で提示されたカテゴリー・モデルで、ある中心的 (プロトタイプ的) メンバーを取り囲むように 2 次的に周辺の (非プロトタイプ的) メンバーが位置づけられ、その 2 次的なメンバーを中心にさらに 3 次的に周辺のメンバーが位置づけられるというように、結果として、幾重もの円が放射状に拡張していくカテゴリーをいう。

辻 (編) (2003 : 159)

放射状カテゴリーを一般的な形で表すと、次の図になる。



辻 幸夫 (編) (2003 : 160) はさらに上記の放射状カテゴリーに従え、ケーススタディとして、英語の名詞 “bar” の多義的カテゴリーを次のように図示している。



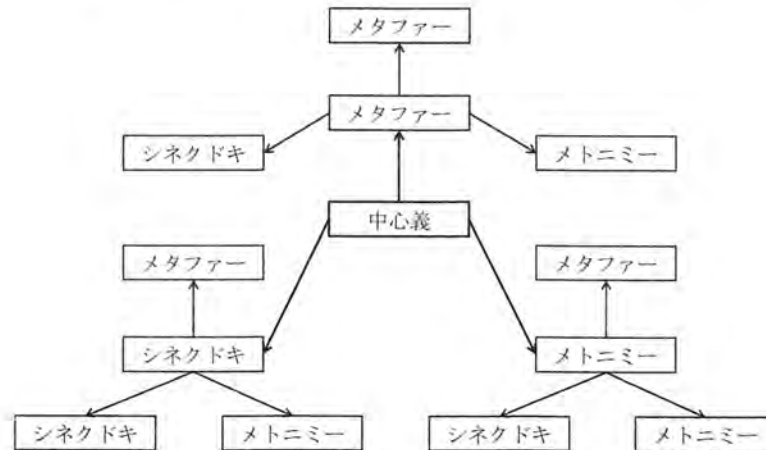
カテゴリーにおける代表的な事例をプロトタイプという (辻 (編) 2002, 古村 2004)。松本 (2003) では、プロトタイプが認知意味論における基本概念の 1 つであると指摘し、プロトタイプ意味論について次のように述べている。

プロトタイプ意味論では、ある意味カテゴリーに属する成員は均等ではなく、そのなかには典型

的なケースと周辺のケースがあることを認め、その典型的なケースに注目して記述を行う。

(松本 曜 2003 : 30)

語の意味分析の課題とされるプロトタイプの意味の認定は、このプロトタイプ理論に基づくものである。瀬戸賢一 (2007 : 40) では、ラネカー (Langacker) のネットワークモデルには大きな欠陥があるということが指摘されている。瀬戸 (2007 : 39-40) によれば、ラネカーのネットワークモデルにはメタファーとシネクドキーがうまく組み込まれているが、メトニミーの位置づけが不明である。そこで、瀬戸 (2007 : 41) は、語の多義の意味を記述するには、「メタファーとメトニミーとシネクドキーをそれぞれ独立した意義展開のボタンと認める必要がある」と主張し、この方向への修正として、多義記述の新しいモデルを図4のように示している。



瀬戸 (2007) による意味ネットワークモデル

瀬戸賢一 (2007) では、上記の図について次のような説明がある。

意味ネットワークは、中心義を出発点として、そこからメタファー・メトニミー・シネクドキーの経路を通して意義が展開する。たとえば、中心義からメタファー展開した意義は、場合により、そこから再びメタファー・メトニミー・シネクドキーのどれかに拡張する。

(瀬戸 2007 : 41-42)

また、瀬戸 (2007) は、多義語を体系的に記述することを旨とし、①「中心義の設定」、②「各意義の認定」、③「各意義の関連」と④「各意義の配列」という4つの問題を設定し、多義語の記述について検討した。まず、中心義は「共時的な多義ネットワークの中心に位置する意義であり、その出発点となる意義である」(瀬戸 2007 : 47) と指摘している。派生義に対して、中心義の方が具体性が高く、想起されやすく、用法上の制約を受けにくいなどの特徴を帯びているという。次に、各意義の認定については、瀬戸 (2007) はメタファー・メトニミー・シネクドキーによる意義の切り分けを主張している。次に、各意義の関連については、瀬戸 (2007) はメタファー・メトニミー・シネクドキーによって関連付けられるのは、「実際の多義を記述するのに目が粗すぎる」(瀬戸 2007 : 49) と批判し、「必要十分な多義展開のボタン (これを意義展開ボタンと呼ぶ) を定めなければならない」(瀬戸 2007 : 49) と指摘している。さらに、語の多義を記述する目的に適するために、メタファー・メトニミー・シネクドキーの元に下位類を設定し、「意義展開パターン」を提案した。たとえば、メタファーの下位類として、「形態類似」、「特性類似」と「機能類似」の3種が挙げられている。

瀬戸 (2007) による意義展開パターン一覧

メタファー	形態類似、特性類似、機能類似	
シネクドキー	種で類、類で種	
メトニミー	空間	全体で部分、部分で全体、入れ物で中身、中身で入れ物、 図地反転、空間隣接

	時間	全体で部分、部分で全体、共起、原因でプロセス、プロセスで原因、プロセスで結果、結果でプロセス、原因で結果、結果で原因、行為者でプロセス、プロセスで行為者、道具でプロセス、プロセスで道具、素材でプロセス、プロセスで素材、場所でプロセス、プロセスで場所、対象でプロセス、プロセスで対象、行為者で結果、結果で行為者、道具で結果、結果で道具、素材で結果、結果で素材、場所で結果、結果で場所
	特性	特性でもの、もので特性

* 本研究では、意味拡張プロセスを分析する際に、研究対象となる味覚形容詞自体の持っている性質を重視する立場に立つ。ここでは、形容詞の評価性・程度性について述べる。

(I) 評価性

西尾(1972)は、「形容詞は一般に、人間がものごとをどのように感受したかをあらわすという性格が濃いので、言語主体(ないしその言語社会一般)のものごとに対する評価・価値づけの要素を含んでいることが多いといえよう。こういう要素は分析がむずかしいけれども、特に形容詞の場合避けて通ることのできない性質のものだと考えられる」(西尾 1972 : 185-186)と言っている。しかも、西尾(1972)が指摘するように、形容詞の意味にみられる価値表現的なものは、単に主観的な性質のものではなく、「対象の客観的な属性の表現と分かちがたく結びついている」(西尾 1972 : 186)のである。したがって、形容詞の価値評価性は評価する人によって、評価されるものによって変わっていくことも可能である。例えば、ある人には甘く美味しいケーキもほかの人にとっては甘すぎるかも知れない。また、リンゴや葡萄などの果物に「これ甘いですね」というのはほめことばであるが、辻本(2003 : 184)が指摘しているように、饅頭や羊羹などに「甘いね、これ」というと、思った以上の甘さをいい、美味しくないという意味に用いられる。よって、多義語の各意味項目においても、その価値評価性は必ずしもつねにある一定の方向を持ったものではないと思われる。

形容詞の意味における評価性について調べるにあたっては、西尾(1972)は「単語に含まれる評価と、単語の使用に伴う評価とを区別しなければならない」(西尾 1972 : 186)と主張し、次のように述べている。

たとえば、「ながい話で閉口した。」というとき、話の長かったことがこの文の話し手にとって迷惑だったことは明らかであるが、「ながい」という単語自身、評価的に、中立的な語であることは明らかである。ところが「長たらしい」はいつでもよくない意味で使われる。

*ながたらしいお話をありがとうございました。

などということはありません。「ながたらしい」は単語自身に、マイナスの評価を含んでいると考えられ、その点で「ながい」と区別される。

もう1つの例をあげてみよう。「となりの花は赤い」ということわざは、およそ「となりの花というものは、とかく自分の家の花よりも、赤さもあざやかに美しくよく見えるものだ(そのように、よそのものは自分のものよりよくみえるものだ)。」のように解しようとすれば、「赤い」の部分がこの文脈ではよい評価を伴って使われているようにみえる。しかし、「あかい」じしんは「目が赤くなる」、「赤い痰が出る」等々の例がいくらかでもあることから自明のように、評価とは無関係な語である。

西尾(1972 : 186-187)

西尾(1972)が指摘しているように、記述的な意味を捨象するならば、味覚形容詞も「赤い」と同じく、評価的に無色な基本的形容詞である。しかし、多義語としての味覚形容詞が各語義として使う際、単語の使用に伴う評価性が生じてくるはずである。本研究は味覚形容詞が単語として評価的な要素の有無を問わず、ダイナミックな視点で、味覚形容詞が各語義に使われる場合の価値評価性を検討したい。

(II) 程度性

形容詞の程度性について、西尾(1972)では次のような指摘がある。

ものごとの属性には、属性の種類の違いとともに、属性の程度の違いが基本的な契機として存在する。ものごとの属性を表す主要な品詞である形容詞においては、その意味の特性として「程度性」を含んでいることが非常に多い。形容詞が、事物の属性についての相対的な判断を表すと云われることがあるのも、このことに起因するものと考えられる。

西尾(1972 : 155)

西尾(1972)は、程度副詞との関係からみて、程度に関係する形容詞の典型的なタイプとして、以下の3種を示す。

(i) 基本的な一般的な形容詞で自由な尺度性をもっているもの

例: 「多い」、「高い」、「暗い」、「うれしい」

(ii) 語自身の中に程度上の制限をもっているもの

例:「こたかいり」、「おびただしり」、「うすぐらい」

(iii) 特殊な意味をもった語で尺度的でないもの

例:「ない」、「いっばいな」、「同じ」

(西尾 1972 : 158)

本研究は、味覚形容詞の程度性について十分な議論をするだけの用意がまだないが、西尾 (1972) を踏まえ、味覚形容詞の価値評価性と程度性が、意味拡張のプロセスにどのように反映されているかについて確認する試みに止まらざるを得ない。

⁹ 『デジタル大辞泉』はインターネットの goo 国語辞書に搭載されており、書籍版『大辞泉』に 1 万語以上を追加し、定期的にデータ更新を行っているものである。

¹⁰ 『玉ねぎの豆知識』JA きたみらい。http://www.jakitamirai.or.jp/nousantop/onion/onion3/

¹¹ Jantima (1999 : 147) は、「あまい」が「からさ」の軸に乗っていて、「からい」と一元的な対義関係を成すことが、スケールが一元化されたと考えている。本研究では、Jantima (1999) の説を踏まえ、前節の「尺度融合」とを区別し、「尺度の一元化」と呼ぶことにする。

¹² 小田 (2003 : 191) によって指摘されたように、「甘い言葉」や「甘いささやき」に見られる「甘い」が聴覚を表す「甘い」とは違うことに注意すべきである。「甘い言葉」や「甘いささやき」の「甘い」は、「人の行為の様態やその結果」(小田 2003 : 192) について用いられる表現である。この用法については、のちに詳しく述べる。

¹³ 鍋島 (2007) は、なぜ価値評価を表す語は他領域を形容できるかに関して、以下のように述べている。

価値判断というのは主観的判断であり、外部世界にあるのではなく、それを判断する人間の側にあるいわば主観的印象の一部である。主観的であるがゆえに好悪など同じような印象を与えるものは同一化されやすくなる。これが価値評価性によって異なる領域がつながれる要因のひとつと考えられる。

(鍋島 2007 : 194)

¹⁴ 瀬口正晴、多田洋、小関佐貴代、衣笠治子、道家晶子、八田一 『食品学各論』瀬口正晴、八田一 (編)、化学同人、p 176。

¹⁵ “アマチャ” 東邦大学薬用植物園。2012 年 5 月 27 日閲覧。

¹⁶ 今田・坂井 (2003) を参考した。

¹⁷ 坂井・ベル (2005) と坂井 (2006、2007) を参考した。

¹⁸ http://www.people.com.cn/

¹⁹ Key Word in Context 文脈付き索引。情報検索で、キーワードが文脈の中に含まれて出てくる索引。

²⁰ 「甘い」のほか、「甘く」、「甘かつ」、「甘け」がある。

²¹ 「甘い」の各語義の使用頻度配列について、まず身体体験領域の感覚ごとの使用頻度に基づき、味覚、嗅覚、視覚、聴覚、触覚という順で語義を配列し、さらに各感覚領域においては個々の語義を使用頻度順に配列している。

²² CCL で調べた結果、14143 例が検索された。そのうちから“甜”によって形成された複合語のデータを除外し、単音節形容詞“甜”と重ね型“甜甜”の使用例は 13127 例が得られた。

²³ “甜”の各語義の使用頻度配列について、まず身体体験領域の感覚ごとの使用頻度に基づき、味覚、視覚、聴覚、嗅覚、触覚という順で語義を配列し、さらに各感覚領域においては個々の語義を使用頻度順に配列している。

²⁴ 日本人は古くから匂いに敏感な民族だとされている。室町時代では、人々は「誰が袖」を帯に下げて携行して身だしなみとして使用していたという。味覚形容詞の「甘い」が嗅覚へ転用する度合いが高いことは、日本人が匂いに敏感であるという文化的な背景に根差していると考えられる。

²⁵ 「甘い言葉」「甘い誘惑」のように、「甘い」は人を誘い込むような極限的な性質を持っている。

²⁶ 山梨 (2000) は、「超えている」という間接的な否定表現について、「否定の世界がある水準を超えた領域として見立てられている」(山梨 2000 : 160) という見方をし、次の図のように示す。



図 2 山梨 (2000) による「超えている」という否定表現の空間認知図 26

「甘い」の語義⑨<人の心を引き付けて迷わせる>の「甘い」が表す否定的な意味は「度外れ」の評価性を帯びているため、図 2 の水準を超えた領域として見立てられるのであろう。また、語義③<塩味・辛味が薄い味>の「甘い」は「基準未達」の評価性を持っているため、その否定的な意味は水準に達していない領域を見立てて、図 3 の様な規定が可能となる。



図3「基準未達」の空間認知図示

- このように、「甘い」の2種の否定的な意味も空間認識に根ざす経験を背景にしていると考えられる。
- ²⁷ 『日本国語大辞典』（小学館 第二版）『学研国語大辞典』（学習研究社 第二版）『新明解国語辞典』（三省堂 第六版）『岩波国語辞典』（岩波書店 第七版）『デジタル大辞泉』（小学館）（以下、それぞれ『日国』『学研』『新明解』『岩波』『大辞泉』と略称）という5つの辞書である。
- ²⁸ 《古代汉语词典》（商務印書館）、《辞海》（上海辞書出版社1989年版）、《现代汉语大辞典》（上海辞書出版社2009）、《现代汉语词典》（商務印書館2002年増補本）、《新华词典》（商務印書館2001年修訂版）（以下、それぞれ《古汉》《辞海》《现汉大》《现汉》《新华》と略称）という5つの辞書である。
- ²⁹ 『EDR 日中対訳辞書』による。
- ³⁰ 《现代汉语词典》により、中国語の“辛”は“①辣（辛い）。②辛苦（辛くてきつい）。③痛苦（苦しい）。④姓（名字）。”の四つの意味項目を持つ。「辛い目」のように使われる日本語「辛い」は中国語“辛”の語義②「辛くてきつい」と通じる。
- ³¹ 生理学的定義に基づく味覚は、味覚受容体細胞にとって適刺激である苦味、酸味、甘味、塩味、旨味の5種（五基本味）を指しており、辛味はこれにあてはまらない。
- ³² <https://aissy.co.jp/ajihakase/blog/archives/12804>
- ³³ 平安時代昌泰年間（898～901）に僧侶昌住が編纂したとされる。現存する漢和辞典としては最古のものである。
- ³⁴ 11世紀末から12世紀頃に日本で成立した、漢字を引くための辞書（字書）。「仏」、「法」、「僧」の3部に分かれる。編者は明らかでないが、法相宗の学僧とみられる。略称、名義抄。
- ³⁵ 岩波書店が出版する『広辞苑 第五版』を参照している。
- ³⁶ Jantra, Jantima (1999:147) は、「あまい」が「からさ」の軸に乗っていて、「からい」と一元的な対義関係を成すことが、スケールが一元化されたと考えている。本研究では、Jantima (1999) の説を踏まえ、前節の「尺度融合」とを区別し、「尺度の一元化」と呼ぶことにする。
- ³⁷ Key Word in Context 文脈付き索引。情報検索で、キーワードが文脈の中に含まれて出てくる索引。
- ³⁸ 「辛い」のほか、「辛く」、「からかつ」、「からけ」がある。
- ³⁹ 「辛い」の各語義の使用頻度配列について、まず身体体験領域の感覚ごとの使用頻度に基づき、味覚、嗅覚という順で語義を配列し、さらに各感覚領域においては個々の語義を使用頻度順に配列している。
- ⁴⁰ CCLで調べた結果、9349例が検索された。そのうちから“辣”によって形成された複合語のデータを除外し、単音節形容詞“辣”と重ね型“辣辣”の使用例は6312例が得られた。
- ⁴¹ “辣”の各語義の使用頻度配列について、まず身体体験領域の感覚ごとの使用頻度に基づき、味覚、触覚、視覚、嗅覚、聴覚という順で語義を配列し、さらに各感覚領域においては個々の語義を使用頻度順に配列している。
- ⁴² 悪辣、毒辣、心狠手辣
- ⁴³ Jantra, Jantima (2002)、「大人の味」という表現の考察, Dynamis: ことばと文化 (2002), 6: 213-222
- ⁴⁴ 石塚左玄、「食物養生法」. 『近代日本養生論・衛生論集成』. 第12巻、大空社、1992. 10.
- ⁴⁵ 「苦い」のほか、「苦く」、「苦かつ」、「苦け」がある。
- ⁴⁶ 「苦い」の各語義の使用頻度配列について、まず身体体験領域の感覚ごとの使用頻度に基づき、味覚、視覚、嗅覚、聴覚という順で語義を配列し、さらに各感覚領域においては個々の語義を使用頻度順に配列している。
- ⁴⁷ CCLで調べた結果、175316例が検索された。そのうちから“甜”によって形成された複合語のデータを除外し、単音節形容詞“苦”と重ね型“苦苦”の使用例は115119例が得られた。
- ⁴⁸ “苦”の各語義の使用頻度配列について、まず身体体験領域の感覚ごとの使用頻度に基づき、味覚、視覚、触覚、聴覚、嗅覚という順で語義を配列し、さらに各感覚領域においては個々の語義を使用頻度順に配列している。
- ⁴⁹ 苦寒、苦毒的语言
- ⁵⁰ 酸味をもたらす成分は、有機酸である酢酸やクエン酸などが代表的である。酢酸は酢に、クエン酸はレモンや梅干に多く含まれている。なお、クエン酸という名称には、中国産の柑橘類である「クエン」をはじめ、柑橘類に共通して多く含まれている酸、という由来がある。
- ⁵¹ 「酸っぱい」のほか、「酸っぱく」、「酸っぱかつ」、「酸っぱけ」がある。
- ⁵² 「酸っぱい」の各語義の使用頻度配列について、まず身体体験領域の感覚ごとの使用頻度に基づき、味

覚、嗅覚、視覚という順で語義を配列し、さらに各感覚領域においては個々の語義を使用頻度順に配列している。

⁵³ CCL で調べた結果、21729 例が検索された。そのうちから“酸”によって形成された複合語のデータを除外し、単音節形容詞“酸”と重ね型“酸酸”の使用例は 11186 例が得られた。

⁵⁴ “酸”の各語義の使用頻度配列について、まず身体体験領域の感覚ごとの使用頻度に基づき、味覚、触覚、嗅覚、聴覚という順で語義を配列し、さらに各感覚領域においては個々の語義を使用頻度順に配列している。

⁵⁵ 日本人は古くから匂いに敏感な民族だとされている。室町時代では、人々は「誰が袖」を帯に下げて携行して身だしなみとして使用していたという。味覚形容詞の「甘い」が嗅覚へ転用する度合いが高いことは、日本人が匂いに敏感であるという文化的な背景に根差していると考えられる。

参考文献：

日本語の著書・論文

- 相原 茂（監訳）（1988）『現代中国語文法総覧（上）』くろしお出版。
- 青谷法子（2001）多義語の語彙ネットワークに関する研究(1)：形容詞「甘い」について
『研究紀要 = Bulletin of Tokai Gakuen University』7号、149-159、東海学園大学
人文学部・短期大学部。
- 秋元美晴（2000）「形容詞の文体論的考察—連用用法全中心に—」『恵泉女学園大学人文学
部紀要』12、87-102。
- 荒川清秀（2009）『中国語を歩く—辞書と街角の考現学』東方書店。
- 荒川洋平・森山新（2009）『日本語教師のための応用認知言語学』凡人社。
- 有菌智美（2008）『顔』の意味拡張に対する認知的考察『言葉と文化』9、287-301、名
古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻。
- 池上嘉彦（1975）『意味論—意味構造の分析と記述』大修館書店。
- 池上嘉彦（2006）『英語の感覚・日本語の感覚』日本放送出版協会。
- 石川慎一郎・前田忠彦・山崎誠（2010）『言語研究のため意の統計入門』くろしお出版。
- 井上 優（2008）「よく分かる日本語辞書とは」『「生活日本語」の学習をめぐる：文化・
言語の違いを超えるために』、24-31、国立国語研究所。
- 王 冲（2011）「認知言語学から見た『切る』と“切”の対照研究—日本語教育のために」
《汉日语言对比研究论丛》2、271-283、北京大学出版社。
- 大石 亨（2007）「日本語形容詞の意味拡張をもたらす認知機構について」『日本認知言語
学会論文集』7、160-170、日本認知言語学会。
- 大河内康憲（1997）「日本語と中国語の同形語」『日本語と中国語の対照研究論文集』くろ
しお出版。
- 岡 智之（2007）「日本語教育への認知言語学の応用：多義語、特に格助詞を中心に」『東
京学芸大学紀要 総合教育科学系』58、467-481。
- 奥田靖雄（1985）『ことばの研究・序説』むぎ書房。
- 小田希望（2003）「甘くてスウィート」瀬戸賢一（編）『ことばは味を超える』、186-214、
海鳴社。
- 北原保雄（2010）『日本語の形容詞』大修館書店。

- 近安里 (1997) 多義語「甘い」の構造的考察—栄と sweet との比較を通して—『明治大学日本文学』25、61-70。
- 楠見 孝 (2004) 「味覚のメタファー表現への認知的アプローチ」日本言語学界 127 回大会予稿集。
- 楠見 孝 (2005) 「味覚表現を支える認知のしくみ」瀬戸賢一 (編) 『ことばは味を超える』、186-214、海鳴社。
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』ひつじ書房。
- 国広哲弥 (1982) 『意味論の方法』大修館書店。
- 国広哲弥 (2002) 「語義の構造」齊藤倫明 (編) 『朝倉日本語講座④語彙・意味』朝倉書店。
- 国広哲弥 (2006) 『日本語の多義動詞—理想の国語辞典Ⅱ』大修館書店。
- 小出慶一 (2003) 「味覚形容詞—体系とその意味拡張—」『群馬県立女子大学国文学研究』23、1-17、群馬県立女子大学国語国文学会。
- 崔明愛・馬場俊臣 (2010) 「日本語と中国語の味覚表現の比較—『甘い』『辛い』を中心に—」『北海道教育大学紀要 (人文科学・社会科学編)』60 (2)、65-78。
- 齊藤俊雄 (2005) 「英語コーパス言語学とは何か」齊藤俊雄・中村純作・赤野一郎 (編) 『英語コーパス言語学—基礎と実践：改訂新版』、3-20、研究社。
- 坂本 勉 (2007) 「共感覚表現の脳内処理モデル」楠見 孝 (編) 『メタファー研究の最前線』ひつじ書房、284-306。
- 佐々木正人 (1994) 『アフォーダンス—新しい認知の理論』岩波書店。
- 篠原俊吾 (2002) 「『悲しさ』『さびしさ』はどこにあるのか—形容詞文の事態把握とその中核をめぐる—」西村義樹 (編) 『認知言語学Ⅰ：事象構造』、261-283、東京大学出版社。
- 篠原俊吾 (2008) 「相互作用と形容詞」森雄一・西村義樹・山田進・米山三明 (編) 『ことばのダイナミクス』89-104、くろしお出版。
- Jantima, Jantra (1999) 「日本語形容詞「あまい」の意味拡張と広告における多義的使用の分析—英語<sweet>及びタイ語<wan>と対照しながら」『Dynamis：ことばと文化』(1999) 3、142-193、京都大学大学院人間・環境学研究科文化環境言語基礎論講座。
- 徐一平 (2009) 「中・日語対照研究と日本語教育」大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」活動報告書。
- 徐 蓮 (2011) 「日中同形多義語<深/浅>の意味構造対照分析」『日本認知言語学会論文集』

11、309-319。

謝豊地正枝 (2004) 共感覺的比喩表現に対する考察—形容詞「甘い」「からい」の多義性に対する分析を中心に『2004 當代認知語言学與日語研究創新研討会論文集』、27-62、台湾大学。

進藤三佳・内元清貴・井佐原均 (2007) 「感覺領域からの意味拡張」楠見 孝 (編)『メタファー研究の最前線』、265-284、ひつじ書房。

杉村 泰 (2009) 「コーパスを利用した複合動詞「一残る」の意味分析」『名古屋大学言語文化論集』30 (2)、171-180。

杉本 武 (2009) 「コーパスからみた類義語動詞：『ねじる』と『ひねる』」『文藝言語研究言語篇』55、109-122、筑波大学文藝・言語系。

鈴木重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』むぎ書房。

砂岡和子・詹衛東 (2007) 「コーパス利用の中国語電子補語辞典編纂とその課題」日本中国語学会関東支部拡大例会。

砂川有里子 (2010) 「コーパスを活用した日本語教育研究—日本語学習辞書編集に向け—」砂川有里子・加納千恵子・一二三朋子・小野正樹 (編)『日本語教育研究への招待』、99-119、くろしお出版。

瀬戸賢一 (2003) 『ことばは味を超える—美味しい表現の探求—』海鳴社。

瀬戸賢一 (2005) 『味ことばの世界』海鳴社。

瀬戸賢一 (2005) 『よくわかる比喩』研究社。

瀬戸賢一 (2007) 「メタファーと多義語の記述」楠見 孝 (編)『メタファー研究の最前線』、31-61、ひつじ書房。

瀬戸賢一 (2007) 『英語多義ネットワーク辞典』小学館。

高橋太郎 (1998) 「動詞からみた形容詞」『言語』27 (3)、36-43。

田野村忠温・服部匡・杉本武・石井正彦 (2009) 「コーパスを用いた日本語研究の精密化と新しい研究領域・手法の開発」(文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「日本語コーパス」平成20年度研究成果報告書)『人工知能学会誌』24 (5)、647-655。

田野村忠温 (2010) 「日本語コーパスとコロケーション—辞書記述への応用の可能性—」『言語研究』138、1-23、日本言語学会。

丹保健一 (1997) 「形容詞の連体、連用、終止用法の出現頻度と意味との関連性をめぐって：「高い」「広い」「寂しい」を例として」『三重大学教育学部研究紀要 (人文・社会科学)』

48、9-18。

- 月足亜由美 (2011) 「形容詞の比喩的多義性」『甲南女子大学研究紀要 (文学・文化編)』48、47-54。
- 辻 幸夫 (編) (2002) 『認知言語学キーワード事典』研究社。
- 辻 幸夫 (編) (2003) 『認知言語学への招待』大修館書店。
- 辻本智子 (2003) 「味ことばの隠し味」瀬戸賢一 (編) 『ことばは味を超える—美味しい表現の探求—』、156-185、海鳴社。
- 寺村秀夫 (1991) 『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版。
- 鍋島弘治朗 (2007) 「メタファーと概念構造. 領域をつなぐものとしての価値的類似性」楠見 孝 (編) 『メタファー研究の最前線』、179-199、ひつじ書房。
- 西尾寅弥 (1972) 『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版。
- 仁田義雄 (1998) 「日本語文法における形容詞」『言語』27 (3)、26-35。
- 橋本直幸 (2009) 「BCCWJ を利用した日本語教育語彙リスト作成の試み」『特定領域「日本語コーパス」平成20年度公開ワークショップ (研究成果報告会) 予稿集』、183-190。
- 橋本三奈子・青山文啓 (1992) 「形容詞の三つの用法：終止, 連体, 連用」『計量国語学』18 (5)、201-214。
- 服部 匡 (2008) 「漢語動名詞+ ‘先’ の意味分析 新聞コーパスの実例に基づく多義の研究」児玉一宏・小山哲春 (編) 『言葉と認知のメカニズム 山梨正明教授還暦記念論文集』、525-529、ひつじ書房。
- 濱屋方子 (2001) 「『酸いも甘いも』“酸甜苦辣” I」《日语知识》2001 (2)、2-4、日语知识杂志社。
- 早瀬尚子 (2008) 「形容詞か副詞か?—副詞としての形容詞形とその叙述性」『認知言語学論考』8、125-155、ひつじ書房。
- 長谷川明香 (2008) 味覚語「甘い」と sweet にみるメトニミー『東京大学言語学論集』第27号、1-14、東京大学文学部言語学研究室。
- 本多 啓・桑畑和佳子 (1997) 「名詞の多義について—IPAL 名詞辞書のための研究から」『言語処理学会第3回年次大会発表論文集』、83-86。
- 前川喜久雄 (2007) 「コーパス日本語学の可能性—大規模均衡コーパスがもたらすもの—」『日本語科学』([特集] コーパス日本語学の射程) 22、13-28、国立国語研究所。
- 松本泰丈 (1978) 『日本語研究の方法』むぎ書房。

- 松本 曜 (2003) 「第 1 章 認知意味論とは何か」松本 曜 (編) 『認知意味論』、3-16、大修館書店。
- 松本 曜 (2003) 「第 2 章 語の意味」松本 曜 (編) 『認知意味論』、17-67、大修館書店。
- 皆島 博 (2005) 「日英語の味覚形容詞：『アマイ』と “sweet”」『福井大学教育地域科学部紀要 I (人文科学 外国語・外国文学編)』第 61 号、11-29。
- 宮島達夫 (1993) 「形容詞の語形と用法」『計量国語学』19 (2)、94-104。
- 武藤彩加 (2001) 「味覚形容詞『甘い』と『辛い』の多義構造」『日本語教育』110 号、42-51。
- 榎山洋介 (1994) 「形容詞『カタイ』の多義構造」『名古屋大学日本語・日本文化論集』2、65-90、名古屋大学留学センター。
- 榎山洋介 (1998) 「換喩 (メトニミー) と提喩 (シネクドキー) —諸説の整理・検討—」『名古屋大学日本語・日本文化論集』6、59-81、名古屋大学留学センター。
- 榎山洋介 (2001) 「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喩」山梨正明・他 (編) 『認知言語学論考』第 1 号、29-58、ひつじ書房。
- 榎山洋介 (2002) 『認知意味論のしくみ』研究社。
- 榎山洋介・深田智 (2003) 「第 3 章 意味の拡張」松本 曜 (編) 『認知意味論』73-130、大修館書店。
- 榎山洋介・深田智 (2003) 「第 4 章 多義性」松本 曜 (編) 『認知意味論』135-186、大修館書店。
- 森田良行 (1980) 『基礎日本語 2』(初版) 角川書店。
- 森山 新 (2005) 「多義語としての格助詞デの意味構造と習得過程」山梨正明・他 (編) 『認知言語学論考』5、1-47、ひつじ書房。
- 森山 新 (2008) 「第二言語としての日本語の多義語の習得と日本語教育への応用」日本認知言語学会論文集 8、595-610、日本認知言語学会。
- 八亀裕美 (2007) 「形容詞研究の現在」工藤真由美 (編) 『日本語形容詞の文法——標準語研究を超えて』、53-77、ひつじ書房。
- 山口治彦 (2001) 「多義を記述するために—多義構造と辞書記述のテキスト構造—」『神戸外大論叢』52 (2)、61-91。
- 山添秀剛 (2003) 「苦くてビター」瀬戸賢一 (編) 『ことばは味を超える』、215-238、海鳴社。
- 山添秀剛 (2006) 「移動動詞 fall の多義構造について」『札幌学院大学人文学会紀要』79、

79-98。

山梨正明 (1995) 『認知文法論』 ひつじ書房。

山梨正明 (2000) 『認知言語学原理』 くろしお出版。

山梨正明 (2007) 「メタファー認知のダイナミックス——知のメカニズムの修辭的基盤」 楠見 孝 (編) 『メタファー研究の最前線』 ひつじ書房、3-29。

尤東旭 (1994) 「味」に関する形容詞の比較的表現—日中対照— 『岡山大学国語研究』 8、47-55。

尤東旭 (2004) 『中日の形容詞に対する比喩的表現の対照研究—五感を表わす形容詞をめぐって—』 白帝社。

吉村公宏 (2004) 『はじめての認知言語学』 研究社。

李在鎬・鈴木幸平・永田由香・黒田航・井佐原均 (2007) 「動詞「流れる」の語形と意味の問題をめぐって」 『計量国語学』 26 卷 2 号、64-74、計量国語学会。

李在鎬 (2011) 『コーパス分析に基づく認知言語学的構文研究』 ひつじ書房。

李在鎬・進藤三佳 (2012) 「決定木に基づく義語分析：「明らか」を例に」 『言語処理学会年次大会発表論文集』 18、583-586。

李芝賢 (2010) 「名詞句の意味構造において主名詞が持つ役割の考察—「感情形容詞+顔」名詞句の意味構造を用いて— 田島毓堂 (編) 『日本語学最前線』、389-402、和泉書院。

英語の論文

Taler, Andres & Vyvyan Evans (2003) *The Semantics of English Prepositions: Spatial Scenes, Embodied Meaning and Cognition*. Cambridge: Cambridge University Press.

国広哲弥監訳 (2005) 『英語前置詞の意味論』、研究社。

Fillmore, Charles J. (1977) *Scenes-and-frames semantics*. In *Linguistics Structures Processing*, ed. by Antonio Zampolli, Amsterdam and New York: North Holland Publishing Company: p. 55-81.

Langacker, R. W. (1993) *Reference-point Constructions*. *Cognitive Linguistics* 4 (1) : p. 1-38.

Taylor, John R. (1992) *Old Problems : Adjectives in Cognitive Grammar*. *Cognitive Linguistics* 3 (1) : p. 1-35.

Taylor, John R. (1989) *Linguistic Categorization: Prototypes in linguistic theory*.

Oxford : Clarendon Press. 辻幸夫, 鍋島弘治朗, 條原俊吾, 菅井三実 (訳) (2008) 『認知言語学のための14章 (原著) (第三版)』. 紀伊国屋書店.

中国語の著書・論文

- 曹学亮 (2009) 《中日“甜”, “辣”概念隐喻的翻译研究》西北大学硕士学位论文.
- 詹卫东、郭锐、谌贻荣 (2003) 北京大学 CCL 语料库简介, 北京大学中国语言学研究中心.
- 丁 慧 (2010) 《味觉形容词的句法特征和语义属性研究》上海师范大学硕士学位论文.
- 葛 成·黄 莺 (2012) 汉语味觉形容词“甜”的通感式词义引申研究《现代语文(语言研究版)》第3期, 25-32.
- 郭 锐 (2004) 《现代汉语词类研究》商务印书馆.
- 侯瑞隆 (2003) 汉语感觉范畴隐喻系统《郑州大学学报(哲学社会科学版)》2003年05期.
- 胡明扬 (1995) 现代汉语词类问题考察《中国语文》第5期.
- 胡壮麟 (2004) 《认知隐喻学》北京大学出版社.
- 黄宝珍 (2006) 汉日语味觉词对比研究《山西农业大学学报(社会科学版)》2006年第1期, 49-52.
- 靳卫卫 (2004) 《走进日本: 透视日本语言与文化》北京语言大学出版社, 180-190.
- 赖锦雀 (2004) 日本語味觉形容词の意味構造《日本語感觉形容词研究論文集》, 台湾致良出版社, 82-92.
- 李金兰 (2005) 味觉隐喻化的认知结构及语义特征《修辞学习》129, 56-58.
- 刘月华等 (1983) 《实用现代汉语语法》外语教学与研究出版社.
- 刘振平 (2007) 《单音节形容词作状语和补语的对比研究》北京语言大学博士学位论文.
- 吕淑湘 (1966) 单音形容词用法研究《中国语文》第2期.
- 吕淑湘 (1984) 形容词使用情况的一个考察《汉语语法论文集》商务印书馆.
- 潘 钧 (1995) 中日同形词词义差异原因浅析《日语学习与研究》03期.
- 祈 峰 (2011) 从黏合式形名组合的角度看单音节形容词做定语的句法功能《对外汉语研究》第7期.
- 沈家煊 (1997) 《形容词句法功能的标记模式》1997年第4期, 242-250.
- 王 静 (2010) 汉日基本味觉形容词的隐喻现象对比研究—以汉日苦味词为例《日语学习与研究》152, 49-56.
- 王建成·李 璐 (2010) 汉英“辣”味觉概念隐喻的对比分析《湖北科技学院学报》, 27-76.

- 王 力(2000)《王力古汉语字典》中华书局.
- 王启龙(2003)《现代汉语形容词计量研究》北京语言大学出版社.
- 王 寅(2007)《认知语言学》上海外语教育出版社.
- 王玉华(2000)“单音节形容词+了”用法特点考察《天津外国语学院学报》2000年第4期,71-74.
- 邢福义(1981)《词类辨难》甘肃人民出版社.
- 杨洋、董方峰(2006)对汉语基本味觉词“苦”的认知语用分析《现代语文》2006年第11期,60-62.
- 赵艳芳(2001)《认知语言学概论》上海外语教育出版社.
- 赵元任(1968)《A Grammar of Spoken Chinese》(《汉语口语语法》)吕淑湘(译)(1979)商务印书馆.
- 赵允敬(2011)《现代汉语单音节形容词的认知语义研究》复旦大学博士学位论文.
- 张国宪(2000)现代汉语形容词的典型特征《中国语文》2000年第5期,447-458.
- 张辉编(2011)《认知语义学研究》上海外语教育出版社.
- 张建理(2007)英语形-名结构的动态识解分析《外语教学与研究》39(2),97-103.
- 张韶岩(1999)日汉语基本味觉词引申义之比较《解放军外国语学院学报》1999年第6期,35-38.
- 朱德熙(1956)现代汉语形容词研究《语言研究》第1期.
- 朱德熙(1982)《语法讲义》商务印书馆.